



大正十五年十月十二日印刷
大正十五年十月十五日發行

有朋堂文庫
古代歌謠集（非賣品）

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地
三浦理

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地
有朋堂印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地
有朋堂書店

岡山製本

古代歌謠集 終

同音 藥玉念珠に至るまで。絲なくしては如何せん。一人弘徽殿の細殿にたゝずむはたれ〳〵。

同音 こうきでんのほそどのにたゝずむはたれ〳〵。

朧月夜の内侍のかみ。光源氏の大將。やら〳〵よしなの袖のうつりがや。二反

喜見城の内には金剛藏に納つゝ。龍宮城の内には。淨瑠璃壇にあがむとかや。目出度かりける寶珠の德かなやれ〳〵。

一人詞　殊勝にこそ存候へ。尙も一拍子を以て口ずされ候へ。

一人伽陀聲　捧ぐる所は眞珠のはなぶさ。

同　香　薰ずる所は至心の香。沈水匂をまじへたり。椿葉八千代の友もあり。一人上　千代までも千代までも。子の日の小松を手にとりもちて。五絃の曲をそうするは。松風よるの鶴とかや。聖代明時にあひぬれば。ほうゆの雲もかずしけし。をさまれりける今の御代かなやれ〳〵。

一人詞　掛る砌には管絃にすぎたることあるまじいで候。中にも琵琶尤勝れて候間。絲綸と云ふ舞を尋被レ出。琴琵琶の緒をよりかけられ候へかしと存候。

一人　然者をよつて御覽じ候へ。

一人上　玉簾珠簾等のこと。琵琶方磬に琴の藥玉。

夫禪林風和にして。松葉の色を增し。定水波靜にして。椿葉の陰を浮ぶ。佛法繁昌の勝地なれば。讃仰の法灯を吾寺にかゞやかし。法相擁護の靈崛なれば。和光利物の惠淺からず。誠函蓋相應の砌とこそ存候へ。面々如何思召候やらん。

一人 如レ仰只今の砌を拜見仕候に。誠上古にも難レ有覺候。就其面々何物をか御賞翫可レ有候やらん。一人 誠金銀珠玉の珍寶はさることにて候へども。如意寶珠にすぎたる寶はあるまじいで候。如何の如意寶珠を感得可レ仕候やらん。一人 如レ仰如意寶珠と申すは心の如く所願成就の玉にて候間。何物か可レ如レ之候。面々心を一にして。寶珠の難レ有樣を口ずさまれ候へ。定而出現あらうずるにて候。

白拍子

凡如意寶珠と申すは。所願圓滿の名珠也。されば五障の龍女は玉を捧て成道し。漢家に名を得し卞和は。玉を磨て德をたつ。是等を聞につけても。玉にすぎたる物ぞなき。一人

三千年に「なるてふ桃のことしより。花さく春に「あふぞうれしき。
君が代は「千世にやちよにさゞれ石の。いはほとなりて「こけのむすまで。
白妙の「衣の袖を霜かとて。はらへば月の「光なりけり。
君はたゞ「心のまゝのよはひにて。千代萬代の「數もかぎらず。
霜こほる「袖にもかげは殘りけり。露よりなれし「有明の月。
いかばかり「神もうれしと三笠山。二葉の松の「千代のけしきは。

舞催歌

君ならで〱。誰にかみせん「梅のはなそうよの。色をもかをも知る人ぞしるそうよの。
わが戀は〱。よむともつきじ「ありそ海のそうよの。濱のまさごはよみつくすともそうよの。

如意寶珠連事

句、梅をかざしてこゝに集へるとあるを、新古今集には此の如く變へたり
三千年に云々―西王母仙桃の故事にして、拾遺集躬恒の歌也、但し末句「あひにける哉」とあり
白妙の云々―後拾遺集、藤原國行の歌
いかばかり云々―今鏡に出でたる周防内侍の歌
君ならで云々―古今集、友則の歌

百敷の云々ー萬葉集卷十に、下

色なる絲の亂るゝは。袖にくすりの玉の絲。

白拍子の歌　金殿

△姑射山の裏には。嵐萬歳の名を呼ばひ。南陽の軒のほとりには。水千年の徳をあらはす。七つ徳をほめけるは。白雲黃竹の歌のこゑ。

△屢仙ほうにたづさへば。斧の柄千度くちぬべし。寶山をかぞふれば。はまの眞砂も數ならず。白玉の椿は千代ともた。

遊僧拍子歌

やあら僧よや三笠山。「松吹風の高ければ。空に聞ゆる萬代の聲。やれことうたふ萬代の聲。萬代の聲。

百敷の「大宮人はいとまあれや。さくらかざして「けふもくらしつ。

こけむす巖に松おひて。梢に鶴こそ遊ぶなれ。
△諸法實相と觀ずれば。峯の嵐も法の聲。
萬法一如とみる時は。谷の巖も花の色。
△花の色々春開は。岸の青柳窓の梅。
櫻山吹岩つゝじ。夏にかゝれる藤の花。

絲綸一聲

△絲を綸をもよると云ふ。日の暮をもよると云ふ。
くる〳〵數もなにかせん。くるよぞ待こそ久しけれ。
△玉簾珠簾箏四絃五絃や琴。
藥玉念珠に至るまで。皆是絲の德とかや。
△絲をよる〳〵織物は。綾羅錦繡あやの文。

開口之詞　春之事

楊柳風和にして梅花匂鮮なり。松門影繁して斜日猶遅し。しか〳〵に云々。鸚鵡は三雅の杯を懐て。一樽を持參したと。餘寒猶ありとて。御銚子はいまだ泔州にて。さては平調の樂にて候。太食調か傾杯樂して候。しか〳〵。萬の降物聳物が集て。當世の風俗なればとて。連歌を仕てみん。又々かけうと申す。其こそ尤興有見物なれ。さて執筆はと申せば。時雨の空かきくもりたと。さて發句はと申せば云々。

亂拍子一聲

△長生殿の裏には。千年春秋をとゞめたり。
不老門の前には。年は行けれども老せず。
△萬歳年經龜山の。下には泉のふかければ。

雲の上に咲く菊—古今集、敏行朝臣、久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれけるを引く

霜こほる云々—新古今集、通具の春日社歌合の歌

當辨

一人云松どもが。圍碁を打たと。さて箱崎の松は。根ははたり。手を打て候。

一人云何はたり手を打て候。さて勝はと申せば。岩代の松と申候。何に岩代の松は勝と申候。さて春日山の松は圍碁よう打とて。生の松原して候。

めしに引けば。物の数ならず。雲の上に咲く菊は。空なる星なれや〳〵。

越天樂歌物　本調子　盤渉調

△梅がえにこそ。鶯は巣をくへ。二反

△かぜふかば。いかゞせん。花にやどる鶯。二反

△やら〳〵よしなの。袖のうつりがや。二反

△霜こほる袖にもかげはのこりけり。
露よりなれしありあけの月。

顯密―天台眞言の一宗

延年唱歌

興福寺延年舞式　披露之詞

披露申せと候は。夫吾寺者佛法繁昌の靈場也。因内二明之鑽仰膽閑に。顯密練行之薫修牀穩矣。夫當社權現者。一天無雙之明神也。一人萬乘之歸仰尤深。文武百官之崇敬超レ餘哉。事之濫觴披露申事新候歟。抑當社造替者。每レ送二卅餘廻星霜一。必成二新造之功一。今般造營遷宮雖レ經二年序一。供養法事停滯。冥顯依レ有レ恐。任二先規一遂二其節一畢。讃佛講經之梵莚。諸堂佛陀定垂二納受一。絃管（イ竹）呂律之曲韵。三所神明隨喜給覽。眞諦俗諦兼行二神事法事一無レ闕。於二今夜一者。賞二見童一。可レ成二延年遊宴一之由評定候。

此披露詞者。康正之遷宮之時。興福寺清淨院光胤專信房僧都被レ草レ之也云々。

篠分し袖しをれけん梵天の衣は。そもいかばかり輕して。わづかに三朱なるらん。此

羽衣の衣手に。五劫を盡し悲願は。げにあさからずぞ覺ゆる。

一乘無價云々―玉を遖に言ひ掛く、前の頭物參照

四十八願―彌陀佛、法藏比丘の因位にして立てし誓願なり、三藏法數を見よ

鶴の摺衣―仁和の帝の時鷹飼に狩衣に鶴のかたを縫ひたるを著し折の歌に、翁さび人な咎めそ狩衣今日ばかりとぞたづも鳴くなる

みの衣―簑代衣なり

とし。一代無二の教主も。忍辱の德をほどこす。出世大事の因緣を。說きあらはし給へり。一乘無價の遖も。逢がたき衣の裏とかや。抑遙に思ひやる。四十八願莊嚴淨土。聖衆の雲の衣。いかなる粧ひなるらん。凡生を人間に受けて。十善の位にいたるも。五戒法衣のあつき力。つひに法身のはだへをや餝るらん。綾を織りなさゞりしは。三皇の賢き時の衣。寒夜に御衣をあらため。民を憐給しも。かたじけなくぞおぼゆる。中にもわりなく聞えしは。實方の臨時の祭の小忌の袖。御手洗川にやのこすらん。雪を拂ひし面かげ。行平の鶴の摺衣。在中將が忍摺。さても宇治の橋姬。片しき衣霜さえて。待夜むなしき袖の氷。とけぬ思をや重ぬらん。光源氏の品々に。いろ／＼の衣をわかちしも。其情をや定けん。げに狹衣のふし／＼も。わすられぬ形見なれや。小夜の袂のかわかぬは。泪をちらす戀衣。陽春程なく影闌て。紅花根に歸り。鳥もふる巢にいりぬれば。霞の衣たちかへて。いつしかうすき袂哉。秋は身にしむ夕とて。淚をさそふ袖の露。ねぬ夜事問月影よ。哀をそふるつまならん。役の優婆塞のそのみの衣。露に馴來て幾秋か。

過を抑え來れば
道もさりあへず
花ぞ散りける
六情―喜怒哀樂
愛惡

中の冬―十一月

慈覺―圓仁
智證―圓珍

向つゝ。心を閑る曉に。懺法の聲澄て。六情の罪霜消ぬ。五更の天の明方。深山の松の嵐も。神さび渡る程なるに。猿の叫聲澄て。殘月峯に傾く。通夜の衆徒は漸く。白雲の底に立歸。參詣の輩は猶。玉敷庭に集。誠に和光利物の。廣き惠とおもへば。背き影を仰て。賴心もいと深し。卯の花の開や卯月の祭には。八柳の昔の跡ふりて。一松の今の御幸。猶彌珍なり。郭公鳴や五月の小五月會。神祭る中の冬の中の申。四季折節の神態。權現の威光を顯す。神自神ならずや。人是を神とす。人自安からず。神の威德に預ばなり。忝くも山王は。慈覺智證權化の法味を受けしより。末代惡世の凡夫の。世俗の事をも嫌ず。佛法王法を守事。四方の神にも勝たり。あの利生利物の露の色。日に副てぞかゞやく。

衣

夫衣は。眞俗二諦を分ち。君臣上下をさだむ。されば三世十方の諸佛は。解脫の衣を錺

に。幾千年をかちぎらむ。抑柳營の春の雨。人を漏さぬ恵かな。幕府山の秋の月。光をあふぐぞたのもしき。されば梓弓末遠かれと朝夕。祈る手向のゆふしでも。さこそは君になびくらめ。

山王威德

天先生て。地後に定り。然有て神其中に生れます。國の常立の尊。始て顯給より。伊弉諾伊弉冉二柱の御神。おのころ島に交りて。日神月神山川草木を生成て。國をば則神國とぞ名附ける。六十餘州の神道。三千餘座の垂跡。利生方便互に。勝劣無と云ども。圓宗の妙法を受て。朝天を守事。日吉山王に如はなし。その本地を尋ぬれば。或者往古の如來なり。塵點の霜遠。或は慈悲の薩埵也。利生の月晴たり。光を和げて。此穢たるに交り。物に緣を結て。濁る衆生を漏さず。さゞ波や志賀の山邊を越には。道も去あへぬ花の雪。踏分て歩を運人は。みな遍き春に逢とかや。社壇に臨てひざまづき。神祠に

柳營—幕府のこと、周亞夫細柳に陣せし故事による

圓宗—天台

塵點—塵點劫とて頗る永き世

志賀の山邊云々—古今集貫之の志賀の山越の歌に、梓弓春の山

譽田の御門—應神天皇

菩提の菓をや結ざりし。名をのみのこす椎が本。只徒に幽閑のおもひにつかれけんも。よしなくぞや覺る。

鶴岡靈威

抑秋津島は是。神態事茂して。一陰一陽の風遠く仰ぎ。天神地神新に。光を和げたまへり。中にも天照大神は。かけまくも賢き宮居にて。伊勢の濱荻代々ふりぬ。八幡三所の御事ぞ。中もおろかなるやな。人王十六代の陛下。譽田の御門といますかりき。忝なくぞ覺る。日本武の尊の御孫。豐浦穴門の宮の御事なり。息長足姫の御代に。干珠滿珠の靈威を施し。高麗百濟新羅。三の韓國をしたがへ。終には豐國の。此宇佐の宮にあとを垂給き。貞觀の比かとよ。行教和尚の三衣の袂にやどりて。男山に遷給ひしも。帝都花洛の守にて。都の南に住給ふ。御裳濯川の清流を受繼。石清水の深誓を顯す。その源を尋つゝ。鶴が岡邊に新宮造せしより。げに鎌倉のさかゆべき。常磐かきはの松が枝

悉地―成就と譯す

傳聞云々―源氏物語を引く

打はらふ。和尚の徳賢して。つゞまやかなるを好すといふとも。利益應用の背きにこたへて。外には耕夫の牛をかり。内には飢人の食をうばふ。佛祖跡をひそめや。魔碍うかがひ難し。又賤民の態までも。杣木のねりそくり返し。はこぶ歩に物うからず。此柴椽けづる飛騨工。うつ墨縄の一筋に。あだならぬ功をいそがはしく。茅茨を切調。されば鳳の翅の反字。並べる鴛鴦の瓦。ゐれる甍頗梨の壁。畫圖の色々様々に。地にはしけり珊瑚の甃。上下の莊嚴妙にして。二階の閣重や。先二世の悉地の標示ならむ。前には諸天擁護の經典軸々に。金玉の徳用喩もあだにや及べき。後には老杉谷をかこみ。古松は靈石に碧羅の色を飾る。岩竹風音を成す。香巖の忘ぬふしなれや。門葉榮枝を連ね。世々の久き様たり。花木匂を途る。東吹春の谷の風。得月光圓に。秋を告嵐や雲をはらふらん。瑤池の浪に冷しきは。三伏の松の下風。爐峯の雪の朝には。翠簾を巻上。軒の垂氷も玉を連ね。銀砂互に映徹せる。眺望四方に勝たり。いづくにかひとしき砌あらん。傳聞北山の室の戸ほそには。太山櫻の色にうつり。優婆塞の宮の宇治山も。終に

巨山—巨福山

三光—日月星

とゞろかし鳴神の。雲井に天聴を驚かし。様々の奇瑞時を告。神託度をや重けん。今一際の勅命は。眉目に似たりといへども。左に遷名をいとひ。二世の恨を顯しも。理とぞや覺ゆ。然ばはたして上無臺に備り。蘋蘩の飾いつくしく。禮奠の風を仰也。

巨山龍峯讃

夫巨山徳高して。寺號を聖曆の賢きに顯し。伽藍建長寺。興國の靈場鎭に。陛下征夷の雨露の恩。祈願の誠に報ぜしむ。況や三千の聖容の。一々の誓願忝くもやたへや。檀信の臺をみそなはして。福壽の寶算。家門の薗に普。此榮花の花。春の色鮮也。是皆新なる堂閣尊像。嚴飾莊嚴殊妙華香。三禮漸々積功德。いかでかたのもしからざらん。爰靈瑞を鑒て。異に勝地の眼目を選る。龍峯の號故あんなる物をな。潛に臥龍は地を守仰ば慶雲峯に聳け。三光同く朗に。二儀共に納る。しかれば精舍を東南の角に向ふる。正に掌方角を賞すれば也。智水深き謀。溪谷の砂もなめらかに。石巖の疊嶂を

君しがらみと―流れゆくわれは水屑となりはてぬ君柵となりてとゞめよ
宿の梢―君がすむ宿の梢をゆくゆくと隠るゝ迄も顧みしかな
野にも山にも立煙―夕されば野にも山にも立つ煙なげきよりこそもえまさりけ
口詩云々―前に註す、治まれるに長(をさ)を掛く
觀音寺云々―都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲

砌にくはゝりしより。袖を連し左の司。何なる中の隔ならん。おもんばかりぞ量難さ。定ざる世のさがなれば。昨日のうつゝ今日の夢よ。みしはあだなる習にて。昌泰聖暦の春とかや。都を霞のよそにして。餞別の愁は浮世をもて。げに後會を期せんや。君しがらみと仰ても。せきも留ぬ涙河。いかなる瀬にか沈みけん。人遣なりし旅の空。進れぬ道に行々も。猶顧し宿の梢。野にも山にも立煙。同思にやむせびけん。須磨の板宿明石潟。恨はさても盡ね共。せめても慰とや。口詩を賜し驛の。治れる國の習とて。露驛を傳し旅の泊。はしたなく遠くきにけりと。浪に太汐馴衣。餘香を拜せし名殘までも。古郷を忍妻なれや。哀を殊に副しは。曉の夢も盡終し。觀音寺の鐘の聲。都府樓の瓦の色。さこそはさびしかりけめ。ひまゆく駒の心地して。つながぬ日數を重つゝ。かしこの栖居の萱が軒。十ふの菅薦菅筵。片敷涙に床なれて。終に常ならぬ世を告。三年を送し二月の。末の露は花より先にあだに散。本のしづくの玉消し。跡にも光や殘けん。かゝりし程にやたへや。人の心の浮雲に。履霧のまよひかとよ。秋の心の晴やらで。踏

菅相公云々―菅原道眞十一歲の時、月耀如晴雪、梅花似照星、可憐金鏡轉、庭上玉房馨と賦したるをいふ

手にもならさぬ梓弓―道眞都良香を訪ひし時良香弓矢を授けしに一發即ち中りしをいふ

を任。十九に説るゝ法は又。語言三昧にこたへつゝ。隨力諸衆聲字の實相に益廣く。到ざる道もあらじかし。近く聖廟幼稚の。奇瑞の舊記を拜すれば。菅相公の春の園に。花のかほばせ妙にして。掌の插頭の梢は。栴檀二葉をきざさしめ。試に問し詩賦の句は。あの玉を連て亂ず。露も滯る詞なく。せめても餘のすさみとや。最引立て手にもならさぬ梓弓。春の遊の態までも。猶其道にもはづれず。況や節にふるゝ玉章。興を催す金言。誰かいひし春の色。東より到と。露あたゝかにして。此南枝花始て開く。つららを結句には又。氷水面に封じて。雪林頭に點ずとか。中にも有難き不思議は。家を離て三四月。落涙は百千行。此句を潛に連つゝ。殊に御感にをさむといへども。發言いまだ顯さゞりし。金玉の光先立て。きゝを外朝の浪にながしけん。いかなる譽なりけん。及てもいかゞは宣盡む。褒美の詞も逹難し。宜なるかなや。風月の主と仰れ。天の下のもてなし。到ざるくまやなかりけん。凡菅原の露の玉鉾の。道の道たる家の風に。靡かざる草葉の末もあらじ。されば終に鳳闕の雲を打はらひ。日月の光を輝つゝ。影なびく

身をつくし云々—澪標の巻に、明石上住吉詣して源氏の君にめぐり會ふこと見ゆ

鶴の子—明石の上の女、明石中宮をさす、母子共に桂の里に住むこと松風の巻にあり

帝都にちかづき—北野のこと

三摩耶—假時と譯す

隔りし。さても身をつくしの。深きしるしを顯しは。住吉神の誓に任つゝ。今日をや松の梢の。枝さしそへし榮ならん。かゝりし惠のかひありて。諸共に翅をかはひし中にして。はぐくみたてけん鶴の子の。雲井に昇る秋の宮。高位の光なれば。月の桂の里人も。さこそは御影をあふぎけめ。彼も是も忝き。道有御代の榮花の花の花盛。幾萬代の春をへても。猶賢き譽に誇也。

聖廟靈瑞譽

夫榮花の花を開し。槐門の古。春の匂馨しく。贈て一人師範の。上無位に仰れまします今。秋の菓色鮮に。最も賢き勅なれや。爰忝もいちはやき靈威を尊ば。天滿天神の尊號として。帝都にちかづき給ては。鎭衛の權扉を押開く。先遙に本地を訪ば。補處の大士十一面の恩顏は。慈悲喜捨忿怒布施愛語。樣々の眸濃に。乃至寶瓶錫杖の三摩耶形も。他ならぬ標示を顯す。三十三身の變作は。六趣の塵に同く。四生の巷に身

きびは—幼稚
ねび—大人び

そよや光源氏の品ことに。様々きこえしもてなしに。最こよなき契の。行末栄し様には。紫の上なきなからひのむつまじく。ゆかりの色を思初にし始より。我手ならしの振分髪。おひさきみえしきびはの程。思し筋のそのまゝに。かはらずねびやまさりけん。はかなき物からしかすがに。憑よすがと待えては。二心なく玉簾。明暮すさみし戯までも。いかでか情をそへざらん。今将えならぬ色を増。樺櫻の花の花鑑。且見ても強てあかねば。春の霞に立並。類もまれにや巣立けん。げに片方の夜闕もさすがにおぼえてや。人遣ならぬ道ならなくに。徘徊疲し通路。さればやおもはぬ旅の栖居までも。都にとめし面影。浪の立居に忘ねば。浮寝の床の梶枕に。恩賜の御衣を返しても。夢を憑し妻と成る。浪間無比の哀をば。浦風の便にや訪ひけん。浦より遠の浦傳。只さ計の泪ぞとも。うちとけ語出しや。せめて隔なかりし中の。此むつごとに顯ん。忘形見をとどめけんも。こはさは世々のむくいかは。あだならざりしかしづき種。つひに明石の恨なく。彼岸を出しあまをぶね。うきては更に思はねど。なれこし岡部の里もはや。海づら遠く

し廿九日本の社に臨ませ給ふ云云

源氏紫明―源氏物語の紫の上と明石の上とのこと也、若紫の巻明石の巻澪標參照

見ゆなる。さても冬籠る御室は。安名尊凍に契を結てや。時をもわかずうかぶ贄。せめてもあさからぬ結縁に。深き心を顯す。普門の誓に任てや。春秋冬夏をわかつなる。春秋の宮の宮居こそ。花さき實生恵とおもへば。なほたのもしくはおぼゆれ。四の御柱片柏も。內證四無量四攝かとよ。又幼稚竹馬をぞ憐べき。稚の名にしおふ兒宮。凡辯才十五の部類。皆一天四海を加護せしむ。抑桓武の御宇。延曆の古にし年とかや。秋の田村のほのかにきく。彼右幕下の古。戰場の道に趣きしに。ちかきまぼりにあひそへし。神威の兵革かたじけなく。つひに勅命を全す。しかのみならず代々の征罰をかへり見て。朝家ことに此神を重くすれば。誰かは首を垂ざらん。そよや倩仰ておもへば。天下座神のしるしを示す梶の葉。いつもときはの色ながら。織女牽牛の。たえせぬ秋の手向までも。よしあなるものをな。

源氏紫明兩榮花

順縁逆縁—縁は或事物を成し又は破る補助的の原因をいひ、その積極的なるを順とし消極的なるを逆とす

穂屋—野の名

御射山祭—信濃地名考に、毎七月廿六日御射山狩にいでまし同

いたらざる草木の本もあらじ。大慈大悲の本誓。あまねき利物の道しあれば。順縁逆縁皆もらさず。眉白の鷹のはだれの雪。積れる罪も跡なく。消行煙の下にむせび。子をおもふ雉も歸りては。翼たかく法性の空にや翔らん。鹿の角の時の間も。かりのその身を手向にて。鹿野苑にとかれし法の。覺の道にぞ入ぬべき。蹄を草村になづまされ。鵜船にともす篝火も。後の闇路を照べき。光や和光のしるべならん。中にも濟度の方便掲焉。頓に生死にしづめぬしるしなれや。楠井の池の。波の白木綿。かくとみえて。國の堺ちとほき海の。さなきの汀にうかぶなるも。ゆゑありてぞや覺る。彼是奇瑞様々なれば。あなかまあだならぬ標示と仰べし。穂屋の薄のいとしげき。をり〳〵の祭禮新に何も時にことなれど。先は木曽路の櫻の花鬘。目並梢もえならず。かすめる比の淨樂會。賤士が早苗を取々に。にぎはふ營の五月會。今は早夏六月の御手作の。いねてふ一夜の程もなき。秋のさかえの神事。御射山祭は七月の末。身にしむ秋の風になびく。矢並たれてものゝふの。露わけ衣の日も夕ばえの色々に。袖にうつろふ花摺。げに故々敷ぞ

千手千眼―六觀音の一にて地獄道の障を破する菩薩、千手は同時に無限の働きを爲し、千眼は同時に一切の事理を知明するこの菩薩の自在神力を示す也

藏の重寶を納置て。利益をほどこす東海。浪の白木綿かけまくも。かたじけなくも諸人の。祈手向になびきつゝ。袖ふきなるゝ追風。神さびまさる瑞籬の。久しき宮居の富榮。幾春秋をかさねん。

諏訪效驗

夫神鏡は機を鑒て。影をうかべ。瑞籬は地を撰で。跡を垂。彼是共にかなひつゝ。萬州に感應をほどこす。さればや當社明神は。遠く異朝の雲をしのぎて。近く扶桑の塵に交る。本地をはるかに訪へば。普賢十願の誓約は。發露を無爲の都に打拂ひ。あの千手千眼の願望は。圓滿無碍の巷にみつ。しかれば上萬乘の玉の臺。臺をいさぎよく照滿。くもらぬ政に光をそへ。下萬民の柴の樞。樞を憐擁護は。利益鎭に益々なり。或は靈地をかしこにしめ。或は勝地をこゝにつぐ。尊號を上下にわかちては。貴賤踵を廻して。肝膽の功をはこばしむ。諏訪の御渡の深誓。須賀の荒野の廣惠。雨露の恩にことならず。

大樹營—幕府のこと
巨靈云々—文選張衡西京賦に巨靈贔屓の語あり、巨靈は河神、贔屓は作力の貌
大辯才—大辯功德天、辯才天、辯天など云ふ、嚴窟に居り、無碍辯を具し、世を護り物を濟ふ、怨敵退散財寶滿足の利益大なりとす
三天—世間天、生天、淨天
文魮云々—文魮は魚名也、山海經に魚居音如磬石之聲とあり
伊豆—雲より出づれ言ひ掛く

此尋ねやすく行きやすきは。大樹營にとはからぬ。江の島の形勝。倩舊記を訪ふに。巨
靈の神贔屓と力をこらしてそばだていだせる石巖。汐合細線の。道に歩をすゝめつゝ。
岩根づたひに攀上。四望眼にきはまらず。先松塢を禮すれば。垂跡をあらはす大辯才。辯
才富貴のみならず。樣々のねがひを三の峯。三天のすがたに象て。あの花は曼荼の春
の霞。紅葉は色相の秋の風。かぎらぬ草木の末までも。惠の露やそよぐらん。鶚居荒
磯ぎはの島めぐり。あまたの龍穴殊にあやしく。深き御法の底までも。そも掲焉道なれ
や。斷岸によこたはる船。碇綱を木かけに結てや。干潟をもとむるあさなぎに。拾袂の
玉や如意珠。げにその心のごとくなり。或は蒼龍窟をしらべ。或は文魮の磬を鳴も。八
百萬代の緑竹の。妙なる聲にや通らん。鮫室に龜鳴て。あの暮行空の雨そゝぎ。やがて
はれぬる夕就日の。紅輪をしづむる青海に。かはりて月は中空の。雲より伊豆の大島。
しまゞ見えて。彼方是方の浪間わけ。夜舟漕音ぞ寢宿の浮枕。抑役優婆塞をはじめて。
かしこく聞えし古の。代々の龍象。金色の巖崛にして。正に賞神の御影を拜せし。密

北斗云々―朗詠集擣衣参照

蘭蕙苑の嵐―朗詠集菊参照
野の宮の秋の哀―源氏物語榊の巻参照

をやけにさは嫌らん。今はたさびしくよわる蟲。秋の霜のおきあへぬ。寢覺すゝめつゝ。やがて明行鳥の音。そよや千種百種かぜになびき。おもひみだるゝ苅萱。名も眠き女郎花の。はなには誰かめでざらん。まばらにふける板廂に。夜はすがらにねられめや。北斗の星の前には。旅雁を横へ。南樓の月の下には。寒衣の砧の音さびし。閨月の冷きをうれふるも。唯曉の空にあり。時しもあれや。秋の別を何樣にせん。旅は夜寒の風厭敷。早九月の初三夜。玉にまがふ露をみだり。弓にや似たるらむ三日月の。入方見ゆる山の端にも。此心細雲間の光。蘭蕙苑の嵐の。紫を摧籬の菊。此花開て後は更に。花鑑かつみる色やなかりけん。あの露も涙も拂あへぬ。旅宿の秋の夕暮。野の宮の秋の哀。秋の名殘をしたひてや。伊勢まではるかに思ひおくりけん。

江島景

虛无縹渺の堺かすかにして。到難ければ。雲逢露來のすみか。むなしく名をのみ聞く。

太眞—太眞夫人也、王母の女

旅別秋情

旅別は是客の思。行路は又友をしたふ。何も哀はかはらねど。殊にわりなく切なるや。餞別は秋の情ならん。思立より峯の秋霧へだてつゝ。すぎこしかたもとほざかれば。麓の里をよそに見て。駒並て向ふ嵐の。跡よりしらむ横雲の。たえ〴〵残る篠の目。又いつかは會坂の。椙の梢をすぎがてに。ほのかにまねくか篠薄。見てだに行むと。名残をとむる關の戸を。あけてもしばしやすらへど。思ひとがむる人もなし。此山里は雲につらなり。野原は煙の末とほく。海は浪をしのぎても。旅のなさけぞしのびがたき。東屋の眞屋の餘に戀しければ。唯かりそめの雨宿りに。立寄友の往措にも。いざや古里人に言傳む。分ぬすさみもをかしきは。主さだまらぬうかれ妻の。妻よぶ男鹿の眞葛原に。なれも恨て音をたつるや。おなじ涙の類ならん。凡日を次夜を重きても。旅衣の露を片敷草枕に。結契はあだながら。思ひをのこす夜の床に。鷄のこゑいそかはしき。こと

射山―藐姑射山
二儀―天地
洞天―福地共に唐杜光庭の洞天福地記參照
三千年になるてふ菓―西王母の漢武帝に奉りし桃實
天地をこめし壺の内―費長房の故事、朗詠集仙家參照
雲の碓―朗詠集に、「雲碓無人水自舂」
八佾―佾は舞列
巴卭の橘云々―太平廣記卷四十、巴卭人參照、橘中の二老叟鬚眉皤然肌體紅潤皆相對象戲身僅尺餘とあり、采は賭物の借字
龍根草―胡濟に方圓徑寸形状宛轉如龍とあり

く。三氣しなをことにし。二儀をことに別しより。洞天は三十六。金闕霞にかゞやき。福地は七十二。靑巖月に歛つ。無爲を僞態とする。白日羽化の倫。星の位に連なりて。上帝に伇する政。くもらぬ影をや照すらん。三千年になるてふ菓の。百千度萬代を重て。つきせぬ水の源。菊を洗し流まで。汲てしらるゝ長生。大茅具茨の幽に深き跡。是皆物外の樂きはまらず。天地をこめし壺の内に。道德の園をひらきて。交久き仙遊。玉の盃を客に勸ては。石の床嵐に拂ひ。瓊蘂を摧て朝に服すれば。雲の碓水につきぐしく。八佾の禮を調て。立舞玉女の袖のよそほひ。紅の雪を飜すも。妙なる調にかよひきて。雲吹とむる夕風。さても巴卭の橘に。其身を屢やどしおきて。濱の砂をうちすさみ。其乘物をあらそひけん。二人の翁の閑適。商山の昔にも。なほ立ちまさる栖家とて。口に含みし龍根草。則龍に化しつゝ。乘てのぼりし五雲の上。げにおよばれぬためしかな。玉晨金樹東王父。羨門高溪安期生。太眞の祕錄に預て。無窮の庭に自得するも。おなじく一涯の内なれば。聖君の壽域と。均かるべき物をや。

これを學び漢帝の傳ふる所といふ
河水樂—唐高宗の時張文收作れり
秋風樂—唐より傳來
萬秋樂—聖武の朝婆羅門僧正傳來
放鷹樂—弘仁三年の作也、野の行幸に奏す
靑衫云々—白樂天の琵琶行を引く
一聲の鳳管—朗詠集管絃參照
八音—金石絲竹匏土革木
四德—仁義禮智
崆峒—黄帝の登りしことある山

げに想夫戀ぞ床敷。黄帝團亂旋は皆。舞曲の中の祕說なり。淸調啄木は。調子の中の奥積。上陽性呂の春の聲。霓裳性律の秋の調。愁場性呂の水の流。聞こそ袖もしをれけれ。王昭君が數行の涙。柳塞に向しあきの風。楊貴妃が一枝の雨。梨苑に奏せし春の花。靑衫いたくうるほすは。潯陽の江の船の曲。村上の聖主の調給し。玄象の撥音妙にして。承傳につたへし淸凉の祕曲。上原石上黄金の柱の邊には。大絃小絃をやはらげ。碧玉の柱の間には。滴瀝の銀の聲をまじふ。離鴻は秋の露に咽び。別鶴は夜の月になく。緱領の雲にたはぶれし霓裳。一聲の鳳管は。あの王子晉がその昔。黄笛音を調へ。五聲八音を器として。四德二調の譽なれば。つひには樂音樹下の砌。功德池の波の聲を合せ。常樂我淨苦空無我。乃至檀波羅蜜提諸波羅蜜の。諸の德をぞ備べき。

仙家道

太上元始の元宮は。構を淸虚の間に插み。崆峒射山の絕隈は。あの基を碧霄の外にひ

黄鐘大簇姑洗蕤賓夷則無射(律)大呂夾鐘仲呂林鐘南呂應鐘(呂)
九部―舜、夔をして修めしめし樂也
七德―唐太宗の軍中にて作りし秦王破陣樂のこと
仁和樂―仁和年中貞雄作る
延喜樂―延喜八年の作也、樂は忠房、舞は式部卿親王作る
さてもやさしかりしは云々―源氏物語に拠る
春の鶯囀る曲―春鶯囀一名天長樂、長壽樂と云ふ 唐太宗の作とも又白明達が作とも云ふ
青海の波―青海波一名鳥向樂、もと唐宮の樂なるを羅路婆羅門

妙儀なり。此風を遷し俗を易る道は。只樂より增れる物はなし。治世の聲は安樂なり。愁を懐る民もなく。爰知ぬ卽。百王の理亂は聲にあり。或は九韶の樂をおこし。或は七德の曲を成。哀樂の異なる。是皆五音の爲態なり。黄帝洞庭の樂は。五奏湯々然たり。我朝の聖代のつくりし。代々の賢様にも。仁和樂や延喜樂。雙調には柳花苑。何も管絃を賞せらる。しかれば此器は。鳳闕朝廷の重き寶。淸涼殿の御厨子に。皆名こそふりんたれやな。さてもやさしかりしは。春の鶯囀る曲。のどけき比の花の宴。いや神無月のかぜにもろき。紅葉の賀の興をまし。立舞袖の綠の色は。青海の波の立居につけて。哀とは見きとぞこたへけるやな。類も希にいとこよなく。樣々なりし女樂に。拍子も調し童姿。殊にきびはにをかしき中に。たちへだてても夕霧の。まがきはよそにや異なりけん。名をさへきくも冷きは。夏行瀬々の河水樂。いつしかかはる荻の葉の。露吹結ぶ秋風樂。千々の秋をもかぎらぬや。兜率の雲に聲をそふる。彌勒慈尊萬秋樂。狩庭の小野の雪の中に。昔の跡はふりぬれど。放鷹樂の其姿。いかなる木居に懸らん。

四序―四季
六儀―六律六呂
十二にわかれ―十二律のこと、

らずぞや覺。雲冴て雪降峯を踏分て。岩やに道を迷はまし。飽ぬ名殘の曉に。見るさへ怨横雲。暈氣色のうれしさは。暮待空に立雲。洞天に日暮て。沉々たる雲海。蓬萊遠して。此漫々たる雲の濤。無常をおもふ夕暮の。雲に立副煙の。跡は何に消ぬらん。往事を忍曉の。雲や昔を隔らむ。立騒雲に暫は迷共。終には御法の風吹て。業障の雲ぞ晴ぬべき。

管絃曲

夫管絃は天地の始。萬物の父母たりやな。其理を絲竹の間に籠。其事を呂律の内に成。目に見えぬ鬼神。妹脊の睦こまやかに。此性五音に通じて。心を和る基なり。鳳管琴鼓取々に。曲又異なりといへども。龍笛音取朧。朱絃斜に調たる。絲竹の聲に合て。哀聲様々に顯る。甲乙は陰陽に象て。四絃は四序に掌る。凡調子に六儀有。其又十二にわかれて。無調の上下にわたりつゝ。一音不聲の初より。五聲の信をなさむる。是又今の

鷄人云々ー朗詠集禁中參照
淮王の藥云々ー同書影參、

清音塵を飛し。雪を廻す舞の姿。手を擧足を頓に。正に宮商に叶へり。さて又殿舍の構は。臺を飾る龍鬢の筵。床の邊の玉の獅子。或は銅雀の正に開け。或は靈光の新なる持成。梅の梁。桂の棟。いや反宇雕甍。上る鳳にや紛ふらん。猶さばおもひ連れば。懐しかりし様かとよ。金の釵を正しくし。繡の茵を重たり。灯は四方に照し。蠟燭は彼方是方に明なり。始て知ぬ如何はせん。遇難見難き事を。可憎の病鵲や。夜半夜半に人を驚す聲。あの薄媚と情無狂鷄の　○曉を柘の小枕取て。是を十娘に與しや。忘記念のしるしな覽。

雲

鷄人曉を唱て。雲居に聞を驚し。淮王の藥を嘗し古。夕の雲をや分つらん。行客の跡を埋白雲に。都の空も遠ざかり。遠樹を隱す浮雲は。花の色にや紛けん。五月雨の山本晴雲の外に。一聲名謁郭公。雨と成雲とや成しと歎比の。跡問人の面影も。淺か

又菩薩となるを得たり
遊仙詞―唐の張文成の遊仙窟の文意に據る

道遙にして。馬疲人や泥けん。青壁の岩。碧潭の淵。神仙の妙なる砌とは。漁翁や知らせけん。又松柏の巖。桃花の澗に至るに。獨の乙女子水の側に。洗衣する渡有り。僕斯に事問て。屢休む宿を望。家主の行末をたづぬれば。崔女郎が舍ならし。博陵王の苗裔。淸河公の舊族。花の容貌。玉の姿。希なる類と聞くからに。調る琴の音は又。姤し顔に細き緒を。時々弄鳴ば聞くだにあるを見えばと。勝いか計かは床しかりし。半面たるを垣間見て。後夜長く更深て眠ず。無爲き月のみや。窓に望し友ならん。能やさは夢覺て胸手なり。起て誰に語はん。徒に薰香の薰のみや。思に燃煙と立ちとはりて。徘徊共披演に便無。然爲我諸共に詩を詠じ。錦の障揚げたる帷。半乖てや挑げけん。紅の顏。翠の黛。何の所か軽に。盈かならざらん。瞼は織女の星か留め眉は恒娥の月を送らむに異ならず。窈窕とたわやかに。忍笑とほゝゑんで。耽しらへる粧。雅妙の操にして。步絶て閑殆なるや。無越最咲き際ならん。せめても呃じき戯とや。雙六の局の諍。其賭の情には、強ても醉をや勸けん。玉の饌珍に。絲竹の調ぶ調ふ。

つ。草創守文を角ひしも。互に譽を施す。三皇五帝樣々に。八元八愷取々なり。延喜天暦の明主も。外朝に名をや耻ざらん。彼四納言が仕へしあと。昭陽舍の五人も皆。忠勤の道を先とす。抑三十三天は忉利天に一夏說かれし御言法。五十二類は涅槃のまへ。阿闍世の懺悔賢く。耆婆が諫に隨ひしや。其身の藥成けん。世人爲子造諸罪。此恐るべきを忘れ。不見輪廻難可報。しらざる事ぞつたなき。然はあれども則ち。若人至心供養佛。復有情勤修孝養。何もかはらざりければ。勝憑敷ぞや覺ゆる。

遊仙詩

夫積石の山は。金城の坤の角。河の出足所也。傳ふらく河源は遠く。漢家の波の外に流れ。星霜を積で聞を。此外朝の雲にや殘すらん。悠々として幽に。其萬古の二三を訪へば。張騫が賢舊跡は。十萬里の波を浸し。伯禹のかたじけなく殘れる跡は。二千年の坂嶮し。深谷地を廻り。たかき嶺天に横り。煙霞是濃に。泉石又明なりや。日暮

動くと云ふことと搜神記に見ゆ

三皇五帝—包犧、女媧、神農を三皇、黄帝、顓頊、帝嚳、唐堯、虞舜を五帝とす、尚異說あり

八元—顓頊高陽氏の才子八人

八愷—帝嚳高辛氏の才子八人

昭陽舍の五人—醍醐帝の五人なり、大中臣能宣、源順、坂上望城、紀時文、清原元

四納言—前の文武に註す

阿闍世—伽毘羅國王舍城の王なり、父を殺し母を收閉し又佛を害せんとす、後文殊菩薩に從ひ懺悔し命終りて地獄に入り、後

閔子騫―孔子の門人也、繼母に事へて至孝、蘆花絮の衣を厭はず、蒙求を見よ

蔡順―後漢の人、椹桑(椹)を拾ふに赤黑器を異にす、赤眉の賊見て問ふ、曰く、黑きは母に奉せんと、賊その孝に感ず、蒙求に出づ

董永―後漢の人、父に孝也、織女感じて其の婦となり、之を

二を兼たるは。父たる父のいつくしみ。孝行の誠といへるは。其子以て子たる昵なり。春の花になづさひては。梢を育む袖しあらば。荒き風をも防てん。あの秋の月を仰みれば。曇ぬ御影の。藪しもわかぬ光なれや。立ならぶ様も長閑き春霞。かすみと共に富士の根の。煙や空になびくらん。上無恵の上無は。仕ふる君の厚き恩。薄衣をいとはぬは。此閔子騫が言の葉。涙も露にまがひしは。白楊が柳の枝なり。綠の林の中まで。菓を惜し蔡順。夕立すなり遠近の。雲井の外に鳴神の。音も絶せず名謂けん。心の中ぞ切なりし。誰爲に身をば賣りてか董永。空憑めせし織女の。星合の昵をしたひけん。君は陽德にかたどり。朝日の影もあまねく。父母は陰樂を調へ。身に入風をもいとはず。夜の衾は染氷れども。片敷袖を猶あたへ。霜夜の床のとことはに。子を思ふ道にやかきくれん。霧よりすゑの村時雨。世にふるわざをもかへりみず。あの雪を分けん孟宗が。もとめし竹の子はいかに。郭巨が掘得し金釜までも。孝行に僞なければ。天地あはれみを垂給ふ。生を胎内に受けては。身體髮膚を破らざる。先孝の始とこそ聞け。命を君明に任つ

風の祝—俊頼の歌、信濃なる木曾路の櫻さきにけり風のはふりにすきまあらすな、清輔袋冊子に云ふ、信濃國は極めて風早き處也、仍て諏訪明神の社に風の祝といふものを置きて是を春の始に深く物に籠めすゑて祝して百日の間尊重する也云々
風を向る海月—謠にくらげの風向ひといふ

東吹風に浪寄は。霞を流す櫻川。乾風の風に迷は。時雨を誘ふ浮雲。紅葉の筏を下は。嵐の山の麓の。河瀬に秋や暮ぬらん。寒嵐冷く。霜深き夜の。月にさけぶ哀猿。風を便に渡成は。梢を傳ふむさゝび。倶羅を増も風なり。風を向る海月。いかなる故成るらん。楢の葉柏うちそよぎ。木枯はげしき飛鳥川。風寒ければ。汀の浪や氷るらん。風のしな〴〵に。所によりて興あるは。山風谷風山颪。山下木の下葉分の風。松吹風のつれなきは。憑めて問はぬ夕暮。葛の裏かぜ恨わび。身にしむ秋の初風。かぜの便風の傳。かぜの宿りを誰かしらむ。浦風汐風興津かぜ。眞帆の追風朝嵐にや。湊吹越るなの渡り。抑　君の恩を仰ぎて。此風の徳に喩れば。風の前の賊塵は。拂に敵する類なく。なびかぬ草木もあらじかし。

君臣父子道

賢王は廟神の再誕。影をも深く敬へ。忠臣は君國の寳なり。貞心おもひ淺からず。尊親

器世間—現在の世界
五大—空風火水地
繩を結び—易の繫辭に、上古結繩而治、後世聖人易之以書契
風土記—和銅六年詔して諸國の地誌を撰進せしむ
五音—宮商角徵羽
何の緒よりか—拾遺集齋宮女御、琴の音に嶺の松風通ふらし何れの緒より調べそめけん

の安立より。器世間是に成ぜらる。五大をいへば風大。黒色其色をかたどる。代に皆其風儀あり。いはゆる巣穴冬夏の住居として。繩を結びや木をきざみし政。伏犧氏王爲。書契をつくりし風體。黄帝代を治しも。風后輔佐の臣たりき。凡あらゆる事態。何か風の徳を備ざらん。されば詩歌の妙なる詞にも。風月の名を先とす。遠に漢家を訪ば。昭明太子の選し。文選の中にも。あの宋玉が風の賦。近く吾朝をかへりみれば。風土記は廣く記する處。風俗は神の御代より。今にたえざる郢曲。家々の風に傳はる。源氏の巻にも。松風野分ぞわりなく聞る。六義の風情に風あり。古今の作者は春風興風。小野の道風は。此蠻闘の屛風に筆を染む。琵琶の調に風香調。樂には夏風秋風樂や。五音皆風にあり。絲竹の調に顯る。風北林になる。花をおびて。鳳の舞かと疑れ。竹に向ては。龍吟に似たる響あり。青嵐窓を過る聲。曉の夢に通ずとか。竹風葉を鳴すや。夜を殘す寢覺の友ならむ。嶺嵐琴を彈ずなる。何の緒よりか調らん。風渡る諏訪の御海に作立ば。浪の白木綿神懸て。風の祝にすき間あらすなと祈ばや。木曾路の櫻さきぬらん◎

風輪最下の安立―風輪は世界の基となり、水輪火輪、地輪成るなり

劍閣のみねにのぼるとか。峨眉の山の邊にも。行通人ぞ稀なりし。朝な〳〵よな〳〵の心。行宮に月を見ば。心を痛しむる色。夜の雨に猿を聞て。腸を斷聲も。勝さこそは哀なりけめ。春の風に。桃李の花の開る日。秋の露に。梧桐の葉の落る時。西宮南内に。秋の草や茂るらむ。落葉階に滿て。紅拂ずとかやな。鴛鴦の瓦すさまじく。霜花重や。ふるき枕ふるき衾。誰と共にかなづさはむ。抑方士が尋得し。太眞院の玉の樞。左右の侍者。おの〳〵綠の袖を連ね。出迎しありさま。執あへざりし插頭の。ねくたれ髪のそのまゝに。思ひ亂れし粧ひ。彼驪山宮の私言。語傳し態までも。天長地久。終に絕せぬ契りは。賴敷ぞや覺る。

風

風大虛にゆるくして。春の水。氷を漲流あり。風野徑に音信て。秋の露。草葉を潤す粧ひ。寒暑折をたがへず。其德時にかなへるや。聖代明王の御代成らん。先は風輪最下

らながからん。

長恨歌

夫泰階平に。四海ことなく。玄宗位に御座て。天の下治事。改の年を重ても。霓裳羽衣の袂に。花容嬋目並色やなかりけん。楊家の深き窓に養れ。一朝に撰ばれて。君王の傍に相見つゝ。この百の媚ありしかば。六宮の粉黛も。顔色無とや愁けん。さればや風になびく。雲の鬢なつかしく。雨を帯たる。花の容貌匂を副。芙蓉の帳あたゝかに。春のよいとみじかく。日闌ておき給ては。朝政や怠し。承歡に寝に侍て。閑成暇なく。春は春の遊に隨ひ。夜は夜な専に。仙樂風に飄り。所々に聞つゝ。緩々歌ひ。猥がは敷かなでつゝや。絲竹の調をこらしけん。叡覽終日に飽しも。理とぞ覺る。しかはあれども。翠花揺々として。行て又留る。都門を出て百餘里。その六軍なともせざりき。花の插頭地に委して。收る人やなかりけん。風蕭索たり。雲の棧廻り廻て。

長恨歌—白樂天の長恨歌の文意に據る

翠花—天子の旗

六種―一つにはそへ歌、二つにはかぞへ歌、三つにはなずらへ歌、四つにはたとへ歌　五つにはたゞごと歌、六つにはいはひ歌也、詩の六義の風賦比興雅頌の意也
梨壺の五人―大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城
金の葉云々―金葉集のこと
詞の花云々―詞花集のこと
君―後鳥羽院をさす

へ。品をば六種に分てり。梨壺の五人を。昭陽舎に置て。後撰集を集しむ。拾遺は花花の製作。長保寛弘の比とかや。後拾遺の奏覧は。應德三の長月。金の葉を重ぬるも。同き御宇とこそ聞。彼よりおほくの春をへて。詞の花を手折は。崇德の賢翫。千載は文治の夏の天。彼宇治山の跡を訪て。松の樞を出たるや。傍に越し譽ならむ。さても新古今を集。其名を興すのみならず。歌を二千々にかさねつゝ。君もさながら難波津の。よしあしを分るゆゑに。手づから集め。自撰る跡を留め。臣も又あさか山。淺深に迷ねば。心の林詞の露。漏たる玉やなかりけん。花の匂鳥の聲。此月の光雪の色。景趣こゝろすごくして。眺望眼に浮ぶより。盡せぬ戀を駿河なる。富士の煙に身をこがし。鏡の影の朝毎に。雪と浪とは厭しく。長柄の橋の橋柱。朽ぬる昔を忍びつゝ。鶴龜に餘副ても。萬代を祈まで。勝磯城島の道無ば。知もしらぬもうづもれぬ。其名をば何にか殘べき。渾百福の宗は悉。六義の内に演盡し。萬物の德は何れも。八雲の奥に納れり。大空の月も住吉の。忌垣の松の葉散事なく。代々に絶せぬ此歌も。蓑のかづ

雨夜の歓の物語—源氏物語帚木の巻參照
東屋歌し—同書東屋の巻參照
雨そゝぎ—同巻に、さしとむる葎やしげき東屋のあまり程ふる雨そゝぎ哉
身を知雨—同書浮舟の巻、つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとゞ水嵩まさりて

つしかさゆる氣色にて。風まぜに碎てたまらぬ玉霰の。霙とかはる冬の雨。さびしき詠の徒然に。其品樣々なりけるは。雨夜の歓の物語。勝忘られぬ節々も。さこそはおもひ合せけめ。雨の名殘の宵の間に。溫明殿の渡を。たゝずみ歩きたまひて。東屋歌し折かとよ。うたてもかゝる雨そゝぎ。眞屋の餘も馴しとや。數ならでさすが世にふる習は。身を知雨の槇の屋に。やすくも過るか淺水の。橋うち渡す雨もよに。此とゞろ〳〵と降し雨。

和歌

傳に聞。日本尊の歌は是。天地開始り。人事定らざりしより。心内に動て。理世の道も備り。詞外に顯れて。撫民の信を先とす。されば日域朝廷の。本主は專我國の習俗を捨ずして。時雨降おける楢のはの。侍臣に仰し萬葉。勅集の源也けり。其後世は十嗣を經。年は百年あまりかとよ。延喜の聖の御代には。古今集を選て。此後を世に澁

羅、人、天を六道と云ひ、之に聲聞、縁覺、菩薩、佛を加へて十界といふ、即ち六凡四聖なり

榮爵にあづかる松―始皇泰山を封じて疾風暴雨に逢ひ松樹に避く、因つて其木を五大夫に封ず

只其群類の奴とならんとぞ思ふ。乞願は此願を。陰らず照給はば。上は法身の月の前。下復和光の塵の底。我等に深き結縁の。感應擁護を仰ぐ國津神。蘆原や破馭盧島に宮敷建て。御座かりける憑敷ぞ覺る。

雨

秦皇泰山の天の下。星霜ふりにし古。榮爵にあづかる松が枝の。緣も深き色を増す。凡雨は天子のや恩として。國に普き德を成。西北に起る雲の膚。東南に來雨の足。時を違ざるは是やこの。十日に開き恵ならん。春の荒小田打返し。思へば榮る民の草葉も押並て。苗代水の引々に。取や早苗の態までも。畔こす小浪に袖ひぢて。春雨急雨白妙の。卯の花くだし五月雨。影ろふ雲にやさわぐらん。おもひもあへぬ夕立。すゞしき風を先立て。露置副る秋の雨は。時雨に成か尾上吹。嵐の末の浮雲。小雨に懸る露けさ。ひぢ笠雨のやすらひ。荵に傳ふ玉水の。落るや軒場の山下に。脆も木の葉の雨とふれば。い

淨名居士—維摩居士とも云ふ、菩薩の道を行ひたる人

六大—地、水、火、風、空、識の六大法界に遍滿して一切法を造作す

四曼—四種曼荼羅の略、一に大曼荼羅、二に三昧耶曼荼羅、三に法曼荼羅、四に羯摩曼荼羅

緊那羅—人に似て一角あり人非人と號す

摩睺羅—摩睺羅伽なり、地龍にして腹行す

十界六道—地獄、餓鬼、畜生、修

も。しかすが定恵の埒にはつまづかざるべし。醫王の藥を儲しも。病に利有と見給へども。其藥を嘗むる人は皆。只良藥の名にのみめづ。故有とぞや覺ゆる。淨名居士の無言說。文殊は是を知て不二法門と褒給ふ。云へば云ふいはねば恨む等閑の。なげの言の葉は。由無き婦が玉章。何とかやあな云ひしらずや。水は流れて春の色。嵐は吹て秋の空。本よりなれが理をば。いかゞは作成べき。抑六大四曼の相。綠の春の英。色々にさける秋の草。琴詩酒の戲。緊那羅摩睺羅が法までも。歩を運び手を糾ふ。是皆祕密の形なり。さながら深祕の言種。見るも見ざるに似たり。きいても聞かざるのみならし。或は色に出で。或は聲に立つ。宮商角徵羽の五音。五色五輪の形も。五佛の智より顯る。知ると知らざると。捨つると捨てざるとなれば。いざさらば只太に漕ぎいでむ。大悲の海には弘誓の舟を浮べつゝ。取手は緩くとも。忍辱の梶に身を任せ。引手にたゆみなく。大慈の綱に懸りて。浦々島々磯本動。猶豫浪に立てる白雲。八重に渺る海原や。青波分出づる岩か根。藻に住蟲の棲にも。我からゆかんの道なれば。十界六道皆漏さず。

姑射山―藐姑射山は仙人の居處也、後仙洞御所の事に云ふ

本覺云々―衆生は無始無明のために本有の覺體を覆はれ、惑、業、苦の三道を生ずるに至るの謂也、要するに本來の悟より出でて迷ひに入るをいふ

影。さして幾代をかぎらん。姑射山の月の光。秋の色鮮に。星をいたゞく夙夜の勤。同仙洞に霜を打拂ふ。龜の尾山の動なき。岩根の瀧の白玉は。幾萬代の數ならむ。人ごとに昇はうれしき位山の。道ある御代はをさまり。代々經ても彌榮行。竹の園生に遊なる。鳳は翅を刷。明王の徳を待出。幕府山の春の梢。枝を連てのどかなるや。天下靜謐のしるしならむ。千年の松の翠も。萬年の苔の色までも。鶴龜の名をあらはせば。此砌にやさかえむ。鶴谷山巨福山。嵐萬歳を呼なり。

釋教

本覺の城を出しより。眞如の臺に塵積て。此身の身を知りがほにして知らぬかな。生じ生じても。猶死の行方をば辨へず。如來は我等が慈父として。一子の慈悲を垂給ふ。なぞしも我等が。思もしらでのみ過す。不孝の責をいかゞせん。倩思ひつゞくれば。他にも年月を爭でか送りけんやな。こゝろより外には法の馬もなし。精進の鞭をばすゝむと

潯陽｜白樂天の琵琶行の故事

されば葦分小舟のさはりおほみ。遇難蓬壺を尋ねしも。船をして煙波の底に傳ふらく。あの和琴潯陽に月靜なり。入江の舟の琵琶の曲。東の舟西の舟。悄然として是をきく。緩く攪鳴して。唐櫓さびしき船の中。葦間の月に棹さして。倡ふ翁の釣漁の舟。つながぬ舟の定めなく。誰をさしてか松浦舟。心づくしの波の上。年や經ぬらん長井の浦の。渚に朽ぬる捨舟。外渡舟の械の滴も絶難き。二千里の須磨の浦傳ひ。客帆寒き夕照風や。舟人さわぐ邇保の海。鸚鵡州の夜の泊。隣船に歌の聲愁て。明月涙をや螢らむ。玉をかざりし錦。色々の財力ある。隋堤の柳に繫舟。

寄山祝

君王德高して。峨々たる青巖。霞をそばだてて聳たり。功臣忠深き事。遠々たる嵠谷。雲に埋て幽なり。久き樣にひかるゝ。蓬が島もなにかせん。大内山の縋には。比春の惠普く。雨露の恩をそゝぎつゝ。樂榮は筑波山。葉山繁山しげければ。御笠の山の春日

上御覽ぜらるゝ詩とらせし—菅丞が明石の驛長に驛長無驚時變改、一榮一落是春秋の詩を示せしを云ふ
雲井に翔—源氏物語明石の卷、秋の夜の月毛の駒よ我戀ふる雲居にかけれ時のまも見ん
いで我駒—催馬樂
駒の蹟—人に醜はるれば乘れる駒蹟くと云ふ、後撰集に、くちぬらん袖ぞゆかしき我駒のつまづく度に身をしくだけば
檜の隈川—前に註す
胡馬云々—文選の古詩に、胡馬依北風、越鳥巣南枝」

らせし態までも。よしあんなる物をな。都の路やまよひけん。黒駒を引し明方。雲井に翔れとぞおもふ。秋の夜の月毛の駒をば。いかなる馬なるらん。甲斐の黒駒と鶴駮の駒と。望月桐原の御牧に立駒。いで我駒ははやく行け。待らん婦をはやみん。此けにこふらしやれ駒の蹟やな。檜の隈川に駒とめよ。しばし水かふ影をだにみん。霞の春の花形。くもらぬ秋の望月は。我朝に名を得し名馬也。竹馬は幼稚のたはぶれ。老馬は雪にもまよはず。胡馬北風にいばゆるも。いかでか心なかるべき。觀音の形像には。馬頭の形をあらはし。神には生馬の明神。駒形の利益ぞ掲焉。馬櫪神の誓は。馬を守靈猿。憑敷ぞや覺ゆる。郢曲にも催馬樂。御馬草白馬其駒。司馬相如が琴の音。牡馬といへるは琵琶の名。抑樣々の御法の教は多けれど。心の馬をしづめずば。誰かは實の道に入らん。

船

一葉風にさそはれて。水にうかべる昔より。河海を渡るはかりごと。波濤を凌ぐ便とす。

七寶云々—七寶の中に瑪瑙あるをいふなるべし

八疋の天の駒—絶地翻羽奔宵超影踰輝超光騰霧挾翼の八駿也

白馬—前出

駒引—八月十六日信濃の勅旨の牧の馬を牽り主

燃燈佛の古を。今の瑞相にしらせしも。懐舊の誠を顯はす。

馬德

教月西天に朗に。佛日東漸の光をそふ。倩其ことわりを思ふにも。經典を白馬に荷しめ。轡を流砂に促がし。蹄を葱嶺に奈せず。傳し道ぞ賢き。凡馬に眞俗のや徳多く。號して其字に故あり。七寶のなかにも。正に馬を寶とす。龍樹菩薩の論釋に。隔檀往向を分つゝ。圓々海德をあらはしも。起信大乘によりてなり。是又馬鳴の製作。さればば此論師の名字の。其古を訪ば。過去の輪陀の在世かとよ。千の白馬を現じつゝ。千の白鳥を鳴しめて。正法を紹隆せし故に。卽馬鳴の名を得たり。佛法最初の執政も。厩戸の王子と號せらる。蘇我の馬子の大臣も。此御時の人とかや。穆王八疋の天の駒。後の人是を愛すな。背は龍の如し。頸は鳥のごとく也。累代の政は。白馬の節會駒引。馬形の御障子は。九重に是を立らる。左右馬の寮頭。馬司國々の厩。厩の長に口持と

昌泰の昔の詞ー菅家の東風吹かばの歌をいふ

小野山云々ー在原業平が惟喬親王を問ひし故事也、伊勢物語を見よ

釋奠ー大寶元年二月十四日行はる

殘れり。呉竹の斑なりしは。舜をしたひし餘波の涙なりけり。古宅の梅をさそひしは。昌泰の昔の詞なり。親故は駕を廻し。妻孥は都を出でずして。鳳凰池上の月におくられしも。いまだ關を越えざるに。いつしか古郷をや忍びけん。梓弓引野のつゞらくりかへし。猶古をしたひつゝ。春を忘れぬ記念は。舊野に植ゑし櫻花。昔べや汝も戀しき郭公。鳴音よいざさは我に借ん。今までは心ながきは秋の夜の。月の光にさそはれて。恩賜の御衣と詠じつゝ。詠明石の浦傳。波の立居に古郷の。面影いかにうかびけん。分て又昔をしのぶ翫の。其手習のなかにも。思出る事おほく。秋に成行空の化粧。山形懸たる家居の。門田の稻のいねがてに。ひた引きならすおとまでも。見し東路の心地して。時を分ぬ夕の露。さこそは袖に亂れけめ。小野山や深き恨の雲の朝。踏分て問し情に。家主も更に昔を戀ひ。客又懷舊の切なる事を勸めき。さても文武の御宇かとよ。遠く唐のや文の道を忍つゝ。孔子の報恩に日を點じて。釋奠を大學寮に始め。近く建久の治天には。日本歌の情をすてざる餘。柿の本の影供を。和歌所に行はる。抑法華説期の砌。

の竹を以て笛を作らしめ鳳凰の聲に像る
風の竹に生夜―朗詠集夏夜、風生竹夜窓間臥
澗戸云々―朗詠集、澗戸鳥歸、遮眼　竹烟松霧之色、
松の尾の明神―大山咋神、市杵島姫神を祀る
王子晉云々―朗詠集仙家參照

らとはせぬ鶯も。軒端の竹に臥馴。三月の空のくれつかた。花は殘らぬ嵐に。散らぬ翠の松の葉。風の竹に生夜の。あの窓の間の假寢。松の響に通ふは。班女が夜の琴の音。陵園妾が松の門。晉の七賢が竹林。臨時の祭の試樂に。竹をかざしゝ始も。よし有てぞやおぼゆる。澗戸に鳥の歸る時や。竹の煙たち增り。除目の中の夜半の天。松明の炭や積るらん。松の尾の明神は。王城ちかく鎭座し。竹生島の天童は。湖邊遙にあとをたる。松の柱竹の垣。疎なりし家居は。海面遠き山里。さこそは冷しかりけめ。

懷舊

閑に曉の夢に語へば。懷舊の露の手枕に。結ぶや老の涙の。古にし昔ぞ戀敷。深更に殘る燈の。ほのかに往事をかぞふれば。霜をかさねて消えなんとす。秋の閨淋じく。朝に聖代の昔を學び。家に忠臣の跡をしたふ。是皆懷舊の思あり。されば詩編に心を演べや。和歌に詞を顯す。王子晉が珠の床。空しき洞に留り。羊太傅が碑の文。主なき宿に

八王子、客人宮、十禪師、三宮、

一心三觀—一心とは行者の一念、三觀とは空觀假觀中道觀なり

烏瑟—肉髻

錯午の風—朗詠集に、竹含錯午之風。

鳴鳳之管—黄帝伶倫をして崑崙

一心三觀の月の影。比良の高根にかゞやく。麓を遥に望めば。白浪湖水に連り。後を顧みればまた。紅葉巌上に色をそふ。古松は瓦のひまをかくし。老杉は門をふさげり。霜深き庭の叢重れたゞ。うき世に還る跡もなく。霞行檜原を分入る泊瀬山。人の心をしらねども。花は貞にさきけるは。泊馴れにし宿の梅。音に聞く其名も高き高野山。深御室の遥々と。星霜舊き松の戸の。さしていくよの曉に。出づべき先を契るらん。堂塔甍を連ねて。佛像烏瑟の影を副へ。坊舍窓を並べて。經論玉章の文を磨く。さても承知の比かとよ。梢の雲も寒き夜。靈鳥來りて鳴きしは。いかなる告なりけん。延喜の朝には卽ち。御衣を送給ひしに。樣々の瑞相をあらはす。

松竹

緑松は貞木の號有て。霜の後に露れ。素竹は錯午の風吹て。比夏の天に譽あり。されば忠臣の道をも此色に喩へたり。鳴鳳の管にも。其聲をや裝ふらん。櫻を分て。ねぐ

卷、諸共に大内山は出でつれど入る方見せぬ十六夜の月
梁伯鸞—後漢の人
孟光—梁伯鸞の妻
千株云々—朗詠集に、千株松下雙峰寺
七社—大宮、權現、聖眞子、二宮、

き情の友なれや。凡君臣合體のことわり。夫婦同穴の契も。皆是ともになずらふ。中にも梁伯鸞が、此覇陵山におくれざる。孟光多年の遊を忘されと。契し儲君が製作。影さへ見ゆる山の井。此すみはてぬ飛鳥井。深き思の程は猶。此世一の酬かは。淨德夫人は印。妙莊嚴王を諫て。つひに善趣におもむかしむ。無著世親の其昵なつかしく。名を千古に飛しめ。春の蘭あきの菊。匂を普く施して。互に遷化を兜率の雲に顯し。滿月の光圓也。彼是ともに勸て。得道に向謀。是皆朋友の德なれや。

山寺

千株の松の下には。青嵐窓冷じく。雙峯の軒の間には。白雲隣をトめたり。晩鐘霜に響く聲。曉月露に寒き色。聞くに哀を催し。見るに心を傷ましむ。抑天智の草創は。園城の舊院。百年餘の經行。その名を三井の水にやながすらん。桓武の建立は。叡山の靈窟。七社の誓願新に。其威を四明に及す。一乘圓宗の英。碧建柚にかうばしく。

任、同齊信、同行成、源俊賢

夫云々—此の冒頭孔子家語の文意に取る

子猷—晉人、王氏

鏡に向山鳥—此の故事枕草子參照

東の旅—業平の東下り

入方見せぬ—源氏物語末摘花の

将よりや。田村保昌に至まで。古今殊なりといへども。忠を天朝に盡して。名を後の代にとゞむるは。たゞ此道の譽也。凡北闕彌安全に。東關益治て、武威重く。文道すなほなりければ。四夷又起事なく。此三韓早く隨はん。

朋友

夫與善の人に伴て。芝蘭の室に交。與惡の友を厭て。鮑魚の肆に入べからず。子猷は雪月にあくがれて。遙に安道を尋き。劉愼は清風に。玄度なき事をや恨けん。伯牙は鍾子なかりしかばや。永琴の緒を括し。樂天は又遺文に。金玉の聲を増とかや。立まよふ夕の霧の絶まにも。列を亂ぬ雁がね。鏡に向山鳥の。影をや友と鳴つらん。友とする人のすくなき。東の路の宇津の山。山腰雲暗してや。猿の叫すくなく。澗底嵐深して。此鳥の聲幽なり。蔦も鶏冠木も色を染。檜原眞木の葉露滋し。夢にも人のと言傳しも。都の友の行あひ。彼常陸の宮の栖家を。里わかぬ月に遷來て。入方見せぬと疑しも。深

學は云々ー朗詠集將軍塋照
四七の武將ー後漢の光武帝を助けし二十八將
野相公ー小野篁
四皓ー東園公、綺里季、夏黃公、甪里先生
四納言ー藤原公

文武

學は麟角を抽て。此文章を味ふ。職は虎牙に連りて。又正に武勇を拉ぎ。文は民を撫る謀。武は國を治警也。されば或は二八の文士を撰れ。或は四七の武將を定置。守文草創の二の道を分し。魏徴玄齡が諍。いづれも進退ず。呂尚周文の車を許れし賢才。拘らざる故とかや。楚の軍戰に。あの革車に乗りし忠臣。思慮の武きを顯す。蘇武は是麒麟閣の兵。田邊のおくの露の命。稻葉の末にかゝりて。多の秋を送し。愁書を雁の翅に附。野相公は即仁明の朝に仕き。松嵐冷き月の夜。悲歎を蔓草のことばに述。彼は武功ありしかば。塞垣に囚れ。是は文藝巧なれば。勅答に預る。蓮府僕射亞相は。文を掌て。律令を正。輪轂を前として。君を助る勞深く。幕下都護大理は。各武に象りて。兵仗牛車の粧。帶劍を給て。あの國を守る功厚し。漢家の四皓にはぢざるは。我朝の四納言とかや。才を雲上に施し。藝を都鄙に感ぜしむ。樊噲豫讓に及は。源平両家の良

沐三握レ髪、一飯三吐レ哺と云ふ
三公—大師大傅大保を云ふ、我國にては太政大臣左右大臣也
延光—源氏にて醍醐の皇孫也、枇杷大納言と稱す
顯基—罪無くて配所の月を見たしと云ひし人

つ。朝に雨露の恩を受。夕に御膳を備ては。霜雪を戴て。夙夜に功や積らん。されば上は三公輔佐の雲の上。景靡月の都より。百の務ことぐ〳〵く。其品々に隨て。緋も綠も色に。衣の袖を連つゝ。仕ろ道に物うからず。掃部寮の筵道。此衛士の燒火の庭もせに。大宮人の朝淸目。塵に交態までも。夙夜の忠にや備らん。光源氏に仕し惟光義淸は。霞の内のかくれ家にも。立おくるゝ事なく。霧の籬の隔なく。里をもわかず隨て。しかりし旅寢の床。磯間傳や彼岸に。年經海人の栖家までも。見るめの草の假にても。花の宴紅葉の賀。あの春の遊秋の興。夕顏の宿花散里。六條邊の通路。須磨明石の浦めこゝろに違節もなし。舊臣の勝て哀なりしためしの。衣の色の深きは。延光の大納言や。顯基の中納言。彼は天曆の古を忍つゝ。近臣の昵なつかしく。菩提の道の緣と成。是は夙夜の昔の面影を。故宮の月に思出て。秋の心を傷め。淺茅が露の玉ゆらも。忘るゝ隙ぞなかりける。是皆夙に起。夜半に寐ざりし。懷舊の思や切なりけん。

十六羅漢―三明六通無量功徳を具へ正法を守護する尊者、賓度羅跋囉惰闍、迦諾迦伐蹉など十六を數ふ
十六善神―十六の護法神にて毘首羯摩夜叉、劫比羅夜叉、法護夜叉などなり
十六の章段―觀無量壽經に十六觀門とて日觀水觀地觀など十六を說く
迷盧―須彌山
風に髮梳云々―莊子に禹の忠節を說いて、沐甚雨櫛疾風といひ、唐書に文皇帝櫛風沐雨とあり
三度食を納ず云云―周公の士に下りし故事、一

覺母の梵篋を圍遶す。彼土の相を修するも。十六の觀察にしくはなく。遠離不善の願も叉。第十六に當とか。十六の章段を連ては。淨土の宗旨を顯はす。末代濁世の根機には。是叉要路とこそきけ。十六丈の廬遮那佛。我朝第一の大伽藍。外朝にも並なし。迷盧は十六萬由旬。十六丈の寶塔も。皆故ある物をな。かたじけなくぞおぼゆる。一字頂輪王の三摩地後十六生。菩薩の十六分の種姓は。生覺の月圓に。殘れる隈はなけれども。密敎の嶺はるかなれば。顯乘の雲をやへだつらむ。

夙夜忠

道を傳。家を起。名を後の代にとゞむるは。此君に仕る忠臣。忠臣の譽を顯すは。夙夜の忠を重つゝ。賢き惠を仰也。凡夙夜に隙なく。風に髮梳。雨に沐するしてや。曉に出星に入。壓壁に背る。燈を挑といへども。閨の床を暖ず。閑に枕を傾ず。宮司の勤に忙しく。三度食を納ず。三度髮を上るは。功臣の忠勤に依てなり。朝政にまみえつ

は正月の十六日。霰走の節會は。和暖を奏る政。朱雀は明主の譽有。御在位十六年の間。さまぐ〜の政德を施す。御手洗河の瑞籬に。鳳輦光をかゞやかし。轅を北に廻しめ。又男山の峯には。大宮人の頭插折。歩を南に運つゝ。雪を廻す花の袂。山藍もて摺れる衣の色。並立る袖もうちみだるゝ。求子駿河舞の其品。勝に故々敷ぞおほゆる。東遊の追風。風をさまれる御代なれば。なびかぬ草木やなかりけん。十六拍子の舞曲は。三臺鹽團亂旋。此陵王の半帖よりの亂拍子。取々なる曲なり。源氏のわりなき節には。十六乙女の卷とかや。古世の友よはひ經て。神冷まさる天津神。豊の明の面影を。いつかは思わすれん。紅顔の粧にほひやかに。花の容貌妙なりし。上陽人が古も。參し時は十六。三千の鍾愛の其中に。十六人を撰て。猶又勝たりしは。光明夫人摩尼仙女。二人の媚を調て。三十二相ときこえしも。各一十六とかや。抑遺教流布は皆。十六羅漢の擁護なり。大通智勝の往年。二八の王子の末なりし。第十六の王子も。今の釋迦牟尼如來是也。壽量は第十六品。如來の久遠を演らる。般若の十六善神は。文殊の利劍いちはやく。

求子駿河舞―東遊參照

三臺鹽―一名天壽樂、則天皇后の作

團亂旋―又團團傳に作る、唐の玄宗の后宮にて作れりといふ

陵王―蘭陵王又羅陵王に作る、北齊の蘭陵王長恭の勇姿によりて作れる舞也

古世の友―源氏物語少女卷の歌、少女子も神さびぬらし天つ袖古き世の友よはひ經ぬれば

三尊―彌陀觀音勢至

粟散―國の義の佛語也、後特に小國を云ふに至れり

十六の大國―釋尊在世に於ける印度内部の國にて毘舍離國憍薩羅國迦毘羅國等十六あり

百濟云々―十五年秋八月

芳野の國栖云々―十九年冬十月國栖人來朝、其歌記紀歌集參照

に彼所に詣でつゝ。倩思ひつゞくれば。かすかに傳聞く。西天月氏の古。信心の窓を照しては。三尊光を並べつゝ。紫磨金の尊容。東土日域の今。眼前結緣絶えずして。利益を普く施す。かたじけなくも十萬億刹の堺を過ぎ。妙覺果滿の臺を出で。粟散邊地を尙捨てず。濁世の塵にまじはる。故有哉や本願の。あの難化難度の誓ならん。

十六

人に定れる盛有。十六を以て盛年とす。物に必故有。數十六に德おほし。粟散廣しといへども。先は十六の大國。國又無量にきこゆれど。天照日次を受傳。古ぬる磯の神代より。天の逆鉾を立初し。我國は賢境なれば。人代十六の皇。應神の御宇の榮より。色々の寶を送りつゝ。百濟經典を奉。芳野の國栖を奏せしも。此御時にはじまる。其より又十六世。用明の陰らぬ御代かとよ。厩戸の王子世に出て。終に法燈をかゝげ給ふ。則逆臣を平しも。十六歲の時なりき。累代の善政は、折にふれ時にしたがふ。踏歌

臼井山―碓氷
離山―淺間山の裾野の一峯
望月―此の牧の馬を毎年八月朝廷に奉る
海野―信濃小縣郡
白鳥―同上
落合―佐久郡、湯川の千曲川に入る所
鹽尻―東筑摩郡にある峠
坂木―埴科郡
佐良科―然（サ）らじに言掛く

る。雲雀は翅を雲にかくし。哀猿は號んで霧にむせぶ。苔踏みならす岨傳。向へる尾上の盤折。椎柴椽柴楢柴に。枝さしかはす白樫。かぶろなる樹するどなる。槇の立枯陰さびし。岩間に漲る瀧の音。巖洞に響く松嵐。取々なる哀は。山路の旅の秋の暮。青葉こそ山のしげみの木陰なれ。いざ立寄りてかざしとらむ。一むら雨のやすらひに。まだ染めやらぬ紅葉ばの。薄紅の臼井山。おもふどちは道行ぶりもうれしくて。いかでわかれなむ離山の。其名もつらし過ぎなばや。雲間にしるき明方の。淺間の煙にまがふは。高根にのこる横雲の。跡よりしらむ篠の目。日かげのどけし水葱の松原。遙々とへだつる方や葛原の。里より遠の程ならむ。深さはしらず櫻井に。花の白浪散りかゝり。霞める空ぞおぼつかなき。望月の駒引きかくる布引の。山の楚交にみゆるは。海野白鳥飛鳥の。飛鳥の川にあらねども。岩下かはる落合や。淵は瀬に成るたぐひならん。富士の根の姿に似たるか鹽尻。赤池坂木柏崎。同じ雲居の月なれど。何の里もかくばかり。よも佐良科とみゆるは。姨捨山の秋の夜。筑摩篠の井西河。さま〴〵の渡を越え過ぎて。既

多摩郡、今の東村山
堀難の—武藏の名所堀兼の井のこと、出に非を掛く
入間川—武藏入間郡
そはずのもり—森の名を掛詞とす
大藏—武藏比企郡
兒玉—武藏兒玉郡
雉が岡—同上八幡山城址
山奈越—山名は上野多野郡
倉賀野—上野群馬郡
豐岡—上野碓氷郡
板鼻—同上
松井田—同上　誰待つに言ひ掛く

だながらむすぶ契の名殘をも。ふかくや思ひ入間川。あの此の里にいざ又とまらば。誰にか早敷妙の。枕ならべむとおもへども。婦にそはずのもりてしも。おつる涙のしがらみは。げに大藏に槻河の。流もはやく比企野が原。秋風はげし吹上の。梢もさびしくならぬ梨。打渡す早瀬に駒やなづむらん。たぎりておつる浪の荒川行き過ぎて。下にながるる見馴川。見なれぬ渡をたどるらし。胡市の里動むまで立ちさわぐ。是やは兒玉玉鉾の。道行人に事とはん。ものゝふの弓影にさわぐ雉が岡。矢並にみゆる鏑河。今宵はさても山奈越ぞ。いざ倉賀野にとゞまらん。夕陽西に廻りて。嵐も寒き衣澤。沫野を過ぎて指出や。豐岡かけて見わたせば。ふみとゞろかす亂橋の。しどろに違ふ板鼻。誰松井田にとまるらん。

同　次

野邊より野邊を顧みて。野外の煙片々たり。山より山に遙來て。重山はるかによぢ上

穂屋の薄—古歌に、信濃なる穂屋の薄も風吹けばそよ〳〵さこそいはまほしけれ
帚木—坂上是則の歌、園原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな
常葉山—鎌倉の大佛切通
きつゝなれにし云々—伊勢物語の故事を引く
小山田—武藏都筑郡なり、其所の關を霞の關と云ふ
久米河—武藏北

善光寺修行

信濃の木曾路。甲斐の白根。思を雲路にはこばしめ。旅客の名殘。數行の涙。情を餞別の道に顯はす。穂屋の薄のほのかにも。伏屋に生ふる帚木を。有りとばかりもいつか見む。吹き送る由井の濱風音たてて。しきりによする浦浪を。なほ顧みる常葉山。かはらぬ松の緑の。千年もとほき行末。分過ぐる秋の叢。小萱苅萱露ながら。澤邊の道を朝立ちて。袖打拂ふ唐衣。きつゝなれにしといひし人の。干飯たうべし古も。かゝりし井手の澤邊かとよ。小山田の里にきにけらし。過ぎこし方をへだつれば。霞の關と今ぞしる。おもひきや我につれなき人を戀ひ。かく程袖をぬらすべしとは。久米河の逢瀬をたどる苦しさ。武藏野はかぎりもしらず終もなし。千草の花の色々。うつろひやすき露の下に。よわるか蟲の聲々。草の原より出づる月の。尾花が末に入るまでに。ほのかに殘る有明の。光も細き曉。尋ねても見ばや堀難の。出難かりし瑞籬の。久しき跡や是ならん。あ

陀羅尼—呪文
蘇多覽—經文

寛平—宇多天皇

薫香風にやかをるらん。向へる峯は備崎。行道もしられつゝ。總持陀羅尼蘇多覽般若の聲耳に滿り。河舟の法のしるべもうれしければ。いつか佛の御本へと。思ふ心を先立て。煩惱の浪をや分過ん。雲取苔路紫金の瀨。取々なる道とかや。新宮は垂跡の始なり。飛鳥の宮神の藏。先此山に顯はれ。此巫女が鼓も打憑。憑をかくる木綿襷。佐野の濱松幾世經む。同緣の梢なれど。此二千石の號ありし。いかなる樣なりけむ。磯路を廻る濱の宮。山路に向ふ坂本。那智の御山は安名尊。あの飛瀧權現御座。苔踏ならす岩がね。所々の靈窟。半天雲を穿て。三瀧浪を重る。峯より落瀧下の。例時懺法聲澄て。瀧水漲音さびし。かゝる流の清ければ。かたじけなくも陰なき。清和寛平花山より。代代の聖代も此所に。あの今に絕ず御幸あれば。百王の末も瑞籬の。久しき神の御代なれば。我國やいつも榮ん。

南無飛瀧權現千手千眼日本第一大靈驗。

發心の門ー發心門の王子とてあり

三所權現ー本宮新宮那智

久遠の如來ー藥師

閻提補處の菩薩ー觀音

同　五

山下に上を望ば樹木枝をつらね。松柏緑陰しげく。盤折巖巓に通じて逆上。登々て暫休石龜の邊。行々ては倘又幽々たりとかや。此雲に埋む峯なれば。げに高原の末とほみ。凝敷岩根は大阪の。王子を過て行先も。はや近露にや成ぬらん。檜曾原しげる木の下。木枯さむく雪ちれば。花かとまがふ繼櫻。岩神湯の河はる〲と。御輿をこえて傍傳。閑谷人希也。鳥の一聲。汀の氷峯の雪。物ごとにさびしき色なれや。うれしきかなや仰見て。是ぞ發心の門ときけば。入よりいとゞにごりなく。心のうちの水のみぞ。げに澄まさりて底淸く。あらゆる罪も祓殿。御前の川は音無の。浪しづかなる流なれば。いや社壇軒を並て。あの三所權現若王子。五體四所の玉の樞。滿山の護法に至まで。或は久遠の如來も。常寂光の宮を出。或は閻提補處の菩薩。慈悲忍辱の姿を。しばらくかりにかくして。樣々の利益を施す。御正體の鏡は。塵をはらひて陰なく。珠簾玉を飾つゝ。

きゝのみわたりし—兼々話にのみきゝて實際には見ざりし、わたりしは永らく然かせる意の語也、川の緣にて特に用ふ

彼岸—涅槃の岸の意にていふ

秋の夜の曉深立こむる。切目の中山中々に。月にこゆればほのぐ〵と。天の戸しらむ方見えて。横雲かゝる梢は。そも岩代の松やらん。千里の濱をかへりみて。皆へだてこし道とほみ。萬山行ば萬の罪きえて。今はや出立田部の浦。砂地白くみゆるは。白良の濱の月影。陰ぬ御代は秋津島の。神もさこそは照すらめ。萬呂の王子の神館。見すぐし難き稻葉峯。穗並もゆらとうちなびく。田蓏を過て是や此。岩田の河の一の瀨。きゝのみわたりし流ならん。倩其水上の。深誓をおもへば。浮たる此身のさすらひて。無始の罪障は重とも。さも消やすき泡の。哀あひがたき道に入ば。岩こす浪の玉とちる。涙も共にあらそひて。幾瀨に袖をぬらすらん。山河の打漲て落瀧の尻。渡せる橋も賴母敷。彼岸につく心地すれば。誰かはたのみをかけざらむ。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ貴き。

南無日本第一大靈驗熊野參詣。

小松原―子の日の松に掛く　拾遺集、子の日する野邊に小松のなかりせば千代のためしに何をひかまし

玉藻の塵にまじはりて。吹上の濱の濱風も。神冷まさる音冷し。夏山のしげき軒端に薫橘。本の家主や袖ふれし。さもなつかしき夕風。梓弓入狹の山の鏑坂。分くる山路はしげければ。流は變らず在田河。河より遠や名草の濱。濱路はるかにとほければ。ほのみの崎をやへだつらん。青柳の絲我の山のいとはやも。はこぶ歩の日を經ては。道もさすがにしられつゝ。湯淺の王子角の瀬。由良のみなとも程ちかく。紀路の遠山行廻。鹿の脊の山名にし負。鹿のしがらむ萩原。寶富安千年ふる。樣にひかるゝ小松原。愛德山をばよそに見て。氷高の河の川岸の。岩打越浪よする。浦路にかゝれば愍を。垂る鹽屋の神なれや。此いなみ班鳩切目の山。惠もしげき梛の葉。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ尊き。

南無日本第一大靈驗熊野參詣。

同　四

有と星をば—貫之集、搔曇りあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは、蟻通明神のことに掛く
妹脊—妹山、脊山
葦邊の鶴—赤人の歌を引く

らん。梢にかよる天雲に。有と星をばえぞしらぬ。樫の井冬戸駒並て。驛にしばしやすらはん。長岡信建も過ぬれば。彼方是方の峯つゞき。雲のいくへぞよそに見えし。葛城山の山中。山口の王子に來にけらし。妹脊の中をながれくる。吉野の川の川村。登ば苦しき態坂。下てはるけき道末の。遠にしげる柏原に。つゞける木蔭の松本。神も我をや松が枝の。梢にかよる藤代。手向る幣も取々に。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ尊き。

南無日本第一大靈驗熊野參詣。

同　三

山は峨々として雲そびけ。海は漫々として浪を湛す。麓を過てよぢ登。御坂をこえてやすらへば。手向の王子の御注連繩。なほくりかへし顧る。渚につゞく和歌の浦の。干潟に並立る。葦邊の鶴も鳴わたる。汀にくだくる空貝。浪に沈める玉柏。玉津島の明神。

轉法輪所—教法を說きて邪見を破し正道を開くを云ふ
馴子舞—馴講舞也、寄合講をして舞ひ遊ぶを云ふ
法施—敎法を回施すること

轉法輪所を顯して。法燈今に絶せず。並たてる安部野の松に。鶴鳴わたる磯づたひ。君が千年は津守の。恨を殘す事もなく。まゐれば願を滿汐の。入江の松をあらふ浪の。白木綿かくる瑞籬。神冷まさる住吉の。千木の片鍛立並。鐵袖もをかしきは。王子々々の馴子舞。法施の聲ぞ尊き。

南無日本第一大靈驗熊野參詣。

同　二

千早破天より下神なれば。御影を垂てこゝにすむ。池田と和泉の堺の里。里をもさこそ守らめ。急雨の露もしのにちる。篠の松原千草の森。信田の杜もしげりあふ。小木の若葉の若綠。雲居をわたる鶴が原。大山重平松。あのみゆる渡瀨はしるき淺小河。ながれの末ははる〴〵と。海に出たる水の浦。興津濱邊の小夜千鳥。吹井の浦の浪の音。高志の濱安濃木が浦に。鹽木積なる海人の住。磯間のみるめぞゆかしき。日根の松原や是な

八相成道—前に註す

和光同塵—老子に和其光同其塵とあり、我智の光を隠して塵俗に混ずる意

美豆—淀と八幡との間にあり

瓊玉—文字をくずして瓊の模様に畫く、水茎歌繪も其の類也

八相成道の無爲の城。眞如の臺は廣けれど。和光同塵の月の影は。やどらぬ草葉やなかるらん。さればや景行賢御代の事かとよ。南山の雲に跡を垂て。星を連ぬる瑞籬に。誠の心をみがきつゝ。誰かは歩をはこばざらん。或は五更に夢をさまし。夕陽に眠を除て。煩惱の垢をやすゝぐらむ。宵曉の去垢の水。所をいへば紀伊國や。此無漏の郡彦の山路の。雲の濤煙の浪を凌て。思立より白妙の。衣の袖を連つゝ。都を出道すがら。あの北に顧れば。又大内山は霞みつゝ。へだつる跡もとほざかり。淀の河舟さしもげに。急とすれど有明の。名残はしひて大江山に。かたぶく月やのこるらん。行末をはるかに美豆の浪よする渚の際。此男山につゞける交野禁野の原。向の汀につのぐむ。蘆の若葉を三島江や。難波も近成ぬらむ。九品津小坂郡戸の王子。過行方にやすらへば、武庫の山風おろしきて。浦吹送る音までも。是や高津の宮柱。建て爲にし跡ならん。西をはるかに望めば。夕日浪にうかびて。淡路の瀬戸の夕なぎに。蘆手にまがふ浦霞。繪島の磯の瓊津浦。東に顧れば又。あの伽藍堂を並て。寶塔雲にかゞやき。一輪光を飛つゝ

優婆塞の宮―源氏物語なる宇治の八宮の事
うき水鳥の音になきし―同書橋姫の巻大君の歌に、いかでかくすだちけるぞと思ふにもうき水鳥の契をぞしる

中にも勝れておぼゆるは。釋尊說化の耆闍崛。沙羅林の雙林。鹿野苑。三世覺母の般若の室。解脱の風も涼しきは。淸涼山の竹林寺。終南山の月の光。悟眞寺の水にやどるらん。瑤池の正觀便を得て。さこそは心澄みけめ。閑居は大原小野の里。芳野の奥小倉が峯。喜撰が栖みし宇治山に。優婆塞の宮の移ろひて。うき水鳥の音になきし。その面影の今更に。又立歸る哀は。川瀨の波にやそぼちけむ。人に知られぬ山陰の。岩根を卜むる松の門。さすや岡部の夕づく日。ほのかに見ゆるすゝきの垣。しのに露ちる篠の庵。誰又爰にふし柴の。しばし夜をも明さん。手向くる花の花がつみ。且みる人も稀なれば。ひとり念誦のや聲澄みて。例時散花梵音。例時散花梵音。九條の錫杖。深山おろし瀧の音。涙を催す便なり。空山にさけぶ猿の聲。梢のよぶこ鳥やな。目にふれ耳に遮る類。あはれをそふる住家也。

熊野參詣

書、食貨志、酒百藥之長
盃ー月に掛く
唐の太子の賓客ー白樂天を云ふ
廬山ー朗詠集、廬山雨夜草庵中

には。なんぞ必ずしも。人のすゝめを待たんや。身づから榼の邊によらむ。鸚鵡盃のたはぶれ。みな其の昵なつかし。酒の香はしきのみならず。誰かは德に歸せざらん。百敷には酒殿。酒司の事態。酒をたうべてとうたふなるは。催馬樂の歌の詞なり。樂には酒胡子酒清司。皆舞曲は無けれど。飲酒樂勅を重ねても。猶輒からずきこゆる。胡飲酒の曲ぞすぐれたる。孝行の實をあらはしも。養老の瀧のいにしへ。いかなる酒のながれならん。げにありがたかりしためし哉。

閑居

廬山の雨の夜の。草庵の窓の灯。かゝげ盡して懷舊の。涙を催すは。夜を殘すね覺の曉。夢か夢にあらざるか。くらきよりくらきを厭ひこし。實の道のしるべは法の教にて。厭離は穢土の春の花。あだなる色にや匂ふらん。欣求は淨土の秋の月。陰らぬ影をや照すらん。聞くも浦山布。ゆかしきあとは。流沙を隔つる月氏の外。葱嶺に近き震旦の。

ん我を思はぬ人の契は

ゐもりのしるし―守宮の血をとりて女の肱にぬれば一生おちず然れども女異心あれば落つと云ふ、古歌に、ぬぐ香の重なる事の重なれば守宮のしるし今はあらじを

筑摩の鍋―近江の筑摩神社の四月一日の祭に、女は鍋を被りて神輿に従ふ、其鍋の數は男と契りたる數によるとぞ

一乘無碍の玉―八歳龍女、一寶珠を佛に上りて成佛せし事

明徳の譽―今昔物語卷二十に徳明等の二人酒を以て交りし故事見ゆ

百藥の名―漢

數やれ。螢をつゝむ袖の色。欵冬の花色衣のたもとにも。涙は顯れけりやな。思ふ心も淺からず。淺緑の薄様の。いとしみふかき玉章の。あらはれ初ししとね の下。此柿の紅葉をながしけん。其水莖の行方も。火とりをかづけられしわざと。うつ蟬のもぬけの衣も。終には主をしりにき。衣の裏に 顯しは。一乘無碍の玉とかや。

酒

酒に明徳の譽あり。しかも百藥の名を獻ず。萬年を延ぶる 翫び。皆情を催す中だちたり。花の春の木の本には。歸らむ家路も忘られし。紅葉の秋の林には。酒をあたゝめて日をくらす。南樓の秋の夜もすがら。光をさしそふ 盃の。かたぶく空を猶したひ。香爐峰の雪の朝。簾をまきあげて。誰かは是を勸めざらむ。されば唐の太子の賓客も。あの酒功讚に徳をのべ。晉の劉伯倫は又。常に一壺の酒を持し。戰 場にのぞみても。勇める色にはこるとか。古徳もおほく愛しき。賢人もさすが捨てざりき。いはんや興宴の砌

茅生に露置き添ふる雲の上人
闡提—不信の義
兜率—知足と譯す、欲界六天の第四
彌勒—慈氏と譯す、兜率天上の菩薩也
無著世親—無著は兄、世親(又天親)は弟、共に菩薩なり
護法—菩薩也、世親の瑜伽宗を相承す
戒賢論師—護法の跡を襲く
ぬぐ沓云々—事の外心あるしるしと云ふ、七十一番歌合に、ぬぐ沓のかさなるとてやいかゞせ

下す大井川。下は名に流たるや久方の。月の桂の川淀に。影さえわたる冬の夜は。岩間傳にわき歸り。下行水もうへこす浪も。氷をくだく心地して。拂もあへぬあし鴨の。上毛の霜は結べども。おのが青羽はつれなくて。つらゝの下にや朽ちぬらん。入江の波の下草。抑上は三世の諸佛。下闡提に至まで。上求菩提の月の光。下又衆生に影をたる。されば兜率の雲の上を分。彌勒の下し阿輸舍國の。輸闍那講堂の御法をも。上古無著世親と。此護法戒賢論師より。下末代に傳る。如來は金剛座の上。あの菩提樹下を定て。正覺をとなへ給ふとか。

顯物

佛陀の善巧方便は。あの慈悲の實を顯す。賢人の忠を顯すは。此國の政による。政陰ねば。明王の徳もあらはる。詞をのぶる筆の跡は。思の色を顯す。ぬぐ沓又かさなり。るもりのしるしも隱無は。あだなる契をあらはす。いかでか顯ざるべき。筑摩の鍋の

瓢箪云々—朗詠集、旣參照
忍ぶには非ぬ草の名—忘れ草を云ふ
卯杖—卯槌の類、これらは邪氣をはらふ祝事に用ゐる

柿の本云々—古今集序參照

小萩がもとに—源氏物語桐壺卷に、宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩が本を思ひこそやれ
露置そふる—同卷、いとゞしく蟲の音しげき淺

御局。或は殿上の下侍。此掃部寮に仰て。垣下の座を敷なるは、臨時の祭の庭の儀。上達部のみ立て。連ぬる袖の色々に。思々に手折は。かざしの花の下枝。晉の王羲之が垂露の點。書流しけん水莖の。上下の字に任つゝ。逆卷浪も立歸り。にごらぬ泉のながれは。げに有難かりしためし哉。齊の威王は。隣國の民に禮をなし。我座の上をあたへき。孟嘗君が砌には。三千の客を請じつゝ。わが座を下にあらたむ。文集の詞はひろけれども。上下の卷につゞまやかに。柿の本のまうち君を。上とも更に云難く。此赤人を下とも定ざりける。古今集を撰れ。千歌廿卷なれども。上下に是を分たる。内外の繝繝おほくは。此字に卷を名附也。光源氏のわりなきは。若菜の上下なりけり。あはれをかけし小萩がもとに。露置そふる雲の上人。下人して問けるは。伊勢より須磨の使とか。家々に替て引は。ひらやなぐひの上帶。人にしられで解なるは。契を結下帶。上裳のすそ下重。袖のうは露下ひもの。せきとめがたき涙を。上にはつゝむとすれども。下には通ふ思の色を。誰かはとがめざるべき。吹下嵐の山の麓の。其水上はとなせの瀧。筏を

岡に草刈る男然な刈りそねありつつも君がきまさんみまくさにせん

奥山の—萬葉集巻三、奥山の岩本菅を根深めて結びし心忘れかねつも

色々ごとに—古今集、秋の露色々ごとにおけばこそ山の木の葉の千ぐさなるらめ

さいたる花を—萬葉集巻八山上憶良の歌、秋のぬに咲きたる花をおよび折りかき數ふれば七種の花、萩が花尾花葛花瞿麥の花女郎花又藤袴朝顔の花、藤袴は蘭草、朝顔は木槿の古名也

鵙の草ぐき—鵙がかげを潜ること

の露の。色々ごとにおけばこそ。千種もひもとけ。さいたる花を手にとりて。かきかぞふれば七種。萩のはな尾花葛花なでしこのはな。をみなへし藤ばかま槿。たゞ借初に結ぶちぎりかは。小野の草伏草枕。あだなる鵙の草ぐき。あの壁におふる草の名の。いつまで草のいつまでか。古屋の垣にしげらん。瓢簞屢空しければ。此又げにさは。草顔淵が巷に滋かんなるものをな。何とかや忍ぶには非ぬ草の名よ。軒端にしげるわびしさ。かき絶えぬるか水莖の。岡邊のまくず恨みても。良枯れまさる冬草。

上下

上として哀むは。君の君たるめぐみなり。下として仰ぐは。あの臣の臣たるみちとかや。かたじけなくもすべらぎは。雲上陛下の御名にいます。天地もこれを司どり。あらゆる世の事態。皆上下の字に治まる。先は青陽の始に。此上の子の日を定て。若菜を奏する政。下の卯の日は。必卯杖を獻ずとかやな。或は上東上西門。上蘭樓。上の戸上の

據る
五節―十一月中の丑の日に行はれし女樂也、舞姫五人あり
さいたづま―虎杖(イタドリ)
春日野の―古今集、春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてん
あまのとの冬―天門冬(スマログサ)
早苗を急ぐ―後拾遺集曾祢好忠の歌、みたや守けふは五月になりにけり急げや早苗老いもこそすれ
かの岡に―拾遺集の旋頭歌、彼

夜。辰の日の節會は。豐の明も面白や。月次神今食。内侍所の御神樂。あの雪も月日も積年。送迎ていく代共。此猶限ぬは。我君の御代なりけり。

草

聞くもやさしきさいたづま。春緑と。夏野の草の葉をしげみ。秋百草の色々。冬はさびしき枯葉まで。とり〳〵なる中にも。先は雪間の若菜卯杖つき。摘まほしきに春日野の。飛火の野守出でて見よ。すぐろの薄角ぐめば。駒いばゆなりや粟津野に。ほどろと折るは早蕨よ。とりたがへたるはすまふ草。あまのとの冬やこれならむ。御生所の葵のかづらと。五月に軒端に蓬あやめ草。五月雨すればしほたれぬ。いつ刈りほさん眞菰草。小菅の笠のひまもがな。早苗を急ぐ御田屋守。若苗とらん早少女。かの岡に草刈るをのこしかなかりそ。有りつゝも君がきまさん。御馬草儲にせんやな。奥山の岩本小菅ねふかめて。思ふ心よ君がため。色どり衣する月草。うつろひぬるか何の間に。人の心も秋

馬を主上御覽ぜらる
踏歌―歌舞也、正月十四日十五日には男踏歌、十六日には女踏歌行はる
曲水―朗詠集三月三日參照
茅君洞―齊の陶弘景の故事、新撰朗詠集十五夜參照
毗毘闍―毗毘尼闍父は秋微尼など書く、解脫處の義也、摩頭夫人の父善覺長者の園圃
根合―あやめの根の長短を爭ふ遊
河瀬にながす―水無月祓
乞巧奠―七夕
放生會―八月十五日
紅葉の色に云々―此のあたり源氏物語紅葉賀に

河。園韓神大原野。此日々を定むる神事。皆二月の事也。魏年の昔のなみ。周旦曲水のふるき風。絶ぬ流を留て。あまねきは是桃花水。鶴に乘し仙人の。花にあそびし茅君洞。凡世間の美景は。春三月を賦せる詩。中天竺の藍毘園。卯月の八日は佛生日。其神山のもろかづら。誰か憑をかけざらん。曙雲の外の郭公。鳴や五月のあやめ草。長ためしに引けるは。郁芳門院の根合。六月の瀬の聲の。晴の雨に似たりしは。香山樓の北の。此暢師が住し禪房。螢火のかゞやく神と五蠅なす。あしきかみとを平げて。河瀬にながす木綿幣。歸る袂に吹初て。涼しき秋の初風。年々渡天の川。雲井の庭の乞巧奠。玄宗皇帝の。楊妃が肩にかゝりて。比翼連理と契し。驪山の昔ぞゆかしき。秋の最中のかひありて。月に心のあくがるゝ。陽明門の一廻。詩歌管絃の遊あり。都の南に男山。神の誓の放生會。上卿參議辨官。諸衞の佐まで供奉しけり。九日の宴は年ふりて。久しき菊の盃。十三夜の佳明は。延喜よりぞ傳はる。神無月十日あまりの比なりし。朱雀院の行幸。紅葉の色にうつろひし。青海波の舞の袖。朔日冬至の敍位の儀。五節の舞姫の參の

引く
わするゝ間なく—野分の巻、風騒ぎ村雲迷ふ夕にも忘るゝまなく忘られぬ君
晩田—夕霜の置くに言掛く
蓬が杣—曾禰好忠の歌を引く、新撰朗詠集參照
大昊—伏羲のこと
白馬—白馬節會(アヲウマノセチエ)とて、正月七日廿一疋の白

し節かとよ。わするゝ間なく忘られぬ。夕の空の村雲に。猶立まよふ夕霧の。籬の花の夕じめり。手折し袖やそぼちけん。夕顔の花さく宿の主や誰。たそがれどきの空目は。けにおぼつかなくぞおぼゆる。夕立の晴ぬる跡の夕づく日。影ろふかたの涼しきは。雲間をわたる夕風。夕霜の晩田の稻葉うちなびき。風にたまらぬ夕露は。結もあへずみだるらん。墨染の夕の色のすごきは。しきみ摘山路のそはづたひ。麓の野寺のはる〴〵と。そこともみえぬ歸るさに。時しもあれや入逢の。かねて思し有増より。猶心澄山陰の。五百代小田の夕嵐。草の戸ざしの明暮は。袖もほしあへぬ露のまに。聲よわりゆく故郷の。蓬が杣のきり〴〵す。暮行空の氣色。誰も哀やまさるらん。夕は脆き涙かな。

年中行事

大昊木德の春の始。一天風のどかなり。千年をさして契は。霞て出る朝日影。四方拜小朝拜。あの白馬踏歌の節會の儀。子の日の松を引てこそ。君が齡を祈けれ。春日平岡率

所
朝餉—清涼殿内の御間
除目—任官の公事
網子調る—萬葉集三、大宮の内迄聞ゆ網引すとあごとゝのふる海人の呼聲
小泊瀬稚武の尊—雄略天皇
夕の殊に云々—以下源氏物語を

るかひ有てうれしきは。契し今朝の玉札。除目の朝の上書。槿の花さく垣ほの朝露。朝置霜の朝じめり。朝居雲の朝まだき。霧の間墻の隔は。衣々の朝やつらからん。朝満潮の朝なぎに。網子調る海士小船。朝立旅のゆくすゑ。遠里遙に見わたせば。朝けの煙の朝もよひ。にぎはふ民のかまどは。さかふる御代のしるしなり。小泊瀬稚武の尊いますかりき。泊瀬朝倉の宮に宮居して。賢き昔の御名をとゞむ。あの浦島の子がいにしへも。この御時の事かとよ。

夕

夕陽西に傾て。東に歸みれば。又麓は霧のへだてつゝ。山よりをちの夕日影。さすがに暮や終ざらん。松のゆきあひの木枯に。つれなき色をのこしても。外に木の葉や時雨らん。夕こえかゝる旅の空。かこつ方なき哀は。夕やわきてまさるらむ。夕汐夕なぎ夕波千鳥。鳴音さびしき夕間暮。夕の殊にわりなきは。野分の風も身にしみて。思みだれ

菩提―佛道也
涅槃―無爲圓寂不生不滅の義
八相―如來出世の八種相也、即ち受胎降生處宮出家成佛降魔説法涅槃
朝拜―朝賀のこと
朝覲―天子年の始に上皇並に母后の宮に幸せらるゝこと
仙洞―上皇の御

柏木の燃思の終。墓無跡にや殘けん。岩根の松の若みどり。花に戯る春の園。月に語秋の閨。身にしむ風に脆散。木の葉に替ぬ命持も。なにかは露の賴有む。凡三世の諸佛の勅。無常を發心の初とし。花は萌り菩提の樹。菓は結ぶ涅槃の山。さればにや證果羅漢も暫他城に留て。漸寶所到らしむ。釋尊八相の成道も。先其姿をあらはす。歸來去六の道に。やすらひ終ぬ身と成て。

朝

朝市の榮花盛にしてや。君の恩も事繁く。市を成たのしみは。仕道ある御代なれば。夙夜の功をや重ぬらん。朝候日たけて出る臣。月卿冠をかたぶけ。雲客袂を連るは。朝拜朝覲の其儀式。鳳闕仙洞の春の朝。此朝餉に見そなはし。朝政もおこたらず。春のくる葛城山の朝霞。かすみて出る朝日影。明るもしるきあまの戸。露とやいはむ。涙とやいはん歸さの。袖打拂ふ篠目。又寢の夢の名殘なれば。おきうき朝の床の上に。み

しからん。哀てふ事をあまたに思亂れて。我黑髮の末までも。本いひ置さし言の端の。替らぬ色の顯れば。東吹風の便にも。などかは傳の無かるべき。幾山越えても我のみぞ。東路はるかに宇都の山。夢にも通ふ心ならむ。

無常

眠は五更に醒ぬれば。倩有爲の理を。思へば夢の他し世に。みし面影の有の媚。下々の容貌も。刹那の生滅早到。幻夢影焰。乾闥婆城の變化は。所執の終も無。流水歸ぬ老の波。越行末の松山の。松に齡を准ても。終には朽ぬる埋木の。苔の下にはたゞ其名をや殘らん。若を送老の恨。老てはさらぬ別の。千世もと祈人の子の。歎は憑影も無。枯葉の淺茅生今幾日は。結べば霜によわるむし。後先立夕煙。雲とやなり雨とや涙の時雨けん。哀は何も切なれど。取敢ざりし夕顏の。寢亂髮の其まゝに。短き契の終しなく。散にし花の玉かつら。懸てもさやは憑しに。育立けん情までも。睦かりし昔の形見とや。

乾闥婆城—忽ち現じ忽ち消ゆる現象也、蜃氣樓といふが如し

老ては云々—伊勢物語、世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の子のため

夕顏—以下源氏物語を引く

行人も留る袖も旅衣。馴來て後の悔しさを。今更思ふも甲斐なくて。勝引留ばやと歎共。駒並て先前立つは涙にて。足柄清見不破の關守徒に。扃は如何に名のみなれや。しひても留めぬ別路に。人を心に送らざらめや。猶行末にも會坂は。有りとこそきけ足引の。山より山のすゑ迄も。嶺の白雲外に頓。遠ざかり行けば如何爲む。

行餘波

熟とおもふも苦し入相の。鐘てふ名殘の。おし明方の天の戸を。立別れなば白雲の。知らずや如何に人心。無如の情もあだなれば。馴々て中々悔しき契さへ。憂身を知れば晴れやらぬ。涙の雨の故鄉へ。又思立つ旅衣。袖しのうらを過難てに。浦山布も歸るか浪に。裳沫は霑るとも休はむ。小餘綾の急がれ無くに顧る。肩瀨の波は行河の。早くや三年を過ぎぬらん。草枕假初と念ふ名殘だに。旅臥の床の常磐に。しをるゝは別の袂なれば。終に稻葉に結ぶ露の。命の中にも忘れずは。苅田の礒思出て。問はればいかに嬉

鐘て—入相の鐘に言掛く
おし明方—名殘惜しに言掛く
故鄉—涙の雨の降るに言掛く
浦山布も云々—伊勢物語、いとどしくすぎゆくかたの戀しきに羨しくも歸る浪哉
急がれ—礒を掛く

宇都の宮—衣を擣つに言掛く

幣も云々—此度はぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに

花鑑—花勝見と書く、菰の花なりといふ、古今集、みちのくの淺香の沼の花かつみかつみる人に戀や渡らむ、上句は序詞也

月に寝覺のすさみならん。抑遙に傳聞く。神護の古天應の。久しき昔かとよ。照日の光を和げて。塵にまじはる瑞籬に。普門を開きつゝ。歩を運ぶ宮人の。絶えぬ誓の御注連繩。長き契を結びつゝ。今もかはらず見そなはす。勝此旅のうれしければ。幣も取敢ず神に插頭。紅葉の錦の色々に。手向けて過ぐる神垣。早霜枯の蘆沼の。氷る汀に風冴えて。閑冷さ増る氷室山。音にのみ聞きし計の心あてに。是や其と思奈須野の假枕。ただ一夜の小竹の庵も。忘れぬ節とも成ぬべき。行末はまだ我が知らぬ白川の。關の岩稜踏鳴し。なが乘駒の爪だに浸ず。名にし負ふ淺香の沼の花鑑。且見るからに戀しきは。猶故郷の面影。西渡月を慕ひても。送る心はひたすらに。其方の空にや通ふらん。おほつかなさは此行くべき陸の奧の。終は何の旅ならん。立隔れど前垣の島。煙の末も隱無く。見ゆるや千家の鹽竈。

留餘波

馬上の曲—王昭君匈奴に送らる途上琵琶を弾じたるをいふ

如何成思—おもひのひに火を言掛く

月は猶。曇ぬ政にかげをそへ。蘋蘩禮奠の風は又。忘ぬ信に徳を增。誠に文信に武。星の如に敷くのみか。木と無草と無。風のごとくに靡して。賢く久敷君が代は。民の煙もにぎはひにければ。九年貯豊なり。

羇旅

山路に人希らなり。耳に滿る物は是。青嵐梢に音信。野徑に煙たなびきて。眼に遮る類は又。白雲遙に聳けり。羇旅に鞭を進むる。駒の振分吹亂る。嵐に向ふ曙露驛に鞍を解ては。野村の叢に宿をしめ。旅より旅に遷來て。花摺衣の袖の色。結びし露の情より。重き草葉の末迄も。皆思出の妻なれや。凡旅客の情。旅人の思は取々に、行くも歸るも押並て。名殘は誰もかはらねば。蘇武が胡國の雁札。昭君が旅の馬上の曲。是皆餞別の色深く。故鄕を忍ぶ心有り。かゝらずばかゝらましやは下野や。室の八島に絕えぬ煙。猶立歸りみて行かむ。如何成思の類ならん。草枕深行夜半の秋風に。床の狹衣宇都の宮。

だきに鳴きてせなをやりつる
昇遷橋―司馬相如蜀へ行く道に壯橋あり、渡る時橋柱に書きつけて、我大車肥馬に乘らずば再び遷り渡らじと誓ひしが後志の如くなれり
上宮太子―聖德太子
鹿子まだら―伊勢物語、時知らぬ山は富士のねいつとてか鹿子斑に雪のふるらん
鳥總立―萬葉集三、鳥總立足柄山に舟木伐り樹に伐りゆきつあたら船材を
我唐衣―蟲の名の「われから」より唐衣に續けたり

邊の浪の立歸り。契興津の濱千鳥。跡をば忍ざらめや。あとを忍も及ぬは。上宮太子の黑駒の。蹄に知し不盡の峯の。其鳴澤の心地して。川瀬の水も早ければ。舟さす棹の取敢ず。向の岸にや著ぬらん。鹿子まだらに降雪は。時しも夏とは知れぬに。早苗取田籠の浦浪に。浮てやみゆる浮島が。原中遠行々て。抑此國は何ぞと。問榮て千刄破。神の惠の絶ずのみ。歩を運ば我も先。詣て三島の瑞籬。山又山の雲を分て。くれば遙き箱根路の。山おろしの風も寒葦の海。吹汀や氷るらん。朽殘るなるしるしをも。いざさは射てみん箭立の杉。鳥總立足柄山に。船木きるてふ山人の。入狹の道をや廻らん。是も湯桁はいさ不知。まだみぬ湯元早河。早むる駒は大磯の。急て過る磯傳。寄來浪に袖濡し。磯菜摘て此泉郞の苅。藻に住蟲の我唐衣。日本には非ぬ唐が。原をば遠隔來て。只鎌倉を御輿が崎。越ては稻村稻瀨河。抑垂跡の源の。あの石淸水を引導て。濁ず潔き心以。言吉差給けむ。詞の花は櫻麻の。直を賞する榮にて。心の作の蓬は更に有難や。御代なれば幾千年を送共。猶若宮の松に住。此鶴が岡の叢祠にぞ。神留御座。柎[illegible]和光の

佐夜の中山云々―新古今集西行、年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山

宇都の山―伊勢物語、駿河なる宇都の山べの現にも夢にも人はあはぬなりけり

芥家鷄の―伊勢物語、夜もあけばきつにはめなむくだかけのま

の松が根年を經て。誰主ならん不審。朽ぬる泉郎の捨船。岡部の若草春と云ば。引馬もさこそは斷らめ。水鳥の下居池田の薄氷。とけて臥られぬ旅の床。夢さへうとく成ぬらん。佐夜の中山長經ば。命の中に又も越なん幾秋を。君が千とせを菊川の。流も久し大井河。歩より渡ば前島の。岸邊に浪寄藤枝を。手折や插頭の花ならん。手向の袖の追風に。靡は神の木綿四手。

同　下

山は青巖の形を。誰かは削成けん。巧に知れて幾年月を。杉立る谷の磯路に。凝敷岩根の岩根傳。蔦はひかゝる宇都の山。現とや云む夢とだに。思も敢ず昔みし。人にや都へ言傳む。書遣文の手越こそ。猶も心の泊なれ。今夜は是所に臥ぬる夜の。未夜を籠て芥家鷄の。鳴別ては背河の。背をば何所遣ぬらむ。彼昇遷橋に准らへて。肥たる馬に乘ずば。此高橋も渡じ。故鄕も同じ月ながら。光は淸見が關路より。向を遙に三穗が崎。磯

立寄りて見て行かむ年へぬる身は老いやしぬると

茅茨や切ぬ―墨子に堯堂高三尺、土堦三等、茅茨不翦、采椽不刊

ひぢ笠雨―催馬樂妹之門參照

唐衣―伊勢物語に、唐衣きつゝなれにしつましあれば遙々きぬる旅をしぞ思ふ

軒。軒も亂れて吹風に。ひぢ笠雨の舊渡の。橋にとかよる歩人。雲晴行ば夏の日の。熱田八劍逸早。惠に太鳴海潟。干潟も遠浦傳。天照神は星崎に。光も曇ぬ代にしあれば。願を滿の汐風も。猶吹送二村山。打過ぬれば是や此。又國越堺河。遠里遙に立上る。煙の末の一筋に。急は旅の夕暮。

同　中

唐衣著つゝ馴にし。著つゝ馴にし妻しあれば。都をさへに忘めや。外にのみ聞渡しを參河なる。蛛手に懸る八橋の。澤邊にさける花の色に。移易き人心を。隔て見ゆる杜若。者武の持る矢作に取副。梓の眞弓。春の澤田を作岡の。苗代水をや任らん。早藤澤に懸ぬる。宮地の山中中々に。問ば遙き東路を。渡津かけて見渡せば。新今橋の今更に。又立歸る橋柱。嵐の音も高足山に。閑冷立る一松。直下と見下ば鹽見坂。雲水はるかに連て。眼正に穿なむとす。濱の砂はかぞへても。白州が崎に居鷗。入海遠き濱名の橋。渚

書、打わびて落穂拾ふと聞かませば我も田づらに行かまし物を
長岡―業平の母の住みし地
水無瀬―惟喬親王の宮あり
小野―同親王隠栖の地
飯匙取し態―本文に、おもながやかなる女の手づからいひがひをとりてけこの器物に盛りけるを見て云々
六條院の女樂―此の段源氏物語若菜下の本文に據る
鹽ならぬ海―琵琶湖をいふ、源氏物語關屋の巻、わくらばに行逢ふ道を頼みしも猶かひなしや鹽ならぬ海
いざ立寄て―古今集、鏡山いざ

山田にかよる湖の渡。矢橋を急ぐ渡守。長等の山を外にみて。淡津の原を後にし。勢田の長橋野路の末も。時雨て痛く守山の。篠に露散篠原の。小竹分る袖も濕つゝ。日も夕ぐれにや成ぬらん。くもりも霞む鏡山。いざ立寄て見てだに行む。年經ぬる身は此老ぬるか。老蘇の森のした草の。蔭に駒を留ても。今夜は是所に假枕。草引結ぶ旅寢せん。ふけぬるか人を。咎る里の犬上の。床の山は不知哉何ぞ。不知哉河河風寒暁の。寢覺に聞ば小夜千鳥の。岡部の松に積る雪の。雪よりしらむ篠の目に。小野の舊道雪吹して。蓑裏返す旅衣。末野を廻は伊吹山。差ゝ冴暮す夕嵐に。氷やすらん佐目井も。楢の葉柏はら〳〵と。ふるや霰の音立て。關の藤河波越ど。水の柵行遣で。たれかは心を留む。不破の關屋の板廂。眞屋の餘に間荒なれば。時雨も月もたまらず。駒並て渡井堰の杭瀬河。雨に凝ば笠縫の。里にやしばし休む。己も契や結ぶの森。うらやましくも立並て。枝差通す二木。水の流て川島の。わが墨俣や替らん。危く渡す浮橋の。足近をこゆる早朝。もはや赤池にや成ぬらん。初霜結ぶ絲薄。枯葉の尾花袖濕て。茅茨や切ぬ萱津の

なる、返し、我方によるとなくなるみよし野の田のむの雁をいつか忘れん
賢神の云々—同書、千早振神のいがきもこえぬべし大宮人の見まくほしさに
かりのつかひ—伊勢へ狩の使に行きしこと
ねひとつばかり—本文に、子一つより丑三つ迄あるにまだ何事も語らぬに歸りけり、歌に、君やこし我やゆきけん思ほえず夢か現か寢てかさめてか
井筒に懸し—同書、筒井筒井筒に懸しまろがたけすぎにけらしないも見ざるまに
秋穂拾し—同

傳ふ羽風にも。亂ぬべくぞ覺る。女御の君今少。匂加る樣して。箏の琴をぞまさぐり給し。開こぼれたる藤の側。並無早朝を見心地す。紫の上は葡萄染にや。色濃小袿に。蘇芳の細長をぞきたまふ。最聲花やかに和琴を。氣高くこそ搔立れ。花と云ば櫻に喩ても。猶物より異に見るに。並てには非御邊に。明石は氣押べけれども。最差も非持成て。高麗の青地の錦の、端さしたる茵に。琵琶を打置て。只氣色計引懸て。婀娜に仕成たる撥の持成。五月待盧橘の花も實も。ともに押折たる喩は。何にも如何くだされん。

海道 上

行々たる露の驛に。思を千里の雲に馳。渺々たる風の泊に、心を幾夜の波に碎む。霞を隔霧を凌ぎ。立別れば旅の空。雲居の外にや成ぬらん。馴來し都をかへりみて。會坂越て打出の濱より。遠を見渡ば。鹽ならぬ海に歛る。石山詣の昔まで。其面影の心地して。

信濃、書　なる淺間の嶽に立つ烟遠方人の見やは咎めぬ
富士の高ね―同書、時知らぬ山は富士のねいつとてか鹿子斑に雪のふるらん
名もむつましき島―都島
事問佗し―同書、名にし負はばいざ言問はん都鳥我が思ふ人はありやなしやと
えびす心―本文、さるさがなきえびす心を見ては如何はせむ
都の土産に―同書、栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを
御芳野の―同書、みよし野の田のむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴く

な。おもへば久方の。あまりくまなき心もて。誰に思ひをかけまくも。賢神のいがきをも。強顏中の隔とや。かりのつかひのかりにても。思ひよるべき便かは。ねひとつばかりの月影に。丑みつまでは語へど。夢うつゝとも分かねてや。心迷に明にけん。井筒に懸し丸がたけ。振分髪のたはぶれ。落穗拾し田邊の庵。春日の里深草。長岡水無瀨小野の里。菟原の郡高安。里をばかれずやかよひけん。飯匙取し態までも。忘れぬ情の妻なれや。

源氏

藻鹽草書集たる其中に。紫式部が筆の跡。疎なるは無やな。六條院の女樂。傳てきくも面白や。比は正月の二十日の空。をかしき程に成行に。御前の梅も盛に。大方の花の木ども。皆けしきばみ霞渡るに。臥待の月差出て。先女三の宮を見奉ば。人より殊に少くて。櫻の細長に。柳の絲の樣したる。御髮こぼれかゝりて。琴引給ふ御姿。鶯の木

白玉か—伊勢物白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へてけなましものを
大幣と—同書、大幣と名にこそ立てれ流れても遂にあふせはあるてふものを
百年に—同書、百年に一年足らぬつくも髮我をこふらし面影に見ゆ
武藏鐙—同書、武藏鐙流石にかけて賴むにはとはぬもつらしとふもうるさし
我身一は—同書、月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして
都をさへ云々—以下業平の東下り也、伊勢物語の本文に據る
淺間の嶽—同

昔男在原の。其身は賤と云ながら。かたじけなくも楢の葉の。末葉の露の白玉か。何ぞと問し人も皆。他なるちぎりの中樣かは。心の奥は陸奥の信夫の里の摺衣。おもひ亂る涙より。袖に湊のさわぐまで。一方ならぬ迷にも。命強顔長らへて。初冠の往年より。五十に餘年月を。送迎る春秋の。詞の花の色々に。しぼめる匂を殘しつゝ。思ひ思はず花かたみ。目ならぶ人は大幣と。名にこそ立れ百年に。一とせ足ぬつくもがみ。立寄老の波までも。情を懸ば武藏鐙。さすがに誰をか捨はてし。我身一は栫ぬに。おぼろげならぬ春の夜の。月やあらぬとながめても。見し面影をやしたふらむ。あだしみやびのせめて猶。すける心のいちはやく。都をさへに住うかれて。東路はるかに思立。淺間の嶽の夕煙。富士の高ねは時知ぬ。山路の雪の曙の。蔦の下道や打拂。限無遠来にけりと。こし方を思つゞけて。いと哀なる時しも有。名もむつまじき鳥の音に。住田川原の渡守に。事問侘し旅の空。物うきひなのすまひなれば。比えびす心もいざやさは。都の土産にいざといはむ。何かはわすれん御芳野の。頼の雁もひたぶるに。我が方にのみ寄ると鳴物

つわぶと谷へよ

羽束しの云々―金葉集顯輔朝臣、家の風吹かぬものゆゑ羽束師の森の言の葉散らしはてつる

徐福―秦始皇の時の人

文成―漢武帝の時の方士

上陽人云々―白氏文集、上陽白髪人を引く

湊入の。蘆分小舟の障おほみ。緒断の橋の絶ねとや。鳥や〳〵鳥の有耶無耶の。關の扃の稠ければ。ゆるさぬ中とや成ぬらん。

樂府

如何に心も摧けむ。蓬萊宮を尋けん。童男丱女は。眼は穿なんとせしかども。覓事をえざりき。是皆徐福文成が。僞多と歎し甲斐もなくして。たゞ徒に老にき。上陽人は又。紅顏空に衰へ。窓打雨の夜の床。寢たる事も覺ず。秋の夜長寢ざれば。明も心元無し。宮の鶯は百囀すれども。聞事を厭。梁の燕はならび住ども。物妬事を止てけり。たゞ深宮に向て。明月を望とかやな。此窄衣裳青き黛。眉書て細く長ければ。外人には見じとよ。見なば笑れなんやな。

伊勢物語

見目ー海松を掛く
しばし水飼ー古今集、さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見ん
筑波山ー古今集、筑波山端山しげ山茂けれど思ひ入るにはさはらざりけり
秋はてぬー古今集讀人不知、刈れる田に生ふるひつぢのほに出でぬは世を今更にあきはてぬとか
妹が島ー萬葉集七、藻刈舟おきこぎ來らし妹が島形見の浦にたづ翔る見ゆ
わくらばにー古今集在原行平、わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻汐たれつ

遠心の駿河なる。田籠の恨有蘇の海の。見目の外にや成ぬらん。爭かは會の松原行てみむ。うらやましきは雙の岡。婦が姿の池水に。しばし水飼影をだにみむ。檜の隈川を渡す駒。人しれぬ涙に袖は。鹽垂山に迷つゝ。佐野の船橋さのみやは。外にも人を聞渡らん。君が住緣喜の里の床しければ。尋行ては美作や。久米の佐良山更々に。爭人に逢ざらん。常陸には田をこそ作れ筑波山。端山重山茂人目を凌ても。苅田の穰思出ば。秋はてぬとも問てまし。自情計は懸よ鹿島の常陸帶の。神に誓し契の。すゑの松山他にしも。爭か波の越つらん。人心うつろふ花の櫻川。外にもやがて立隔るか。霞の關の關守。妹か島記念の浦に鳴鶴の。音には立れど忍の岡。強顏色のかはらぬは。年經松が浦島。わくらばに問人あらばすまの浦の。あまり憂音に袖は濡じ。書絶ぬれば陸奥の。壺石文ふみもみず。心の奥を知せばや。信夫の山の下わらび。然伊吹の誓約草。さしもつらくてやまんとや。不審な逢瀬をだにも辿身の。渡ぬ前の名取川に。しづみも終は無名島。厰生の浦回に。來寄波の濡衣。羽束しの漏ても誰か散しけむ。會事を今將猪無の

集讀人不知、思ふには忍ぶることぞ負けにける色には出でじと思ひしものを

しかすがの—さすがにの意に、しかすがの渡の名を掛く

ぬ恨の。數取とらばや。如此計見目の外に強顔は。闕も終なでや思草。葉末の露のたまさかに。來てだに手にもたまらねば。取滞り衣手に。咽涙の中に別れにし。うきおもかげを身に副て。明行空に朝鳥の。音のみ啼て左右に。憂物なれや人毎の。聞苦しき世の中に。ながれてあはむ憑だに。懸ても如何が他浪の。寄邊定ぬ水の上の。泡ときえなでや浮沈。水隱に喘餘。早川の瀬には立ねど。苦しき戀の淵となる。涙の床の浮枕。人頼なる夢をだに。結も終ぬ片絲の。今將更に逢ずは。何をか玉の緒にはせむ。

名所戀

忍も苦し如何にせむ。強顔人は常葉山。言ねばこそあれ岩躑躅。さのみはいかゞ愼終む。思倍田の生限は言出じ。漏じとこそおもへども。音羽の瀧の音にたてて。岩瀬の森の梢の。色にし見えねば。しかすがの。渡てなどか問ざらん。さりともと信土の山の待甲斐も。名草の濱の濱千鳥の。跡だに附ねば小餘綾の。急て我や行まし。宇土濱の疎

八神殿―足産靈神、高產靈神、生産靈神、玉積產靈神、御食津神、大宮賣神、事代主神を祭る
園韓神―曾富理(ソホリ)の神と韓の神と也
思ふには―古今

は是を仰ざらん。伊弉諾伊弉冊の。二人の尊計て。天より降す玉鉾の。道有御代の今もなほ。荒金の地の動なく。崇神の賢き昔かとよ。天津社を崇て。此地祇御神も贍す。神の神たるは。人の敬に依てなり。人の人たるは。神の恵に依とかや。さればや大内の御垣にも。祝れ給ふなる。神祇官の八神殿。園韓神の社と。生馬の明神鑒て。賢所は温明殿に。玉體光を並とか。又賤き宮仕子祝子。あの巫女の鼓の打妙に。神閑冷増る鈴の音。振仰見れば榊葉や。立舞袖の追風に。御注連にかくる白木綿。弓立宮人聲々に。此豊幣取々なる態までも。神の心やなびくらむ。

吹風戀

吹風の目にみぬからに身染て。おもふ心よ何もかく。益無迷ふ戀路の。すゑや何逢坂の。せき留難瀧津心は山川の。音に立ても謂ばや物を。無端命も知ずかげろふの。岩垣淵の隱に。身を捨ても何かは忍ぶ。思ふには負習も。有蘇の海の片貝。此拾もて會

霊の君の歌、若葉さす野邊の小松をひきつれて元の岩根を祈るけふかな

二八の尊者—十六菩薩のこと

藥師の十二大願—藥師如來が一切衆生に對する種々の大願十二をいふ、三藏法數を見よ

十二神明—藥師の十二神將とてこゝに掲げたる外尙五大將あり

枌楡—漢高祖の禱りし社の名

蘋蘩—神に薦むる水草

空隱。法性の光は有明の。つきせず無量の壽命なれば。二八の尊者は今現に。遺教流布の勅を受け。或は北瞿盧西瞿陀尼。東勝南贍部州をしめ。或は玉樓金閣。香峯山。潘覩婆山。廣教毘布羅の山の麓。分身普く及ほして。教法今に絶えせねば。不老不死と説かれたる。一乘一味の雨のしたに。藥草藥樹の花のにほひ。病卽消滅の風薫ず。あの凡不老不死の利益。藥師の十二大願。十二神明の擁護なれば。始宮毘羅大將よりや伐折羅大將。安底羅乃至摩睺羅眞達羅等。此招杜羅大將毘羯羅も。皆是等の大將諸共に。各七千の眷屬と。君をぞ守り奉らん。

神祇

神德峯高くして。枌楡の榮枝を連ね。感應海廣ければ。蘋蘩の綠波に浮ぶ。浪を隔る千里の外。雲を重ぬる萬國に。其形を餘多に分ては。利益を品々に施す。倩古の舊にし跡をおもへば。天の岩戸を緋の瑞籬に。宮ゐする代々に至まで。皆我國の神態。誰か

文成、齊人李少翁、漢武帝に仕ふるに方術を以てし、文成將軍となる後詐術露はれて誅せらる

巴の字云々―曲水宴のこと

若紫―源氏物語に見ゆる光君の契りし紫の上をいふ

若葉さす―源氏物語若菜上卷玉

不老不死

長生不老の棲は。必ず蓬萊の島のみかは。いなや歸らじと尋ねしかど。文成が僞も由なし。老いせぬ門をさして云へば。日月陰らず代を照す。御垣の光や是ならん。されば累代の政ごと賢くして。靑陽の春の始の日。藥の典袖を連ね。弓場殿に此又座を敷きて。不老不死の藥を獻ずとか。衆德を兼ねたるは酒の興宴。憤を散じ齡を延ぶ。年月次を重ねても。巴の字を書いたる流のすゑ。重陽の宴の菊水。仙宮萬年の歡び。上壽をたもつ事態なり。何も常磐の若緑。千とせを遠く松に住むは。まだ巢の中なるひな鶴。梅の初花初子の日の。若菜は老いせぬ君が代の。様に誰かは引かざらん。勝條柴の座も。枝を鳴らさずのどかなるや。風治まれるしるしならん。幼なかりしは若紫の。遙に思ふ行すゑ。初もとゆひを結びしは。二葉より契りし葵草。若葉さす野邊の小松と祈りしも。最ねび增りて物々敷。見る甲斐有りし樣なれや。抑佛は常住にして。はや浮雲の

忠臣云々—朗詠「鶏既鳴忠臣待旦」、「夜行沙厚履聲忙」等の句によりて綴りしならん

嘉辰令月—朗詠集祝參照

光を云々—老子「和二其光一同二其塵一」

月春秋積りても。老せぬ門に仕て。忠臣朝を待出る。砂に響く沓の音。民も久しき御影を仰ぐ天の下。閑き春の耕すより。苅ほす稲葉の秋を經ても。絶ずぞ備る御調物。東に霞を隔ては。花洛の境に攀上り。西に浪路を凌ても。都の道に急がはしく。萬民愁を成ざれば。關の戸とづる事もなし。

嘉辰令月

嘉辰令月の。曇なき御代に會ては。國富民豐なり。萬歳千秋の風長閑なれば。浪治れる時を知。優曇海中に開つゝ。百度發萬度。榮る春の日の。長居の浦の砂路の。砂の數は拾へども。盡せず久しき玉津島や。光を塵に和げて。紀路の濱木綿重ても。猶憑しく三熊野の。神もろともに瞻せば。掛も賢き流のするゝ。聞ては古ぬる五十鈴川。伊勢の濱荻代々を經て。替らぬ田鶴の聲までも。雲井に遥に立ちのぼる。此位山麓の塵ひぢ積りても。其名はげにさは高砂の。尾上の松の枝さし副て。幾千年をか限らん。

汀の氷云々—源氏物語浮舟の巻に、峯の雪汀の氷踏分けて君にぞまどふ道はまどはず

賣炭翁—白樂天の詩に出づ

我やどの—古今集讀人不知、今よりはつぎてふらなむ我宿の薄おしなみふれる白雪

かや。夕に鳥立に迷ふ雪も。白符にみゆる箸鷹。皓鶴あざやかなるをうばはれ。白鷴は素をうしなふ。抑善政曇らぬ御代に。逢ふがたのしき九重の。豊の明の小忌衣。神ふる雪はなほさえて。日影に消ぬ玉敷の。御垣にたえぬ御溝水。汀の氷峯のゆき。君にぞまよふ道は迷はずと詫ても。けなばけぬべき命の。なほ又世にふる白雪に。市の南に臨し賣炭翁は。さゆる一尺の雪を悦ぶおもひあり。我やどの薄おしなみ降雪は。世々に續ても。跡たえじとぞやおぼゆる。

祝言

四海浪閑にして。九州風治り。雨壌を犯さず。棘の野邊も押なべて。遍き露をや灑らん。幾萬代と白浪の。濱松が枝の手向草。緣に見ゆる山鬘の。小忌の衣の。立舞袖をひるがへし。神の心もや打解て。曇らぬ光は玉鉾の。道有御代をや照すらん。所々の宮社。猶古へに立歸り。寺々の甍もかはらねば。鎭護の道場悉く。遮那洞は上中峯嵐

佛名―宮中にて十二月十九日より三日間行はるる佛式の公事

追儺―十二月晦日の夜行はれし鬼やらひ

終に紅葉ぬ―古今集、讀人不知、雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

袁司徒―朗詠集に、袁司徒之家雪應路達

雪の中の維ぬ駒―管仲が老馬の智を應用せし故事

春の隣の近ければ。老木は花もうらやまし。いとひてもいとふ方ぞなき。來る老らくの關もり。さても佛名に成ぬれば。三千世界恒河沙如來。諸佛菩薩受持名號。功德無量無邊引接。賴敷ぞや覺る。立舞袖もいそがはし。追儺の夜半の人。

雪

瑞を豐年に顯す。尺に滿白雪の。降て暮行年月の。積ても。終に紅葉ぬ松が枝の。綠もふかき春くれば。雪間を分る若草の。はつかに思ふ心はうき人の。末の松山浪越かと。みゆる浦ちかくふりくる雪。雪の光に明る山の。尾上の里のさと人は。人目枯行跡無庭に。問ぬを情と思へども。猶恨敷や待るらん。袁司徒が家の雪も。春過夏深く。積て道は迷はず。瑤階を連ぬる處の雪。瓊樹を抽る林の雪は。此一萬株の花ほころび。梅が枝に花降まがふ淡雪。鶯の百囀すれども。猶風まぜの春の雪は。班女が閨の中には。秋の扇の色となる。孫康が窓には。雪を集て光とす。朝に跡を尋しは。雪の中の維ぬ駒と

掃もてなし。是皆秋の興を増て。色々にみゆる百種千種の花の下紐。早解初るいと萩に。亂て結ぶ白露。薄霧の立旅衣の。袖かとまがふ初尾花。分行末もはる〴〵と。ほのかにきけば妻籠に。男鹿鳴野の眞葛原。末枯ぬれば蟲のねも。絕々よわる夕暮。よしさらば今夜はこゝに宿とらん。男山花にあだ名は立ぬとも。我脫懸ん蘭。なまめき立る女郎花。げにそもえならぬ色なれば。あたりの草のゆかりまでも。心おかるゝ夕露の。手枕さむきかりがねの床。第一に心を病しむる。何の所にかすぐれたる。月のあきらかなる前。皓々たる星のあけなんとする曉。壁に背る灯の。幽にのこる窓の中。

冬

今日よりは間なく時雨の。間無時雨の布留の神杉や。年舊ぬれど染あへなくに。猶綠に三輪の山本。嵐や避て吹ぬらん。僅にのこる紅葉ば。霜に枯行淺茅生の。宿には人も間こず。板井の水も水草ゐて。氷の上に霰ふり。小野山里雪ふかし。跡だに見えぬ細道。

なまめき立てる―古今集、秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時

第一に云々―朗詠集秋興に、第一傷心何處最

布留―地名也、降るに言掛く

三輪の山本―我庵は三輪の山本戀しくば訪ね來くれよ杉立てる門

たる風にぞありける
槙雌の音に―新古今集西行、小山田の庵近く鳴く鹿のねに驚かされて驚かすかな
つゞりさせと鳴蟲―古今集在原棟梁、秋風に綻びぬらし藤袴つゞりさせてふ蟋蟀鳴く
庾公―晉の庾亮南樓に月を翫べり
和琴云々―朗詠集斎女に、和琴緩調臨潭月―
緱山―緱氏山ともいふ、王子晉の鶴に乘りてあらはれし山也
緑苔を擁―白樂天の句に　石上題詩掃綠苔

月窓に傾て。宮漏正に長ければ。打や碪の萬聲。千度寢覺の床の上に。拂ひもあへぬ露霜を。片敷袖にや置副ん。月冷く風秋なり。此和琴緩く調て潭月に臨むのみならし。索々たる絃のひゞき。松の嵐も通來て。深ては寒き霜夜の月を。緱山に送なり。瀧水氷むせんで。ながるゝ事をやえざるらん。月の出汐のや御津の濱松の。下枝をあらふ浪の。波間にうかぶ白妙の。月や砂を照らん。月は明石の浦の栖居。槇の戸口の月影。問す語の夢もけに。忘ぬ節とや成ぬらん。いざ見に行ん更科や。姨捨山淸見か關。廣澤住江難波潟。蘆間にやどる夜半の月。仰げば淸き久方の。月の都は九重の。雲の梯にすみわたる。露臺の月の在明。月花門の夕月夜。秋の宮人の袖のうへに。移ふ萩が花ずり。露もさながら色々の。玉かとみゆる月影。いざよひに弓張。伏待の月。朧に霞む三日月。

秋興

蕭颯たる涼風。一時の秋を告とかや。槐花雨に潤ふ。桐葉風涼し。林を纐紅葉。綠苔を

かなくも鳴渡る哉

いつも初音―金葉集權僧正永縁、聞く度に珍しければ時鳥いつも初音の心地こそすれ

今來の岡―萬葉集十、藤浪の散らまくをしみ霍公鳥今城の岳を鳴きて越ゆ也

こゝを詮にせむ―新古今集西行、きかずともこゝをせにせん時鳥山田の原の杉の村立

須賀の荒野に―萬葉集十四、信濃なる須賀の荒野に時鳥鳴く聲きけば時すぎにけり

ころをほにあげて―古今集藤原菅根、秋風に聲をほにあげてくる舟は天のとわ

取し早苗の何の間に。稲葉の鳴子引替て。秋風吹ば。七夕の。妻迎船に契てや。時しもころをほにあげて。雲井をわたる鴈金。遠の山路や霧籠て。友迷せる旅人は。過さぬ秋や怨らん。露分わぶる篠の目。春は緑にみえし若草の。花は野邊に紅葉は峯に。綵露の玉ゆらも。日影を待えざりけるは。垣ほにつたふ朝がほ。古枝にさける本荒の小萩が花。苅萱女郎花花薄。ほのかに招く夕間暮。えぞ過やられざりける。同じ雲井のなどやらん。七月八月長月に成ば。久方の月の都に。光ぞさやけかりける。賤士が假寢の稲筵。棹鹿の音に驚かされて。おどろかすなんなる物をな。山田の引板の寢覺は。此夜や寒からん。つゞりさせと鳴蟄。いかゞはすべき暮る秋の。名殘をしたふ袂よりや。先は時雨そむらんやな。

月

東閣夜閑にして。清明たる月の夜。明月峡の曉。庾公が樓に登ば。千里に月明なり。隴

ては鳴かず云々
履手乞ては—時鳥の異名を沓手鳥といふ、そは此鳥卵生に沓を賜に賣る鳥其價を棒はず時鳥の來る時身を縮めて出でずとぞ
布穀—郭公、鳲鳩、鵠鵴などに同じ、和名ふふとり、つゝとり
何の田長—死出の田長亦時鳥の異名
己鳴ては—枕草子の田植歌を引く（本書雜謠參照）
まだ夜ふかきに—拾遺集壬生忠見、何方に鳴きて行くらん時鳥淀の渡のまだ夜深きに
おほつかなしや—拾遺集實方朝臣、五月闇鞍橋山の時鳥おぼつ

明方かけてや名乘らん。木の丸殿の曉。鶯の卵の中より巣立とも。藍より青き聲有は。たゞ郭公鳥のみならで。履手乞ては何かせん。鵙めが不直を顯す。五常の中の信あるは。布穀に過たる鳥ぞなき。何の田長ぞ名もしるく。己鳴ては早苗とり。丸は田に立營に。にぎはひわたる君が代の。げに治れる時の鳥。寢覺の空の村雨は。袖に淚の色染て。人の戀敷常磐山。唐紅にふり出て。鳴は我身の類かと。露けき程の五月雨に。しげきあやめに水越て。善惡もみえぬ夜の浪に。御船を留し淀の渡。まだ夜ふかきにと詠しは。いかなる船の中ならん。おほつかなしや鞍橋山。山路くらしつゆきやらで。只一聲のあやなくも。やがて明ぬる篠目の。信田の森の千枝の數。聞てもあかぬ名殘は。いつも初音の子規。紀路の遠山廻つゝ。今來の岡にぞ待るなる。きかでも杉のむら立を。こゝを詮にせん山田の原。又百千歸信濃なる。須賀の荒野になく比や。聲六月の郭公。

秋

ほどとき過ずー程時過ぎずに時鳥を掛く、から る數語古今集物名の歌に見ゆ
二三更、金鈴云云ー凡て朗詠集の句にとる
花散里の時鳥ー源氏物語參照
今夜聞つー金葉集橘成元、郭公音羽の山の麓近尋ねし聲を今宵聞く
鳴つる方をー千載集に出づ
鳴音空なるー古今集貫之、さつき山楠を高み時鳥鳴音空なる戀もする哉
汝が父なれどー萬葉集九に、鶯のかひこの中に郭公獨生れてしが父に似ては鳴かずしが母に似

郭公

緑松の陰の本。紫藤の露の底。胡蝶も霞に遠ざかり。溪鳥も雲に入ぬれば。待るゝものとは我宿に。來迎空の郭公。ほどとき過ず聞ばやと。おもふ心や誘引けん。その神山の昔年。其神館にたちやすらひけん。かたをかのもりて初音にめづらしき。四五月のあはひの。端山の峰の雲の外。二三更の間の。夢の直の雨の後。枝には露を帶つゝ。金鈴りゝと房なり。華は艶を施して。紫麝芬々とかぐはしき。盧橘の香をとめて。鳴は昔や忍ばるゝ。有つる桓根の同聲に。慕來にける哀は。さすがに人には異なりや。花散里の時鳥。待日はきかず日比經て。今夜聞つと讀りしは。音羽の山の時鳥。鳴つる方を眺れば。たゞ有明の月影の。強顏人の梢より。鳴音空なる戀わびて。こゝろのうちを書口說。岩瀬の杜の郭公。妻來りしはいかなるよの事成けん。汝が父なれど鶯は。賤き墻ねに木傳て。玉敷庭には音信ず。然を一聲の山鳥は。夜となくひるとなく。聞ん事を松の戸に。

野にすみれ摘みにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寢にける

花は根に—千載集崇徳院、花は根に鳥は古巣に歸る也春のとまりをしる人ぞなき

みあれ—賀茂の葵祭をいふ

木綿祓—六月のみそぎ祓

や來なん。今宵ねて名殘の袖はしをるとも。小野の芝生の露分衣。日もゆふ暮の歸るさ。

夏

花は根に鳥は古巣にや歸らん。惜し物を櫻色に。染しは花の袂を。此いつしか更るは。云ぬに著たる夏衣。卯花さける玉川の。井ぜきにかゝるしら浪。二葉に見えしあふひ草。みあれのころや榮ん。勝先初音もめづらしき郭公。雲井の外の一聲を。おもひもあへず詠れば。強顔のこる晨明。水位増りぬや五月雨に。苅手もたゆき河長の。菖蒲はもらぬ軒端にも。藁屋や萱屋や板廂。何もかはらざりけり。外面の木陰露涼し。一むらすぐる夕立に。水増らざらめや。鵜飼舟螢やかゞり篝火や。螢にまがふ夕闇。今宵計や六月の。名殘も惜き木綿祓。庭の末葉にかよふや秋の初風。

をさゝせ給へるを見てよめる、前のおほきおほいまうち君、「年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし」
四種曼陀の花―一曼陀羅華（白華）二摩訶曼陀羅華（大白華）三曼殊沙華（赤華）四摩訶曼殊沙華（大赤華）

珠簾云々―朗詠集に[illegible]
臺頭云々―朗詠集に「臺頭有酒鶯呼客」
ゑぐ―草名
田中の井戸―催馬樂田中井戸名所
[illegible]云々―朗詠集[illegible]
つ[illegible]云々
一萬葉集の、[illegible]

春野遊

上陽の春の野遊の曲。紅錦をさらす春日影。閑き風にや匂ふらん。霞にもるゝ花の香。花に鳴きては木傳ふ鶯は。此誰が家の軒端にか。珠簾いまだ卷かざるに。夢の枕に音信て。人來と客を呼ぶとかや。臺頭に酒有りて醉を勸むる砌に。爐下に羹を和するは。野澤に求めしゑぐの若菜。折る手にたまる早蕨。土筆と書けるは土筆。長安の薺の青き色。田中の井戸に引く田菜。あこめよいかにとめこかし。形見にそでを連ねつゝ。摘みしらせばやとぞ思ふ。うつろふ情の色しあらば。花のもとに歸らん事をや忘るらん。遊絲繚亂の色々。碧羅の天になびくなり。絲を束ねて打解くる。花の下紐永き日も。あかでも暮るゝ山鳥の。尾上の櫻さきしより。一木が本は綾なくて。見きと語らん都人に。いざうち群れて御吉野や。小泊瀬志賀の山越。片野のみ野の櫻がり。雉鳴く野の夕煙。龍田の奥の幾霞。霞を分けて誰栗栖野に宿とらん。尋ね入る野のつぼすみれ。摘みて

春は云々―伏羲氏木德を以て王たり、春は五行の木に當る
石崇―字は季倫晉人也

臨時の祭―石淸水八幡宮の三月中の午の日の祭をいふ
花しづめの祭―三月に行はる、公事根源「鎭花祭これは大神狹井の二祭をいふ云々春花のとびかふ頃は疫神分散して人をなやますゆゑに彼を鎭めんために此祭はありとかや」
去來穗別の天皇―履仲天皇
甁にさしたる云云―古今集に、染殿の后のお前に花甁に櫻の花

春は羲木の德ありて。名を顯せる櫻桃李。這花の中にも勝たる。紅櫻絲櫻。初花櫻さけるより。梢にかゝるしら雲。花の所の名高は。石崇が住し金谷苑。廬山の邊の錦繡谷。我朝の吉野山。龍田泊瀨志賀の山。奈良の都の八重櫻。大内山の花櫻。雲井の櫻をかざすなる。臨時の祭の舞人。花しづめの祭は。げにさは此神の惠ぞたのもしき。去來穗別の天皇の。稚櫻の宮の花の盃。淳和の御門の花の宴。天長八年の春也。花見の御幸と聞えしは。保安第五の二月。萬代のためしをば。花にぞ留し白川。甁にさしたる花を見て。物思ひなしや老のはる。けふもこずと恨しは。雪と降し庭の花。楊貴妃がかほばせ雨を帶たる花の枝。源氏の紫の上。霞の中のかば櫻。催馬樂の櫻人。雙調には御花薗。花山の遍昭僧正。花薗の右大臣とかや。花色衣花染。花うすやう花がたみ。靈山說法の庭には。四種曼陀の花ぞふる。法花の喩し優曇花。いかなる匂なるらん。哀賢き御代なれば。あの風も枝をならさず。千年の春ぞ閑き。

宴曲

梅が香を云々―後拾遺集中原致時の歌
己が羽風―古今集、素性、木づたへば己が羽風に散る花を誰におほせてこゝらなくらん

春

霞たなびく雲井より。春立けりな天の戸の。明る氣色も閑にて。鶯誘引春風。かすむとすれど淡雪の。下草は猶結れて。岩間の氷解やらず。爭か春の越つらん。勿來の關の東路。そよやあらまほしきは梅が香を。櫻の花に匂せて。柳が枝に發てしがな。百千鳥木傳ば己が羽風にも。亂ぬべき物をな。誰に仰て鳴音も絶せざるらん。八重款冬紫深き藤波。汀になびく池の面。取々にぞや覺ゆる。しひてや手折まし。ならでや插頭ましやな。三月の永き春日も。猶あかなくに暮しつ。

花

過レ隙之駒―光陰の過ぐるに譬ふ、渡關之馬も亦然かなるべし、之を白とせるは、莊子漢書等の「如ニ白駒之過一レ隙」の語による

あき風になびくあさぢのすゑごとに
おくしらつゆのあはれ世の中（新古今）　蟬丸

白

寸陰景裏。將レ窺ニ過レ隙之駒一。廣陌塵中。欲レ認ニ渡レ關之馬一。　白賦　謝觀

あしびきの山路も見えずしらかしの
えだにも葉にもゆきのふれゝば（拾遺）　人丸

こひにくちなん名こそをしけれ（後拾遺）　相摸

無常

未ㇾ及二暮景一。蜉蝣之世無ㇾ常。不ㇾ待二秋風一。芭蕉之命易ㇾ破。　在列

孟嘗君之多ㇾ樂。猶泣二雍門之微吟一。漢文帝之至尊。已望二覇陵一而傷ㇾ思。　同

君不ㇾ見。北邙暮雨。壘々青塚色。又不ㇾ見。東郊秋風。朧々白楊聲。

昨日開來今落去。因ㇾ花多覺二世無常一。　老閑行　菅三品　山寺作　英明

こゝに消えかしこにむすぶ水の泡の
うきよをめぐるわが身なりけり（千載）　四條大納言

覇陵—漢文帝を葬りし所也

わが身なりけり—一本「身にこそありけれ」

うらなき―心なき、かへされぬとはひろうといひ、凡て衣服によそへし洒落

乍望二團扇一悲莫レ悲二兮班婕妤一。稍過二長門一愁莫レ愁二兮陳皇后一。　八月十五夜　公乘億

可憎病鵲。半夜驚レ人。薄媚狂鷄。三更唱レ曉。　張文成

鴛鴦瓦冷霜花重。舊枕故衾誰與共。　長恨歌　白

獨對二寒窓一恨二明月之易一レ過。孤臥二冷席一悲二長夜之不一レ曙。　奏請大臣　野篁

一點燈消夢後涙。數聲砧冷月前襟。　孀婦愁夜長　家貞

うしとてもさらに思ひぞかへされぬ
こひはうらなきものにぞありける（後拾遺）　堀河右大臣

しのぶれどいろに出でにけり我戀は
ものやおもふと人の問ふまで（拾遺）　兼盛

うらみわびほさぬ袖だにあるものを

きみが代はあまの羽衣まれにきて
なづともつきぬいははなるべし（拾遺）

きみが代はちよにひとたびゐる塵の
しらくもかゝる山となるまで（後拾遺）　嘉言

戀

日下レ壁而沈レ彩。月上レ軒而飛レ光。見二紅蘭之受レ露。望二青楸之離一レ霜。　別賦　江文通

春閨閉二此青苔色一。秋帳含二兹明月光一。夏簟淸兮晝不レ暮。冬釭凝兮夜何長。　同

瓦有二鴛鴦一。自羨二雙飛之義一。簾編二翡翠一。空嗟二共會之娛一。　聞鄰望幸賦　陳皇后

冬釭―釭はあぶら皿、冬夜の燈釭をいふ

浮雲云々—論語「不義にして富み且貴き、我に於て浮雲の如し」の語に取る
除書—任官名簿
三盃—一本「盃上」

嘉賓喜色欺盃酒。醉妓催聲弄管絃。　白

莫嫌鬢上些々白。金紫由來稱長年。　同

兩川風景同三月。千里江山屬一家。　同

湛露恩深酬幾日。浮雲富到避何方。　拜平章事贈納言

愚陋不論官好惡。唯歡名字入除書。　拜官後書懷　五常

鳳掖君誇溫樹露。龍門我泣浪花春。　賀門章　順

うれしさをなにゝつゝまんから衣
袂ゆたかにたゝましものを（古今）

祝

獻壽吹來三盃露。採花拂盡首間霜。　菊有延年術　儀同三司

流下綠邊皆上壽。籬東日月不傾西。　同　以言

身老五花風月席。家傳十葉帝王師。　言志　匡衡

處レ身豈羨龜多智。論レ命還思木不材。　後中書王

鄉夢頻催胡馬思。橋題不レ信蜀龍心。　尾張學士

有レ琴有レ酒閑中樂。無レ憂無レ喜世上情。　第三親王

やまのはにいりぬる月のわれならば
うき世のなかにまたは出でじを（後拾遺）　藤爲義

われのみとおもひしかども高砂の
をのへの松もまだ立てりけり（同）　藤義實

われ舟のしづみぬるみのかなしきは
なぎさに寄する浪だにもなし（同）　四條中納言

慶賀

大行—險阻を以て有名なる山

喪レ馬之老—塞翁の故事、淮南子に見ゆ

夢レ蝶之翁—莊子のこと

楊震—後漢の賢吏、四知の故事あり

張儀—蘇秦と並びて辯才あり

大行之路能摧レ車。若比二人心一是夷途。巫峽之水能覆レ舟。若比二人心一是安流。　白

木雁一篇須二記取一。致下身材與二不材一間上。　同

榮花外物終須レ語。老病傍人豈得レ知。　同

喪レ馬之老。委二倚伏於秋草一。夢レ蝶之翁。任二是非於春叢一。　莵裘賦　中書王

不レ歠二其醨一。雖レ孤二漁父之誨一。不レ容何病。可レ祖二顏子之詞一。　同　同

榮路遙而難レ期。青陽薄二寒木之頂一。　同

筆耕疲而未レ獲。秋風暮二隴苗之畦一。　九月盡日侍北野廟序　高積善

心事結レ風功不レ就。浮榮書レ水字難レ成。　菅野士　眞春通

自愳楊震齡空暮。妻咲張儀舌猶存。　述懷　江相公

いはしろ―紀伊日高郡

柳下惠―晉に仕へし人
東方朔―漢の武帝に仕へし人

百里奚―もと虞の大夫也、後秦の穆公に仕ふ

花前昔會春夢短。月下故情夜涙催。　舊遊何在哉　爲憲

いはしろの野なかに立てるむすび松
こゝろもとけずむかしおもへば（萬葉、拾遺）　人丸

つねよりもまたぬれそへし袂かな
むかしをかけておちし涙に（千載）　赤染衛門

述懐

老子莊周吾師也。身居ニ賤職一。柳下惠東方朔達人也。安ニ卑位一。　與崔深絶交書　嵆叔夜

昔騄騏倚ニ輈於吳坂一。長鳴ニ於良樂一。知與レ不レ知也。百里奚愚ニ於虞一而智ニ於秦一。遇與レ不レ遇也。　答盧諶　劉越石

吳強大兮。夫差以敗。越棲ニ會稽一兮。勾踐覇レ世。　服鳥賦　同

そより—それより

尼父云々—孔子故郷を懐へるをいふ

依倚—又は依稀、彷彿といふに同じく、ぼんやりとしてさだかならぬをいふ

をかの松風そよりほかには

懐舊

昔尼父之在陳兮。有歸歟之歎音。鐘儀幽而楚奏兮。莊舃顯而越吟。　登樓賦　王仲宣

昔君烏紗帽。贈我白頭翁。帽今在頂上。君已歸泉中。物故猶堪用。人亡不可逢。岐山今夜月。墳樹已秋風。　白

笙歌縹渺虛空裏。風月依倚夢想間。　同

東平王之思舊宅也。墳上之風靡西。天門山之傳新名也。峡中之煙拂地。　松竹榮　以言

交遊少日心如水。閑話今宵鬢有霜。　冬夜閑居話舊　菅

伯牙―琴を能くせし人也、鍾子期能く其の音を聽き分く、子期死して伯牙絃を絶ちてまた彈ぜず

仲尼―孔子の字

子路―孔子の門人仲由の字

龍花三會―彌勒下生經に「彌勒菩薩閻浮に出家之日、便得成佛、坐於龍華樹下華林園中三會說法」

交友

昔伯牙絕二絃於鍾期一。仲尼覆二醢於子路一。痛二知音之難レ遇。傷二門人之莫レ逮。　與吳質書　魏文帝

臨二白首一而始知。恨隔二面於蓋波萬里外一。仰二玄蹤一而遙契。願促二膝於龍花三會之朝一。　謝杭州天台智者敎講經王和歸　匡衡

新齋夜語聞レ雞起。舊宅春遊待レ月歸。　野相公

遲レ暮交親雲意淡。在レ朝故舊醴香濃。　題山亭壁　前中書王

思ふどちまとゐせる夜はからにしき
　たゝまく惜しきものにぞありける　（古今）

かたらはん人こそなけれやまざとは

阿監—宮女の長

百川未有回流水。一老終無却少人。　白

梨園弟子白髪新。椒房阿監青娥老。　同

辭枝雪蘂將春去。滿鑷霜毛送老來。　同

呂尙父之面波。別渭水而猶疊。袁司徒之鬢雪。出商山而既寒。　右大臣重信辭職勅答　爲明

馬嘶反櫪精神舊。鶴老歸田鬢髮新。　感戸部尙書致仕　中書王

白首七旬殘日少。蒼波萬里遠天垂。　憶入唐圓通大師　以言

關門未固年行路。劍戟難防老及情。　[illegible]　爲憲

ぬばたまのわがくろ髪にとしくれて
かゞみのかげにふれるしらゆき　（古今）　貫之

かぞふれば年ののこりもなかりけり
老いぬるばかりかなしきはなし　（新古今）　泉式部

三年、至レ今未レ許也」

雲路たづぬる人もなきよに（後撰）　清正女

遊女

南北東西不レ定レ家。風水爲レ郷船作レ宅。　鹽商婦　白

東船西船悄無レ言。唯見江心秋月白。　琵琶行　同

家夾江河南北岸。心通上下往來船。　遊女詩　以言

桂花秋白雲閑地。蘆葉春青水冷天。　同　同

こゝろからうきたる船にのりそめて
ひとひも波にぬれぬ日ぞなき（後拾遺）　小町

老人

白髮鏡中慙レ易レ老。青山江上幾回春。　元稹

胡旋女―白氏文集にあり

宋玉家邊女―文選、宋玉の登徒子好色の賦の序「臣東家之子、增之一分則太長、減之一分則太短、著粉則太白、施朱則太赤」、此女登牆闚臣

玉容寂寞涙欄干。梨花一枝春帶レ雨。　長恨歌　白

梨花園中冊作レ妃。金鷄障下養爲レ兒。　胡旋女

玉貌自宜雙黛翠。桃花獨咲一枝春。　贈妓女　賀蘭遂

陽氣陶レ神。望二玉階一而餘喘。韶光入レ骨。飛二紅袖一以羸形。　春娃無氣力　菅家

鴛鴦連レ袂謳吟。窈窕隔レ簾談咲。不レ知陽臺朝雲之未レ歸歟。不レ知洛浦神皇之交會歟。　第一王女眷寄　藤氏部卿

綺羅脂粉粧無レ暇。不レ謝巫山一片雲。　貴女吟　紀家

若非二宋玉家邊女一。疑是襄王夢裏人。　娉樂宮餞妓　江相公

繡帳粧成燈照曜。金樓宴罷月徘徊。　儀同三司

妾顏秋暮孤蛾老。願領二梨園少女風一。　和江侍中贈詩　采女

くやしくぞおふつをとめとなりにける

左衽ー夷狄

王昭君

一雙涙滴黃河水。　願得三東流入二漢家一。　棟國

身埋胡塞千重雪。　眼盡巴山一點雲。　善相公

翡翠扇飜溪霧斷。　琵琶絃咽嶺泉懸。　菅齊明

九重恩薄羅裙去。　萬里路遙畫鼓迎。　匡衡

漢月不レ知懷土涙。　邊雲空愧惜レ金名　同

豈レ圖左衽和親日。　空失二後宮寵幸時一。　齊名

見るたびに鏡のかげのつらきかな
かゝらざりせばかゝらましやは　（後拾遺）　快圓法師

妓女

あしかる—蘆刈る、惡しかる

なりけり—異本「なるべし」

鄒枚—鄒陽と枚乘と也、共に梁の孝王の臣

富春山—後漢の嚴子陵の故事、嚴子陵を詠める詩也

蒲猶非霜威之不用。　能飛州刺史　以言

州民縱作甘棠詠。莫忘多年風月遊。　賜學定政赴任　後三條院

君が代になにはのうらもしげりあひぬ
あしかるわざをせねばなりけり（家集、拾遺）　忠家

詠史

鄒枚散後平臺靜。空遺春風一日斷腸。　得業親王　是眞親王

曉洞貫窓斜月影。寒巖洗枕落泉音。　南山四皓　紀家

三千里外隨行李。十九年間任轉蓬。　蘇武　在昌

富春山月當頭白。嚴絲灘波與意清。　得後漢　閑院

こひわびてわかれし野べを來てみれば
あさぢが原にあきかぜぞ吹く（詞化）　道濟

李將軍—漢の李廣
敵—或は賊に作る
細柳—周亞夫ここに陣す　蒼梧—帝舜を葬りし地
邵伯—召公奭　羊祜—晉人
硯亭之碑—所謂墮淚碑也

李將軍之守レ邊。胡人不二敢南下一。揚大尉之在レ鎭。敵國且以子來。　新羅賦勅府　中書王

詠耿恭　高丘未高

三軍士渇二孤城下一。一眼泉飛二再拜前一。

身留細柳孤營月。淚灑蒼梧一片煙。　在列

たづねつる雪のあしたのはなれごま
君ばかりこそあとはしるらめ（後拾遺）　源兼信母

刺史

煙花片々文章主。井邑家々父母君。　章孝標

邵伯止息之鄉。州民作二甘棠之詠一。羊祜臨望之地。門客建二硯亭之碑一。郭細侯之春竹。雖レ有二風聲之可一レ傳。劉太守之秋　低陰論一作低彈一作低陸　中書王

壯士辭燕―荊軻のこと

開匣。　白河序　藤實綱

林風槐舊繁花久。池水蓮傳累葉芳。　林池秋興　以言

おそくともつひにさきぬる花みれば
たがまきおきしたねにかあるらん（新古今）　貞信

將軍

拔白刃以萬舞。危冬葉之待霜。履虎尾不噬。蹇要伯於子房。　西征賦　潘安仁

將軍守塞北。流戎羯之鄉。壯士辭燕西。入虎狼之國。　愁賦　公乘億

貳師將軍拔佩刀兮。刺山飛泉涌出。戊己校尉正衣冠兮。拜井奔流激射。　龜山祭文　前中書王

胡廣─後漢の人字は伯始
黃憲─後漢の人字は叔度
阿衡─殷の時の宰相
周勃─漢高祖の功臣
丙吉─漢の人、牛喘を問ひて節序の調はざるを憂ひし故事あり

丞相　附執政

胡廣累世之農夫也。伯始致ニ位相公一。黃憲牛醫之賤子也。叔度動ニ名京師一。昔伊尹有莘氏之媵臣也。一佐ニ成湯一遂荷ニ阿衡之號一。呂尙磻溪之漁者。一朝指麾。乃封ニ營丘之地一。

勸晉王牋　阮嗣宗

大相國者臣之嚴親也。仰ニ膝下一而流レ汗。左僕射臣之伯父也。揖ニ座上一而收レ襟。

小野宮太政大臣辭職三度　後江相公

應對易レ迷。汗洽ニ周勃之背一。陰陽難レ理。牛喘ニ丙吉之前一。

同表　同

囘塘春柳。太公之鈎垂レ絲。曲池秋波。魏徵之鏡

系—或は岳に作る

岐嶷—幼にして卓抜せる意

日遠論—晉の明帝五歳の時、日と長安との遠近を論ぜし故事

親王 附王孫

江都之縱二逸遊一。遺二譏於雷陂之戲一。東阿之巧二詞賦一。流二譽於渭水之文一。　望月遺情多　齊名

漢景帝之十有三子。最弟謝二其系一名。梁孝王之曲二觀平臺一。誰人聞二其好一レ學　今年又有春　順

見二其容姿一。則文王之孫。長子誦之幼日。論二其岐嶷一。又孔聖之師。大項槖之同年。　東宮第一皇孫讀書徑　匡衡

老臣在レ座私相語。我后少年學二此文一。　同　儀同三司

若言二皇子神聰敏一。日遠論非二同日論一。　第一皇子讀書畢日竟宴　家經

みねたかき春日のやまにいづる日の
くもるときなくてらすべらなり（古今）　長秋相公

公主―天子の女
釋迦如來―八十歳にて入滅

隆周之昭王穆王暦數永。吾君又暦數永。本朝之延暦延喜胤子多。吾君又胤子多。　賀雇序　儀同三司

漢高祖之過沛中。賞父老以撃筑。唐太宗之宴池上。率貴臣以獻詩。　渡水落花舞　匡衡

飛鳥朝者王女也。待羽翼以開鳳暦。高野姬者公主也。契風雲以復龍興。　第一皇女著袴日宴　民部卿

言其尊儀。則娑婆世界十善之主。計其寶算。又釋迦如來一年之兄。　陽成院願文　後江相公

鳳輦宴酣方欲幸。可憐沛老狎恩情。　渡水落花舞　儀同三司
忽看烏瑟三明影。暫駐鸞輿一日蹤。　宇治行幸詩　後冷泉院

ほり江には玉しかましをおほぎみの
みふね漕がんとかねてしりせば（萬葉）　左大臣諸兄

北辰—天子の位
南面—同上

こよひは越えじあふさかのせき（千載）　藤範永

庚申

早臥無レ情看二雪月一。獨眠不レ得守二庚申一。　守庚申月夜對雪　保胤

かのえさる舟までしばしこととはん
おきのしらなみたちて來ぬまに（拾遺）　藤佐見

帝王　附女帝法皇行幸

人在レ威而不レ在レ衆。我王也萬夫之防。器在レ利而不レ在レ大。斯劒也三尺之長。　漢高祖斬白蛇賦　白居易

德是北辰。椿葉之影再改。尊猶南面。松花之色十廻。　聖化萬年春　後江相公

壯士云々―荊軻の「風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還」の句による

故關。　白

三湘愁鬢逢秋色。萬里歸心對月明。　盧倫

嶺懸驛路殘雲斷。海浸城根老樹秋。　賈島

遼陽客路千峯引。薊北鄕心片月知。　賀蘭遂

故鄕有母秋風淚。旅館無人暮雨魂。　代送島人　爲憲

涼燠二回鄕外夢。家山千里客中情。　月前旅情多　長國

征徒旆重胡關曉。壯士衣單易水秋。　霧中風露冷　第三親王

みやこにてながめし月のもろともに
たびねの空にいでにけるかな　道命

待ちつらんみやこの人にあふさかの
せきまできぬと告げややらまし（玉葉）　中務

ありあけの月もしみづにやどりけり

みなれし―水馴に見馴を掛く

せきとゞめぬ―關に堰を掛く

而消レ魂。　　　　　　餞別奥州刺史赴任　藤　敦　宗

縱令後會能相結。兩鬢白二於邊地霜一。　　遠　別　都　良　香

家訓欲レ聞殘日少。洛陽風月莫二遲歸一。　　餞源能州赴任　輔　昭

ころも川みなれし人のわかるれば
　たもとまでこそ波はよせけれ（新古今）　重　之

かりそめのわかれとおもへど白川の
　せきとゞめぬは涙なりけり（後拾遺）　四條大納言

とまりゐてまつべき身こそ老いにけれ
　あはれわかれは人のためかは（詞花）　藤　輔　尹

行旅

山川函谷路。遊子塵土顏。蕭條去國意。秋風生。

古渡南横迷遠水。秋山西繞似屛風。

敦淳和院眺望　佐國

みわたせばひらのたかねに雪きえて
わかなつむべく野はなりにけり（續後撰）

兼盛

餞別

潯陽江畔夜送客。楓葉荻花秋索々。

琵琶行　白

勸君更盡一盃酒。西出陽關無故人。

送元二使　王維

酌盃酒以強勸不醉奈何吳坂楚嶺之寒嵐。加滄飯以莫辭定知悵然三峽五湖之春浪。

別方山水深　保胤

倩誰人而說離憂。責不言於桃李。向何方而陳別緒。恨無心於煙霞。

花下惜別　齊名

山月東昇。指前途而勞思。邊雲秋冷。問後會

江畔—原詩「江頭」に作る

陶君云々—陶淵明の愛したる東籬の菊も衛枯れしと也
商老—四山の四皓をいふ

陶君籬舊寒花悴。商老山深曉月幽。　　秋景鶴閑人　都督亞將

ひとりのみながめふるやのつまなれば
人をしのぶのくさぞおひける（古今）　　眞　登

眺望

詩成暗著閑心記。山好遙偸病眼看。　　曲江晩亭　白

煙霞隔路三千界。花柳藏城十二衢。　　淸水寺上方望　正通

山雨鐘鳴荒巷暮。野風花落遠村春。　　暮春眺望　儀同三司

嵩山圍繞興溪霧。洛水同流入野煙。　　禪林寺眺望　公政

紅樹重々寒雨後。遠村處々夕陽中。　　同　道濟

雁字一行鷄月去。樵歌數曲負嵐還。　　秋山眺望　菅　忠眞

紅林半落寒山透。白鷺斜飛遠水長。　　長樂寺眺望　敦宗

して色變草の如し

范岫ー六朝の齊人

陵園配妾ー唐の武帝の宮人、潘安仁に讒せしとて陵園の墓守に配せられたるをいふ

神無月しぐればかりを身にそへて　しらぬやまぢに入るぞかなしき（後撰）　素性

さゞなみや志賀の浦かぜいかばかり　こゝろのうちのすゞしかるらん（拾遺）　四條大納言

閑居

柴扉日暮隨レ風掩。落蕊閑花不レ見レ人。　元稹

閉レ閣只聽朝暮鼓。上レ樓空望往來船。　白

崔儦入レ室書千卷。范岫辭レ官筆一雙。　書齋獨居　後江相公

讀レ易床頭新月色。學レ禪窓下遠鐘聲。　閑居秋日暮　後中書王

歸老休臣霜後眼。陵園配妾月前心。　閑中秋色變　以言

墻中風景無二塵網一。門外煙霞任二雀羅一。　池亭作　中書王

齋—とき、僧の正食をいふ

液霞客—仙人のこと

艾髮—髮蒼白に

僧

禪衣衲厚雲藏線。壽臈高來霜印眉。　贈老僧　杜荀鶴

齋後將何充供養。西軒泉石北窗風。　白

清泉繞屋澄心遠。曙月銜山出雲遲。　王晉復

昔隋煬帝之報智者。千僧膝一。今左丞相之訪寂公。曝布足百。　諷誦文　定基入道

香印微煙無凝月。齋僧輕步不穿苔。　野篁

溪嵐吹樹搖秋思。山月穿窗訪夜禪。　在列

松門露暗僧歸寺。蘿洞雲栖鳥宿林。　山中秋日暮　以言

茅屋無人扶病起。香爐有火向西眠。　保胤

蘿襟朧積液霞客。艾髮餘衰弄月人。　遊東光寺　明衡

闡提―不信の義

獨覺―緣覺の原語辟支佛の義譯にして、十二因緣の法を觀じて迷惑を除く證果に悟入するをいふ

雖二一念一不レ捐。似下結二涓露一而納中秋月上。雖二闡提一能救。如下披二雲霧一而覩中青天上。

觀音經　江部督

不レ厭時々猿一叫。自然日々鳥相馴。

寂寞無人聲　保胤

眞如珠上塵厭レ禮。忍辱衣中石結レ緣。

不輕品　以言

巫女昔夢慙二妄想一。仙人秋駕隔二圓乘一。

慈意妙大雨　時綱

縱事二仙人一誰拾レ地。全教下獨覺一不上レ觀レ空。

常有花菓　成家

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき
　はるかにてらせ山のはのつき（拾遺）　泉式部

ころもなる玉ともかけてしらざりつ
　ゑひさめてこそうれしかりけれ（後拾遺）　赤染衛門

わしの山へだつるくもやあつからん
　つねにすむなる月をみぬかな（同）　康資王母

いはのうへに旅寢をすればいとさむし

こけのころもをわれにかさなん（後撰）　小町

佛事

誕生七歩。花承二輻輪之趺一。苦行六年。鳥栖二烏瑟之髻一。　策文　淳茂

烏瑟—佛の頂上の肉

雪盡氷解之日。伴二溪鳥一而傳二法音一。月殘露結之朝。折二籬花一而供二佛界一。　自筆法華經願文　中書王

海風之吹二沈香一。自供二芬芳一。河水之流二碎金一暗添二嚴飾一。　築池爲佛塔　保胤

中夜八十之火。假唱二雞林之煙一。東方五百之塵。長懸二鷲峯之月一。　以言

繩床―坐禪の床
三昧―佛語、專念の意
天祿―漢の殿閣の名

繩床欲レ穿。月老二春蘿之洞一。衲衣易レ破。風疎二秋桂之峯一。　接念山林　同

四禪衣闌。曉颸飛而山月曙。　三昧秋暮。霜猿叫而峽煙深。　金峰山願文　江都督

庭松百尺歷レ年老。　山月幾回仍レ舊圓。　秋日遊栖霞寺　儀同三司

禪定水清寒谷月。　閼伽花落故園霜。　遊法性寺　四條大納言

青苔院靜地空老。　碧樹路深山不レ童。　遊長樂寺　源右府

棠梨嶺遠雲宵雪。　楊柳寺深天祿塵。　暮春遊西山　第三親王

空假葉飛林雨盡。　色香菊老岸風芳。　孝言

花色春深林霧底。　鐘聲日暮野煙中。　敦基

まてといはゞいともかしこし花の山に
しばしと鳴かん鳥のねもがな（拾遺）　遍照

淡交―莊子山木篇「君子之交淡若ㇾ水」

阮家南北舊來隣。不ㇾ隔ニ墻垣ニ不ㇾ愧ㇾ貧。　無墻隣家　齋丘未高

泉纖ニ淡交ヲ長有ㇾ味。樹含ニ芳契ヲ豈無ㇾ情。　陸張隣　直幹

垣ごしに見れどもあかずさくらばな
ねごめにかぜの吹きもこさなん（後撰）　伊勢

山寺

石橋路上千峯月。山殿雲中半夜燈。　周元範

鐘聲半夜香山雨。散入ニ前溪楓葉秋。　夕宿寶塔寺　何玄

香煙出ㇾ戸。紙窓掩而無ㇾ人。禪侶向ㇾ壇。金磬鳴而有ㇾ響。　遊山寺　英明

幽洞日暮迎佛之使飛ㇾ煙。松戸人稀護塔之鳥撥ㇾ月。　雲林寺　齊名

稲負鳥―鶺鴒或は雀或は雁等、數說あり

蒲葉露低漁火濕。稻花風起釣絲飛。　英明

田家秋意　高相如

牛休門荻花寒處。犬吠園林葉落聲。

城南別業卽事　佐國

綠蘿墻遶田家近。紅蓼花殘水岸高。

同　都督亞相

秋霧橫レ峯消二雁陣一。夕陽落レ瀨曝二漁罾一。

をやま田のおくての稲をかりほして
まもるかりほにいくよぬるらん（拾遺）　躬恒

山田もるあきのかりほにおくつゆは
稲負鳥のなみだなりけり（古今）　忠岑

御田舍守けふはさつきになりにけり
いそげやさなへおいもこそすれ（後拾遺）　好忠

隣家

土宜―風土に適する産物

煙藏古竹風中色。雲領飛泉洞裏聲。　幽居春日屏風　菅三品

草創主人雲臥後。竹編客舍雨墮時。　北山居　四條大納言

馬臺東西遠山路。賓閣南頭明月地。　右相府白川亭作　儀同三司

苔庭木落紅無跡。雲碓月晴雪有聲。　仙家秋色多　明衡

土宜酒熟酌秋竹。松蟠嵐寒聞夜琴。　江家

やまざとは秋こそことにかなしけれ
　しかの鳴くねにめをさましつゝ（古今）　忠岑

このごろは木々の梢ももみぢして
　鹿こそは鳴けあきのやまざと（後拾遺）　上東門院中将

田家

携將晚浪孤舟子。染著秋風一簪薄。　田家作　具

來許由長棲二於潁水之月一。　法性寺大相國辭表　匡衡

心地早銷方寸火。鬢霜鎭帶數莖秋。　訪朔處士　江相公

おちつもる柞葉がしたのみなしぐり
なにかは人にありとしられん

山家

雲生二澗戸一衣裳潤。嵐隱二山厨一火燭幽。　香爐峰下新居　白

寂寞柴門人不レ到。空林獨與二白雲一期。　王維

窓東早月當二琴榻一。墻上秋山入二酒盃一。　方干

夕陽山影穿レ窓入。幽澗泉聲向レ戸飛。　山齋喜春　嵯峨御製

門出二水脣一春浪齧。路從二溪口一暮雲穿。　紀

山開二畫障一當レ窓立。水亂二羅文一繞レ座流。　山庄　田忠臣

ふるさとは見しごともあらず斧の柄の
朽ちしところぞこひしかりける（古今）　　友則

隱倫

堯稱天而。不屈潁陽之高。武盡美矣。終全孤竹之潔。　　逸民傳論　范蔚宗

蕙帳空兮夜鶴怨。山人去而曉猿驚。誘廻俗士之駕。爲君謝逋客。　　北山移文　孔德璋

明主十徴何謝病。煙霞不許作堯臣。　　朴昂

孤竹二子之去周。春蕨煙老。五柳先生之遁晋。秋菊霜寒。　　月前閑談　以言

漢四皓雖出。應曜獨留於淮陽之雲。堯三徴不

潁陽之高―許由堯の帝位を己に遜らんとすと聞きて潁川に耳を洗ひし故事
孤竹之潔―伯夷叔齊のこと
淮陽―或は淮南に作る

あさぢ原ぬしなきやどのさくら花
　こゝろやすくや風にちるらん（拾遺）　同

仙家　附道士

開レ雲植レ玉嫌ニ山淺一。渡レ海傳レ書怪ニ鶴遲一。　酬嵩丘麻道士　盧　綸

金殿月中看レ擣レ藥。玉樓風裏聽レ吹レ笙。　宿天橋観　章孝標

玉池露冷芙蓉淺。金井煙分薜荔疎。　玉芝観　許　渾

四九三十六之天。丹霞之洞高闢。八九七十二之室。青巖之石削成。　神仙策　都良香

夕巖苔靜稀ニ人到一。曉洞花飛見ニ鶴遊一。　勾曲山屏風　菅三品

境傳ニ方術一長看レ雪。籬隔ニ乾坤一豈怕レ霜。　仙家菊猶殘　後三條

藥欄日斜暎ニ秋雪一。雲碓水急舂ニ曉霜一。　仙洞菊花多　孝標

新豐樹老籠明月。長生殿閣鎖黃昏。　過天寶宮康吏　白

粧客妓樓何寥靜。柳似舞腰池似鏡。　兩朱閣　同

隱映朝霧之斷時。南流鷗浴。朦朧秋月之傾處。西堂人稀。　河原院賦　源爲宣

今來恭避人間暑。此處仙皇昔待風。　河原院釣臺避暑　英明

雲深聖主昔遊處。樹老宮人手植時。　冬見淳和院感舊　菅家

世事不停江水逝。垂楊空掃舊門欄。　過藤相公舊宅　保胤

屋舍大荒非舊日。主人一去幾春風。　過伊州舊宅　同

きみましょむかしは露かふるさとの
花みるごとにそでのぬるらん（續古今）　貫之

すだきけんむかしの人もなき宿に
たゞかげするは秋の夜のつき（後拾遺）　惠慶

きみましょ――一本「思ひいづる」
すだき――一本「すみき」

あかき―明かに照り輝ける

六龍―鳳輦のこと

花は云々―異本「花ぞ咲きける」

銅臺―魏の曹操の築きし銅雀臺

けふこゝのへに匂ひぬるかな（詞花）　伊勢大輔

こゝのへのうちだにあかき月かげに
あれたるやどをおもひこそやれ（拾遺）　爲政

故京

雙鳳北歸山寂々。六龍西幸水滔々。　望清花宮　許渾

ふるさととなりにしならの都にも
いろはかはらず花は咲きけり（古今）　奈良帝

故宮　附古宅

石崇之門客長辭水流二金谷一。魏帝之宮人已散草満二銅臺一。　愁賦　公乗億

五夜漏聲—五更を報ずる漏刻の聲

豫樟—又豫章、くすのきの類、子虚賦の顔註に「豫章二木、生七年乃可分別」

禁中

五夜漏聲催二曉箭一。九天春色醉二仙桃一。　白

渚宮東面煙波冷。浴殿西頭鐘漏深。　八月十五夜禁中　白

九重城裏春來早。百尺樓頭日落遲。　崔　曙

殿庭之甚幽。咲三嵩山之逢二鶴駕一。風景之最好。嫌三曲水之老二鶯花一。　菅姫無氣力　菅　家

通二籍重門踏二彩霞一而失レ歩。登レ仙半日間二青鳥一而知レ音。　同　同

仙籍是重。暫降二蓬萊萬里之雲一。高材不レ拘。誰待二豫樟七年之日一。　松竹策　以　言

いにしへのならのみやこの八重ざくら

潯陽楓葉—白樂天「琵琶行」潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟々」の句による

石竇寒泉秋眼泣。銀河晴色曉顏淸。　池亭宴飲　都良香

只照二形容一難レ照レ思。含レ情空問影中人。　監山水　紀家

青草湖圖波寫得。白蘋洲様岸相傳。　林池眺望　英明

細浪沙來塡二鷺跡一。喬枝日落入二蟬聲一。　林池　在列

擧レ帆往反秋風送。轉レ棹東西夜月隨。　釣魚翁　善家

傾得孤蘆三數酌。高歌不レ信有二公卿一。　漁人　保胤

洲蘆浪碎驚二花白一。岸樹日藏省二葉紅一。　水氣先秋冷　以言

潯陽楓葉帶レ霜碎。蓋嶺泉聲穿レ雪流。　明月照江山　都督

きみが世にあふくま河のみづきよみ
そこにぞ見ゆるよろづよのかげ（詞花）　入道殿

世にすまばまたも見にこん大原や
おほろのしみづおもがはりすな　能宣

張博望—漢の博望侯張騫

彭蠡—洞庭のこと

滄浪—「滄浪之水清兮可以濯我纓、滄浪之水濁兮可以濯我足」

滉瀁—深きこと

奫淪—深きこと

張博望之至牛漢。泝十萬里之浪。伯司空之鑿龍門。遺一千年之跡。

辨山水遊　澄明

松江月落漁舟去。蘿洞雲開隱逕深。

雨晴山川清　雅材

客帆有月風千里。仙洞無人鶴一雙。

江山此地深　惟成

潭心月映金波漲。嶺面雲開翠黛纖。

晴後山河清　入道大納言

舟隨彭蠡鴈聲去。鳥踏嶧陽桐葉行。

秋色變山水　源右相府

滄浪歌白雪飄曉。雲雨夢香風脆春。

花瀧江山良　澄兼

あしびきの山した水のこがくれて
たきつこゝろをせきぞかねつる（古今、後撰）

源善

水　附漁父

影浸南山青滉瀁。波沈西日紅奫淪。

混明靜水滿　白

巫女嶺南行雨冷。鄭公谿北遠嵐餘。　暮山景氣寒　明衡

はるはもえ秋はこがるゝ竈山かすみも霧もけぶりとぞみる（拾遺）　元之

おもひでもなきふるさとの山なれどかくれゆくはたあはれなりけり（拾遺、詞花）　嘉言

山水

左據函谷二崤之岨。表以太花終南之山。右界褒斜隴首之嶮。帶以洪河涇渭之川。　西都賦　班孟堅

墨水澄時潭底出。白雲破處洞門開。　白

尼父之一望也。歎龜山之蔽魯。靈均之五顧也。繞沅湘而傷楚。　菟裘賦、中書王

竈山—美濃
尼父—孔子
靈均—屈原

杜康―古へ酒を作りし人

もち―望、持ち
千たび―異本「千代」

縱無ニ醉面將レ桃競一。暫有ニ愁眉與レ柳開一。　逢花傾一盃　保胤

荊籬客醉斜吹レ菊。柴戸人稀緩酌レ蘭。　載酒訪幽人　庶幾

人喜ニ樽中春氣湛一。鳥思ニ盃底晩香分一。　花菜酒中新　篤茂

杜康昔構容ニ八息一。陶令重來寄ニ我生一。　唯以酒爲家　後中書王

藍水應レ無ニ氷泝思一。玉山唯有ニ雪消情一。　依醉忘天寒　國成

めづらしき光さしそふさかづきは
もちながらこそ千たびめぐらめ（後拾遺）　紫式部

山　附山水

千峯黛色因レ晴出。百谷泉聲欲レ暮寒。　賀蘭遂

煙消ニ茶竈一厨兒睡。日落ニ松巖一野鶴留。　山閑人事少　食名

鹿鳴猿叫孤雲慘。葉落泉飛片月殘。　秋聲多在山　後中書王

虛無責得林花色。寂寞求來谷鳥聲。
詩情被動春　以言

班扇長襟秋不齎。楚臺餘味老彌深。
高樓夜宴文難明　天暦

あはれてふことのはごとにおく露は
むかしをしのぶなみだなりけり（古今）

酒

香醅淺酌浮如蟻。雲鬢新梳薄似蟬。
花酒　白

能消忙事成閑事。轉得憂人作樂人。
家醞　同

酒軍在座。菟園之露未晞。僕夫待衢。鷄籠之山欲曙。
望月遠情多　齊名

葉則玄圃之梨。折西枝兮置机。酒是青州之竹。酌上葉而滿樽。
寒花爲客栽　匡衡

班扇―班婕妤の團扇を詠じたるをいふ

菟園―梁の孝王の園

玄圃―崑崙山にあり

あきの夜は人をしづめてつくづくと
かきなす琴のねにぞなきぬる（後撰）　是貞親王

文詞　附遺文

收百代之闕文。採千載之遺韻。觀古今於須臾。撫四海於一瞬。　文賦　陸士衡

聲々麗曲敲寒玉。句々妍詞綴色絲。　白

春霞秋月。潤艷流於言泉。花色鳥聲。鮮浮藻於詞露。　新撰和歌集序　紀貫之

我聞相如嘗文。家徒四壁立。又聞孫弘高才。年此八旬行。　老閑居　菅三品

文路春行看不足。詞林秋望老彌深。　来雨風月思　儀同三司

相如―漢人、司馬氏、其賦二十九篇傳る
家徒四壁立―家貧しくして家財なきをいふ

ひぢぬる—異本「ぬれぬる」

間關—鳥聲の高低相曲をいふ

漏猶深—漏刻深し、夜のふけ深きをいふ

臨水館　連江雁翼。　枕山樓　入峽猿聲。　秋宿驛館　直幹

あきやまのかひにみかへりなく猿を
夜ふかく聞きて袖ぞひぢぬる（家集）　是則

管絃

間關鶯語花底滑。　幽咽泉流氷下難。　琵琶行　白

絃中恨起湘山遠。　指下情多楚峽流。　聽琴　蘇替

秋月夜閑聞案曲。　金風吹落玉簫聲。　金吾

紈扇月落。秋調白雪之聲。　青玉燈殘。風傳昭花之曲。　管絃臨曉清　明衡

寒鶴怨長夢自斷。　寒鳥啼苦漏猶深。　寒夜撫鳴琴　天暦御製

人松風響春吹夢。　落峽泉聲暗灑心。　雅量

いづる―出、鶴

みる―異本「思ふ」

蘭岸月冷聲彌亮。蕙帳雲空怨幾殘。　霜天聞夜鶴　順

初疑二波面孤雲宿一。更誤二沙頭片月殘一。　波澄鶴影　嵐

秋雲歸レ洞千年駕。白日昇レ天一擧情。　鶴是作仙禽　都督

忘れてもあるべきものをあしはらに
おもひいづるの鳴くぞかなしき　貫之

あしたづの立てる川べにふくかぜは
よせてかへらぬ波かとぞみる（古今）　宇多御製

猿

巴峽猿聲催二客涙一。鋼梁山峯入二紅樓一。　李嶠

吳岫雨來溪燕浴。楚江雲暗嶺猿吟。　許渾

峽裏猿鳴悲又清。況聞二薄暮第三聲一。　猿叫峽　善家

楓松堤是菰蒋地。木落秋還岸暗春。　草長江湖春　以言

呉郡望青風放馬。杭州道緑月行人。　同

なつ草はむすぶばかりになりにけり
　のがひのこまはあくがれぬらん（後拾遺）　重之

おほあらきのもりの下草なつくれば
　かる人なしにしけるころかな　忠岑

鶴

花亭風裏依々鶴唳猶聞。巴峡雨中悄々猿啼已息。　暁賦　謝観

望廻翔於蓬島霞袂未逢。思控馭於茅山霜毛徒老。　鶴鳴九皐　藤雅村

蘭臺―楚の襄王此に遊ぶ
宋玉―襄王に侍し風賦を作る
うらは―異本「くちば」

叢八莖疎而且寒。憶曾湘妃廟裏雨中看。　畫竹歎　白

千花萬草凋零後。留向紛々雪裏看。　同

柯亭月閑。雲過蔡氏之曲。蘭臺日暮。風舞宋玉之詞。　辨松竹叢　以言

長竿冒雪白龍蟠。能濫虛心獨苦寒。　見庭竹雪　良春道

竹のよもわが世もいたくおいにしをうらはさやにもおける霜かな（續古今）　菅家

草

荀令見君應向我。僞言秋草閉門多。　白

消盡雪青湖寺路。霽來煙綠洞庭砂。　違草初含色　輔昭

湖邊人踏三分綠。塞外馬嘶一道煙。　同　齊名

逢ひて松樹に雨やどりし、因りて其樹を封じて五大夫となしたる故事、次の秦爵もこれに因りて松の稱とせる也

呉人云々ー呉の季札徐君の冢樹に徐君が生前心竊かに望みし己の劍を懸けし故事

雲汗。收二赤驪之溝一。　松聲當夏寒序　以言

秦爵琴聲調二白雪一。呉人劍色掛二秋霜一。　夜月照高松　明衡

沙雨荷開交二蓋影一。汀風魚躍誤二琴聲一。　松緣臨池水　有信

すみよしのきしの姫松ひとならば
　いくよかへしと問はましものを（古今）　讀人不知

大原や小鹽のやまのこまつばら
　はや木高かれ千代のかげみん（後撰）　貫之

ゆく末のしるしばかりにのこるべき
　松さへいたく老いにけるかな　道濟

竹

西叢七莖勁而健。省二向天竺寺前石上見一。東

黃石公―張良少時下邳圯上に遊びし時履を圯下に墮し良に命じて之を取らしめ、後遂に良に兵書を授けし老人

秦皇云々―始皇帝泰山を封じたる時暴風暴雨に

上陽宮裏曉鐘後。天津橋頭殘月前。

曉上天津橋　白

孤帆飛而不留。黃石公授履之後。五馬嘶而欲去。孟嘗君出關之程。

客別期曉　後生

聞鐘起問山高卑。隔燭看迷鴈後先。

曉色未分明　元眞

星飜空拂槿花露。月落暗聞蘆葉秋。

晴風臨曉來　明衡

ありあけのつれなく見えしわかれより
あかつきばかりうきものはなし（古今）　忠岑

松

澗底松搖千尺雨。庭前竹撼一窓秋。

杜荀鶴

搖窓竹色留僧語。入院松聲共鶴聞。

橘巨源

秦皇泰山之雨風。消黃雀之路。周穆長坂之

雲際日光分二萬井一。煙消山色露二千峯一。　元稹

天台嶺前四十五尺之泉曝レ布。洛陽城外三十六峯之黛聯綿。　山晴秋望多　齊名

野鶴一冲晴後失。塞鴻數點望中銷。　高天澄遠色　村上御製

應レ分一隼鶴毛羽。欲レ計數行鴈弟兄。　天秋無片雲　保胤

金風吹拂青山極。銀水洗除碧海呑。　同　以言

金風―秋風

あまの川あふぎのかぜに霧はれて
そらすみわたるかさゝぎのはし　(拾遺)　元輔

曉

愁二思婦於深窓一。輕紗漸白。眠二幽人於古屋一。暗隙纔明。　曉眠　謝觀

幽人―隱者

風乎舞雩詠而歸」といへるに對し、孔子喟然として「吾與レ點也」といひし故事

來ぬひと云々—秋風が物を思はする故來ぬ人も恨めしけれど、それにもまして恨めしと也

戀レ石云々—古來雲は石より生ず故に雲根といふといへるに依る

かをだにぬすめはるのやま風（古今）　遍昭

わがせこが來まさぬ宵のあきかぜは
來ぬひとよりもうらめしきかな（拾遺）　好忠

雲（くも）

[illegible]　齊名

月知二溪靜一尋常入。雲愛二山高一日暮歸。

觀雲知隱　善相公

聚散隨レ身非レ出レ岫。低昂逐レ步豈由レ風。

行雲思故鄉　庶幾

戀レ石唯念初觸色。離レ溪不レ忘昔棲心。

宇治別業即事　儀同三司

横レ嶺晩雲紅慘慘。落レ湍秋水白潺潺。

あまのはら春はことにも見ゆるかな
雲のはたてもいろまさりけり（菅家萬葉）　菅家

晴（はれ）

列子―風に御して行くといへる故事、朗詠集の風の條參照

陸惠曉―齊人也、張融と竝び住む、其間池あり樹あり

魯聖云々―孔子、論語先進篇に孔子弟子に志を曰はしめし時、點が「暮春者春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、

新撰朗詠集　巻下

雑

風

雲霧輕レ身。窺二列子之此駕一。㵫洴授レ手。問二宋人之不一レ龜。　清風戒寒序　菅　家

沙鷗之眠易レ驚。陸惠曉之柳拂レ地。浦月之影漫動。孫子荊之枕揚レ波。　水岸清風至　齊　名

迎レ晴拂二墻陰雪一。解レ凍飜二來岩曲波一。　風渡請春意　後中書王

枕冷唐妃專幸裏。襟飜魯聖以思程。　有風終夜涼　以　言

はなのいろは霞にこめて見せずとも

年のうちにつもれる罪はかきくらし
降るしらゆきと共にきえなん（拾遺）　貫之

ゆきつもるおのが年をばしらずして
春をばあすと聞くぞうれしき（同）　重之

長河暗泮狐聞急。古渡偸穿馬踏危。　春水氷解　紀家

はるかぜに澤のこほりやとけぬらん
けさやまかはの水まさりけり　具平親王

狐聞—狐は性疑ひ深く氷下の水音を聴きて後渡るといふによる

霰

念佛山僧掌舍利。名醫道士佐銀丸。　日微霰　菅家

竹の葉にあられふる夜のさむけきに
ひとりはねなんものとやは思ふ（千載）　馬内侍

舍利—骨也、佛骨の意

佛名

道場夜半香花冷。猶在燈前禮佛名。　白

懺抛業障氷消地。破却無明日上天。　良春道

無明—迷ひの闇

ふまゝくをしき庭のゆきかな（詞花）　泉式部

雪ふかきみちにぞしるき山ざとは
われよりさきに人こざりけり（後拾遺）　藤經衡

氷

石髮、水衣ー共に陟釐即ちあをさといふものの異名、本草綱目に、水中の石上に生ずる物有りて其狀髮の如く、水不潔にて石無きに生ずる物あり其狀絲綿の如しといへる是也

石髮渲來風未櫛。水衣黏後浪難縫。　輕水含岸苔　爲政

光難鑒古春消處。背似有龍魚負程。　水面氷如鏡　第三親王

いはまにはこほりの轄うちてけり
たまゐの水もいまはもりこず（後拾遺）　好忠

春氷

春來日暖危心立。曉後霜凝踏足行。　履薄氷　橘廣相

痩公―晉の庾亮
孫子夜書―孫康雪に照して書を讀みし故事

うち拂ふともねならねばをしどりの
うは毛の霜もけさはさながら（家集）　泉式部

雪

翫雪　何玄
秦客訪レ花驚出レ洞。痩公看レ月誤登レ樓。

早雪　弘仁御製
班姫秋扇已亡レ色。孫子夜書獨有レ明。

禁中雪　田忠臣
闇夜猶行明月地。人間却踏白雪天。

雪飛千里外　爲時
胡塞斷レ花遙去馬。巴山歌レ月遠行人。

江都督
地白猶迷停午影。山明不レ信落西光。

兼盛
やまざとは雪ふりつみてみちもなし
けふこん人をあはれとは見ん（拾遺）

待つ人のいまもきたらばいかゞせん

心灰—心冷灰の如く老いて情火の滅したるをいふ

心灰不レ及爐中火。鬢雪多レ於二砌下霜一。　冬至夜　白

碧氈帳上正飄レ雪。紅火爐前初炷レ燈。　夜招晦叔　同

遠憐珠砌銀華亂。近愛黃家獸炭馴。　愛火懷雪　順

はひにのみくだく心をいかにせん
かきあらはさぬ夜半のうづみ火　相模

霜

寒月曉殘。期二皎潔於花表之頂一。初陽且照。
守二凄清於瓦溝之中一。　青女司霜賦　紀家

林欒織著黃絲纈。沙渚瑩來白水精。　早霜　菅家

寒鳴自應二三危結。暗落先和二五夜清一。　鐘聲應霜　紀家

寒鞭斷去紅難レ駐。曉刃裁來綠不レ完。　霜間落葉多　中書王

曉硯―曉方硯の水の氷れるによりての意

なれども―異本「とおもふに」

冬至　白

爐火欲レ消燈欲レ盡。夜長相對百憂生。

橘在列

夜衣漸識千山雪。曉硯初諳四海寒。

四條大納言

しもおかぬ袖だにさゆる冬の夜は
鴨の上毛をおもひこそやれ（拾遺）

歳暮

劉禹錫

巻レ簾松竹雪初霽。滿レ院地塘春欲レ廻。

荏苒歲之暮　後江相公

急二於流水一無二廻浪一。去似二奔車一幾轉レ輪。

相模

あはれにもくれゆく年のひかずかな
かへらんことは夜のまなれども（千載）

爐火

萋々—草の盛なる貌

こや—地名の昆陽に小屋を掛く

うたゝねに夜やふけぬらんから衣
うつこゑ高くなりまさるなり（後拾遺）　藤忠房

冬

初冬

初冬　白

霜輕未殺萋々草。日暖初乾漠々沙。

清洛曉光鋪玉簟。上陽霜葉剪紅綃。　劉禹錫

蕭條秋後色　齊名

四五株楊經雨色。兩三叢菊佗霜花。

あしの葉にかくれてすみしつの國の
こやもあらはに冬はきにけり（拾遺）　貫之

冬夜

性好道術能爲五里霧」といへるに出づ

はれじな—異本「はれせじ」

賓雁云々—蘇武の故事。漢書蘇武傳に「天子上林苑中に射て雁を得たり、足に帛書を係くるあり、言ふ蘇の澤中に在りと」

あづまぢに入りにし人のこひしきに
あふさか山はきりこめてけり　惟成

とりつなげみつのの原のはなれごま
よどの川霧あきははれじな　長能

擣衣（たうい）

賓雁繫レ書飛ニ上林之霜一。忠臣何在。寡妾擣レ衣泣ニ南樓之月一。良人未レ歸。　願文　江都督

擣自ニ金颸秋暮冷一。催ニ於素月夜來晴一。　擣衣詩　都在中

色爭ニ霜葉辭レ林色一。聲混ニ雲鴻出レ塞聲一。　同

客路霜乾秋韻遠。孀閨雪冷曉聲寒。　擣衣明月中　菅在良

雪中絕盡幽人夢。霜後添來旅雁聲。　月前聞擣衣　藤友房

あきの野はらにをじか鳴くなり（續千載）　相摸

露

看取風流何所似。瑠璃盤底水精丸。　荷上露　高五常

蒼葭夜色添銀液。翠竹秋粧任玉裝。　白露凝　慶滋

鳴きわたるかりの涙やおちつらん
　ものおもふ宿の秋のうへのつゆ（古今）

わがそでに露ぞおくなるあまの川
　くもの欄なみやこすらん（後撰）

霧

淺深猶暗千峯曉。濃淡雖分五里朝。　秋霧植紅樹　源相方

五里例―霧のたくる例、後漢書に張楷字公超、

孀閨枕冷吟レ風曉。孤館夢殘怨レ雨秋。　夜聞只聞蛬　堀河右大臣

かしがましのもせにすだく蟲のねに
　　われだにものをいはでこそおもへ

なけやなけ蓬がもとのひきがへる
　　すぎゆく秋はげにぞかなしき（後拾遺）　好忠

蓬が云々―後拾遺には「蓬が杣のきり〴〵す」とあり

鹿

秋山寂々葉零々。麋鹿鳴聲屢更聆。　菅家萬葉

憶レ嶺鹿歸二溪霧底一。卜レ林鳥入二夕陽端一。　嵯峨秋望　高相如

しかのねぞねざめの床にきこゆなる
　　をのの草ぶしつゆやおくらん（後拾遺）　家經

草ぶし―草のよしど

つゆむすぶ萩がした葉やさむからん

橋、字－雁行の形容

かすむゆふべに－異本「かすめるそらに」

徙倚－たちもとほる、楚辭「獨徙倚而彷徉」

絡緯－莎雞（キリギリス）

歸鴈

數重影底橋南絕。一片膚中字北飛。　歸雁浮青雲　藤有信

うす墨にかくたまづさと見ゆるかな　かすむゆふべに歸るかりがね（後拾遺）　津守國基

蟲

草間蟲響臨秋急。山裏蟬聲薄暮幽。　早秋山中作　王維

野煙秋深。任馬蹄而優遊。叢露日暮。尋蟲聲而徙倚。　和歌序　成國

絡絲響冷秋夢短。飲露聲幽晚思深。　後思蟬聲滿耳秋　保胤

吟急殘燈光正背。夢驚孤枕淚雖乾。　蟋蟀近床聲　以言

鄕信—故鄕よりの音信

若耶—後漢の鄭弘此溪に薪を採る

引櫓—雁の鳴く聲の形容、白居易の河亭晴望詩の句に「秋雁櫓聲來」

この葉ちる宿はきょわくことぞなき
しぐれする夜もしぐれせぬ夜も（後拾遺）　源頼實

鴈

江柳影寒新雨地。塞鴻聲急欲霜天。　贈江客　白

夢中鄕信驚秋鴈。窓下林聲帶夜蟬。　寓居　楊巨源

鴻聲斷續暮天遠。柳影蕭疎秋日寒。　作　順

若耶風北來賓響。沙漠日西逆旅聲。　暮天聞遠雁時　棟

驚弓斜避三更月。引櫓遙過萬里雲。　幾行寒雁多　村上御製

便混商風添雅韻。遙辭朔土入琴聲。　雁聲遠和琴時　綱

さよふかく旅のそらなるかりがねは
おのが羽かぜや夜寒なるらん（後拾遺）　伊勢大輔

紅葉—散りたる紅葉

而泣。琴之感已未。　豪士賦序 文選 陸士衡

征馬鳴レ珂。秋踏二仙家之雪一。宿禽歛レ翅。夜栖二一枝之風一。　落葉賦 齊名

寒猿抱レ木唯携レ月。暮鳥歸レ林不レ宿レ紅。　葉下風枝疎 順

潭色變來秋月後。浪文燒盡暮煙中。　落葉泛寒流 同

瑠璃色變難レ籠レ月。纐纈花寒被レ織レ風。　落葉水初紅 英明

莓苔變レ綠林間露。麋鹿踏レ紅洞裏秋。　山深落葉多 長國

䃜澗嵐飄山未レ曙。空階雨脆月初傾。　夜深聞落葉 藤有信

こがらしのおとに時雨をきゝわかで
もみぢに濡るゝたもととぞみる　（新古今）　後中書王

山ふかみおちてつもれるもみぢ葉の
かわけるうへに時雨ふるなり　（詞花）　嘉言

紅葉又紅葉。蓮峯之嵐淺深。蘆花又蘆花。斜岸之雪遠近。　和歌序　源道濟

紅林定有二重青日一。素髪應レ無二更綠春一。　霜葉滿林紅　菅三品

紅葉嵐深窓暗雨。蒼花日暮鬢寒霜。　法音寺言志　匡衡

山雲秋後隔レ霜觸。野客朝來穿レ錦斟。　落葉埋泉石　後三條院

いかなればおなじ時雨にもみぢする
　　はゝその森のうすくこからん（後拾遺）　堀川右大臣

いづくにか駒をとゞめんもみぢ葉の
　　いろなるものぞこゝろなりける（家集）　長能

落葉

落葉俟二微風一以隕。風之力蓋寡。孟嘗遭二雍門一

素髪—白髪

うすくこからん—或は薄く或は濃きならん

瑠門—瑠門子周客を以て孟嘗君に見えし故事說苑に出づ

けなる—なは一層もろき

南内、落葉—原詩一に「南苑、宮墟」に作る

露よりけなるあさがほのはな（新古今）　好忠

ありとてもたのむべきかは世の中を
しらするものはあさがほのはな（後拾遺）　泉式部

前栽

西宮南内多秋草。落葉満階紅不掃。　長恨歌　白

子月齊名傳早艶。南風栽織領新粧。　秋化先秋開　後中書王

栄枯大底任園露。早晩由来属野煙。　秋化次第開　一條院

みどりなるひとつ草とぞ春は見し
あきはいろいろの花にぞありける（古今）　忠岑

紅葉

もとあら一本の
まばらなる意

もとあらの萩やしをれしぬらん（家集）　長能

蘭

波匂遠覺吹二秋水一。雨染高和動二暮雲一。　蘭氣入輕風　管三品

魏宮名顯三臺月。燕夢子傳萬代風。　蘭以香爲貴　以言

爲レ深爲レ淺風聲暗。何紫何紅露影秋。　夜蘭不辨色　同

やどりせし人のかたみにふぢばかま
わすられがたき香ににほひつゝ（古今）　貫之

槿

蘿薫殘槿抽レ紅濕。池馥早荷與レ玉飄。　秋露草花香　保胤

おきて見んと思ひしほどにかれにけり　一

比方—たくらぶべきもの

なべて—並べて

一叢百朶入秋發。黄色花中無比方。　詠庭前女郎花　在列

天生花麗粧還冷。地與英靈色方黄。　翫女郎花　以言

ひぐらしに見れどもあかず女郎花
野邊にやこよひたびねしなまし（拾遺）　長能

をみなへしかげをうつせば心なき
水もいろなるものにぞありける（後拾遺）　堀川右大臣

萩

一秋有藥號芽花。麝子鳴時此草奢。　菅家萬葉

秋風はすゞしくなりぬこまなべて
いざ野に行かんはぎのはな見に（新拾、萬葉）　人丸

ぬれ／＼もあけばまづみん宮城野の

九月盡

一年云暮。窮秋纔留於半日之間。百卉盡零。殘菊猶開於繁霜之後。　題殘菊　紀家

那堪漸々鐘聲暮。挑盡寒燈夜半花。　九月盡　同

路非山水誰堪趣。跡任乾坤豈得尋。　秋暮欲何歸　後朱雀院

みやまよりおちくる水のいろ見てぞ
　秋はかぎりとおもひしりぬる（古今）　興風

をしめどもたちもとまらぬ物ゆゑに
　たゆけにまねく花すゝきかな（拾遺）　好忠

女郎花

をしめども—異本「招くとも」
たゆけにまねく—異本「あはれかたよる」

東籬云々—陶淵明の菊を愛せしこと
韋賢—漢宣帝の時丞相たり
姑射—藐姑射の山、仙人の居る所
姮娥—姮或は嫦と書く、月の異名也

不レ謂二之殘菊一

菊是孤叢臣。數代戴レ霜。共立二玉欄前一。　秋色殘菊　菅

東籬方遇南薰主。最弟被レ知二季曆兒一。　殘菊應製　清愼公

范蠡長男凡草老。韋賢少子一叢殘。　菊是花聖賢　以言

粧誤崐山金骨相。葩迷姑射雪膚名。　菊爲花最弟　佐國

姮娥夜々應レ偸レ艶。方士年々欲レ採レ粧。　菊開似遇仙　藤敦宗

道士試嘗寒岸露。仙雞誤舐曉籬霜。　菊花爲上藥　藤行家

同　有信

あさまだき八重さく菊のこゝのへに
見ゆるはしものおけるなりけり（後拾遺）　長房卿

めもかれず見つゝくらさん白菊の
はなよりのちの花しなければ（同）　伊勢大輔

茱萸—ぐみ、九月九日の節物の一

花も云々—菊花は齢を延べ老を若ゆといへど其甲斐もなく老いはてたる哉

九日 附菊

蟋蟀聲寒初過レ雨。茱萸色淺未レ經レ霜。　九日　白

芬芳染レ脣。然後知二中腸之已飽一。氣力補レ性。　觀群臣賜菊花　紀家

然後期二天年之難一レ終。

賜在二帝恩一含二湛露一。出從二天意一混二流霞一。　同　同

便採二孤叢秋露稱一。非レ祖二五柳曉雲孫一。　同　菅家

ながつきのこゝのかごとにつむ菊の

花もかひなくおいにけるかな（拾遺）　躬恒

菊

九月廿七日孰不レ謂二之盡秋一。孤叢兩三莖。孰

峴亭碑―峴は山名也、晋の羊祜の蹟にある墮涙碑のこと
爐峯云々―白樂天の草堂を構へしをいふ

陶君門舊秋霜鏁。陳后閨疎曉雪深。　月前夜方閑　明衡

鄕國眇茫孤戍曉。生涯零落五湖秋。　月明羇旅中　江佐國

鄕淚灑レ霜孤館曉。客夢驚レ雪戍樓秋。　同　藤行家

蓋嶺絃聲調二白雪一。峴亭碑字書二秋霜一。　夜月照泉石　藤季綱

楚臺風度吹二秋雪一。魏闕天明倒二曉霜一。　明月照衣砧　江隆兼

銀漢無レ雲蘿洞曉。爐峯有レ雪草堂秋。　山中夜月明　時綱

ひとりゐて月をながむるあきの夜は
なにごとをかはおもひのこさん（千載）　後中書王

眺むるにもの思ふことのなぐさむは
月はうきよのほかよりや行く（拾遺）　大貳高遠

すむ人もなきやまざとの秋の夜は
月のひかりもさびしかりけり（後拾遺）　藤原範永

わきてこよひのめづらしきかな（後撰）　好忠

月

親故適回レ駕。妻奴未レ出レ關。鳳凰池上月。送レ我過二商山一。　白

老住二香山一初到夜。秋逢二白月一正圓時。　同

從レ今便是家山月。試問二清光一知不レ知。　初入香山院對月　同

吳人棹而高歌。江波水潔。荇馬斷而欲レ惑。野草霜深。　望月遠情多　齊名

商人棹レ雪歌二漁浦一。老將踏レ霜立二戍樓一。　同　同

遊子不レ歸鄉國夢。明妃有レ淚塞垣秋。　同　源孝道

砧添二鄉淚一孤鶯外。鶴照二皐聲一一擧中。　山川千里月　輔昭

鳳凰池　中書省をさしていふ

荇馬―荇は草を茹ふこと

明妃―漢の王昭君をいふ

花陽洞—齊の陶弘景致仕して茅山に入り華陽隱居と稱し三層樓を造りて栖む

化氷壺之心—清くすみ渡りたるをいふ

玄黄—天地

三十六旬—三百六十日、一年

十五夜　附月

花陽洞裏秋壇上。今夜清光此處多。　八月十五夜　白

長安十二街。皆踏萬頃之霜。高宴千萬處。各得一家之月。　八月十五夜映池秋月明　菅相公

三十五名之星躔。遙浮於水鏡之面。五萬四千之土壤。自化氷壺之心。　八月十五夜清光千里同　都在中

螢火幽光消不見。鷺絲寒色混難尋。　同池邊翫月　橘正通

晝夜和同迷漏刻。乾坤洞朗照玄黄。　同翫月　後中書王

南門曉到東西路。八月秋深十五天。　同　以言

琴詩酒客千家思。三十六旬一夜情。　八月十五夜　四條大納言

いつとても月みぬあきはなきものを

向子期—名は秀、晉人

壯齒—齒は齡の意、さかんなりしよはひ

上陽宮—白樂天上陽白髮人の詩の句に「秋夜長夜長無レ睡天不レ明」にとる

ことならぬ—異本「かはらぬ」

對月遠情多　齊名

梁鷄栖而遲唱。笛吹ニ向子期之隣一。漢月臨而難レ傾。砧怨ニ楚屈原之舍一。

秋夜　後中書王

暗風飄レ幌影。殘溜滴レ階聲。壯齒今何在。終宵動ニ故情一。

同

宮漏高低風北送。隣砧緩急月西傾。

秋夜偶作　同

枕欹隣笛清商曲。窓對前林暗淡紅。

漫々秋夜長　國

萬事皆非燈下涙。一生半暮月前情。

秋深知夜長　藤有信

上陽宮裏天難レ曙。散騎省頭夢易レ驚、

能宣

草のうへにおきこそあかせ秋の夜の
露にことならぬ我身とおもへば

躬恒

ながしとも思ひぞはてぬむかしより
あふ人からのあきの夜なれば（古今）

なべに―によりて

露滴二暗叢一螢火濕。風吹二曲岸一鷺絲寒。　林池秋興　以言

あきの野に機おるむしのあるなべに
　からにしきとも見ゆる野べかな（拾遺）　貫之

秋晩

入レ樓早月中秋色。遶レ郭寒潮半夜聲。　方干

ひとり居てながむるやどの荻の葉に
　かぜこそわたれ秋のゆふぐれ（詞花）　道濟

秋夜

早蛬鳴復歇。殘燈消又明。隔レ窓知二夜雨一。芭蕉先有レ聲。　秋夜　白

張翰―晉人、下文は其鱸膾を思ひて官を辭し歸鄕せし有名なる故事にとる

雲夢云々―雲夢は大澤の名、前漢司馬相如傳に「呑若雲夢者八九」といへるに出づ

かへさでぬるやこよひなるらん（後拾遺）　堀河右大臣

いたづらにすぐる月日をたなばたの
ぬるよの數とおもはましかば（拾遺）　惠慶

秋興

秋風一箸鱸魚膾。張翰搖ㇾ頭喚不ㇾ歸。　白

山水秋深。若二雲夢一者有二八九一。煙嵐日暮。記二風物一
以難二一二一。　大井川和歌序　江匡衡

涼風寫得巖松韻。暮雨偸將瀧水聲。　賦秋思　野美材

荒院珠簾閑卷色。遠營風旆重飜聲。　秋涼風露冷　以言

踏ㇾ露路迷紅葉色。迎ㇾ風衣染紫蘭香。　嵯峨秋望　爲時

梢鴈陣穿二秋霧一。山脚人家帶二夕陽一。　同　同

懷レ私ーひそかに胸の中にて念ずるおもひ
隨分ーおふな〳〵とも訓ず、人々それ相應に

あふはあふかはー逢ふ位が逢ふといふ内に數へられんや

七夕

今宵織女渡天河。朧月微雲一似羅。　　白

宮人懷私之願。似面不同。墨客乞巧之情。
隨分應異。　　代牛女惜曉更　野美材

爭教七夕縮爲六。更課秋風計會新。　　七月六日女言志　齊名

泣計露珠叢底裛。愁望月鏡嶺西含。　　牛女惜夜闌　以言

雲霞帳巻風消息。烏鵲橋連浪往來。　　乞斷雁風　藤相公

似告前行臨浪夕。欲迷歸路隱雲秋。　　月爲渡河橋　菅忠眞

契りけんこゝろぞつらきたなばたの
年にひとたびあふはあふかは（古今）　　女則

たなばたのくもの衣をひきかさね

第三伏—立秋後の初庚、即ち三伏中の末伏をいふ

うらがなし—心細し、葛の葉は風に吹かれてうらがへるものなれば、うらがへす、うらがなし、うらみなどいひ習へり

あきたつ日とは宜もいひけり（後撰）　讀人不知

川風のすゞしくもあるかうち寄する
なみとともにや秋はたつらん（古今）　貫之

早秋

秋來六日未二全一秋。白露如レ珠月似レ鉤。　七月六日　菅家

白氏書中收二夏部一。誰家集裏闕二秋詩一。　早秋　田忠臣

初一葉風穿レ骨入。第三伏汗謝レ身分。　早秋詩　藤輔昭

あさぢはらたままく葛のうらかぜに
うらがなしかる秋はきにけり（後拾遺）　惠慶法師

なつ衣まだひとへなるうたゝねに
こゝろして吹けあきのはつかぜ（拾遺）　安法法師

うすくや―蟬羽の薄きより思ふ人の心の薄情にならんと悲む意によそへたる也

せみの聲きけばかなしきなつごろも
うすくや人のならんとおもへば（古今）　友則

つれもなきなつの草葉におくつゆを
いのちとたのむ蟬のはかなさ（後撰）　讀人不知

秋

立秋

涼飆忽扇物先哀。應是爲秋氣早來。　菅家萬葉

壁蛬家々音始亂。叢蘭處々榮初開。　同

夜深月桂孤輪影。秋淺風槐一葉聲。　立秋作　都在中

風槐―風にそよぐゑんじゆ

にはかにも風のすゞしくなりぬるか

みさは—異本「おもひ」

嵆郎—後漢の嵆康

蘭蕙香邊飄不ㇾ濕。　蒹葭色裏亂猶餘。　螢飛白露間　菅三品

蒹葭渚誤ニ珠還ㇾ浦。　竹葦村驚ニ燈映ㇾ虛。　同　直幹

いさり火のまがへる川と見えつるは
　　なみのよるてふほたるなりけり（續古今）　惟盛

おともせでみさはにもゆる螢こそ
　　鳴くむしよりもあはれなりけり（後拾遺）　重之

蟬

嵆郎死後罷ニ琴聲一。　可ㇾ憐松蟬雨混幷。　菅家萬葉

岸柳綠前驚欲ㇾ認。　宮槐風底失何尋。　初蟬纔一聲　二條院

響絕紅霞殘槿下。　吟空綠重老槐間。　雨降蟬聲歇　保胤

秋去秋來聞不ㇾ改。　今年聲似ニ去年聲一。　蟬　齊名

郭公

四五月交雲外語。二三更後雨中音。　四條大納言

深山いでてよはにや來つるほとゝぎす
　あかつきかけて聲のきこゆる（拾遺）　兼盛

ねぬ夜こそかずつもりぬれほとゝぎす
　聞くほどもなきひとこゑにより（後拾遺）　小辨

みやこびと寢で待つらめやほとゝぎす
　いまぞ山べをなきてすぐなる（拾遺）　藤原道綱

螢

翠箔燈籠秋耿々。碧雲星透曉炯々。　晴螢穿竹見　一條院

一株金—橘の實は黄色にて古來こがねと形容し來れり

波臣—魚

題橘樹　齊名

盛夏花留三伏雪。嚴冬子熟一株金。

花山院

宿ちかくはなたちばなはほり植ゑじ
むかしをこふるつまとなりけり（詞花）

相摸

さつきやみ空なつかしくにほふかな
はなたちばなに風や吹くらん（後拾遺）

蓮

荷香漸歇　齊名

露深半染眠レ沙鶴。風冷纔薫戲レ藻魚。

秋水落芙蕖　中書王

落レ流濃色秋風脆。打レ岸寒聲晩浪香。

蓮浦落紅衣　保胤

淵客紆レ緋應二自輕一。波臣衣レ錦欲二何歸一。

六條宮

いかにしてはちすのなかに宿るらん
よをうきはにはすむ人もなし

ゆふされば—異本「ゆふぐれは」

金商—五音の一也、秋の氣を云ふ

かたへ—一方

夏山のならの葉そよぐゆふされば
ことしも秋のこゝちこそすれ（後拾遺）　源頼綱

晩夏（ばんか）

日催ニ鳥羽ニ炎暉去。風報ニ金商ニ氣味幽。　但馬頓昇進　以言

おほあらきの森の下草しげりあひて
ふかくも夏のなりにけるかな（拾遺）　忠岑

なつと秋とゆきかふ空のかよひぢは
かたへすゞしき風や吹くらん（古今）　躬恒

花橘（はなたちばな）

珠顆形容隨レ日長。瓊漿氣味得レ霜成。　貫橘書懷　白

おなじよどのに―異本「みつのみまきに」

霜鬢―しらがの鬢の毛

おなじよどのにひけるなりけり（榮華）　輔尹

納涼

綠竹掛レ衣涼處憩。清風展レ簟困時眠。　池上即事　白

熱惱漸知隨レ念盡。清涼常願二與レ人同一。　避暑　同

桂月清明。夏迎二一背之秋一。松風蕭颯。晴聞二百尺之雨一。　和歌序　明衡

君蓄二風情一炎處冷。我垂二霜鬢一夏中秋。　納涼　善相公

銜レ秋水上千巖冷。凝レ日林間六月寒。　避暑　橘直幹

扇忘嶺鶴歸レ嵐翅。簟滑隣鷄報レ月音。　曉夕多清涼　江時棟

杣川のいかだのとこのうきまくら
なつはすゞしきふしどなりけり（詞花）　好忠

ね—根、音

なつの夜は浦島の子がはこなれや
　はかなくあけてくやしかるらん（拾遺）　中務

なつの夜はまだ宵ながらあけぬるを
　くものいづこに月やどるらん（古今）　深養父

待つほどに夏の夜いたくふけぬれば
　をしみもあへず山のはのつき（詞花）　道濟

端午

五月菖蒲素得レ名。毎レ逢二五日一已成レ靈。　菅家萬葉

あしびきの山ほとゝぎすけふとてや
　あやめの草のねにたてて鳴く（拾遺）　延喜御製

くらぶべきこまもあやめの草もみな

けふは待つかな―異本「けふよりぞ待つ」

漏―漏刻の水のしたゝり

やまほとゝぎすけふは待つかな（後拾遺）　泉式部

首夏

長恨春歸無ニ覓處ー。不レ知轉入ニ此中ー來。　大林寺桃花詩　白

林蘿深處趣ニ淸涼ー。移レ榻開レ襟夏日長。　早夏閑詠　齊名

さかきとる卯月になればかみやまのならのはがしはもとつはもなし（後拾遺　好忠

夏夜

日長夜短懶ニ晨興ー。夏漏遲明聽ニ郭公ー。　菅家萬葉

月沈ニ蘋藻ー銀鉤影。風觸ニ松杉ー玉軫聲。　池樹消夏　田忠臣

水煙半濕綺羅冷。山月初昇樓閣明。　夏夜池臺望　儀同三司

銜鐙―くつばみとあぶみ
咲殺―咲は笑、わらふ
伶倫―樂師

漢帝雲膚凝岸額。　齊桓衣色洗波聲。　　紫藤霞染池　源亞將

むらさきのくもとぞ見ゆる藤のはな
　いかなる宿のしるしなるらん（拾遺）　　四條大納言

藤なみのかゝれるきしの松は老いて
　わかむらさきにいかで咲きけん（家集）　　順

夏

更衣

獨騎善馬銜鐙穩。初著單衣支體輕。　　早春朝歸　白

絺衣新製幾千襲。　咲殺伶倫竹與絲。　　菅家萬葉

櫻いろにそめしころもをぬぎかへて

病雀—楊寶が黄雀を救ひし故事をさす

紫茸—紫藤の英也、論語の「子曰惡二紫之奪一レ朱也」の語を引く

款冬

養得昔令レ扶二病雀一。開來本是待二蛙鳴一。　保胤

八重濃艶人相貴。一片踈葩世所レ輕。　白

はるがすみゐでの河なみたちかへり
見てこそ行かめやまぶきのはな（後撰）　順

さは水にかはづ鳴くなり山吹の
うつろふかげや底に見ゆらん（拾遺）

藤

夜深不レ語中庭立。月照二藤花一影上レ階。　宿楊家　白

紫茸偏奪二朱衣色一。應三是花心忘二徹率一。　紫藤花下作　順

こゝろとちれる—我心から散らんとして散るにあらず風に吹き散らさると也

橋上落花多　郎三親王具平

洛水流間横宿雪。天津月下渡殘春。

わがやどの櫻なれども散るときは
こゝろにえこそまかせざりけれ　（詞花）　花山院御製

吹くかぜぞおもへばつらきさくら花
こゝろとちれる春しなければ　（後拾遺）　大貳三位

躑躅

山石榴花白

風嫋舞腰香不盡。露消粧瞼涙新乾。

紅躑躅花飛失艶。白髭鬚容見多愁。　善相公

岩つゝじ折りもてぞ見るせこがきる
くれなゐぞめのきぬに似たれば　（後拾遺）　泉式部

はる來てぞひともとひくるやま里は
はなこそやどのあるじなりけれ（拾遺）　四條大納言

さくら花あかぬあまりにおもふかな
散らずば人やをしまざらまし　堀川右大臣

落花（らくくわ）

遮二沙風一而婉轉廻雪之袖暗薫。過二巌泉一而婆娑。落霞之琴遠和。　渡水落花舞　匡衡

逸馬斷二晨風之中一。蹄踏二輕質之雪一。　別路花飛白　以言

征衣過二夕陽之下一。袖織二回文之霞一。　渡水落花舞　儀同三司

雪膚路濕覺裳重。風力橋高錦繡明。

胡關春暮雖レ留レ雪。燕寢月荒欲レ妬レ春。　落花遠近飛　明衡

廻雪之袖—舞の巧妙なる形容

織錦云々—晉の竇滔の妻蘇氏夫の秦州の刺史となり流沙に徙されたる時之を思ひて錦を織り回文旋圖の詩を作りて贈りし故事にとる

刀—一に「刀」に作る

專房女―楊貴妃

拾謁―拜謁を求むること

漢相―蕭何

曹王―陳思王曹植

他生―來生

兮猶眠曉夢芬二芳書帙之下一。

遠臨十二因緣水。多勝三千世界花。

匂同唐帝專房女。粧咲秦醫一里兒。

門窗拾謁宜レ期レ夏。閨婦孤夢還妬レ春。

望疲雲嶺千條雪。跡入煙村一道霞。

落蘂灑レ衣春拂レ雪。濃粧泛レ酒曉掛レ霞。

漢相閤閑空鎖レ雪。曹王園舊幾藩レ春。

枝留二彩鳳一桃源月。浪織二藻龍一柳岸風。

六十餘回看未レ飽。他生定作二愛レ花人一。

粧繁鳥啼家園露。香亂馬嘶隴塞風。

おさみどり野べの霞はつゝめども

こぼれてにほふ花ざくらかな（菅家萬葉）

入夜花如雪　齊名

紅梅下作　江相公

花木被知人　以言

花時不在家　同

暮春尋花　四條大納言

紅梅花下作　菅之義

東西花色雨　明衡

花野皆錦繡　時棟

遲年未飽花　佐國

遠近皆花滿　源成宗

娃―美人、此句垂柳を形容す

容與―ゆるやかにためらふ

彭宅門閑春縁鎖。武昌樓暗暮煙深。　柳影繁初合　保胤

春娃眠足鶯衾重。老將腰疲鳳劍垂。　弱柳不勝鶯　以言

曉眼不レ眠非レ夢レ蝶。春腰無レ力欲レ栖レ鴉。　詠柳　齊名

みちのべの朽木のやなぎはる來れば
あはれむかしとしのばれぞする（新古今）　菅家

ふるさとのみかきの柳はるぐ\と
たがそめかけしあさみどりぞも（詞花）　道濟

あさみどりそめてみだるゝ青柳の
いとをも春のかぜやとくらん（新勅撰）　是則

花

王船纔分未レ出。春棹容二與沙涯之間一。絲帷垂

ことゝ〃に—白紅と別々に

五柳—陶淵明のこと

洞深疑是仙方雪。水近應薰海岸香。　同　菅淳茂

不唯我愛人來愛。一片紅粧直萬金。　英明

くれなゐにいろをばかへて梅のはな
かぞことゝ〃ににほはざりける（後撰）　貫之

をられけりくれなゐにほふ梅の花
けさしろたへに雪はふれゝど（新古今）　宇治太政大臣

柳

不知細葉誰裁出。二月春風是剪刀。　垂柳　元稹

居席暮深。五柳門煙裊々。紅衣曉薄。剛桑驛月蒼々。　辨春秋　以言

白雪花繁空撲地。綠絲枝弱不勝鶯。　楊柳　白

絳雪—赤き雪

しろたへのいもがころもに梅のはな
　　いろをも香をもわきぞかねつる（拾遺）　深養父

わがやどの梅のたちえや見えつらん
　　おもひのほかに君がきませる（同）　兼盛

梅が香をよはのあらしの吹きためて
　　わがねやの戸のおくる待ちけり　嘉言

紅梅

翦丹霞而爲葩。便是春風之裁出。凝絳雪而作蘂。豈非暖雨之染成。　詠前庭紅梅　篤茂

葩皆三重。不似流俗之樹。色自再入。無待染人之功。　同　順

やまのみどりをなべてそむらん（新古今）　　伊勢

はるさめの花のえだよりながれこば
なほこそ濡れめかもやうつると（後撰）　　敏行

梅（附紅梅）

歌聲怨處微々落。酒氣薰時艷々開。　　梅花　白

芬馥入レ簾。夜添二薰籠之氣一。艷色通レ砌。影泛二春流之浪一。　　翫前庭梅　藤篤茂

瑠璃扉薄雖二相邀一。翡翠簾疎亦不レ妨。　　梅近香入窓　延喜御製

鶯兒舊曲移二殘溜一。巫女別粧染二曉風一。　　林香雨落梅　天曆御製

半染二秋毫一浮二硯水一。斜薰二春砌一入二珠簾一。　　梅近香入窓　順

南薰風與二南枝色一。計會一時不レ辨レ香。　　梅花琴上飛　源時綱

翡翠簾－薄くして美しき簾
鶯兒－韋蘇州の詩に「鶯兒弄而曲未闋」と見ゆ、鶯の聲をいふなるべし
巫女－楚の襄王の巫山に會せし女をいふなるべし

信樂—近江
とやまに云々—異本「とやまの霞春めきにけり」
娃—美人
紅女—紅は功に同じ、織紙を業とする女
墨子之涙—墨子練糸を見て哭したる故事

かすみぞ春のしるしなりける（續後拾遺）　中務

きのふかもあられふりしは信樂の
　とやまにかすみたなびきにけり（詞花）　惟成

雨

花疑漢女啼粧涙。水似吳娃咲弄箏。　訪山居過山　傳溫

斜脚繰出。紅女之手難レ施二其功一。輕質染來。墨子
　之涙尙悲二其變一。　密雨如散絲　以言

柳眼剪レ破春黛綠。桃顏流レ汗宿粧紅。　春雨洗花顏　紀家

寫得楊妃湯後態。模成任氏汗來脣。　同　英明

瓦檐時誤鴛鴦浴。華樹還驚二女妓啼一。　對雨言志　高五常

水のおもにあやおりみだる春雨や

陶染—すゑたり染めたりして人工を施せる如しとならん

倉椅の山—大和

うぐひすさそふしるべにはやる（同）　友則

こほりだにとまらぬ春のたにかぜに
まだうちとけぬうぐひすのこゑ（拾遺）　順

霞

霞添春氣色　齊名

山容水態之區分。自承二陶染一。城柳園梅之異種、暗添二光輝一。

同

火是帶レ煙籠レ柳後。紅應レ交レ白鎖レ梅辰。

紅霞間綠樹　勘解由相公

色映新籠堤柳黛。光燒半祕嶺松煙。

朝忠

倉椅のやまのかひよりはるがすみ
としをつみてやたちわたるらん（家集）

よしのやま雪にはあともたえにしを

遷レ喬―詩經に「伐木丁々、鳥鳴嚶々、出レ自二幽谷一遷二于喬木一」

鶯

黄鸝巷口鶯欲レ語。烏鵲橋頭氷盡銷。　　正月三日閑行　白

遷レ喬何日。難レ泥二寒谷之蹊一。仰レ榮今朝。漸動二春花之思一。　　樹是鶯朋友　以言

粉閣夢驚傳二好哢一。紅窓燈盡送二嬌音一。　　宮鶯囀曉光　村上御製

露濃漫語遠花底。月落高歌御柳陰。　　同　同

金殿夢驚傳二好語一。玉樓鐘動奏二清音一。　　同　藤後生

唱衰首戴二殘花雪一。韻老翅歸二舊谷雲一。　　林鶯歌曲老　以言

雪のうちに春はきにけりうぐひすの
　　こほれる涙いまやとくらん（古今）　　二條皇后宮

花のかを風のたよりにたぐへてぞ

春—異本「もの」
いとかくけふを—異本「今日をわりなく」
添三三十行之暦日—閏にて一ヶ月三十日の増加せるをいふ

をしめども春のかぎりのけふの日の
　ゆふぐれにさへなりにけるかな（後撰）　躬恒

花だにもちらでわかるゝ春ならば
　いとかくけふを惜ましやは（家集）　朝忠中納言

閏三月

案頭則添二三十行之暦日一。窓前亦望二千萬里之春風一。　今春又有春　順

風暖嵩煙重巻レ翠。月明洛水再沈レ珠。　同

残陽得レ閏廿二重聴一。暦日添レ行許二屢禁一。　後三月花鳥有餘香　齊名

つねよりものどけかりつる春なれど
　けふの暮るゝはあかずもあるかな（拾遺）　躬恒

ふかくも春のなりにけるかな（詞花）　能宣

ぬれつゝぞしひて折りつる年のうちに
春はいくかもあらじとおもへば（古今）　業平

三月盡

四十六時三月盡。送レ春爭得レ不ニ慇懃一。　春去　白
林間縱有ニ殘花在一。留ニ到明朝一不ニ是春一。　三月晦　李方
人只送レ春吾送レ老。鬢華頭鶴欲ニ何歸一。　送殘春　菅三品
花落鶯啼携未レ別。登レ山臨レ水送將レ歸。　三月盡　中書王
花鳥縱雖レ期ニ向後一。流年豈返老來身。　實範

はな見つゝ惜むかひなくけふ暮れて
ほかの春とやあすはなりなん　貫之

妓樹一。

水寫二右軍三日會一。花薰二東閣萬年盃一。

桃始花　紀家

花筵晉日蘭亭飮。羽爵周年曲洛波。

因流泛酒盃　匡衡

周旦古風傳二曉水一。魏年昔浪寄二春苔一。

屛風三月三日　爲政

から人のふねをうかべてあそぶてふけふぞわがせこ花かづらせよ（新古今）

羽爵泛流來　江都督

家持

晉日―永和九年王羲之禊事を修したるをいふ蘭亭―會稽山陰にあり

暮春

滑水橋邊春已度。灞陵原上雨初晴。

惠文太子

霞消李老青牛路。風去茅君白鶴峯。

閑山作欲辭　以言

伴レ霞雖レ盡餘花艶。謌レ雪未レ歸好鳥聲。

花鳥與作殘　明衡

ちる花にせきとめらるゝやまがはの

李老青牛路―李老は老子をいふ、高士傳に「老子爲二周柱下史一、後周德衰乃乘二青牛車一去入二大秦一過二西關一」云々

　　おいせぬものはわかななりけり（拾遺）　圓融院御製

きみがため春の野にいでて若菜つむ
　　わがころもでに雪はふりつゝ（古今）　仁和御製

しらゆきのまだふる年のかすが野は
　　いざうちはらひ若菜つみてん（後拾遺）　能宣

三月三日　附桃

因流泛酒盃　匡衡

昔成王之叔父周公旦。卜洛陽而濫觴。今聖主之親舅左丞相。亦宅洛陽而宴飲。醉鄕國之俗。伴鄭泉而得水路。酒德頌之文。因巴字而添風情。

同

濃輝可愛。掩絳雪於仙家。嬋娟無雙。嘲紅粉於

濫觴ーさかづきをうかべたり、これ即ち曲水宴の起源といふ

巴字ー曲水宴をいふ

はつね—初音と初子とを掛く

千世を云々—思ふ存分に千世を引きたり

鹽梅鼎足臣—君を輔くる賢良なる三公のこと

嘯二野煙之春光一。各吟二一句一。酌二山霞之晩色一。
忽酔二數盃一。　　春日野遊　在列

松のうへに鳴くうぐひすの聲をこそ
　はつねの日とはいふべかりけれ（拾遺）　　能宣

姫小松おほかる野べにねの日して
　千世をこゝろにまかせつるかな（玉葉）　　源道濟

めづらしき千世の子日のためしには
　まづけふをこそひくべかりけれ（拾遺）　　信賢中將

若菜

若尋二野外和羹主一。便是鹽梅鼎足臣。　　子日屏風　義忠

かすが野におほくの年はつみつれど

牛漢—銀河

象魏—門闕也

まもるに云々—見守り居たりとて散らずに居るべき花にはあらねども

こゝろあらん人にみせばや津の國の
　なにはあたりの春のけしきを（後拾遺）　能因

ゆきとまるところぞ春はなかりける
　花にこゝろのあかぬかぎりは（同）　藤爲信

春夜

不レ明不レ暗朧々月。非レ暖非レ寒漫々風。　嘉陵夜月　白

春夜欲レ明。望二牛漢之西轉一。夏日告レ朔。指二象魏一而北レ轅。　古廟春正暮　以言

春の夜はいこそねられねおきゐつゝ
　まもるにとまる花ならねども（家集）　泉式部

子日

あふさかの關をやはるのこえつらん

音羽の山のけさはかすめる（同） 橋俊綱

春興

綠油剪レ葉蒲新長。紅蠟黏レ枝杏欲レ開。 遊城東 白

秦城樓閣鶯花裏。漢主山河錦繡中。 清明日 杜甫

銅街陌柳條々翠。金谷園花片々燃。 遊宴洛中 張野人

居無二常座一。掃レ苔而暫代レ筵。至無二定家一。尋レ花而不レ問レ主。 感化皆好 紀齊名

中殿曙香從レ吹染。上陽春色被レ煙陶。 陽作詞 都良香

萬事老來皆不レ敏。唯因二花鳥一作二聰明一。 花鳥 田忠臣

衰鬢山陰多歳雪。浮榮花下一時春。 餘作述懷 知房

銅街—洛陽に銅駝街あり

金谷園—晉崇季倫の美女を聚め晉遊を事とせし別館

作聰明—春來れるを明かに知覺すとなるべし

文漪―あやなるさゞなみ

諳―自然にそれと知れる

みしま江―攝津

早春

林外雪消山色靜。窓前春淺竹聲寒。　章振

及二之於深水一則文漪動而紫鱗騰。著二之於幽溪一則彩雲暖而黃鶯出。　陽春詞　部眞香

煙生二村巷一遙知レ柳。雪積二墻陰一暗辨レ梅。　巡檢山野　物部安興

不レ醉爭辭溫樹下。建春門外雪埋レ春。　元日賦宴　善相公

巖松雪宿二諳山北一。岸草煙濃識二水東一。　早春　橘在列

みしま江につのぐみわたる葦のねの
ひとよのほどにはるめきにけり（後拾遺）　好忠

みよし野は春のけしきに霞めども
むすぼほれたるうぐひすのこゑ（同）　紫式部

高卑—高き山も低き山も

新撰朗詠集　巻上

春

立春

淺深何水氷猶結。高卑無山雪不消。　立春　菅

浮雲自後寒應暖。壯日如今去不歸。　同　同

年のうちに春たつことをかすが野の
わかなさへにも知りにけるかな（家集）　賀年作　貫之

春無跡至爭尋得。老趁身來亦避難。　立春作　藤篤茂

春がすみたてるを見ればあらたまの
としは山よりこゆるなりけり（拾遺）　紀文幹

燕丹云々―燕の太子丹秦に客たり、後國に歸されし故事

毛寶―晉の人也、龜に助けらる

王弘使―陶淵明に酒を送りしこと

晩花―菊のこと

かきわけて―一本「ふみわけて」

闇夜猶行明月地。人間却踏白雲天。　白賦　謝觀

秦皇驚歎。燕丹之去日烏頭。漢帝傷嗟。蘇武之來時鶴髮。　同　同

銀河澄朗素秋天。又見林園白露圓。　白髮句　順

毛寶龜歸寒浪底。王弘使立晩花前。　胸句　同

蘆洲月色隨潮滿。葱嶺雲膚與雪連。　腰句　同

霜鶴沙鷗皆可愛。唯嫌年鬢漸皤然。　末句　同

しら〳〵しらけたる夜の月かけに
ゆきかきわけて花のはな折る　讀人しらず

猶逢五衰之日。　　願文　後江相公

朝有紅顔誇世路。暮爲白骨朽郊原。　　中陰願文　義孝少將

雖觀秋月波中影。未遁春花夢裡名。　　無常　後江相公

世の中をなににたとへんあさぼらけ
　こぎゆく舟のあとのしらなみ（拾遺）　　滿誓法師

すゑの露もとのしづくや世のなかの
　おくれさきだつためしなるらん（新古今）　　眞僧正

手にむすぶ水にやどれる月かげの
　あるかなきかの世にもすむかな（拾遺）　　貫之

世の中はゆめかうつゝかうつゝとも
　ゆめとも見えずありてなければ

白

五衰—佛說に云ふ五つの衰相

春花夢裡名—莊子が夢に胡蝶となれる故事による

世の中を云々—萬葉には「世の中を何にたとへん朝びらきこぎいにし舟の跡なきがごと」

世の中は云々—或本は此歌を載せず

まされる―まさりてつらし

岸額―墜ちたる岸のかど

わが戀はゆくへもしらずはてもなし
逢ふをかぎりとおもふばかりぞ（古今）　躬恒

たのめつゝ來ぬ夜あまたになりぬれば
待たじといふぞ待つにまされる（拾遺）　人丸

いま來んといひしばかりにながつきの
有明の月をまち出づるかな（古今）　素性

無常

觀レ身岸額離レ根草。論レ命江頭不レ繫舟。　無常　羅維

年々歲々花相似。歲々年々人不レ同。　有レ所レ思　宋之問

蝸牛角上爭ニ何事一。石火光中寄ニ此身一。　對レ酒　白

生者必滅。釋尊未レ免ニ栴檀之烟一。樂盡哀來。天人

爲レ君薰ニ衣裳ー。君聞ニ蘭麝ー不ニ馨香ー。爲レ君事ニ容飾ー。君見ニ金翠ー無ニ顏色ー。

大行路借ニ夫婦ー以諷ニ君臣之不ニ終也　白

更闌夜靜。長門閭而不レ開。月冷風秋。團扇杳而共絕。

遊仙窟文　長文成

行宮見レ月傷レ心色。夜雨聞レ猿斷レ腸聲。

長恨歌　白

春風桃李花開日。秋露梧桐葉落時。

同　同

夕殿螢飛思悄然。秋燈挑盡未レ能レ眠。

同　同

南翔北嚮。難レ附ニ寒溫於秋雁ー。東出西流只寄ニ瞻望於曉月ー。

九條右丞相報ニ吳越王書ー　後江相公

聞得園中養ニ花艶ー。請君許折ニ一枝春ー。

[illegible]　紀齊名

寒閨獨臥無ニ夫壻ー。不レ妨蕭郎枉ニ馬蹄ー。

和ニ江侍郎來書ー　采女

貞女峽客唯月色。窈娘堤舊獨波聲。

和ニ源現村子餞居作ー　爲憲

長門―長門宮、漢の孝武帝陳皇后の居

寒溫―時候の挨拶を通ずる手紙

一枝春―妙齡の美人を譬ふ

蕭郎―梁武帝蕭衍の故事により侍中の事を云ふ

うれしさをむかしは袖につゝみけり
こよひはみにもあまりぬるかな（新勅撰）　讀人しらず

祝（いはひ）

嘉辰令月歡無極。萬歲千秋樂未央。　雜言詩　謝偃

長生殿裏春秋富。不老門前日月遲。　天子萬年　保胤

君が代はちよにやちよにさゞれ石の
いはほとなりて苔のむすまで（古今）　讀人しらず

よろづ世とみかさの山ぞよばふなる
あめが下こそたのしかるらし（拾遺）　仲算

戀（こひ）

君が代は—古今集には「わが君は」とあり

よろづ世と云々—漢武帝の嵩中嶽太室に登り萬歲の聲を聞き之を封じて奉祠し、命じて崇高邑といひし故事

かくばかり—一本「しばしだに」

雙鳳闕—宮殿の稱

吏部侍郎—式部大少輔の唐名

銀魚—銀魚袋、紫帶

綾鶴—綾の袍、鶴の文

睦—一に「睨」に作る

宮もわらやもはてしなければ（新古今）　蟬丸

かくばかりへがたく見ゆる世の中に
うらやましくもすめる月かな（拾遺）　藤原高光

慶賀

劍佩曉趨雙鳳闕。烟波夜宿一漁船。　夜宿二江浦一　白

錢塘去レ國三千里。一道風光任レ意看。　及第詩　章孝標

想得江南諸父老。因レ君鞭二撻子孫一多。　感二及第一　同

吏部侍郎職侍中。著レ緋初出二紫微宮一。　賛二在衡一　正通

銀魚腰底辭二春浪一。綾鶴衣間舞二曉風一。　同胸句　同

花月一窓交昔睦、雲泥萬里眼今窮。　同腰句　同

省レ躬還恥二相知久一。君是當初竹馬童。　同末句　同

謝安—晉人、しばしば朝廷より召されしかど辭して草廬を出でず

顔駟—漢武帝の時の老人

伯鸞—後漢の梁鴻のこと

五噫—歌の名

三閭—官名、屈原のこと

こともやさしく—或は「やさしく」又は「はづかし」などに作る

范蠡收レ責。棹二扁舟一而逃レ名。謝安辭レ功。鞭二孤雲一而養レ志。　　述懐　後江相公

昇殿是象外之選也。俗骨不レ可三以蹈二蓬萊之雲一。尚書亦天下之望也。庸才不レ可三以攀二臺閣之月一。　　申文　直幹

齢亞二顔駟一。過二三代一而猶沈。恨同二伯鸞一。歌二五噫一而將レ去。　　詩序　橘正通

言下暗生二消レ骨火一。咲中偸鋭二刺レ人刀一。　　述懐　在道

載二鬼一車一何足レ畏。棹二巫三峽一未レ爲レ危。　　感傷詩　前中書王

楚三閭醒終何益。周伯夷饑未二必賢一。　　橘倚平

何をして身のいたづらに老いにけん
　　としのおもはんこともやさしく（古今）

世の中はとてもかくてもおなじこと　　讀人しらず

荊卿—名は軻
侯生—名は嬴
豫子—名は讓
文公—晉文公重耳
驪龍—黑色の龍
高—得意になりて高く翔る意

なきがおほくもなりにけるかな（同）　爲賴

述懷

專諸荊卿之感激。侯生豫子之投レ身。心爲レ恩使。命依レ義輕。　後漢書文

范蠡收二責勾踐一。乘二扁舟於五湖一。咎犯謝二罪文公一。亦逡二巡於河上一。　同

翫二其磧礫一不レ窺二玉淵一者。未レ知二驪龍之處レ蟠也。
習二其弊邑一不レ視二上邦一者。未レ知二英雄之處レ躔。　吳都賦　左太沖

人間禍福愚難レ料。世上風波老不レ禁。　詠レ懷　白

車前駿病駑駘逸。架上鷹閑烏雀高。　寄二富途李逕秀才一　許渾

事々無レ成身也老。醉鄉不レ去欲二何歸一。　醉吟　白

舊遊—舊時交遊の友
王尹橋—姑蘇にあり
羊太傅—晉の羊祜
峴山—祜が平生遊憩の所
甘棠—詩に「蔽芾甘棠勿レ翦勿レ伐召伯所レ茇云々」とあり、召公奭郷邑を巡行して棠樹下に刑政をなしゝ故事

往事渺茫都似夢。舊遊零落半歸泉。　贈微之十七韻　同

蘇州船故龍頭暗。王尹橋傾雁齒斜。　問江南景物　同

金谷醉花之地。花毎春匂而主不歸。南樓翫
月之人。月與秋期而身何去。　右大臣報恩願文　菅三品

王子晉之昇仙。後人立祠於緱嶺之月。羊太傅
之早世。行客墮涙於峴山之雲。　安樂寺廟作文序　源相規

促齡良木其摧歎。遺愛甘棠勿剪謠。　哭人　野美材

いにしへの野中のしみづぬるけれど
もとのこゝろを知る人ぞくむ（古今）　讀人不知

昔をばかけじと思へどかくばかり
あやしく目にもみつなみだかな（拾遺）　村上御製

世の中にあらましかばとおもふ人

隋の部承たり
張僕射—張錫のこと、僕射は官名
裴文籍—渤海の使臣
菅禮部—菅原道眞のこと、禮部は治部省を云ふ
ならなくに—「ならぬに」の延
黄壤—黄泉の意

新才推爲忘年之友。　交友序　後江相公

裴文籍後聞君久。菅禮部孤見我新。　篤茂

君とわれいかなることをちぎりけん
むかしの世こそ知らまほしけれ（新千載）　村上御製

たれをかもしる人にせん高砂の
まつもむかしの友ならなくに（古今）　興風

懷舊

黄壤誰知我。白頭獨憶君。唯將老年涙一灑故人文。　題故元少君遺文之詩　白

長夜君先去。殘年我幾何。秋風滿袂涙。泉下故人多。　同　同

林霧校レ聲鶯不レ老。岸風論レ力柳猶强。　同　菅三品

醉對二落花一心自靜。眠思二餘算一涙先紅。　同　雅規

ますかゞみそこなる影にむかひゐて見る
ときにこそ知らぬ翁にあふこゝちすれ（拾遺）　躬恒

いづくにか身をばよせまし世の中に
老をいとはぬ人しなければ　爲頼

交友

琴詩酒友皆拋レ我。雪月花時最憶レ君。　寄二殷協律一　白

陽春曲調高難レ和。淡水交情老始知。　酬二張十八員外以二新詩一見一レ寄　同

昔年顧レ我長青眼。今日逢レ君已白頭。　贈二押衙一　許渾

嵩會稽之過二古廟一託二締異代之交一。張僕射之重

校レ聲—我聲と鶯の聲とをくらぶ
餘算—餘命

淡水交情—莊子曰、君子之交淡如水
青眼—愛好の眼、晉の阮籍の故事による
[illegible]

蹤[illegible]の跋

[illegible]

不レ待レ年―年の割よりも老いたり

紅榮黄落―春花咲き秋葉散る

綺里季―四皓の一人

老人

昔偶二京洛聲華客一、今作二江湖潦倒翁一。　晏坐閑吟　白

老眼早覺常殘レ夜。病力先衰不レ待レ年。　睡覺

再三憐レ汝非二他事一、天寶遺民見漸稀。　贈二康叟一　同

紅榮黄落。一樹之春色秋聲。結レ綬抽レ簪。一身之壯心老思。　一條右大臣辭二左大臣一表　菅三品

少二於樂天一三年。猶已衰之齡也。遊二於勝地一一日。是非二老之幸一哉。　左衛門尚齒會詩序　同

太公望之遇二周文一、渭濱之波疊レ面。綺里季之輔二漢惠一、商山之月垂レ眉。　壽考策文　江匡衡

水無二返夕一流年涙。花豈重春暮齒粧。　尚齒會詩　菅三品

し、朗詠の諸本には「佳人難レ出」「佳人歎」など題し田達音の作とす

饑鬟—貧しきこと

望夫山—昔貞女遠征の夫を慕ひて此山に登り化して石となる

あまの子—遊女の異称、又賤女の身を海士に喩へたるならんともいふ

釵。　菅三品

欲レ寃ニ今日新饑鬟一。泣賣ニ先朝舊賜箏一。　老命婦詩　後江相公

あまつかぜ雲のかよひぢふきとぢよをとめのすがたしばしとゞめん（古今）　良峯宗貞

遊女

秋水未レ鳴ニ遊女佩一。寒雲空滿ニ望夫山一。　寄ニ所レ思佳人一　賀蘭暹

翠帳紅閨。萬事之禮法雖レ異。舟中浪上。一生之歡會是同。　遊女序　以言

和琴緩調臨ニ潭月一。唐櫓高推入ニ水煙一。　同　順

しら波のよするなぎさに世をすぐすあまの子なれば宿もさだめず（新古今）

外人不レ識承レ恩處。唯有三羅衣染二御香一。　宮詞　元稹

嬋娟兩鬢秋蟬翼。宛轉雙蛾遠山色。　井底引二銀瓶一　白

莫レ怪紅巾遮二面咲一。春風吹綻二牡丹花一。　別後寄二美人一　同

李延年之餝レ族、託二一妍一以始飛。衛子夫之待レ時。在二衆醜一而永異。　主家樂斷詩序　野相公

秋夜待レ月。纔望二出レ山之清光一。夏日思レ蓮。初見二穿レ水之紅艶一。　催レ粧詩序　菅

算二取宮人才色衆一。粧樓未レ下詔來添。　同題詩發句　同

雙鬟且理春雲軟。片黛纔成曉月纖。　同胸句　同

羅袖不レ遑レ迴二火尉一。鳳釵還悔レ鎖二香匳一。　同腰句　同

和風先導二薰烟一出。珍重紅房透二翠簾一。　同落句　同

嫌二褰錦帳一長薰レ麝。惡レ卷二珠簾一晩著

李延年—李夫人の兄
衛子夫—漢武帝の皇后

且—又かつ〳〵と訓ず

嫌云々—此詩日本詩紀に失題と

沙塞—胡國の要塞
涙行—涙の列り流るゝこと
黃金賂—畫工に賂せざりし故に醜と畫かれて遂に胡に送られし也
容貌云々—遊仙窟の崔女郎のこと

翠黛紅顔錦繡粧。泣尋沙塞出家鄕。　發句　後江相公

邊風吹斷秋心緒。隴水流添夜涙行。　同胸句　同

胡角一聲霜後夢。漢宮萬里月前腸。　同腰句　同

昭君若贈黃金賂。定是終身奉帝王。　同末句　同

身埋胡塞千重雪。眼盡巴山一點雲。　王昭君　王昭君

數行暗涙孤雲外。一點愁眉落月邊。　同美人眉似片月。　同

あしびきの山がくれなるほとゝぎす
きく人もなきねをのみぞ鳴く　實方

妓女

容貌似舅潘安仁之外甥。氣調如兄崔季珪之小妹。　遊仙窟文　張文成

たみのかまどはにぎはひにけり　（新古今）　仁徳御皇

詠史

燈暗數行虞氏涙。夜深四面楚歌聲。　賦二項羽一　橘相公

賓雁繫レ書秋葉落。牡羊期レ乳歳花空。　賦二蘇武一　紀在昌

他日逢逃二秦虎口一。暮年初謁二漢龍顏一。　賦二叔孫通一　紀納言

かぞいろはいかにあはれと思ふらん
みとせになりぬ足たゝずして　朝綱

王昭君

愁苦辛勤顦顇盡。如今却似二畫圖中一。　王昭君　白

身化早爲二胡朽骨一。家留空作二漢荒門一。　同　紀納言

下の「高殿にのぼりて見れば天の下四方に烟りて今ぞ富みぬる」を正しとすべし

虞氏ー項羽の寵姫

賓雁云々ー漢の蘇武の故事

他日云々ー漢の叔孫通の故事

かぞいろー父母

足たゝずしてー蛭子のこと、此歌日本紀竟宴歌集に「かぞいろはあはれと見ずやひるの子は三年になりぬ足たたずして」とあるを改めたる。

寒玉一聲—文章の流麗なる形容
蛇云々—禹王のこと
馬云々—魏文帝のこと
玉くしげ—枕詞
あけ—緋（アケ）を掛く、五位の
刺史—州の長官、我國知事の如し
使君—刺史
金紫—金印紫綬
昆吾劍—西戎の周穆王に獻ぜし名劍
此歌實は移原時

雄劍在レ腰。拔則秋霜三尺。雌黄自レ口。吟亦寒玉一聲。

和歌所別當左衛中郎將寒行序　同

蛇驚ニ劍影一便逃レ死。馬惡ニ衣香一欲レ噛レ人。

送ニ李將軍一　都良香

玉くしげふたとせあはぬ君が身を
あけながらやはあらんと思ひし　（後撰）

公忠

刺史

士女笙歌宜ニ月下一。使君金紫稱ニ花前一。

甲寧懷ニ蘇州一寄ニ書侍　白

精明合浦珠相似。斷割昆吾劍不レ如。

贈ニ李尙書一　同

雖ニ三百盃一莫ニ強辭一。邊土不ニ是醉鄕一。此一兩句可ニ重詠一。北陸豈亦詩國。

餞ニ能登守賀史赴ニ任國一別序　保胤

たかきやにのぼりて見れば煙たつ

鄭太尉—後漢の鄭弘若耶溪に薪を採る

雪中放レ馬—管仲の故事

聲—或は夜に作る

李將軍—漢の李廣

祭征虜—後漢の人、名は遵

虎牙—大將

四七將—後漢以下二十八將

麟角—顏氏家訓、學者如二牛毛一、成者如二麟角一

魯二十篇—論語

北。鄭太尉之溪風被二人知一。　同　同

山ざくらあくまでいろを見つるかな　はな散るべくも風ふかぬ世に（續古今）　兼盛

將軍

三尺劍光氷在レ手。一張弓勢月當レ心。　贈二李部使一　陸將軍

雪中放レ馬朝尋レ跡。雲外聞レ鴻夜射レ聲。　重和二扶風老人活溶一　白

千里往來征馬疲。十年離別故人稀。　贈二河東虞將軍一　許渾

隴山雲暗。李將軍在レ家。潁水浪閑。祭征虜之未レ仕。　淸愼公辭二左近大將一表　菅三品

職列二虎牙一。雖レ拉二武勇於漢四七將一。擧二拙麟角一。遂味二文章於魯二十篇一。　右親衞藤中將讀二論語一序　順

季文子—魯の昭公の相
公孫弘—漢武帝に相たり
陳丞相—名は平 高帝に相たり
袁司徒—名は安 後漢の人
忠仁公—藤原良房
殷夢—殷帝の夢に入ること
涇渭—共に水名

季文子妾不レ衣レ帛。魯人以爲ニ美談一。公孫弘身服ニ布被一。汲黯譏ニ其多レ詐。

後漢書文

百里奚乞ニ食於道路一。穆公委レ之以レ政。甯戚子飼ニ牛於車下一。桓公任レ之以レ國。

漢書文

孫弘閤閣無ニ閑客一。傅說舟忙不レ借レ人。

宿ニ裴司空池亭一　白

西京席門。乃是陳丞相之舊宅。南山芝澗。寧非ニ袁司徒之幽栖一。

清愼公辭ニ攝政一第三表　後江相公

周公旦者文王之子。武王之弟。自知ニ其貴一。忠仁公者。皇帝之祖。皇后之父。世推ニ其仁一。

貞信公大臣元服後辭ニ攝政一表　菅三品

傅氏巖之嵐。雖レ風ニ雲於殷夢之後一。嚴陵瀨之水。猶ニ涇渭於漢聘之初一。

一條右相府辭ニ右大臣一表々　同

春過夏闌。袁司徒之家雪應ニ路達一。且南暮

東平蒼之雅量。寧非二漢皇褒貴無雙之弟一哉。桂陽鑠之文辭。亦是齊帝寵愛第八之子也。
親王書始詩序　菅三品

江都之好二勁捷一也。七尺屛風其徒高。淮南之求二神仙一也。一旦乘レ雲而何益。
親王入學詩序　順

開レ卷已知レ爲レ子道一。秋風悵望鼎湖雲。
冷泉院第八親王始讀二孝經一時詩序　保胤

我王孝行先何到。梧岫秋風一片煙。
同　菅雅規

此花非二是人間種一。瓊樹枝頭第二花。
名花在二閑軒一　後江相公

此花非二是人間種一。再養二平臺一片霞一。
同　菅三品

いかるがやとみの小川のたえばこそ
　わがおほぎみのみなはわすれめ（拾遺）
達磨大師

丞相　附執政

漢皇—明帝をさす
齊帝—太祖
江都—江都王非汝南王たり、材力あり
鼎湖—黄帝の墓所
梧岫—梧は蒼梧の野也、舜帝の墓所、岫は山の洞
平臺—梁孝王の居所
いかるが—大和斑鳩の里
とみの小川—富小川、法隆寺の東を流る
わがおほぎみ—聖徳太子

皇甫謐云々―晉の人、帝王世紀等の書を作りて百王の治亂を述べしをいふ

蒲―後漢劉寛寛仁也、人過有れば只蒲鞭を用ひて之を罰したりといふ故事

螢空去―月令に腐草化して螢となるといふによる

庳車―低き車

香衫―衫は一重の衣

兼之者我君也。

榮啓歸之歌三樂。未到常樂之門。皇甫謐之述

百王猶暗法皇之道。

村上御時冷泉院書會序　同

應太上天皇制序　後江相公

玉扆日臨文鳳見。紅旗風卷畫龍揚。

大極殿朝拜詩　藤原伊周

刑鞭蒲朽螢空去。諫鼓苔深鳥不驚。

無爲治詩　江相公

なにはづに咲くやこのはな冬ごもり
いまを春べと咲くやこのはな（古今）

王仁

散りぬれど又くるはるは咲きぬべし
ちとせののちは君をたのまん

小松天皇

親王　附王孫

庳車軟轝貴公主。香衫細馬豪家郎。

牡丹芳詩　白

項莊—項羽の從弟
鴻門—地名
沛郡—高祖の舊里
犧皇—伏犧氏
向上人—對等以上の人
梁元—梁の元帝
周穆—周の穆王
崑閬—崑崙と閬風、共に仙人の居所
黃炎—黃帝軒轅氏、炎帝神農氏

項莊之會二鴻門一。寄二情於一座之客一。漢祖之歸二沛郡一。傷二思於四方之風一。　同

四海安危照二掌內一。百王理亂懸二心中一。　百鍊鏡　白

幸逢二堯舜無爲化一。得レ作二犧皇向上人一。　讀二太宗皇帝一　同

聖皇自在二長生殿一。不レ向二蓬萊王母家一。　上陽春辭　楊衡

仁流二秋津洲之外一。惠茂二筑波山之陰一。淵變作レ瀨之聲。寂々閉レ口。沙長爲レ巖之頌。洋々滿レ耳。　古今和歌集序　紀淑望

梁元昔遊。春王之月漸落。周穆新會。西母之雲欲レ歸。　村上仁壽殿詩序　菅三品

布レ政之庭風流未下必敵中於崑閬上。兼レ之者此地也。好レ文之世。德化未三必光中于黃炎上。

庚申—道家の說に　庚申の夜眠れば三尸蟲身に災すとて其夜眠らずに明す也
推甲子—年月の干支を推算すること
おきなかのえさるときなき—沖中に魚を獲ざる時節を意にカノエサルを隱題とせり
いかでかは—或本に「いかになほ」に作る
なかのえさるまじきを—え去るまじきの意にしてかはり隱題也
一卷之書—黃石公の授けし兵書

庚申

年長每勞レ推二甲子一。夜寒初共守二庚申一。

贈二王山人一　許渾

己酉年終冬日少。庚申夜半曉光遲。

庚申夜所懷　菅

おきなかのえさるときなきつり舟は
あまやさきだつ魚やさきだつ（袖中抄）

いかでかは人にもとはんあやしきは
おもはぬなかのえさるまじきを

帝王　附法皇

漢高三尺之劍。坐制二諸侯一。張良一卷之書。立登二師傅一。

後漢書文

長松―丈高き松
極浦―人里遠く離れし浦
謫處―配流の處
の川なかせし一
…書によるに奥
州白河の關也

渺。長風浦之暮聲猶深。曉入長松之洞。岩泉咽兮嶺猿吟。夜宿極浦之波。青嵐吹兮皓月冷。　山河千里別序　順

別路江山遠序　爲雅

渡口郵船風定出。波頭謫處日晴看。　將越謫處隱岐國　野相公

洲蘆夜雨他鄉涙。岸柳秋風遠塞情。　秋宿驛館　直幹

蒼波路遠雲千里。白霧山深鳥一聲。　石山作　同

ほのぼのとあかしの浦のあさぎりに
　しまかくれ行く舟をしぞおもふ（古今）　人丸

和田の原やそ島かけてこぎ出でぬと
　人にはつげよあまのつりふね（同）　篁

たよりあらばいかで都へつげやらん
　けふしら川のせきは越えぬと（拾遺）　兼盛

九枝燈—燈臺の九枝なるをいふ
石火—人生の無常變易に喩ふ

いのちだに云々—命が心に叶ふものなら何の別が悲しからん、又逢ふ迄保ち難き命と思ふに斯くは悲しき也

同　菅庶幾

九枝燈盡唯期レ曉。一葉舟飛不レ待レ秋。

欲下以二浮世一期中後會上。還悲二石火向レ風敲一。　知二裴大使之什一　菅

おもひやる心ばかりはかはらじを
なにへだつらん峯のしらくも（後撰）　直幹

としごとの春のわかれをあはれとも
人におくるゝひとぞ知りける（家集）　元眞

いのちだに心にかなふものならば
なにかわかれの悲しからまし（古今）　白女

行旅

孤館宿時風帶レ雨。遠帆歸處水連レ雲。　許渾

行々重行々。明月峽之曉色不レ盡。渉々復渉

こきまぜて—かきまぜて、一つにして
雁山—雁門山
鴻臚—館名也、玄蕃寮にあり、蕃客滯留の所
丹鳥—螢のこと
畫熊—車のこと、漢の制に上大夫の車の前板に熊を畫く
楊岐—楊朱、岐に泣くの故事
李門—後漢李膺衆望ありし故事

見わたせば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしきなりける（古今）　素性

餞別

與レ君後會知二何處一。爲レ我今朝盡二一盃一。　臨都驛送二崔十八一　白

前途程遠。馳二思於雁山之暮雲一。後會期遙。霑二纓於鴻臚之曉涙一。　於鴻臚館餞二北客一序　後江相公

昔聚二丹鳥一競二寸陰於十五年之間一。今促二畫熊一欲レ分二手於三百盃之後一。　山河千里別序　順

楊岐路滑。我之送レ人多年。李門波高。人之送レ我何日。　別路花飛白詩序　以言

萬里東來何再日。一生西望是長襟。　餞別詩　野相公

わが宿はみちもなきまであれにけり
　つれなき人をまつとせしまに（古今）　遍昭

眺望

風飜二白浪一花千片。雁點二青天一字一行。　江樓晩眺　白

出二紫闥一而東望。山岳半插二雲根之暗一。踏二秦嶺一而西顧。家郷悉没二烟樹之深一。　山寒花未レ披序　尊敬

見二天台山之高巖一。四十五尺浪白。望二長安城之遠樹一。百千萬莖薺青。　春色生二晴中一序　順

江霞隔レ浦人烟遠。湖水連レ天雁點遥。　遊二漂福寺一　直幹

一行斜雁雲端滅。二月餘花野外飛。　春日眺望　顯

老眼易レ迷殘雨裏。春情難レ繫夕陽前。　同　篤茂

紫闥：禁門

天台山—台教の根地

四十五尺浪—天台山の瀧を云ふ

十二—崑崙山の仙宮
三千—宮中の數多の女官
抽簪於北山之北—後漢法眞の故事によりて官を去り遁世するをいふ
東海—齊の魯仲連の故事
都府樓—太宰府をさして云ふ
陶門—陶淵明の門
燕寢—燕婉の室

宮車一去。樓臺之十二長空。隙駟難レ追。綺羅之
三千暗老。
閑賦　張讀

幽思不レ窮。深巷無レ人之處。愁腸欲レ斷。閑窓有
レ月之時。
貧女賦　白

鶴籠開處見二君子一。書巻展時逢二故人一。
出家不レ出レ門　同

人間榮耀因緣淺。林下幽閑氣味深。
老來生計　同

官途自レ此心長別。世事從レ今口不レ言。
香爐峰下新卜二山居一　同

蕙帶蘿衣。抽二簪於北山之北一。蘭橈桂檝。鼓二舷
於東海之東一。
落花亂二舞衣一詩序　江相公

都府樓纔看二瓦色一。觀音寺只聽二鐘聲一。
不レ出レ門　菅丞相

晦レ跡未レ抛二苔徑月一。避レ喧猶臥二竹窓風一。
奉レ同二香爐峰下作一　平佐幹

陶門跡絕春朝雨。燕寢色衰秋夜霜。
閑中日月長　以言

觀レ空淨侶心懸レ月。送レ老高僧首剃レ霜。　夏日遊二般若寺一　順

鶴閑翅刷二千年雪一。僧老眉垂二八字霜一。　和下補闕村子登二天台山一之什上　源爲憲

たらちねはかゝれとてしもうば玉の
わがくろ髪はなでずやありけん（後撰）　遍昭

世の中にうしのくるまのなかりせば
おもひのいへをいかでいでまし（拾遺）　讀人しらず

三輪川のきよきながれにすゝぎてし
わが名をさらに又やけがさん（續古今）　玄賓

閑居

不三獨記二東都履道里一。有二閑居泰適之叟一。亦令レ知二皇唐大和歲一。有二理世安樂之音一。　洛詩序　白

うしのくるま―法華譬喩品「爲求牛車、出於火宅」
おもひのいへ―火宅、煩惱の苦み
三輪川の―江談抄「弘仁五年玄賓坊任二律師一、辭退歌云」の序あり、三句以下、あらひてし衣の袖はけがれざりけり」
大和―年號

蒼茫—はのくらきこと

芳林—花さきて芳ばしき林

五臺—支那五臺山文殊院——

極樂ははるけきほどと聞きしかど
　つとめていたるところなりけり（千載）　空也上人

いつしかと君にとおもひし若菜をば
　法のためにぞけふは摘みつる（拾遺）　村上御製

僧

蒼茫霧雨之晴初。寒汀鷺立。重疊煙嵐之斷處。晩寺僧歸。　閑居賦　張讀

野寺訪僧歸帶月。芳林携客醉眠花。　逢隱師、餘寺僧正歸家　英明

堂有母儀。莫以逗留於中天之月。室有師跡。莫以偃息於五臺之雲。　餞入唐僧詩序　保胤

明鏡忽開隨境照。白雲不著下山來。　以僧智喩明鏡　野相公

芥鷄―季平子と郈昭伯と鬬鷄をなしたる故事、左傳昭公廿五年の條に出づ
勾典―山の名、漢の時三茅君此山に居る、宣帝初元四年三月十八日茅盈君登仙す
面月―阿難尊者の面淨滿の月の如し
何―或は爭に作る
僧祇劫―僧祇は無數也、劫は時なり
朝宗―百川の海を宗として朝する也
君がひくべき―彌陀の引接し給ふべき
阿耨多羅三藐三菩提―無上正遍智の佛なり

芥鷄一而長忘。

經二六波羅蜜寺供養堂一佛塔一詩序也　保胤

念二極樂之尊一一夜。山月正圓。先二勾典之會一

三朝。洞花欲レ落。

勸學會詩序　紀齊名

玉磬聲思二曾絃奏一。衲衣僧代二綺羅人一。

九條右丞相花亭法華會詩序　野相公

眼蓮豈養二淸涼水一。面月長留二十五天一。

贈二阿難尊者一詩　齊名

以二佛神通一何酌盡。經二僧祇劫一欲二朝宗一。

弘誓深如レ海詩　以言

叩レ凍負來寒谷月。拂レ霜拾盡暮山雲。

採レ藥汲レ水詩　保胤

已終二未レ習千年役一。初得難レ遇一乘文。

同　同

この世にて菩提のたねをうゑつれば
君がひくべき身とぞなりぬる

左相府

阿耨多羅三藐三菩提のほとけたち
わがたつそまに冥加あらせたまへ（新古今）

傳敎大師

讃佛乘—佛法の功德をほむること
轉法輪—敎法を說きて邪見を破ること
百千萬劫—劫は時なり
九品—上中下の三品に各〻上中下の三生あり、極樂往生の階級也
十惡—殺生偸盗邪婬妄語綺語惡口兩舌貪欲嗔恚愚痴
忉利天—欲界六天中の第二也、須彌山頂にして帝釋此に居る
紫磨金—黃金の美なる物
兩足—福智具足の意、佛の尊稱

止觀第一文　智者大師

樹教レ之。

洛中集記　白

願以二今生世俗文字之業。狂言綺語之誤一。翻爲二當來世々讃佛乘之因。轉法輪之緣一。

贈二鉢塔院如滿大師一詩　同

百千萬劫菩提種。八十三年功德林。

極樂寺建立願文　保胤

十方佛土之中。以二西方一爲レ望。九品蓮臺之間。雖二下品一應レ足。

讃二極樂寺一　江匡衡

雖二十惡一兮猶引攝。甚レ於三疾風披二雲霧一。雖二一念一兮必感應。喩三之巨海納二涓露一。

仁康上人奉レ造二丈六釋迦一願文　同

昔忉利天之安居九十日。刻二赤栴檀一而模二尊容一。今跋提河之滅度二千年。瑩二紫磨金一而禮二兩足一。

浪洗欲レ消。鞭二竹馬一而不レ顧。雨打易レ破。鬪二

策レ馬來時。只思二風烟之可一レ翫。逢レ僧談處。漸覺二世俗之皆空一。

遊二圓成寺上方一序　源英明

人如二鳥路一穿レ雲出。　地是龍門趨レ水登。

遊二龍門寺一　菅丞相

三千世界眼前盡。　十二因緣心裏空。

竹生島作　都良香

泉飛雨洗二聲聞夢一。　葉落風吹二色相秋一。

石山寺作　高相如

やまでらのいりあひの鐘のこゑごとに
けふも暮れぬと聞くぞかなしき（拾遺）

讀人しらず

このもとをすみかとすればおのづから
はな見る人になりにけるかな（榮花物語）

花山院

佛事

月隱二重山一兮。擧レ扇喩レ之。　風息二大虛一兮。動レ

鳥路―空

十二因緣―衆生の三世に輪回する相に十二の名目あり

聲聞―阿羅果の聖者にて未だ佛菩薩の證果を得ざる者

色相―形にあらはれたる無常變易の假法

喩レ之―月の存在に喩ふ

可獨終身數相見。子孫長作隔墻人。　同　同

池邊別業是何人。聞道陸張昔卜隣。　題隣家　菅三品

落枕波聲分岸夢。當簾柳色兩家春。　同　同

春烟遞讓簾前色。曉浪潛分枕上聲。　卜隣家　直幹

君がやどわがやどわくるかきつばた
うつろはぬまに見ん人もがな（六帖）　伊勢

山寺

千株松下雙峰寺。一葉舟中萬里身。　香山寺隱居　白

更無俗物當人眼。但有泉聲洗我心。　宿靈岩寺上院　白

不改朝天之門。便作求車之所。不變閑水之橋。以爲到岸之途。　慈恩寺初會詩序　野相公

可—或は「何」不」に作る
陸張—陸惠曉張白融の二人
君がやど—此歌貫之集に見えて二句「我が宿わける」四句「うつろはぬ時」
雙峰寺—香山寺と遺愛寺と
朝天之門—朝廷出仕に出入せる我家の門
求車—求法の意
閑水之橋—門前の小水に架せる

甲日—立秋後のきのえの日百穀熟すといへり

たご—田を植うる賤

いな葉もそよと—或は「いな葉そよぎて」此歌古今集には讀人不知とし、異本或は躬恒に作る

守レ家一犬迎レ人吠。放レ野群牛引レ犢休。　　田家早秋　都良香

野酌卯時桑葉露。山畦甲日稻花風。　　田家秋意　紀齊名

蕭索村風吹レ笛處。荒涼隣月擣レ衣程。　　同　高相如

春の田をひとにまかせてわれはたゞ
花にこゝろをつくるころかな（拾遺）　　齋宮内侍

時すぎばさなへもいたく老いぬべし
あめにもたごはさはらざりけり（家集）　　貫之

昨日こそさなへとりしかいつのまに
いな葉もそよと秋かぜぞ吹く（古今）　　躬恒

隣家

明月好同三徑夜。綠楊宜レ作兩家春。　　與二元八一卜レ隣　白

山路日暮。滿レ耳者樵歌牧笛之聲。澗戸鳥歸。遮レ眼者竹烟松霧之色。　暮春遊覽賦序　紀齊名

花間覓レ友鶯交レ語。洞裏移レ家鶴卜レ隣。　卜二山居一　紀納言

晴後青山臨レ牖近。雨初白水入レ門流。　田家之早秋　都良香

觸レ石春雲生二枕上一。衝レ峰曉月出二窓中一。　春宿二山寺一　直幹

山ざとは物のさびしきことこそあれ
よのうきよりはすみよかりけり（古今）　讀人しらず

やまざとは冬ぞさびしさまさりける
人めもくさもかれぬとおもへば（同）　宗于朝臣

田家

〔碧毯線頭抽二早稻一。青羅裙帶展二新蒲一。　春題二湖水一　白

澗戸—谷の入口

白水—濁水

かれぬ—草の枯るゝと人の來訪なきとの兩意

いつかちとせを我はへにけん（古今）　素性

山家

遺愛寺鐘欹レ枕聽。香爐峰雪撥レ簾看。　寺近ニ香爐峰下一　白

蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中。　廬山草堂雨夜獨宿　同

漁父晩船分レ浦釣。牧童寒笛倚レ牛吹。　登ニ石壁水閣一　杜荀鶴

王尚書之蓮府麗則麗。恨唯有ニ紅顏之賓一。嵇仲散之竹林幽則幽。嫌三殆非ニ素論之士一。　尚齒會詩序　菅三品

南望則有ニ關路之長一。行人征馬駱ニ驛於翠簾之下一。東顧亦有ニ林塘之妙一。紫鴛白鷗逍ニ遙於朱檻之前一。　秋化遊ニ書閣詩序　順

蘭省―尚書省を云ふ

王尚書―齊の王儉也、時人儉の府を蓮府と云ふ

素論之士―老人、素は白髮をいひ、論は倫に通ず

謬入仙家ー王質石室中に童子の圍棋を見て斧柯朽ちし故事

七世之孫ー劉晨阮肇天台山に採藥し道を失うて仙女に會ひ七代を經て歸る

石床、玉案ー仙人のとことつくゑ

潁水云々ー許由堯の讓を受けざりし故事

虚澗ー人氣なき谷

柳門ー陶淵明のこと

奇犬吠花。聲流於紅桃之浦。驚風振葉。香分於紫桂之林。　同　同

謬入仙家。雖爲半日之客。恐歸舊里。纔逢七世之孫。　二條院宴落花亂舞衣序　後江相公

丹竈道成仙室靜。山中景色月花低。　山中有仙室　菅三品

石床留洞嵐空拂。玉案抛林鳥獨鳴。　同胸句也　同

桃李不言春幾暮。煙霞無跡昔誰栖。　同腰句也　同

王喬一去雲長斷。早晩笙聲歸故溪。　同結句也　同

商山月落秋鬢白。潁水波揚左耳淸。　山中自述　後江相公

虚澗有聲寒溜咽。故山無主晩雲孤。　山無隱士　紀納言

通夢夜深蘿洞月。尋跡春暮柳門塵。　遠念賢士風　菅

ぬれてほすやまぢの菊のつゆのまに

つきのもるにも袖はぬれけり（古今六帖）

君なくてけぶり絶えにししほがまの

うらさびしくも見えわたるかな（古今）　貫之

いにしへは散るをや人のをしみけん

今は花こそむかしこふらし（家集）　一條攝政

仙家　附道士隱倫

壺中天地乾坤外。夢裏身名旦暮閒。　幽棲　元稹

藥爐有火丹應伏。雲碓無人水自舂。　尋郭道士不遇　白

山底採薇雲不厭。洞中栽樹鶴先知。　卜山居　溫庭筠

三壺雲浮。七萬里之程分浪。五城霞峙。十二樓之構插天。　神仙策　都良香

うらさびし—何となく心さびし、浦を掛く

壺中天地—費長房仙術の壺中に入りて歡樂を極めし故事あり

丹—煉藥

三壺—方壺蓬萊瀛壺の三神山

五城十二樓—崑崙に仙人居る所

獲落—空廓たる状
滑石—もと礎としたる滑かなる石
姑蘇臺—呉王闔閭の築く所
咸陽宮—秦の始皇帝の宮殿

故宮　附故宅

陰森古柳疎槐。春無二春色一。獲落危牖壞宇。秋有二秋聲一。　連昌宮賦　公乘億

臺傾滑石猶殘レ砌。簾斷眞珠不レ滿レ鉤。　題二于家公主舊宅一　白

強呉滅兮有二荊棘一。姑蘇臺之露瀼々。暴秦衰兮無二虎狼一。咸陽宮之煙片片。　河原院賦　順

老鶴從來仙洞駕。寒雲在昔妓樓衣。　嵯峨舊院卽事　菅

孤花裛レ露啼二殘粉一。暮鳥栖レ風守二廢籬一。　題二后妃舊院一　良春道

向レ晚簾頭生二白露一。終宵床底見二靑天一。　屋舍壞　三善宰相

荒籬見レ露秋蘭泣。深洞聞レ風老檜悲。　秋日過二仁和寺一　源英明

きみなくて荒れたるやどの板間より

鷄人—旦を報じて百官を呼び起す役人
鳧鐘—鐘のこと、鳧氏鐘を鑄る故に云ふ
朝候—諸官毎朝の出仕、此詩作者出典未詳
日高云々—遲刻して冠の拔け落ちんとするも心附かざる周章の狀也
いそのかみ—ふるに掛る枕詞

鷄人曉唱。聲驚明王之眠。鳧鐘夜鳴。響徹暗天之聽。　漏刻策　都良香

朝候日高冠額拔。夜行沙厚履聲忙。

みかきもり衛士のたく火にあらねども
われもこゝろのうちにこそたけ（家集）　中務

こゝにだにひかりさやけき秋のつき
雲のうへこそおもひやらるれ（拾遺）　藤原經信

古京

綠草如今麋鹿苑。紅花定昔管絃家。　過平城古京　菅三品

いそのかみふるきみやこを來て見れば
むかしかざしゝ花さきにけり（新古今）　讀人しらず

刻レ印—足跡をいふ

模レ書—雁行を文字に譬へいふ

ちり—散り、塵

みなかみ—そのかみの意を水の縁にて水上といへる也、歌の意は「堀河院御時堀川院に二度行幸せさせ給ひけるによめる」の詞書にて明か也

仙郎—宮中に宿直する人

三千—一に「三十」に作る、從ふべし

聞レ雁。遙感二旅宿之隨一レ時。　同　同

沙頭刻レ印鷗遊處。　水底模レ書雁度時。　題二洞庭湖一　後江相公

日脚波平孤嶋暮。　風頭岸遠客帆寒。　海濱書懷　平佐幹

としをへてはなのかゞみとなる水は
ちりかゝるをやくもるといふらん（古今）　伊勢

みなかみのさだめてければ君がよに
ふたゝびすめるほり川の水（詞花）　好忠

禁中

鳳地後面新秋月。　龍闕前頭薄暮山。　題二東北齋院小寄亭一　白

秋月高懸空碧外。　仙郎靜翫禁闈間。　八月十五日夜聞三崔大員外翰林獨直對レ酒翫レ月因懷二禁中清景一　同

三千仙人誰得レ聽。　含元殿角管絃聲。　及第日報二破東平一　章孝標

邊城—國境にありて夷狄の侵入に備ふる城

青草湖—一名重湖、北洞庭湖と相連なる

艋舟—小舟也

本主—舊主、先主字多帝をいふ

たつたの川の水のにごれる（拾遺）　時平

水　附漁父

邊城之牧馬頻嘶。平沙渺々。江路之征帆盡去。遠岸蒼々。　曉賦　謝觀

洲芳杜若抽心長。沙暖鴛鴦敷翅眠。　樂府見明春水滿詩　白

帆開青草湖中去。衣濕黃梅雨裡行。　送客之湖南　同

水驛路穿兒店月。花船棹入女湖春。　送劉中丞郎赴任蘇州　同

菰蔣杓酌春濃酒。舴艋舟流夜漲灘。　戲贈漁家　杜荀鶴

閑居屬於誰人。紫宸殿之本主也。秋水見於何處。朱雀院之新家也。　閑居賦秋水序　菅

垂釣者不得魚。暗思浮遊之有意。移棹者唯

扶疎—枝の繁りて四方に分布すること

韓康—後漢の人名山に採薬す

削、形、色—原文「鏤」「石」「涙」

凝レ日暮山青簇々。浸レ天秋水白茫々。

登二西楼一憶二行簡一　白

漁舟火影寒焼レ浪。駅路鈴声夜過レ山。

秋夜宿二臨江駅一　杜荀鶴

山似二屏風一江似レ簟。叩レ舷来往月明中。

泛レ舟　劉禹錫

草木扶疎。春風梳二山祇之髪一。魚鼈遊戯。秋水養二河伯之民一。

山水策　江澄明

韓康独往之栖。花薬如レ旧。范蠡遍舟之泊。烟波惟新。

同　同

山復山。何工削二成青巌之形一。水復水。誰家染二出碧潭之色一。

同　同

山郭遠樹雲開処。海岸孤村日暮時。

春日送別　直幹

山成二向背一斜陽裏。水似二廻流一迅瀬間。

春日山居　後江相公

かみなびのみむろの岸やくづるらん

名のみして云々—三笠山といふ名はあれど山には笠なくして朝日夕日のさすに任せたり

巴猿—巴峡の猿聲

黄沙磧—黄色の沙漠の立つ胡國の沙漠

名のみして山はみかさもなかりけり
あさ日ゆふ日のさすにまかせて（拾遺） 貫之

くものゐるこしのしら山おいにけり
おほくのとし野雪つもりつゝ（同） 忠岑

みわたせば松の葉しろきよし野やま
いく世つもれる雪にかあるらん（同） 兼盛

山水

泰山不讓土壤。故能成其高。河海不厭細流。故能成其深。 上秦王書 李斯

巴猿一叫。停舟於明月峽之邊。胡馬忽嘶、失路於黃砂磧之裏。 愁賦 公乘億

建德―莊子に曰く、南越に邑あり建德といふ其民愚朴寡欲と
無何―寂寞無爲の境也、莊子に見ゆ

黛色―遠山の翠色

紈扇―白き絹張の團扇
谷心―谷間、谷の中心

先逢二阮籍一爲二鄕導一。漸就二劉伶一問二土風一。
入二醉鄕一贈二納言一　橘相公

邑隣二建德一非二行歩一。境接二無何一便坐忘。
同　後中書王

王勣鄕霞紫浪朧。嵆康山雪逐レ流飛。
醉看二落レ水花一　保胤

ありあけの心地こそすれさかづきの
ひかりもそひていでぬと思へば（拾遺）
能宣

山　附山水

黛色迥臨二蒼海上一。泉聲遙落二白雲中一。
題二百丈山一　賀蘭遂

勝地本來無二定主一。大都山屬二愛レ山人一。
題二雲居寺一贈二正棲三十六塊主一　白

夜鶴眠驚松月苦。曉猿飛落峽烟寒。
題二遙嶺暮烟一　都在中

紈扇抛來青黛露。羅帷卷却翠屛明。
遠山暮烟歛　後中書王

衆籟曉興林頂老。群源暮叩谷心寒。
秋聲在レ山　以言

晉建威將軍劉伯倫。嗜レ酒作二酒德頌一傳二於世一。唐太子賓客白樂天。亦嗜レ酒作二酒功讃一以繼レ之。

酒功讃序　白

臨レ風杪秋樹。對レ酒長年人。醉貌如二霜葉一。雖レ紅不二是春一。

醉中對二紅葉一　同

生計抛來詩是業。家園忘却酒爲レ鄕。

送三蕭處士遊二黔南一　同

茶能散レ悶爲レ功淺。萱道レ忘レ憂得レ力微。

賞レ酒之詩　同

若使下榮期兼二解醉一。應レ言二四樂一不上レ言レ三。

琴酒　同

醉鄕氏之國。四時獨誇二溫和之天一。酒泉郡之民。一頃未レ知二沍陰之地一。

煖寒從二飲酒一詩序　匡衡

菓則上林苑之所レ獻。含自消。酒是下若村之所レ傳。傾甚美。

內宴詩序　江相公

長年—老年

萱—護草（ワスレグサ）

榮期—榮啓期孔子の問に答ふるに三樂を以てす、列子に出づ

下若村—若溪は長興縣の南溪にあり、南を上若北を下若といふ、村人下若の水を取りて酒を釀すに頗甚だ美なりといふ

昨日山中之木。材取於己。今日庭前之花。詞慙於人。　雨來花自濕詩序　橘　茂

王朗八葉之孫。摭徐詹事之舊草。江淹一時之友。集范別駕之遺文。　敬公集序　順

陳孔璋詞空愈病。馬相如賦只凌雲。　題英明集　尊　敬

贈爵新恩銘刻石。獲麟後集世知丘。　遇會不相識、毎見安樂寺　以　言

いつはりのなき世なりせばいかばかりひとのことの葉うれしからまし（古今）　讀人しらず

酒

新豐酒色。淸冷於鸚鵡盃之中。長樂歌聲。幽咽於鳳凰管之裏。　送友人歸大梁賦　公乘億

王朗—三國魏人
徐詹事—詹事は官名
江淹—六朝の人
范別駕—六朝の人別駕は官名
陳孔璋—三國魏人
獲麟—孔子（丘は名）春秋を記して「哀公十四年西狩獲麟」に筆を絶つ
新豐—酒の產地

落梅、折柳—共に曲名
相如—漢の司馬相如琴心を以て卓文君を挑みし故事
簾中—婦人
詞—或は「辭」に作る
繳—又いぐるみと訓ず
遺文—元少尹の遺稿をさす
龍門—同人を葬りし地
言語云々—詩篇を評して云ふ

落梅曲舊脣吹レ雪。折柳聲新手掬レ煙。　花間理二管絃一　菅

相如昔挑二文君一得。莫レ使二簾中子細聽一。　聽レ彈レ琴　惟高親王

ことのねに峯のまつかぜかよふらし いづれの緒よりしらべそめけん（拾遺）　齋宮女御

文詞　附遺文

沈詞怫悅若三遊魚銜レ鉤而出二重淵之底一。浮藻聯翩若三翰鳥纓レ繳而墜二曾雲之峻一。　文選文賦　陸士衡

遺文三十軸。軸々金玉聲。龍門原上土。埋レ骨不レ埋レ名。　題二故元少尹集一　白

言語巧偸二鸚鵡舌一。文章分二得鳳凰毛一。　贈二薛濤一　元稹

錦帳曉開雲母殿。白珠秋寫水精盤。　賀二韓侍郎及第詩一　章孝標

山のかひあるけふにやはあらぬ（古今）　躬恒

管絃　附舞妓

一聲鳳管。秋驚二秦嶺之雲一。數拍霓裳。曉送二緱山之月一。　連昌宮賦　公乘億

第一第二絃索々。秋風拂レ松疎韻落。第三第四絃冷々。夜鶴憶レ子籠中鳴。第五絃聲尤掩抑。瀧水凍咽流不レ得。　五絃彈　白

隨分管絃還自足。等閑篇詠被二人知一。　重答二劉和州一　同

頓令下燈下裁レ衣婦。誤剪中同心一片花上。　聞二夜箏一　章孝標

羅綺之爲二重衣一。妬レ無レ情於機婦。管絃之在二長曲一。怒レ不レ闋二於伶人一。　春娃無二氣力一詩序　菅

緱山―王子晉の故事

疎韻落―秋風の松の梢を拂ふが如く寂しき音を發す

隨分―又あふなあふなと訓ず、分相應の意、原詩「隨分笙歌聊自樂」

羅綺之爲重衣―綺人の美女の羅の衣もなほ重くして堪へ難き状と也

瑤臺ー仙人の居る玉のうてな
巴峽ー三峽の一
五夜ー五更
字ー巴の字
商客ー旅商人
江相公ー扶桑集によれば大江朝綱作也　後江相公とあるべし、次句も日本蒜記に據るに同斷なり
わびしらにー侘しげに

猿

瑤臺霜滿。一聲之玄鶴唳レ天。巴峽秋深。五夜之哀猿叫レ月。

清賦　謝観

江從二巴峽一初成レ字。猿過二巫陽一始斷レ腸。

送三蕭處士遊二黔南一　白

三聲猿後垂二郷涙一。一葉舟中載二病身一。

舟夜贈レ内　同

胡鴈一聲。秋破二商客之夢一。巴猿三叫。曉霑二行人裳一。

山水策　澄明

人煙一穗秋村僻。猿叫二三聲一曉峽深。

秋山閑望　紀納言

曉峽蘿深猿一叫。暮林花落鳥先鳴。

山中感懐　江相公

谷靜纔聞二山鳥語一。梯危斜踏二峽猿聲一。

送二歸レ山僧一　同

わびしらにましらな鳴きそあしびきの

丁令威—月の部に出づ
陶安公—仙人也、赤龍に乘りて去る
乳—子をはぐくむ
五絃彈—白樂天の詩
かたをなみ—干潟無くして也
さしながら—宛然
ふけひの浦—和泉

清唳數聲松下鶴。寒光一點竹間燈。　在家出家　白

雙舞庭前花落處。數聲池上月明時。　贈レ鶴詩　劉禹錫

鶴歸ニ舊里一。丁令威詞可レ聽。龍迎ニ新儀一。陶安公之駕在レ眼。　神仙策　都良香

飢啄性躁急々乳。老鶴心閑緩々眠。　晩春題ニ天台山一　同

叫レ漢遙驚ニ孤枕夢一。和レ風漫入ニ五絃彈一。　霜天夜聞ニ鶴聲一　順

わかの浦に汐みちくればかたをなみ
あし邊をさしてたづ鳴きわたる（萬葉）　赤人

大空にむれたるたづのさしながら
おもふこゝろのありげなるかな（拾遺）　伊勢

あまつかぜふけひの浦にゐるたづの
などかくも井にかへらざるべき（新古今）　清正

おほあらき—山城
おひ—たけ高くのび立ちたるを人の齢高きによそふ
もえ—萌え、上よりの縁にて燃えを兼ぬ

鶴有レ乘レ軒—衛懿公鶴を好みて車に乘せしこと
雀能穿レ屋—詩經に出づ
屈原—江南に流され漁夫の辭を作り「衆人皆醉我獨醒」の語あり
五老峯—廬山の[illegible]

ありつゝも君がきまさんみまくさにせん（拾遺）　人丸

おほあらきの森のした草おひぬれば
駒もすさめずかるひともなし（古今）　重之

やかずとも草はもえなんかすが野を
たゞ春の日にまかせたらなん（新古今）　忠見

鶴（つる）

嫌二小人而踏一高位一。鶴有レ乘レ軒。惡二利口之覆一邦家一。雀能穿レ屋。　王鳳凰賦　賈嶋

同二李陵之入一レ胡。但見二異類一。似二屈原之有一レ楚。衆人皆醉。　[illegible]賦　皇甫曾

寒來枕上千年鶴。影落盃中五老峯。　題二元八溪居一　白

顏淵、原憲―共に窮境に晏如たりし高士
綿蠻―ゆる〳〵鳴くこと
華山―周武王殷紂を征して牛馬を放ちし所
傅野―殷武帝夢に聖人を得、傅說といふ、即ち說を傅險中に得擧げて相と爲す

うきふしごとにうぐひすの鳴く（古今）　讀人しらず

しぐれするおとはすれどもくれ竹の
などよとともに色もかはらぬ（古今六帖）　素性

草

沙頭雨染斑々草。水面風驅瑟々波。　早春憶微之　白

西施顏色今何在。應在春風百草頭。　春詞　元稹

瓢簞屢空。草滋顏淵之巷。藜藋深鎖。雨濕原憲之樞。　中文　直幹

草色雪晴初布護。鳥聲露暖漸綿蠻。　春日山居　後江相公

華山有馬蹄猶露。傅野無人路漸滋。　遠草初含色　保胤

かのをかに草かるをのこしかなかりそ

われみてもひさしくなりぬ住吉の
きしのひめ松いくよへぬらん（同）　讀人しらず

あまくだるあらひと神のあひおひを
おもへばひさしすみよしのまつ（拾遺）　安法

あひおひ―此神の鎮座と共に神木として生ひ出でたる意

竹

煙葉蒙籠侵レ夜色。風枝蕭颯欲レ秋聲。　和二令狐相公栽竹一　白

阮籍嘯場人歩レ月。子猷看處鳥栖レ煙。　竹枝詞　章孝標

晉騎兵參軍王子猷。栽稱二此君一。唐太子賓客白樂天。愛爲二吾友一。　修竹冬青序　篤茂

迸筍未レ抽二鳴鳳管一。盤根纔點二臥龍文一。　禁庭植竹　前中書王

世にふればことの葉しげきくれ竹の

阮籍―晉の人、竹林七賢の一人也
子猷―竹を愛し何ぞ一日も此君無かる可けんやと云へり
太子賓客―官名
鳴鳳管―黄帝伶倫氏をして竹を崑崙に取りて笛を作らせしを云ふ

嵇康—晉の人字は叔夜、人と爲り嵒々として孤松の獨立せるが如し

養由—養由基は楚人也、柳葉を去る百歩にして百發百中す、即ち下句は柳の詠也

錯午—暑と涼と互に交錯すること

十八公—吳の丁固松樹腹上に生ふと夢む、松字は十八公也、後十八歲公たらんと、果して夢の如し

松

但有雙松當砌下。更無一事到心中。　新昌坊閑居　白

青山有雪諳松性。碧落無雲稱鶴心。　寄殷堯藩　許渾

千丈凌雪。應喩嵇康之姿。百歩亂風。誰破養由之射。　柳化爲松賦　紀納言

九夏三伏之暑月。竹含錯午之風。玄冬素雪之寒朝。松彰君子之德。　河原院賦　順

十八公榮霜後露。一千年色雪中深。　歳寒知松貞　同

含雨嶺松天更霽。燒秋林葉火還寒。　山居秋晩　後江相公

ときはなる松のみどりも春くれば
いまひとしほの色まさりけり（古今）　宗于

遊子云々ー齊の孟嘗君秦に客遊し竊に秦を遁れ函谷關に至り從者に鷄聲をなさしめて關に歸りし故事をいふ

胡笳ー笳は笛の類、胡人蘆葉を捲いて之を吹く

金屋ー壯麗なる舍

青蛾ー美人の眉

五聲宮漏ー五更を報ずる宮中の漏刻

おきてー置くに起くを掛く

曉

佳人盡飾於晨粧。魏宮鐘動。遊子猶行於殘月。函谷鷄鳴。　曉賦　賈島

幾行南去之雁。一片西傾之月。赴征路獨行之子。旅店猶扃。泣胡城百戰之師。胡笳未歇。　同　謝觀

嚴粧金屋之中。青蛾正畫。罷宴瓊筵之上。紅燭空餘。　同　同

五聲宮漏初明後。一點窓燈欲滅時。　禁中夜作　白居易

あかつきのなからましかば白露の
おきてわびしきわかれせましや（後撰）　貫之

よそにのみ見てややみなんかつらぎや
たかまの山とみねのしらくも（新古今）　讀人しらず

晴

煙消二門外一青山近。露重二窓前一綠竹低。　晴興　鄭師冉

紫蓋之嶺嵐疎。雲收二七百里之外一。瀑布之泉
波冷。月澄二四十尺之餘一。　山晴秋望多序　惟成

雲消二碧落一天膚解。風動二清漪一水面皺。　梅雨新霽　都良香

雙鶴出レ皐披レ霧舞。孤帆連レ水與レ雲消。　高天澄二遠色一　菅三品

歸レ嵩鶴舞日高見。飲レ渭龍昇雲不レ殘。　晴後山川清　以言

かすみはれみどりの空ものどけくて
あるかなきかにあそぶいとゆふ　赤人

紫蓋―山の名
漪―さゞなみ
歸レ嵩鶴―周靈王太子晉（王子喬といふ）嵩高山に上り鶴に乗りてあらはれし故事あり
渭―川の名
いとゆふ―遊絲（かげろふ）

ほのぐとありあけの月の月かげに
もみぢ吹きおろす山おろしのかぜ（新古今）　　信明

雲

竹斑湘浦。雲凝鼓瑟之蹤。鳳去秦臺。月老吹簫之地。　　愁賦　張讀

山遠雲埋行客跡。松寒風破旅人夢。　　同　寄名

終日望雲心不繫。有時見月夜方閑。　　閑女幽　元稹

漢皓避秦之朝。望凝孤峯之月。陶朱辭越之暮。眼混五湖之煙。　　觀雲知隱逸賦　以言

暫借崎嶇非載石。空餘峻嶮豈生松。　　夏雲多奇峯　都在中

漢帝龍顏遂處所。淮王鷄犬失留連。　　秋天無片雲　以言

竹斑：湘浦ー舜の二女舜の二妃を湘夫人と云ふ、舜崩ず、二妃の涙竹にかゝりて竹盡く斑なりと傳ふ
鳳去：秦臺ー蕭史簫を吹く、秦穆公其女弄玉を妻はす、後弄玉は鳳に乘り蕭史は龍に乘りて共に去る
漢皓ー漢の四皓秦の亂を避けて商山に遁る
陶朱ー越の范蠡會稽を去りて姓名を變へたる也
漢帝ー高祖のこと
淮王ー淮南王劉安

和漢朗詠集　卷下

雜

風

春風暗剪庭前樹。夜雨偸穿石上苔。　春日山居　輔昭

入松易亂。欲惱明君之魂。流水不歸。應送列子之乘。　風中琴　紀納言

漢主手中吹不駐。徐君塚上扇猶懸。　北風利如劍　保胤

班姬裁扇應誇尚。列子懸車不往還。　清風何處隱　同

おき風の吹くにつけてもとはぬかな
をぎの葉ならばおとはしてまし（後撰）　中務

列子―名は御寇、鄭人也、能く風に御して行くと云ふ

徐君―呉の季札、劍を徐君の塚に掛けし故事

颯―風が樹を吹きをふるをいふ

深見―前詩一に行爲の作とす、從ふべきか

かきくらし—空かき曇りて

かぞふれば我身につもるとしつきを
おくりむかふとなにいそぐらん　（拾遺）　同

年のうちにつくれる罪はかきくらし
ふるしら雪とともにきえなん　（同）　貫之

麞牙米―くしかの牙の如くして精米に似たるよりいふ

香自禪心―原句「香因禪心」に作る

谷のこほりはけふやとくらん（續後拾遺）　惟正

霰

雪化爲レ霰　菅

麞牙米簇聲々脆。龍頷珠投顆々寒。

みやまにはあられ降るらし外山なる
まさきのかづらいろつきにけり（古今）　貫之

佛名

獻二贈禮レ經老僧一　白

香火一爐燈一盞。白頭夜禮二佛名經一。

懺悔會作　菅丞相

香自二禪心一無レ用レ火。花開二合掌一不レ因レ春。

あらたまの年もくるればつくりつる
罪ものこらずなりやしぬらん（家集）　兼盛

氷　附春氷

氷封ニ水面ー聞無ㇾ浪。雪點ニ林頭ー見有ㇾ花。　臘月獨興　菅

霜妨ニ鶴唳ー寒無ㇾ露。水結ニ狐疑ー薄有ㇾ氷。　狐疑ㇾ氷聞ニ波聲ー　相如

おほぞらの月のひかりのさむければ
かげみし水ぞまづこほりける（新撰萬葉）　七條后宮

春氷

氷消見ㇾ水多ㇾ於ㇾ地。雪霽望ㇾ山盡入ㇾ樓。　早春憶ㇾ遊ニ思黯南莊ー　白

氷消漢主應ㇾ疑ㇾ覇。雪盡梁王不ㇾ召ㇾ枚。　早春雪氷消　篤茂

胡塞誰能全ニ使節ー。虜陀還恐ㇾ失ニ臣忠ー。　雪消氷亦解　相規

やまかげのみぎはまされる春かぜに

狐疑—狐は疑ひ深く、氷の張るを見ては氷下に水聲なきを聽き定めて始めて河を渡るといふ
おほぞらの—此歌古今集に讀人不知とあり、二三句「月の光し清ければ」
覇—光武皇帝の臣王覇が冰を踏みて渡を察せし故事
枚—前漢の枚乘、梁王を從へて雪を賦せし故事
虜陀—河の名

鶴氅―鶴の毛の衣也

腋―腋毛、其白きを雪の喩とせる也

琴聲―楚王臺の上にて琴を彈く、廻雪の曲といふ

ふる―降る、舊を

雪似鵞毛飛散亂。人被鶴氅立徘徊。　酬令公雪中見贈　白

或逐風不返。如振群鶴之毛。亦當晴猶殘。疑綴衆狐之腋。　春雪賦　紀納言

翅似得群栖浦鶴。心應乘興棹舟人。　池上初雪　村上御製

立於庭上頭爲鶴。坐在爐邊手不亀。　客舍對雪　菅

班女閨中秋扇色。楚王臺上夜琴聲。　題雪　尊敬

みやこにてめづらしと見るはつ雪の
よし野の山にふりやしぬらん（拾遺）　景明

みよし野の山のしらゆきつもるらし
ふるさと寒くなりまさるなり（古今）　是則

ゆきふれば木ごとに花ぞ咲きにける
いづれをうめとわきて折らまし（同）　友則

四皓―漢の時東園公甪里先生綺里季夏黄公とて四翁あり、商山に隠る
君子―鶴をいふ
聲不レ警―鳴かず、菅家文章に聲字「音」に作る
瓦溝―瓦屋根の溝
鴛―鴛鴦の瓦
梁王之苑―梁孝王の兎園
開―或は「拼」に作る

閨寒夢驚。或添二孤婦之砧上一。山深感動。先侵二四皓之鬢邊一。　青女司霜賦　紀納言

君子夜深聲不レ警。老翁年晩鬢相驚。　早霜　菅丞相

聲々已斷華亭鶴。歩々初驚葛履人。　寒露凝レ霜　菅三品

晨積二瓦溝一鴛變レ色。夜零二華表一鶴呑レ聲。　同前題　紀納言

夜を寒みねざめて聞けばをしぞなくはらひもあへず霜やおくらん（拾遺）

雪

曉入二梁王之苑一。雪滿二群山一。夜登二庾公之樓一。月明二千里一。　白賦　謝觀

銀河沙漲三千界。梅嶺花開一萬株。　雪中即事　白

黄醅綠醑—濁酒と清酒
逐夜開—毎夜客あるをいふ
臘裏—十二月の中
終日—一に「終夜」に作る
他—或は「多」に作る
獸炭—けものの形に作れる炭
花—蘆荻の花

爐火

黄醅綠醑迎冬熟。絳帳紅爐逐夜開。　戯招諸客　白

看無野馬聽無鶯。臘裏風光被火迎。　火見臘天春　菅三品

此火應鑽花樹取。對來終日有春情。　同　同

他時縱醉鶯花下。近日那離獸炭邊。　同　輔時

うづみ火の下にこがれしときよりもかくにくまるゝをりぞわびしき　業平

霜

三秋岸雪花初白。一夜林霜葉盡紅。　般若寺別成公　溫遊筠

萬物秋霜能壞色。四時冬日最凋年。　歳晩旅望　白

雲外夜—雲の上に高く聳ゆる山中に宿れる夜
年光—歳月の移り行く影

老底—老後

冬夜

一盞寒燈雲外夜。數盃溫酎雪中春。

和李中丞與李給事山居雪夜同宿小酌 白

年光自向燈前盡。客思唯從枕上生。

冬夜獨起 尊敬

おもひかねいもがりゆけば冬の夜のかはかぜさむみ千鳥なくなり（拾遺）

貫之

歲暮

寒流帶月澄如鏡。夕吹和霜利似刀。

江樓宴別 白

風雲易向人前暮。歲月難從老底還。

花下春 良春道

ゆく年の惜しくもあるかなますかゞみ見るかげさへにくれぬとおもへば（古今）

貫之

年々別思驚二秋鴈一。夜々幽聲到二曉雞一。　同　同

からごろもうつこゑ聞けば月きよみまだ寝ぬひとをそらにしるかな（新勅撰）　貫之

冬

初冬

十月江南天氣好。可レ憐冬景似春花。　早冬　白

四時零落三分減。萬物蹉跎過半凋。　初冬即事　延喜御製

床上卷收青竹簟。匣中開出白綿衣。　驚レ冬　菅三品

かみな月ふりみ降らずみさだめなきしぐれぞ冬のはじめなりける（後撰）　貫之

三分減—春夏秋去りて冬のみ殘るをいふ

かみな月—後撰集にはよみ人不知とす

あき霧のふもとをこめてたちぬれば
そらにぞあきの山は見えける（拾遺）　深養父

たがためのにしきなればかあき霧の
さほの山べをたちかくすらん（古今）　友則

たがための云々—誰に見せんとての錦なれば斯くは霧立ちて紅葉をかくし我には見せざるぞ

擣衣

八月九月正長夜。千聲萬聲無了時。　聞夜砧　白

誰家思婦秋擣帛。月苦風凄砧杵悲。　同　同

北斗星前横旅雁。南樓月下擣寒衣。　同　劉元叔

擣處曉愁閨月冷。裁將秋寄塞雲寒。　風疎砧杵鳴　菅篤茂

裁出還迷長短製。邊愁定不昔腰圍。　擣衣詩　直幹

風底香飛雙袖舉。月前杵怨兩眉低。　同　後中書王

南樓—昔の庾亮南樓に登りて月を翫べる故事により、北斗の對として用ふ

邊愁云々—邊塞に居るかなしみに瘦せて腰も昔ほどの太さは無からん

ゆふづく夜—枕詞

衒—或は「銜」に作る

暗—一に「暁」に作る、源詩亦然り、從ふべし

ゆふづく夜をぐらの山に鳴くしかの
　こゑのうちにや秋をしるらん（古今）　貫之

露

可憐九月初三夜。露似眞珠月似弓。　暮江吟　白

露滴蘭叢寒玉白。風銜松葉雅琴淸。　秋風颯然新　源英明

さを鹿のあさたつをののあきはぎに
　たまと見るまでおけるしらつゆ（古今）　宗持

霧

竹霧曉籠銜嶺月。蘋風暗送過江春。　庾樓曉望　白

蹔愁夕霧埋人枕。猶愛朝雲出馬鞍。　山居秋晩　後江相公

山館雨時鳴自暗。野亭風處織猶寒。　　蛬聲入二微館一　直幹

叢邊怨遠風聞暗。壁底吟幽月色寒。　　同題　順

いま來んとたれたのめけん秋のよを
　あかしかねつゝまつむしの鳴く

きりぐ〵すいたくな鳴きそ秋のよの
　ながきうらみはわれぞまされる（古今）　　素性

鹿

蒼苔路滑僧歸レ寺。紅葉聲乾鹿在レ林。　　宿二雲林寺一　温庭筠

暗遣レ食レ深身色變。更隨レ加二草德風一來。　　賦二內府歌一白鷺詩　紀納言

もみぢせぬときはの山にすむしかは
　おのれ鳴きてやあきを知るらん（拾遺）　　能宣

いま來んと—作者未詳
たのめ—たのみに思はしめ

素性—古今集によれば忠房なり又古今集第四句「長き思ひは」

暗—いつしか
加草德風—論語に「君子之德風小人之德草草上之風必偃」とあり

其故事を引く
風檣—雁の聲を遍ふ
瀟湘—二水洞庭に合流す

黒鬢、幽人—物思ふ女、世をはかなむ人

短脚—臥床の臺脚の短きをいふ

たがたまづさをかけて來つらん（古今）　友則

歸雁

山腰歸雁斜牽レ帶。水面新虹未レ展レ巾。　春日閑居　都在中

春がすみたつを見すててゆくかりははななきさとに住みやならへる（古今）　伊勢

蟲

切々暗窓下。喓々深草裏。秋天思婦心。雨夜幽人耳。　秋蟲　白

霜草欲レ枯蟲思苦。風枝未レ定鳥栖難。　答二夢得秋夜獨坐見一レ贈　同

床嫌二短脚蛬聲閙一。壁厭二空心鼠孔穿一。　秋夜　野相公

汝—原詩「爾」に作る

雁引來—原詩「雁送來」に作る

碧落—天空也

范叔—范睢字は叔、魏人也、後秦の相と爲る、初魏の中大夫須賈に事ふ、睢微行して賈を訪ふ、賈憐みて綈袍を以てす、こゝには雲を衣に譬へて

雁 附歸雁

萬里人南去。三春雁北飛。不レ知何歲月。得ニ與レ汝同歸一。

南中詠雁　韋承慶

潯陽江色潮添滿。彭蠡秋聲雁引來。

登ニ江州淸輝樓一　劉禹錫

四五朶山粧レ雨色。兩三行雁點レ雲聲。

衡陽道中　杜荀鶴

虛弓難レ避。未レ抛ニ疑於上弦之月懸一。奔箭易レ迷。猶成ニ誤於下流之水急一。

寒雁識ニ秋天一　後江相公

雁飛ニ碧落一書ニ青紙一。隼擊ニ霜林一破ニ錦機一。

秋暮傍レ山行　田達音

碧玉粧箏斜立柱。青苔色紙數行書。

天淨識ニ賓鴻一　菅三品

雲衣范叔羇中贈。風櫓瀟湘浪上舟。

賓雁似ニ故人一　後中書王

あきかぜにはつかりがねぞ聞ゆなる

梧楸影中。一聲之雨空灑。鷓鴣背上。數片之紅纔殘。

葉落風枝疎序　順

樵蘇往反。杖穿二朱買臣之衣一。隱逸優遊。履踏二葛稚仙之藥一。

落葉満二山中路一序　高相如

秋色變二山水一　順

隨レ嵐落葉含二蕭瑟一。灘レ石飛泉弄二雅琴一。

秋葉隨レ日落　後中書王

遂レ夜光多呉苑月。每レ朝聲少漢林風。

あすか川もみぢ葉ながるかつらきの
やまの秋かぜ吹きぞしぬらし　人丸

かみな月しぐれとともにかみなびの
もりのこの葉はふりにこそふれ（後撰）　貫之

見る人もなくて散りぬるおくやまの
もみぢはよるのにしきなりけり（古今）　同

樵蘇―木こり草刈り

朱買臣―漢の時會稽太守たり、錦を著て郷に歸る故事による

稚仙―葛洪字は稚川、晉の時の人、羅浮山に止りて丹藥を煉る

やまの云々―萬葉下の句「山の木の葉は今し散るかも」

かみなみ―神名備は大和

蕭疎—一に蕭條に作る
もる山—漏るに近江の守山を掛く
さほ山—大和佐保山
きりたゝぬ—霧起たぬに切り裁たぬを掛く
宮漏—宮中の漏刻
空階—人影も無く寂しき階
搖落—葉の秋風にゆり落さるゝこと

洞中淸淺瑠璃水。庭上蕭疎錦繡林。　翫二池頭紅葉一　保胤

外物獨醒松澗色。餘波合力錦江聲。　山水唯紅葉　以言

しらつゆもしぐれもいたくもる山は
　した葉のこらずもみぢしにけり（歌仙家集）　貫之

むら〳〵のにしきとぞ見るさほ山の
　はゝそのもみぢきりたゝぬまは　清正

落葉

三秋而宮漏正長。空階雨滴。萬里而鄕園何在。
落葉窓深。　愁賦　張讀

秋庭不拂携藤杖。閑踏梧桐黃葉行。　晩秋閑居　白

城柳宮槐漫搖落。秋悲不到貴人心。　早入皇城贈王留守僕射　同

多見二栽レ花悦レ目儔一。先レ時豫養待レ開遊一。　栽二秋花一　菅三品

自二吾閑寂家僮倦一。春樹春栽秋草秋。　同

閑思レ看二汝花紅日一。正是當二吾鬢白年一。　初植二花樹一詩　保胤

曾非三種處思二元亮一。爲三是花時供二世尊一。　栽二種菊一　菅三品

元亮―陶淵明の別の字

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより
いもとわがぬるとこなつのはな（古今）　躬恒

はなによりものをぞおもふしら露の
おくにもいかゞあらんとすらん

はなにより―此歌作者出典凡て未詳

紅葉　附落葉

不レ堪紅葉青苔地。又是涼風暮雨天。　秋雨中贈二元九一　白

黄纐纈林寒有レ葉。碧瑠璃水淨無レ風。　巴二太湖一書二寄微之一　同

纐纈―絞子染のこと　原詩「夾纈」に作る

香はにほひつゝ—古今集「香こそにほへれ」

薤—にら、白氏の句に「薤葉有朝露、槿枝無宿花」とあり、送葬の歌を薤露歌といへり、人生の果敢なきを喩に用ふ

ぬし知らぬ香はにほひつゝ秋の野に
　たがぬぎかけしふぢばかまぞも（古今）　素性

槿（あさがほ）

松樹千年終是朽。槿花一日自爲榮。　放言詩　白

來而不留。薤壠有拂晨之露。去而不返。槿籬無投暮之花。　願文　前中書王

おぼつかなたれとか知らん秋ぎりの
　たえまに見ゆるあさがほのはな（新勅撰）　道信中將

あさがほをなに果敢なしと思ひけん
　人をもはなはさこそ見るらめ（拾遺）　同

前栽（せんざい）

ねるやねりそのくだけてぞおもふ（拾遺）　人丸

うつろはんことだにをしきおき秋を
　折れるばかりにおけるつゆかな（同）　伊勢

秋の野のはぎのにしきをわがやどに
　鹿のねながらうつしてしがな（歌仙家集）　元輔

蘭

前頭更有蕭條物。老菊衰蘭三兩叢。　杪秋獨夜　白

扶桑豈無影乎。浮雲掩而忽昏。叢蘭豈不芳乎。秋風吹而先敗。　菟裘賦　前中書王

凝如漢女顏施粉。滴似鮫人眼泣珠。　紅蘭受露　都良香

曲驚楚客秋絃馥。夢斷燕姬曉枕薫。　蘭氣入輕風　直幹

鹿のねながら―鹿の鳴き居る聲もそつくり

前頭―我が前のあたり

扶桑―日の光をいふ

燕姬―鄭文公の妾燕姞をいふ

俗—「しよく」の訓各種の本概ね皆如此

一時情—一時の興に任せての意。或本「一枝情」に作る　あきの野に—拾遺集「つの岡に」　なはをなみ—縄の無くて也

女郎花（をみなへし）

花色如蒸粟。俗呼為女郎。聞名戯欲契偕老。
恐悪衰翁首似霜。　詠女郎花　順

をみなへしおほかる野邊にやどりせば
あやなくあだの名をやたゝまし（古今）　美材

をみなへし見るに心はなぐさまで
いとゞむかしの秋ぞこひしき（新古今）　清慎公

萩（はぎ）

曉露鹿鳴花始發。　百般攀折一時情。　新撰萬葉集詩　菅

あきの野に秋かるをのこなはをなみ

おきまどはせる—置きて花か霜かと人をまどはかす
崤函—嶮重なる關所の名
蕭瑟—秋風の寂しき形也
孟賁—古の勇士
頭目云々—頭目はやりても今日一日の秋はやられぬ
文峯、詞海—作文作詩などする場所
もとゆひ—髻也、頭髮の意

こゝろあてに折らばやをらん初霜の
　おきまどはせるしら菊のはな（古今）　躬恒

九月盡

縱以二崤函一爲レ固。難レ留二蕭瑟於雲衢一。縱令二孟賁一而追。何遮二爽籟於風境一。　山寺惜レ秋序　順

頭目縱隨二禪客乞一。以レ秋施與太應レ難。　山寺九月盡　同

文峯按レ轡白駒景。詞海艤レ舟紅葉聲。　秋未レ出二詩境一　以言

やまさびし秋もくれぬとつぐるかも
　まきの葉ごとにおけるあさしも　千里

くれて行く秋のかたみにおくものは
　わがもとゆひの霜にぞありける　兼盛

一半黄—黄菊半分開きたり

嵐陰—もやのくもり、秋景と相對して秋のさまをいふ

陶家—陶淵明

不垂堂—文選「家累千金坐不垂堂」家のはし近かに出でず

叢—蘭蕙の花に何れも叢なり

いく代つもりてふちとなるらん（拾遺）　中務

菊

霜蓬老鬢三分白。露菊新花一半黄。
九月八日酬皇甫十見贈　白

不ニ是花中偏愛レ菊。此花開後更無レ花。
十日菊花　元稹

嵐陰欲レ暮。契ニ松柏之後凋一。秋景早移。嘲ニ芝蘭之先敗一。
翫ニ禁庭殘菊一　紀納言

酈縣村閭皆潤レ屋。陶家兒子不ニ垂堂一。
菊散ニ一叢金一　三善清行

蘭苑自慙レ爲ニ俗骨一。槿籬不レ信レ有ニ長生一。
菊是草中仙　保胤

蘭蕙苑嵐摧レ紫後。蓬萊洞月照レ霜中。
花寒菊點レ叢　菅三品

ひさかたの雲のうへにて見るきくはあまつ星とぞあやまたれける（古今）　敏行

赤萸—ぐみ
黃花—黃菊の花
彭祖—帝顓頊の玄孫年壽七百餘歲
三遲—宴席に遲參したる者への罰盃をいふ
谷水—陽酈縣に甘谷水あり、詳しき故事抱朴子に見ゆ
日精—菊のこと
年顏—年とると共に衰ふる顏色

世にふればもの思ふとしもなけれども　月にいくたびながめしつらん（拾遺）　後中書王

九日　附菊

燕知社日辭集去。菊爲重陽冒雨開。　秋日東郊作　皇甫冉

採故事於漢武。則赤萸插宮人之衣。尋舊跡於魏文。亦黃花助彭祖之術。　觀賜群臣菊花詩序　紀納言

先三遲兮吹其花。如曉星之轉河漢。引十分兮蕩其彩。疑三秋雲之廻洛川。　同　同

谷水洗花。汲下流而得上壽者三十餘家。地脈和味。喰日精駐年顏者五百箇歲。　同　同

わがやどの菊のしらつゆけふごとに

月

誰人隴外久征戍。何處庭前新別離。　秋月　白

秋水漲來船去速。夜雲收盡月行遲。　汴水東歸即事　部　居

不レ醉二黔中一爭去得。磨圍山月正蒼々。　送三蕭處士遊二黔南一　白

天山不レ辨何年雪。合浦應レ迷舊日珠。　禁庭翫レ月　三統理平

欲レ和二豐嶺鐘聲一否。其奈二華亭鶴警一何。　夜月似二秋霜一　前中書王

鄉淚數行征戍客。棹歌一曲釣漁翁。　山川千里月　保胤

あまの原ふりさけ見ればかすがなる
みかさのやまに出でしつきかも（古今）　安倍仲麿

しら雲にはねうちかはし飛ぶかりの
かずさへ見ゆるあきの夜のつき（同）　躬恒

戍—或は戌に作る、從ふべし

合浦—縣名也、貪吏のため に疲弊し珠玉他境に去るといふ

豐嶺鐘聲—豐山に九鐘あり

華亭鶴—丁令威道を學んで後鶴に化し華表に居りし故事をいふ

故人—舊友
嵩山—五岳の一
兩顆珠—空と水と二つの月
十二廻—一年十二ヶ月
瑤池—西王母が仙宮の池をいふ
金膏—水銀
楊貴妃—唐玄宗之を寵す
李夫人—漢武帝之を寵す

八月十五日夜禁中獨直對月憶元九　白
三五夜中新月色。二千里外故人心。

八月十五日夜翫月　同
嵩山表裏千重雪。洛水高低兩顆珠。

天高秋月明序　紀納言
十二廻中無勝於此夕之好。千萬里外各爭於吾家之光。

月影滿秋池詩　淳茂
碧浪金波三五初。秋風計會似空虛。

同　同
自疑荷葉凝霜早。人道蘆花過雨餘。

同　同
岸白還迷松上鶴。潭融可算藻中魚。

同　同
瑤池便是尋常號。此夜清明玉不如。

滿月明如鏡　菅三品
金膏一滴秋風露。玉匣三更冷漢雲。

對雨戀月　源順
楊貴妃歸唐帝思。李夫人去漢皇情。

順
水のおもにてる月なみをかぞふれば
こよひぞ秋のもなかなりける　（拾遺）

といふ愛妓を之に置く、時々夫を訪うて獨棲す

孤舟夢—只一つ舟がかりせる舟中の人の故郷の夢

萬里心—邊塞に出征せる軍士の故鄕を思ふ心

いづらは—いづくに有るぞ

秦甸—畿内の地

氷鋪—月の照り渡れる形容

相思之字—晉の竇滔の妻蘇氏夫を思ひ廻文の詩を錦に織り込みし故事を指す

蔓草露深人定後。終宵雲盡月明前。　秋夜詣祖廟詩　野相公

蒹葭洲裏孤舟夢。楡柳營頭萬里心。　秋夜雨　齊名

あしびきのやまどりの尾のしだりをの
ながながし夜をひとりかもねん（拾遺）　人丸

むつごとのまだつきなくに明けにけり
いづらは秋のながしてふ夜は（古今）　躬恒

八月十五夜　附月

秦甸之一千餘里。凜々氷鋪。漢家之三十六宮。澄々粉餝。　長安八月十五夜賦　公乘億

織錦機中。已辨相思之字。擣衣砧上。俄添怨別之聲。　同

松臺—松樹のはとりの臺榭か

をぐら山—新古今によみ人不知とす

ほのか—幽、仄か

燕子樓—邸宅也　張建封、盼々

秋晩

相思夕上松臺立。蛬思蟬聲滿耳秋。　題李十一東亭　白

望山幽月猶藏影。聽澗飛泉轉倍聲。　法輪寺口號　菅三品

をぐら山ふもとの野べのはなすゝき
ほのかに見ゆるあきのゆふぐれ（新古今）　貫之

秋夜

秋夜長夜長無眠天不明。耿々殘燭背壁影。
蕭々暗雨打窓聲。　上陽白髮人　白

遲々鐘漏初長夜。耿々星河欲曙天。　長恨歌　同

燕子樓中霜月夜。秋來只爲一人長。　燕子樓　同

林間煖レ酒燒二紅葉一。石上題レ詩掃二綠苔一。　白

楚思淼茫雲水冷。商聲淸脆管絃秋。　於二黃鶴樓一宴罷望　同

大底四時心惣苦。就レ中腸斷是秋天。　暮立　同

物色自堪レ傷二客意一。宜將二愁字一作二秋心一。　客舍秋情　野相公

由來感レ思在二秋天一。多被二當時節物一牽。　秋日感懷　田達音

第一傷レ心何處最。竹風鳴レ葉月明前。　同

蜀茶漸忘二浮花味一。楚練新傳二擣レ雪聲一。　暑往寒來詩　江相公

うづら鳴くいはれの野邊のあき萩を
おもふ人とも見つるけふかな

あきはなほ夕まぐれこそたゞならね
をぎのうはかぜ萩のしたつゆ（藤原義孝集）　義孝少將

楚思―楚囚の思、故鄕を思ふ情の切なること
商聲―秋聲
蜀茶―蜀州の茶名有り
楚練―楚國の練絹
いはれの―磐余野は大和なり
たゞならね―一通りにあらず最も寂し

珠―涙の玉、鮫人の涙が珠玉たりし故事
怨―或は恨に作る
去衣―織女の歸り去る時の衣
行燭―道行くに携ふるともし火

露應二別涙一珠空落。　雲是殘粧髻未レ成。　代二牛女一惜二曉更一　菅

風從二昨夜一聲彌怨。　露及二明朝一涙不レ禁。　代二牛女一惜レ曉　後江相公

去衣曳レ浪霞應レ濕。　行燭浸レ流月欲レ消。　七夕含レ睇渡二河橋一詩　菅三品

詞託二微波一雖二且遣一。　意期二片月一欲レ爲レ媒。　代二牛女一待レ夜　菅輔昭

あまの川とほきわたりにあらねども
　きみのふなではとしにこそまて（後撰）　人丸

ひとゝせに一夜とおもへどたなばたの
　あひ見る秋のかぎりなききかな（拾遺）　貫之

としごとにあふとはすれどたなばたの
　ぬる夜のかずぞすくなかりける（古今）　躬恒

秋興

早秋

但喜暑隨三伏去。不知秋送一毛來。　早秋答蘇六　白

槐花雨潤新秋地。桐葉風涼欲夜天。　早秋　同

炎景剩殘衣尚重。晚涼潛到簟先知。　立秋後作　紀家

秋たちていくかもあらねどこのねぬる

あさけの風はたもとすゞしも（拾遺）　安貴王

七夕

憶得少年長乞巧。竹竿頭上願絲多。　七夕　白

二星適逢未敍別緒依々之恨。五夜將明頻驚涼風颯々之聲。　代牛女惜曉更詩序　美材

二毛―毛髪の黒白半するを云ふ

炎景―炎暑の氣

秋たちて―萬葉に出て二句「いくかもあらねば」五句袂さぶしも

乞巧―文章女婦の巧ならんを二星に乞ふ也

願絲―二星に願をかけて竹竿に繫ぶ九條の絲

五夜―五更のこと

きみが手にまかする秋のかぜなれば
　なびかぬ草もあらじとぞおもふ（家集）　中務

秋

立秋

蕭颯涼風與二衰鬢一。誰教二計會一一時秋一。　白
（立秋日登二樂遊園一）

鷄漸散間秋色少。鯉常趨處晩聲微。　保胤
（於二菅師匠舊亭一賦二一葉落レ庭時一詩）

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
　かぜの音にぞおどろかれぬる（古今）　敏行

うちつけにものぞ悲しきこの葉ちる
　秋のはじめをけふとおもへば（後撰）　能宣

きみが手に—此歌四句或は「なびかぬ草は」「なびかぬ色も」に作る

鯉常趨處—師父より教訓を受けし當亭の義、鯉は孔子の子、論語季氏篇に出でたる「鯉趨而過庭」孔子に教を受けし故事による

晩聲—夕方木の葉の散る聲

月—扇の形を喩ふ

夜漏初分—日暮れて夜の初更にいること

かさまし—手向けん。たなばたに手向くるをかすといひ習へり

そらにぞ蟬のこゑはきこゆる　人丸

これを見よ人もとがめぬこひすとて
ねをなく蟲のなれるすがたを（後撰）　重光

扇

盛夏不レ消雪。終年無レ盡風。引レ秋生二手裏一。藏レ月入二懐中一。　白羽扇　白

不レ期夜漏初分後。唯歎秋風未レ到前。　輕扇動二明月一　菅三品

あまの川かは瀬すゞしきたなばたに
あふぎの風をなほやかさまし（拾遺）　中務

あまの川扇のかぜにきりはれて
空すみわたるかさゝぎのはし　元輔

かぜにきえぬはほたるなりけり（新勅撰）　赤人

つゝめどもかくれぬものはなつ蟲の
身よりあまれるおもひなりけり（後撰）

おもひ—思ひに火を言ひ掛く。

蟬

遲々兮春日。玉甃暖兮溫泉溢。嫋々兮秋風。山蟬
鳴兮宮樹紅。　驪山宮賦　白

千峯鳥路含二梅雨一。五月蟬聲送二麥秋一。　發二青泥店一至二長安一西方渡江之作　李嘉祐

鳥下二綠蕪一秦苑靜。蟬鳴二黃葉一漢宮秋。　題二咸陽城東樓一　許渾

今年異レ例腸先斷。不二是蟬悲一客意悲。　聞二新蟬一　菅

歲去歲來聽不レ變。莫レ言秋後遂爲レ空。　吟二初蟬一　紀納言

なつ山のみねのこずゑのたかければ

嫋々—風のそよ吹く形容

千峯鳥路—鳥ならでは至り難き程の連山の高所

麥秋—四月

秦苑靜—原詩「秦苑夕」に作る

ひとづてにこそ―夜半郭公啼けりと人より傳へぎきに
屋上―江泌夜讀書するに月光に隨ひて卷を握りて屋に昇りし故事
床頭―孫康雪に映じて讀書せる故事
山經―山海經の山經也
海賦―木華の作
くさふかき―新勅撰集にはよみ人しらず

ゆきやらで山路くらしつほとゝぎす
いまひとこゑの聞かまほしさに（拾遺）　公忠

さよふけて寝ざめざりせば郭公
ひとづてにこそ聞くべかりけれ（同）　忠見

螢

螢火亂飛秋已近。辰星早沒夜初長。　夜坐　元稹

蒹葭水晴螢知レ夜。楊柳風高雁送レ秋。　常州留二與楊給事一　許渾

明々仍在。誰追二月光於屋上一。皓々不レ消。豈積二雪片於床頭一。　秋螢明一帙賦　紀納言

山經卷裏疑レ過レ岫。海賦篇中似レ宿レ流。　同　橘直幹

くさふかきあれたる宿のともしびの

風荷老葉蕭條緑。水蓼殘花寂寞紅。
縣西郊秋寄ニ贈馬造階下一　白

葉展影飜當レ砌月。花開香散入レ簾風。
階下蓮　白

煙開ニ翠扇一清風曉。水泛ニ紅衣一白露秋。
題ニ雲陽驛亭蓮一　許渾

岸竹枝低應ニ鳥宿一。潭荷葉動是魚遊。
池亭晩望　紀在昌

縁レ何更覓吳山曲。便是吾君座下花。
亭子院法皇御賀吳山千葉蓮華屏風詩　延喜御製

經爲ニ題目一佛爲レ眼。知汝花中植ニ善根一。
石山寺池蓮　源爲憲

はちす葉のにごりにしまぬ心もて
なにかは露をたまとあざむく（古今）
[illegible]僧正

郭公

一聲山鳥曙雲外。萬點水螢秋草中。
題ニ[illegible]居一將レ尋ニ同志一　許渾

さつき闇おほつかなきにほとゝぎす
鳴くなるこゑのいとゞはるけき
明日香皇子

風荷—風になびく蓮
砌—階段
翠扇—蓮の葉の開ける形容
吳山曲—流や大臣願無佛と稱して吳山の池が背蓮華を採り得し故事
佛爲レ眼—佛眼を青蓮瓣に譬ふ
山鳥—ほとゝぎす
さつき闇—萬葉「この夜らのおほつかなきに時鳥鳴くなる聲のおとのはるけさ」の改作

なごしのはらへ—六月晦日の大祓
盧橘—夏蜜柑
薫風—南風
さつき待つ—此歌古今集によみ人しらずとせり

いづれかさきにおきまさるらん　中務

ねぎごともきかずあらぶる神だにも
　けふはなごしのはらへなりけり　齋宮

花橘

盧橘子低山雨重。栟櫚葉戰水風涼。　西湖晩歸望孤山寺白

枝繋金鈴春雨後。花薫紫麝凱風程。　花橘詩　後中書王

さつき待つ花たちばなの香をかげば
　むかしの人のそでの香ぞする（古今）　伊勢

ほとゝぎす花たちばなの香をとめて
　啼くはむかしのひとや戀しき（新古今）　貫之

蓮

新圖臨水障―新に水邊の景色を畫ける障子

いは井―岩井、石疊みの井戸

臥見二新圖臨水障一。行吟二古集納涼詩一。　題二納涼之畫一　菅

池冷水無二三伏夏一。松高風有二一聲秋一。　夏日閑避レ暑　源英明

すゞしやと草むらごとにたち寄れば
　あつさぞまさるとこなつのはな（古今六帖）　貫之

したくゞる水にあきこそかよふらし
　むすぶいづみの手さへすゞしき（新千載）　中務

松かげにいは井の水をむすびあげて
　なつなき年とおもひけるかな（拾遺）　惠慶法師

晩夏

竹亭陰合偏宜レ夏。水檻風涼不レ待レ秋。　夏日遊二永安水亭一　白

夏はつるあふぎと秋のしらつゆと

有レ時當レ戸危レ身立。無レ意故園任レ脚行。　　懸二艾人一　菅

わかごまとけふにあひくるあやめ草
おひおくるゝやまくるなるらん　（歌仙家集）　頼基

きのふまでよそに思ひしあやめぐさ
けふわがやどのつまと見るかな　（拾遺）　能宣

納涼

青苔地上消二殘雨一。綠樹陰前逐二晚涼一。　　池上逐涼　白

露簟清瑩迎レ夜滑。風襟瀟灑先レ秋涼。　　池上夜境　同

不三是禪房無二熱到一。但能心靜卽身涼。　　恒寂禪師　同

班婕妤團雪之扇。代二岸風一兮長忘。燕昭王招涼之珠。當二沙月一兮自得。　　過二[illegible]水石一序　匡衡

艾人―艾草にて作りたる人形、五月五日毒氣を禳ふ爲めとて戸上に懸く
無レ意云々―戸に懸けらるゝ其位置は危ふげなれど衣冠を帶しゝたる我樣の麗しさに敢てもと生へ居りし庭園を戀しとも思はず
つま―端也、軒のつまに妻を掛く
殘雨―原詩「殘暑」に作る
簟―簟は竹筵也
班婕妤―班況の女、漢成帝の宮人たり、婕妤は官名也、其賢德行に溢る最も有名也
招涼之珠―王之を懷にして常を納るといふ玉

平沙—ひろ〲としたる河邊の沙原

ねぬに明けぬ—夏の夜はまだねぬ内に明けたりと誠に短し

ほとゝぎす—との歌萬葉集には二句「きなくさつきの」に作り、拾遺と共に詠者不詳とせり

夏夜

風吹二枯木一晴天雨。月照二平沙一夏夜霜。　江楼夕望　白

風生レ竹夜窓間臥。月照レ松時臺上行。　早夏獨居　同

空夜窓閑螢度後。深更軒白月明初。　夜陰歸レ房　紀納言

夏の夜をねぬに明けぬといひおきし
　人はものをやおもはざりけん　人丸

ほとゝぎす鳴くやさつきの短夜も
　ひとりしぬればあかしかねつも（拾遺）　同

夏の夜はふすかとすれどほとゝぎす
　鳴くひとこゑにあくるしのゝめ（古今）　貫之

端午

経宿―一夜を過したる
生衣―生絹にて作りたる夏の衣
宿醸―年越しの酒、昨秋より醸し置ける酒の今春に至りて熟せるもの
竹葉―酒の異名
小蓋―小さききぬがさ、初夏の小さき荷葉の形容

更衣（ころもがへ）

背壁燈殘經宿焰。開箱衣帶隔年香。　早夏曉興　白

生衣欲待家人著。宿醸當招邑老酣。　讃州作　菅

花の色にそめしたもとの惜しければ
ころもかへ憂きけふにもあるかな（拾遺）　重之

首夏（しゆか）

甕頭竹葉經春熟。階庭薔薇入夏開。　薔薇正開春酒初熟　白

苔生石面輕衣短。荷出池心小蓋疎。　首夏作　物部安興

わがやどのかきねや春をへだつらん
なつ來にけりと見ゆる卯のはな（拾遺）　順

關々—鳥聲相和する也

たこのうら—越中

名だてに—浮名を立つるものとなりて

わがやどのやへの山吹ひとへだに
散りのこらなん春のかたみに（拾遺）　兼盛

藤

悵望慈恩三月盡。紫藤花落鳥關々。　開元十八三月三日慈恩寺見寄　白
紫藤露底殘花色。翠竹煙中暮鳥聲。　四月有餘春詩　源相規

たこのうらのそこさへにほふ藤波を
かざして行かん見ぬひとのため（拾遺）　縄丸

ときはなる松の名だてにあやなくも
かゝれる藤の咲きてちるかな（續古今）　貫之

夏

寒食―冬節を去る一百五日疾風甚雨あるを云ふ、此時火を禁ず

ときはの山―時を掛く、山は山城太秦の北に在り

詔紙―麻を以て製し其色黄也

躑躅

晩蘂尙開紅躑躅。秋房初結白芙蓉。　題元十八溪居 白

夜遊人欲尋來把。寒食家應折得驚。　山石榴艶似火 源順

思ひいづるときはの山のいはつゝじ
いはねばこそあれ戀しきものを（古今）　平貞文

欵冬

點著雌黄天有意。欵冬誤綻暮春風。　清愼公

書窓有卷相收拾。詔紙無文未奉行。　題花黄 保胤

かはづ鳴くかみなびがはに影みえて
いまや咲くらん山ぶきのはな（新古今）　厚見王

落花

落花不レ語空辭レ樹。流水無レ心自入レ池。
過二元家履信宅一　白

朝踏二落花一相伴出。夕隨二飛鳥一一時歸。
春水頻與二李二賓客一郭外同遊因贈二長句一　同

春花面々闘二入酣暢之筵一。曉鶯聲々豫二參講誦之座一。
春日侍二前鎮西都督大王一讀二史記一序　後江相公

落花狼藉風狂後。啼鳥龍鐘雨打時。
惜二殘春一　同

離レ閣鳳翅憑レ檻舞。下レ樓娃袖顧レ階飜。
落花浸繞レ樹詩　菅三品

さくら散るこのした風はさむからで
そらに知られぬ雪ぞふりける（拾遺）　貫之

とのもりのとものみやつこ心あらば
この春ばかりあさぎよめすな（同）　公忠

闘入—妄に入ること
酣暢—酒宴
龍鍾—疲れ衰ふること
翅—或は翎に作る
あさぎよめ—朝の掃除

蜀人云々―白氏六帖に「蜀成都有濯錦之江」所謂蜀江の錦はこれに基く

同題序　順

亦蜀人濯レ文之錦粲爛。

花開如レ散レ錦　菅三品

織自二何絲一唯暮雨。裁無二定様一任二春風一。

同題　源英明

花飛如レ錦幾濃粧。織者春風未レ疊レ箱。

同上　同

始識春風機上巧。非二唯織レ色織二芬芳一。

花少鶯稀　源相規

眼貧二蜀郡一裁殘錦。耳倦二秦城一調畫箏。

世の中にたえてさくらのなかりせば
　春のこゝろはのどけからまし（古今）　業平

わがやどのはな見がてらにくる人は
　散りなんのちぞこひしかるべき（同）　躬恒

見てのみや人にかたらんやまざくら
　手ごとに折りていへづとにせん（同）　素性

くる—來る、縒る

上苑—上林苑也、始皇之を開き漢武之を重修す

輕軒—輕きくるま

一入再入—幾度もくりかへし染めたる

はるのくるにぞいろまさりける（新千載）　錄輔

花（はな）附落花

花明二上苑一。輕軒馳二九陌之塵一。猿叫二空山一。斜月瑩二千巖之路一。　閑賦　張讀

池色溶々藍染レ水。花光焰々火燒レ春。　早春招二張賓客一　白

遙見二人家一花便入。不レ論三貴賤與二親疎一。　尋レ春題二諸家園林一　同

瑩レ日瑩レ風。高低千顆萬顆之玉。染レ枝染レ浪。表裏一入再入之紅。　花光水上浮序　菅三品

誰謂水無レ心。濃艶臨兮波變レ色。誰謂花不レ語。輕漾激兮影動レ脣。　同上　同

欲レ謂二之水一。則漢女施レ粉之鏡淸瑩。欲レ謂二之花一。　同

巫女廟—赤帝の女桃花を巫山の廟に葬れる所
昭君村—王昭君の生地
嵆宅—晉の嵆康の宅
陸池—南齊の陸慧曉の池

巫女廟花紅似レ粉。昭君村柳翠二於眉一。　題二峽中石上一　同

誠知二老去風情少一。見レ此爭無二一句詩一。　與レ前一首絶句也　同

大庾嶺之梅早落。誰問二粉粧一。匡廬山之杏未レ開。豈趁二紅艶一。　内宴序停レ盃看二柳色一　紀納言

雲擎二紅鏡一扶桑日。春嫋二黄珠一嫩柳風。　早春作　田達音

嵆宅迎レ晴庭月暗。陸池逐レ日水煙深。　柳影繁初合詩　後中書王

潭心月泛交レ枝桂。岸口風來混レ葉蘋。　垂柳拂二緑水一詩　菅三品

あをやぎのいとよりかくる春しもぞ
　みだれて花はほころびにける（古今）　貫之

春くればしだれやなぎにまよふ絲の
　いもがこゝろによりにけるかな

あをやぎの眉にこもれるいとなれば

仙方―仙人の處方

仙臼―仙人の藥を煉る臼

淺紅鮮娟。仙方之雪。媿レ色濃香芬郁。妓爐之煙讓レ薰。　媿レ鶯梅正開詩　橘正通

有レ色易レ分殘雪底。無レ情難レ辨夕陽中。　賦二庭前紅梅一　前中書王

仙臼風生空簸レ雪。野爐火暖未レ揚レ煙。（[illegible]）　紅白梅花　紀齊名

君ならでたれにか見せんうめのはな
いろをも香をも知る人ぞしる（古今）　友則

色かをばおもひもいれずうめのはな
つねならぬ世によそへてぞ見る（新古今）　花山院

柳

林鶯何處吟二箏柱一。墻柳誰家曝二麴塵一。　天宮閣早春　白

漸欲レ拂二他騎馬客一。未三多遮二得上レ樓人一。　喜二小樓西新柳抽一レ條　同

陶門柳―陶淵明宅邊に五柳樹あり、自ら五柳先生と稱す
庾嶺―大庾嶺とて梅に名有り
五嶺―大庾始安臨賀桂陽揭陽の五嶺也

あやなし―かくしたとて香があらはれて何の役にも立たねば

雞舌―香の名

青絲繰出陶門柳。白玉裝成庾嶺梅。　尋二春花一　後江相公

五嶺蒼々雲往來。但憐大庾萬株梅。　同題　菅文時

誰言春色從レ東到。露暖南枝花始開。　同　菅三品

いにしとし根こじてうゑし我宿の
わか木のうめは花さきにけり（拾遺）　安倍廣庭

わがせこに見せんと思ひし梅のはな
それとも見えずゆきの降れゝば（萬葉）　赤人

香をとめてたれ折らざらん梅のはな
あやなしかすみたちなかくしそ（拾遺）　躬恒

紅梅

梅含二雞舌一兼二紅氣一。江弄二瓊花一帶二碧文一。　早春尋二李校書一　元稹

宮也獻公作之
龍池―興慶宮に在り、明皇遊ぶ所

ぬける―貫ける

臘雪―臘は十二月也

養得自爲花父母。洗來寧辨藥君臣。　仙家春雨　紀納言

花新開日初陽潤。鳥老歸時薄暮陰。　春色雨中深　菅三品

斜脚暖風先扇處。暗聲朝日未晴程。　微雨自東來　保胤

さくらがり雨は降りきぬおなじくは
　濡るとも花のかげにかくれん（拾遺）　讀人しらず

あをやぎの枝にかゝれるはるさめは
　いともてぬけるたまかとぞ見る（新勅撰）　伊勢

梅　附紅梅

白片落梅浮澗水。黄梢新柳出城墻。　春至香山寺　白居易

梅花帶雪飛琴上。柳色和煙入酒中。　早春初晴野宴　章孝標

漸薰臘雪新封裏。偸綻春風未扇先。　寒梅結早花　村上御製

鑽レ沙草只三分計。跨レ樹霞纔半段餘。　春淺帶二輕寒一　菅丞相

きのふこそ年はくれしかはるがすみ
かすがの山にはや立ちにけり（萬葉）　人丸

春がすみたてるやいづこみよし野の
よし野のやまにゆきは降りつゝ（古今）　赤人

あさ日さすみねのしら雪むらぎえて
春のかすみはたなびきにけり（家集）　兼盛

雨

或垂二花下一潛增二墨子之悲一。時舞二巷間一暗動二潘郎之思一。　密雨散如レ絲序　都在中

長樂鐘聲花外盡。龍池柳色雨中深。　聞二下第一贈二舍人一　[illegible]

墨子之悲—墨翟、練絲を見て「以て黄にすべく以て黒くすべし」と泣く、是は[illegible]潘郎之思—晉の潘岳[illegible]二毛を歎ず、[illegible][illegible]長樂—[illegible]

間關―鳥の鳴ずる聲

顧二間關於新花一。　　同題　同

新路如今穿二宿雪一。舊巣爲レ後屬二春雲一。　　鶯出レ谷　菅丞相

西樓月落花間曲。中殿燈殘竹裏音。　　宮鶯囀二曉光一　菅三品

あらたまの年たちかへるあしたより
　待たるゝものはうぐひすのこゑ（拾遺）　　素性

あさみどり春たつそらにうぐひすの
　はつこゑ待たぬ人はあらじな（榮花物語）　　麗景殿女御

うぐひすのこゑなかりせば雪きえぬ
　山ざといかではるを知らまし（拾遺）　　中務

霞

霞光曙後殷二於火一。草色晴來嫩似レ煙。　　早春晴寄二蘇州夢得一　白居易

人のこゝろにあかれやはせぬ（古今）　伊勢

鶯

鷄既鳴忠臣待レ旦。鶯未レ出遺賢在レ谷。　鳳爲レ王賦　賈島

誰家碧樹鶯啼而。羅幕猶垂。幾處華堂夢覺而珠簾未レ巻。　春曉聞鶯賦　謝觀

咽レ霧山鶯啼尚少。穿レ砂蘆笋葉纔分。　早春尋二李校書一　元稹

臺頭有レ酒鶯呼レ客。水面無レ塵風洗レ池。　和三思黯憶二南莊一　白

鶯聲誘引來二花下一。草色拘留坐二水邊一。　春江　同

感二同類於相求一。離鴻去鴈之應二春囀一。含二意氣一而終混二龍吟魚躍之作一曉啼一。　鳥聲韻二管絃一序　菅三品

燕姬之袖暫收猶二縱亂於舊拍一。周郎之簪頻動

蘆笋—笋は筍也、蘆の芽也

燕姫—漢の成帝の后趙飛燕、舞の妙手として有名也。周郎—呉の周瑜、音樂に通ぜり、[illegible]時人謠に「曲有レ誤、周郎顧」[illegible]

はありと思ふ時すら花の蔭は立ちうきにまして今日のみと思ふ今日は殊に立ち去り難し

金陵―三國の呉以後南朝の都たり

はるくはゝれる―閏月ありて春の一月加はる意

たつことやすき花のかげかは（古今）　躬恒

はなもみな散りぬるやどはゆく春の
ふるさととこそなりぬべらなれ（拾遺）　貫之

またもこん時ぞと思へどたのまれぬ
わが身にしあれば惜しきはるかな（後撰）　同

閏三月

今年閏在春三月。剰見金陵一月花。　送淮南李中逐行軍　陸侍郎

歸鞍歌鶯更逗留於孤雲之路。辭林蝶還翩翻
於一月之花。　今年又有春序　源順

花悔歸根無益悔。鳥期入谷定延期。　滋藤

さくらばなはるくはゝれる年だにも

集といひ、其第一首初句に「何處春光好、春深富貴家」

蕭索—花散りてものさびし

韶光—のどけき春

けふのみと云々—明日もなほ春

いたづらに過ぐる月日はおほけれど
はな見てくらすはるぞすくなき（家集）　興風

三月盡

留レ春春不レ駐。春歸人寂寞。厭レ風風不レ定。風起花蕭索。　落花古調詩　白

竹院君閑消二永日一。花亭我醉送二殘春一。　酬二皇甫賓客一　同

惆悵春歸留不レ得。紫藤花下漸黄昏。　題二慈恩寺一　同

送レ春不レ用レ動二舟車一。唯別三殘鶯與二落花一。　同

若使三韶光知二我意上。今宵旅宿在二詩家一。　送レ春　尊敬

留レ春不レ用二關城固一。花落隨レ風鳥入レ雲。　三月盡　同

けふのみと春をおもはぬときだにも

曾波ー曾は眉にて眉なる意、美人のふたへまぶたをいふ

不言之口ー史記李廣傳「桃李不言下自成蹊」

みちとせになるてふ桃ー西王母の漢の武帝に献ぜし桃

野馬ー陽炎也

劉白ー劉禹錫と白居易との唱答の詩を劉白唱和

桃

夜雨偸濕曾波之眼。新嬌暁風緩吹。不言之口先咲。

桃花詩序　紀納言

みちとせになるてふ桃のことしより
はな咲くはるにあひにけるかな（拾遺）

躬恒

暮春

拂水柳花千萬點。隔樓鶯舌兩三聲。

過元稹志襄陽樓口占　元稹

低翅沙鷗潮落暁。亂絲野馬草深春。

晩春遊松山館　菅丞相

人無更少時須惜。年不常春酒莫空。

春光細賦　小野篁

劉白若知今日好。應言此處不言何。

深春好　源順

かたみ―筐也、形見を書掛く

仙源―武陵桃源をいふ

曲水―三月三日の宴

巳字―水の象

魏文―魏の文帝曹丕

源起周年―晉書束晳傳に「昔周公洛邑に城く流水に因て以て酒を汎ぶ故に逸詩に曰く羽觴隨レ波」

幾年―幾年の舊例、石云々―曲水宴は盃を流に泛べ己の前を過ぐる程に詩を賦するなれば、遲きは詩早く成りて心に盃を待ち、速きは詩成らずして先づ手にて盃を遮ると也

かたみに摘めるわかななりけり　　貫之

三月三日　附桃

春來遍是桃花水。不レ辨二仙源一何處尋。　　桃源行　王維

春之暮月。月三朝。天醉二于花一。桃李之盛也。我君一日之澤。萬機之餘。曲水雖レ遙。遺塵雖レ絶。書二巳字一而知二地勢一。思二魏文一以翫二風流一。蓋志之所レ之。謹獻二小序一云レ爾。　　花時天似レ醉序　菅

煙霞遠近應二同戸一。桃李淺深似二勸盃一。　　同題詩　菅丞相

水成二巳字一初三日。源起二周年一後幾霜。　　縈レ流送二羽觴一　菅篤茂

凝レ石遲來心竊待。牽レ流遄過手先遮。　　同　菅雅規

蕙心―蕙は蘭也、婦人の心を云ふ
荑指―荑は茅の始めて生ずるを云ふ、婦人の指に譬ふ

ちよのためしになるを引かまし（拾遺）　忠岑

ちとせまでかぎれる松もけふよりは
君にひかれてよろづ代やへん（同）　能宣

若菜

野中芼レ菜。世事推ニ之蕙心ー。爐下和レ羹。俗人
屬ニ之荑指ー。　菅丞相（催粧序）

あすからは若菜つませんかたをかの
あしたのはらはけふぞ燒くめる（拾遺）　人丸

あすからは若菜つまんとしめし野に
きのふもけふもゆきは降りつゝ（新古今）　赤人

行きてみぬ人もしのべとはるの野の

春の夜の云々ー春の夜の闇といふやつは誠れ譯の分らぬやつ也、斯く梅の花の色は見えずかくすとも其香はかくれはせぬものを、どうせ其位ならば色もかくさず置くがよい

しめつるー兼て子の日の爲めと定め置きたる

千年翠ー「千歳之松」といふ語史記に出づ

二月之雪ー梅花を喩ふ

背レ燭共憐深夜月。踏レ花同惜少年春。　春夜與二盧四周諒一花陽觀同居　白

春の夜のやみはあやなしうめの花　躬恒
いろこそ見えね香やはかくるゝ（古今）

子日　附若菜

倚二松樹一以摩レ腰。習二風霜之難レ一犯也。和二菜羹一而啜レ口。期二氣味之克調一也。　雲林院行幸　菅

倚二松根一而摩レ腰。千年之翠満レ手。折二梅花一而插レ頭。二月之雪落レ衣。　子日序　尊敬

ねの日しにしめつる野べのひめ小松
引かでやちよのかげを待たまし（新古今）　清正

ねの日する野邊に小松のなかりせば

上陽—支那の縣の名

麴塵—萠黄色

われにて知りぬ—自分の心持によりて能く他の心も推知せらる

歌酒家々花處々。莫三空管二領上陽春一。　送二令狐尚書赴二東都一　白

山桃復野桃。日曝二紅錦之幅一。門柳復岸柳。風宛二麴塵之絲一。　逐レ處花皆好序　紀齊名

著レ野展敷紅錦繡。當レ天遊織碧羅綾。　春生　野相公

林中花錦時開落。天外遊絲或有無。　上レ寺望二聚落一　田達音

笙歌夜月家々思。詩酒春風處々情。　悅者衆　菅三品

もゝしきの大宮人はいとまあれや
さくらかざしてけふもくらしつ（新古今）　赤人

はるはなほわれにて知りぬ花ざかり
こゝろのどけき人はあらじな（拾遺）　忠岑

春夜

萌芽を出したるを、史記平原君傳に見えたる嚢中の錐の故事によそへていへり

ひま—すきま

綺羅—美しく亂れもつれて立つをいふ

氣霽風梳二新柳髮一。氷消波洗二舊苔鬚一。　春暖　都良香

庭增二氣色一晴沙綠。林變二容輝一宿雪紅。　草樹晴迎レ春　紀納言

いはそゝぐたるひの上のさわらびの
　もえいづる春になりにけるかな　（古今）　志貴皇子

山かぜにとくるこほりのひまごとに
　うちいづるなみや春のはつはな　（同）　正澄

見わたせば比良のたかねに雪きえて
　わかな摘むべく野はなりにけり　（續後撰）　兼盛

春興

花下忘レ歸因二美景一。樽前勸レ醉是春風。　酬二哥舒大見一レ贈　白

野草芳菲紅錦地。遊絲繚亂碧羅天。　春日書懷寄東洛白楊　劉禹錫

ひぢてむすびし―ぬらして掬ひ上げたる

蘆錐―蘆の新芽の尖りたるを錐に喩ふ

紫塵―蕨の穗の紫色に細對

錐脫囊―蘆の

夜向二殘更一寒碧盡。春生二香火一曉爐燃。　山寺立春　良春道

袖ひぢてむすびしみづのこほれるを
はるたつ今日のかぜやとくらん（古今）　紀貫之

春たつといふばかりにやみよし野の
やまもかすみてけさは見ゆらん（拾遺）　忠岑

早春

氷消二田地一蘆錐短。春入二枝條一柳眼低。　寄二樂天一　元稹

先遣二和風一報二消息一。續教二啼鳥一說二來由一。　春生　白

東岸西岸之柳。遲速不レ同。南枝北枝之梅。開落已異。　春生逐二地形一序　保胤

紫塵嫩蕨人拳レ手。碧玉寒蘆錐脫レ囊。　和二早春晴一　野相公

和漢朗詠集　巻上

春

立春

逐吹潛開。不待芳菲之候。迎春乍變。將希雨露之恩。
内宴進花賦　公乘億

池凍東頭風度解。窓梅北面雪封寒。
立春日書懷呈芸閣諸文友　篤茂

年のうちに春は來にけりひととせを
こぞとやいはんことしとやいはん　（古今）
在原元方

柳無氣力條先動。池有波文氷盡開。
白居易

今日不知誰計會。春風春水一時來。
府西池　同

吹—風なり

東頭—東方、頭はほとりの意

年のうちに云々—舊年の内に立春の節來りたれば、この一年を今年といはんか去年といはんかと也

計會—理めもくろみ合はせしか

おぎのりわざ――品物と引替に金を拂はず懸にて買ふこと

かやつ――彼奴

おぎのりわざをして。錢もてこず。おのれだにこず。

國のかた（同　上）

なほこそ。國のかたは。見やられ。わが父母。ありとしおもへば。カヘラヤ。

川そひ柳（榮花物語所載）

川そひ柳。風ふけば。動くと見れど。根はつよし。

ほとゝぎす（枕草子所載田植歌）

ほとゝぎす。おれよかやつよ。おれ鳴きてぞ。我は田に立つ。

夜は誰と（同書所載）

よるは。誰と寢ん。常陸の。介と寢ん。寢たる。肌もよし、

また（同　上）

男山の。峰のもみぢ葉。さぞ名が立つ。さぞ名が立つ。

昆明池—昆明國にあり、方二百里と稱す
嚴陵瀨—後漢の光武帝の時嚴子陵富春山に隱れて耕釣して終る

以下は特に民謠なり、併せてこゝに收む

水のすぐれて。おぼゆるは。西天竺の。白鷺池。じむしやう許由に。すみわたる。昆明池の。水の色。ゆくすゑ久しく。澄むとかや。賢人の釣を。垂れしは。嚴陵瀨の。河の水。月影ながら。漏るなるは山田の筧の。水とかや。蘆の下葉を。とづるは。三島入江の氷水。春立つ空の。若水は。汲むとも〳〵。盡きもせじ。つきもせじ。

伊佐立奈牟（同上）

いざ立ちなん。鴛鴦の鴨鳥。水まさらば。とくぞまさらん。

白薄様（同上）

白うすやう。濃染紫の紙。まきあけの筆。巴書いたる。筆の軸。ヤレコトウトウ。

春の野（土佐日記所載舟歌）

春の野にてぞ。音をば泣く。わがすゝきにて。手を切る切る。摘んだる菜を。親や貪食るらん。姑やくらふらん。カヘラヤ。よんべの。童女もがな。錢こはん。空言をして。

衣被女—見物の女

其九

ついたて。見たれば。神のます内野の。森の影の。高さよ。

其十

ついたて。見たれば。御隨身の。持ちたる。立松明の。しろさよ。

其十一

ついたて。見たれば。衣被女の。おほさよ。

其十二

ついたて。見たれば。舞姫の。おほさよ。

其十三

すさまじく。いふなる。十二月の。月夜を。豊のあかりの。光は。めづらしくぞ。覺ける。

水猿曲（又は水白拍子）（同　上）

歳寒レ秋に十返り—松は百年に一度花さき其花の十回も咲く程の意、即ち「千歳之松」と漢久にいへる意也

日蔭の糸—神事に日蔭蔓の代りに冠の笄の左右に懸けたる白青の絹糸の紐

其三

見るにめでたき。花のいろ。千とせの松に。降る雪。

其四

豐年のしるしは。天に滿ちて。降る雪。

其五

年のうちに。咲く梅。くれなゐにほひの。薄雪。

其六

日蔭の糸に。むすほほれ。小忌の袖に。置く霜。

其七

おまへの池の。鴨どり。上毛の霜の。しろさよ。

其八

ついたて。見たれば。御階の月の。あかさよ。

びんだたら—髮のおちたるをいふとぞ

八千とせ—莊子逍遙游篇ニ上古有大椿者以八千歲爲春八千歲爲秋

雜藝

鬢多々良（五節間郢曲）

びんだたらを。あゆかせばこそ。あゆかせばこそ。愛敬づいたれ。ヤレコトウトウ。

思之津（同　上）

おもひの津に。舟のよれかし。星のまぎれに。おして參らう。ヤレコトウトウ。

物云舞（又は萬歲樂）（同　上）

其一

千世に萬代。かさなるは。鶴のむれゐる。龜岡。

其二

椿のかげは八千とせ。松花のいろは。十返り。

松のこかげ云々し朗詠集「倚レ松根而摩レ腰千年之翠満レ手」の句と相似たり

峰のあらしの。はげしさに。木々の木の葉も。散りはてて。

松の木陰に　（同　上）

松のこかげに。立ちよれば。千とせの緑は。身にしめども。松が枝かざしに。さしつれば。春の雪こそ。降りかゝれ。

大宮權現　（日吉山王利生記所載）

大宮權現は。おもへば教主。釋迦ぞかし。一たび此地を。蹈む人は。靈山界會の友となる。僧都慶増作

四大聲聞—一決定聲聞二退菩提聲聞三應化聲聞四増上慢聲聞

ゆく—取る

四大聲聞。いかばかり。よろこび身よりも。餘るらむ。われらは末世の佛ぞと。たしかに聞きつる。今日なれば。

熊野にまします（同　上）

熊野にまします。權現は。名草の濱にぞ。おりたまふ。和歌の浦にし。ましませば。年はゆくとも。若王子。

ちはやぶる神（同　上）

ちはやぶる神。上におはします。ものならば。あはれに。おぼしめせ。神もむかしは。人ぞかし。

春のはじめ（同　上）

春のはじめの。梅の花。よろこび開けて。實なるとか。みたらし川の。うす氷。こゝろ解けたる。たゞいまかな。

峰の嵐の（同　上）

あやめて―怪しみて、この歌「忍ぶれど色に出にけり我が戀は物や思ふと人の問ふまで」による

かれ―うと／＼しく離れさかる意、菊の縁にて枯れにいひ掛く

こゝろの内には。忍べども。色に出にけり。我戀は。ものやおもふと。みな人の。あやめていかにと。問ふまでに。

藥師の十二の　（古今著聞集所載）

藥師の十二の。誓願は。衆病悉除。たのもしき。一經其耳は。さておきつ。皆令滿足すぐれたり。

ませのうちなる　（同　上）

笆のうちなる。白菊も。うつろふ見るこそ。あはれなれ。我等が通ひて。見し人も。かくしつゝこそ。かれにしか。

像法轉の　（梁塵口傳集所載）

像法轉の。時にては。藥師の誓ぞ。たのもしき。一たび御名を。聞く人は。よろづの病なしといふ。

四大聲聞　（同　上）

人の國—外國

たのめし人—必ず來るとたのみに思はせられし人

をさまりなびく。時なれや。一天四海の。内のみか。人の國まで。日の本の。もろこしが原も。此ところ。

信濃にあるなる　（體源抄所載）

信濃にあるなる。木曾路川。君におもひの。深ければ。水沫に袖をも。ぬらしつゝ。あらぬ世をこそ。すぐしけれ。

竹のよなかは　（同　上）

竹の夜中は。あはれぬる。ふしも定めず。起きゐつゝ。人に知られぬ。戀をして。鳥の鳴くまで。寢も入らず。

よしなの我等が　（同　上）

よしなの我等が。獨寢や。かばかり寒き。冬の夜に。ころも薄くて。夜は長し。たのめし人は。待てどこず。

心の内には　（同　上）

春はさくらの。流るれば。吉野川とは(イも)。なづけたり。秋は紅葉の。ながるれば。立田川とも。いひつべし。冬も末に。なりぬれば。法師も紅葉も。ながれたり。

あたりの野邊の　（同　上）

あたりの野邊の。白眞弓。おし張りすびきし。肩に掛け。なれぬほどは。何にせん。馴れての後は。そるぞくやしき。藤原實方作

月影のみ　（同　上）

月影のみよするは。田上川の。みなかみ。稻舟のわづらふは。最上川の早き瀬。そこと も知らぬ。琵琶の聲。霞のひまに。まぎ(イさ)れり。

別のことさら　（曾我物語所載）

わかれの殊更。かなしきは。親のわかれ。子のなげき。夫婦の思と。兄弟と。いづれを分きて。思ふべき。袖にあまれる。忍音を。かへしてとゞむる。關もがな。

をさまりなびく　（吾妻鏡所載）

ありのすさびー あるが儘に任せての意、源氏物語の註に「ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人はこひしかりける」

さまも心も　（同　上）

さまも心も。かはるかな。おつる涙は。瀧の水。妙法蓮華の。池となり。弘誓の舟に。さをさして。沈む我身を。のせたまへ。

月も同じ　（長門本平家物語所載）

月も同じ月。空も同じ空の。いかなれば。こよひの空の。照りまさるらん。

ありのすさびの　（義經記所載）

ありのすさびの。にくきだに。ありきのあとは。戀しきに。あかで離れし。面影を。いつの世にかは。忘るべき。

わかれのことに　（同　上）

わかれのことに。悲しきは。親のわかれ。子のわかれ。すぐれてげにも。悲しきは。夫妻の別。なりけり。

春はさくらの　（同　上）

ものゆゑに—ものなるに

彌陀—無量壽佛

君があげこし　（同　上）

君があげこし。手枕の。たえて久しく。なりにけり。何しにひまなく。むつれけん。ながらへもせぬ。ものゆゑに。

心のやみの　（同　上）

心のやみの。深きをば。燈籠の火こそ照らすなれ。彌陀の誓を。たのむ身は。照らさぬところも。なかりけり。

はくろは　（同　上）

白露は月の。ひかりにて。黄土うるほす。化あり。權現舟に。さをさして。むかひの岸に。よする波。

佛の方便　（同　上）

ほとけの方便。なりければ。神祇の威光。たのもしや。たゝけば必ず。ひゞきあり。仰げば定めて。花ぞさく。

千手—觀音也

ふるき都　（源平盛衰記所載）

ふるき都を。來て見れば。淺茅が原とぞ。なりにける。月の光は。くまなくて。秋風のみぞ。身にはしむ。後德大寺實定作

よろづの佛の　（同　上）

よろづの佛の。願よりも。千手の誓ぞ。たのもしき。枯れたる木草も。たちまちに。花さき實なる。とこそ聞け。

君をはじめて　（同　上）

君をはじめて。見る時は。千代も經ぬべし。姬小松。おまへの池なる。龜岡に。鶴こそむれゐて。あそぶなれ。

佛も昔は　（同　上）

佛もむかしは。凡夫なり。我らもつひには。ほとけなり。三身佛性具しながら。へだつる心の。うたてさよ。

今様

春の初 （郢曲譜）

ヤ。春のはじめのヤ。梅の花ヤ。よろこびひらけて。みなるはな。おまへの池なる。薄こほり。こゝろとけたるヤ。たゞいまかな。

蓬莱山 （同　上）

ヤ。蓬莱山にはヤ。千とせふるヤ。萬歳千秋かさなれりン。松のえだには。鶴すくひ。巌がそばには。亀あそぶ。

りやうぜんみやま （同　上）

靈山みやまのヤ。五葉松ヤ。竹葉なりとぞ。人はいふ。われも見る。竹葉なりとも。折りもてこん。閨のかざしに。まつさゝん。

雁なちば。名のりぞせまし。猶くどひなりや。トウ〳〵。

鳴高し—音高しとて制する也
あなかま—あゝ喧し、制止の詞
あそか—密（ミソ）か
八少女—あまたの少女

鳴高

一段

鳴高しャ。鳴高し。大宮近くて。なりたかし。アハレノ。なりたかし。

二段

音なせそや。音なせそ。

三段

あなかま。こむともャ。あそかなれ。

八平止女

八少女は。わが八少女ぞ。立つや八少女。立つや八少女。神の坐す。高天の原に。立つや少女。立つや八少女。

彼乃行

かの行くは。雁か鵠か。雁ならば。ハレヤ。トウ〳〵。

だる小柳。しだるカイテハヤ。國ぞ富せむ。郡ぞ榮えむ。里ぞ富せむ。吾家ぞ富せむヤ。しだるこやなぎ。

平之高倍

をしたかべ。鴨さへ來ゐる。原の池に。生ふる玉藻はヤ。よき草の。ゆかりぞヤ。まねな刈りそヤ。

此歌前の鴛鴦と略同じ

伊勢人

伊勢人は。あやしきものをヤ。なとてへば。小舟に乘りてヤ。波の上を漕ぐヤ。波のへをこぐヤ。

あやしきものをヤ―奇しき事をなすよの意
なとてへば―何と云へば也

加比加禰

甲斐が嶺に。白きは雪かヤ。否をさの。かひの褻衣や。ならす調布や。さらすてふくりヤ。

よこはち云々—今非似閑は横大路に酒を買ひの意とす

ちゝらゝ—眞淵は父母とす

うそふい—嘯きなるべし

てうと—調度也、弓矢の類

しだら—しだるに同じ、垂也

荒田

あらたに生ふる。富草の花。手に摘み入て。宮へ參らむ。なかつたえ。

東路

あづまぢに。かるかやの。よこはちになさけを。かいかるかやの。見ねばや。こともやすらに。かるかやの。しさや。かいかるかやの。

菅牟良

すがむらの。ヤハレ。小菅叢のヤ。むらのヤ。生ひては我こそ。かい刈らめ。

知々良々

ちよらよが門に。うそふい。まろこそ立てれ。てうとをひさげて。などかはや立でりしもせざらむ。おのれかや。最愛者の門に。てうとをひさげて。

我門

わが門のや。しだら小柳。サハレ。トウ〱しだる小柳。しだるカイテハ。ナヨヤ、し

大鳥一篇

常陸にも。田をこそ作れ。あだ心や。兼ぬとや君が。山を越え。野を越え。雨夜きませる。

筑波山

筑波山。葉山しげ山。しげきをぞや。たが子も通ふな。下にかよへ。我つまは下に。

月面

月のおもを。さわたる雲の。まさやけくみる。なはの。圓江の。秋なれば。霧立ちわたる。なはのつぶら江。

大鳥

大鳥の。羽根に。ヤレナ。霜降れり。ヤレナ。誰かさ云ふ。千鳥ぞさいふ。鶏ぞさいふ。蒼鷺ぞ。京より來て。さ云ふ。

奈末不利

なはのつぶら江の。春なれば。霞みて見ゆる。なはのつぶら江。

小車

小車。綿の紐とかむ。宵りをしのばせヨヤナ。われしのばせこ。われしのばせ。そよまさに。ねてけらしも。月の面を。さわたる雲の。まさやけく。みるこ。さやけくみる。

宵りを―宵上り、をは上と同意の強辭なるべし

陸奥

アハレヤ。阿武隈に。霧立ちわたり。明けぬとも。夫をばやらじ。待てばすべなしヤ。

此歌古今集に見ゆ

甲斐

甲斐が嶺を。さやにも見しがヤ。けゝれなく。心なく。横ほり立てる。さやの中山。

此歌同上

さやにも見しが云々―明らかに見たしと思ふのに心なくも

常陸

筑波嶺の。このもかのもに。陰はあれどヤ。君がみかげに。ます陰も。ますかげもなしヤ。

此歌古今集に出づ

同

鸍—和名抄「多加閉、貌似レ鴨而小背上有レ文」
まね—眞に也

此歌古今集に見ゆ

おのをによする—己を似寄する、己をそれに比する意なるべし

鴛鴦

鴛鸍。鴨さへ來る。原の池のヤ。玉藻はまねな刈りそヤ。生ひも續ぐがにや。おひもつぐがに。

之太乃浦

しだの浦を。朝こぐ小舟。さし寄せろ。我さへ乗りてナ。しだゝ。しだの浦みむヤ。

君平置天

君を置きて。あだし心を。我持たばヤ。ナヨヤ。末の松山。波も越えなむヤ。波もこえなむ。

越方

遠方や。彼方や。安達の原にたよるからに。
たよるからに。うわるからに。おのをによする。さ寢としなくに。
よせばよせ。よせばよせ。よそふる人の。憎からなくに。

こゆるすりきぬ—眞淵云、こゆすぐりきぬの誤也、此所より過來ぬと也
戀すくせ—戀のやりすごしにくき也
此歌古今集東歌に見え「菜摘む」を「磯菜摘む」に作る

風俗

小筑波

小筑波を。こゆるすりきぬ。かへりきてヤ。たが戀すくせ。をつくばを。こゆるすきぬ。

小由流支

小淘綾の。磯立ち馴らし。磯ならし。菜摘む。童女ぬらすな。ぬらすな沖に折れ。をれ波ヤ。
濡ろ／＼も。君が食すべき。めすべき。菜をし摘み。摘みて。ハヤ。

玉垂

玉だれの。小瓶を。中にするゑて。主はもや。肴覓ぎに。肴とりに。こゆるぎの。磯の若和布。刈りあげに。

うれ—末
いはたした—地名なるべし
あせか—何故か
千早振—この歌古今集東歌の最末に出づ
おほひれ、をひれ—大比枝小比枝か
よらなれや—寄らぬが如し
とほめ—吾が遠望をいふ

袖を垂れて。あな安らけ」。千鳥故に。濱に出て。遊ぶ千鳥故に。文も無き小松がうれに。網な張りそ。網な張りそ」。いはたしたヱ。笠忘れたりや。いはたしたヱ。殿原もしろくもがなや。笠奉り置かむ。笠奉り置かむや」。知らざらむ。あせか其殿原。知らざらむ。いはたなるや。たへのとのは。近き隣を。近き隣を」。以上六段

求女子歌

アハレ。千早振。賀茂の御社の。姫小松。アハレ姫小松。萬代經とも。色はかは。アハレ色はかはらじ。

於保比禮

おほひれや。をひれの山は。よりてこそ。よりてこそ。山はよらなれや。とほめはれと。

東遊

手ー琴笛の手
さかむのねー盛の音か

なゝくさー人名か地名かならん
さ寝ーさは發語

一歌

ヲヲヲヲ。ハレナ。手を調へろな。歌とゝのへむな。さかむのねエ。ヲヲヲヲ。

二歌

エ我脊子が。今朝の琴手は。アハレ。七つ絃の。八つ緒の琴を。調べたることや。なをかけや。あまのかつのをけや。ヲヲヲヲ。

駿河歌

ヤ。有度濱に。駿河なる。有度濱に。打ち寄する波は。なゝくさの妹。ことこそよし。ことこそよし」。なゝくさのいもは。ことこそよし。あへるとき。いささ寢なんや。なゝくさのいも。ことこそよし」。あな安らけ。あな安ら安ら。あな安らけ。練の緒の。衣の

かやるか。かやるか。中は絶えたるか(ィなかはたいれたるか)。

奥山

おく山に。木伐るや翁。木を(ィう)やは削る。眞木やはけンづる。木けンづるをぢ。

奥々山

おく山に。木流すと。木伐る翁(ィさか木かをち)。木やと木やと。木を(ィう)やはけンづる。眞木やはけンづる。木けンづる翁。

我家

わいへン(ィわがいへ)は。帷帳をも。垂れたるを。大君きませ。聟にせん。御肴に。何よけん。鮑さだえ(ィを)か。石陰子よけん。あはびさだえか。かぜよけん。

わいへン―我家也
さだえ―榮螺

なんばーなには也

めぐるもしるくーめぐるが如く我もさま〳〵に悩みたるが、遂に其甲斐ありて時にあへりと也こゝ迄凡て時にあへるといふ爲めの序也比喩也

帯を取られてー高麗人が好色の情より女の帯を取りしなるべし

難波海

なんばの海。なんばの海。漕ぎもてのぼる。小舟大舟。
つくし津までに。今すこし(ィい)のぼれ。山崎までに。

鈴之川

すゞか川。すゞか川。八十瀬の瀧を。みな人の。めぐ(ィつ)るもしるくや。時にあへる。
時にあへるかもや。

石川

一段

いしかはンの。高麗人に。帯を取られて。からき悔する。

二段

いかンなる。いかンなる帯ぞ。縹の帯の。中は絶えたる。

三段

わかせヤ—まゐれとも謡ふ
まゆとじめ—眉の美しき女、又は眉を抜かずして立てたる女なるべし、とじめは刀自女
たふとこりんぞ—たふ〳〵蹈りんぞ也
まうでくる—やつて来る途に

美濃山に。繁に生ひたる。玉柏。豊の明に。あふがたのしさヤ。あふがたのしさヤ。

眉止之女

大御酒わかせヤ（イみまくさとりかへ）。まゆとじめ。まゆとじめ。まゆとじめヤ。まゆとじめ。まゆとじめ。

酒飲

酒をたうべて。たべ酔うて。たふ（イん）とこりんぞや。まうでくる。なよろほひそ。まうでくる。タンナ。タンヤ。タリヤ（イリ）。ランナ（イリラ丶又タンナ）タリチリラ（イウ）。

田中井戸

田中の井戸に（イも）。光れる田水葱。摘め〳〵吾子女。田中の子あこめ（イこめこめて）。タラリ。ラリ。田中の子あこめ。

無力蝦

ちからなき（イい）かへる。力なき（イい）かへる。骨なき（イい）蚯蚓。骨なき（イい）みよず。

込んだり—五月の菖蒲を多く持寄りたる也
さやめ—あやめ、さあやめの略也
總角—童男
かより—かは搖頭語、寄り
本滋—木の茂りたること

てぞ。あそびあへる。

大宮

大宮の。西の小路に。菖蒲込んだり。さやめこんだり。タリ。ヤリ。タンナ。

總角

あけまきや。タ(イト)ウ〳〵。尋ばかりや。タ(イト)ウ〳〵。放りて寢たれども。まろび逢ひにけり。タ(イト)ウ〳〵。かより逢ひにけり。タ(イト)ウ〳〵。

本滋

一段

もとしげき。もとしげき。吉備の中山。昔より。むかしから。

・

二段

むかしから。昔より。名の舊りこぬは。今の世のため。けふの日のため。

美濃(イ蓑)山

青の云々—此宛字凡て守部の入綾の説に據る

淩箭矢—淩羽とて風を淩ぎて直に飛ぶ也、其羽の眞箭(サヤ)也

肱笠—袖笠、久方の雨といふ枕詞より轉じ來れる語なるべし

席田—美濃

青馬

青の(イう有り)ま。放れば取り繋げ。眞青(イせ)の馬。はなれば取りつなげ。しのいざやの。淩箭矢の。箭雄(イせ)子が孫なる。眞郎子。眞大膽(イたはろん)子の。大氣のわら(イろ)はの。さを(イせ)こがひこなる。さいろンこ。

妹之門

妹が門や。夫が門。行き過ぎかねてや。わがゆかば。肱笠の。ひぢがさの。雨もや降らなん。郭公。雨やどり。笠やどり。やどりてまからん。しでたをさ。

席田

一段

むしろだのヤ。席田の。伊津貫川にヤ。住む鶴の。いつぬき川にヤ。すむつるの。

二段

すむ鶴のヤ。すむつるの。千歳をかねてぞ。あそびあへる。よろづよ(イちとせを)かね

藤生野—山城
しめはやし—定めたる意
がに—爲めに
朱雀—大路也
まだい—まだきの音便

藤生野

一段

ふぢふのの。かたち。かたちが原に(イを)。しめはやし。ナヨヤ。しめはやし。ナヨヤ。

二段

しめはやし。いつき。いはひしも(イになし)しるく(イし)。時にあへるかも(イヤ)。時にあへるかもヤ。

妹與我

いもとわれと。妹と我と。いるさの山の。山蘭。手な觸れそヤ。香を薫す(イまさる)がにヤ。香を(イとく)増さすがにや。

淺緑

あさみどりヤ。濃い縹。染めかけたりと。見るまでに。玉光る。下光る。新京。朱雀の。しだり柳。まだい(イは)田居となる。前栽秋萩撫子。唐葵。しだり柳。

こざかごゆ—小賢し肥えにて男の癇る意の詞かと云ふ
招くをなみ—招き呼ぶべき手段なく閉口す

此歌古今集に出づ
みまさかや云々—上二句「さらさらに」の序

うばたまり。われを。我を戀ふらし。こざかごゆ(イえす)なるや。こざかごゆなるや。

鷹山

一段

たか山に。たかを。鷹を(イになし)放ちあげて。招くよし(イちあけて)を無み。アハレ。をぐをなみ。ハレ。

二段

をくをなみ。わがす。わがする時に。會へる夫かも(イり)ヤ。あ(イの)へるせなかも。

美作

一段

みまさかや。くめの。久米の佐良山。さら〳〵に。ナヨヤ。さら〳〵に。ナヨヤ。

二段

さら〳〵に。わがな。我名はたえ(イて)じ。よろづよまでにや。萬代までにや。

三つば四つば―三棟四棟、子孫一族の榮ゆるをいふ也

春日すら云々―春の長き日に行き行きてすら盡きぬ程長き倉の垣よと也

うばたまり―守部云、姥專女（ウバタウメ）也

このとのは。むべも。宜も（イになし）富みけり。三枝の。アハレ。さきくさの。ハレ。

二段

さき草の。三つば四つばの中に。殿づくりせりヤ。とのづくりせりヤ。

此殿西

一段

この殿の。此殿の。西の。西の倉垣。春日すら。アハレ。春日すら。ハレ。

二段

春日すら。ゆけど。ゆけどもつきず。西の倉垣や。にしのくらがきや。

此殿奥

一段

この殿の。此殿の。おくの。奥の造酒舎の。うばたまり。アハレ。うばたまり。ハレ。

二段

竹河—伊勢多氣郡齋宮にあり

めざしたぐへて—童女を一所に添へて、めざしは童女の一名

出でて我寢ぬ—忍び出でて思ふ人と寢たり

竹河

一段

竹河の。橋のつめなるや。橋のつめなる(イヤ)。花園に。ハレ。

二段

花ぞのに。我をば放てや。我をば放てや。めざしたぐへ(イたよえ)て。

河口

一段

かはぐちの。關の荒垣や。關のあらがきや。まもれども。ハレ。

二段

まもれども。出でて我寢(イになし)ぬや。出でてわれ寢ぬや。關のあらがき。

此殿者

一段

余波—波の引きたる後に泡立ち殘る波

此歌は光仁天皇潛龍の時童の謡也

榎の葉井—光仁天皇の妃井上内親王の意を掛く

白璧—天皇の諱也、續日本紀に白壁王とあるは此歌によれば壁は璧の誤なるべし

きのくにの。紀の國のヤ（イになし）。白良の濱に。ましらゝの濱に。おり（イきて）ゐる鷗。ハレ。その玉もてこ。

二段

風しも吹いたれば。餘波しも立てれば。水底霧りて。ハレ。その玉見えず。（其玉ひかる 有怪時習用、）

葛城

一段

かづらきの。寺の前なるや。豐浦の寺の。西なるや。

二段

榎の葉井に。白璧沈くや。眞白璧沈くや。おしとンど。おしとンど。

三段

しかしてば（イしらてしては）。國ぞ榮えんや。我家らぞ。富せんや。おしとンど。おしとンど。おしとンど。

瓜たつまでに—破瓜の年頃に、みづあげしてもよい年頃に

此歌古今集に出づ

三段

いかにせん。なりやしぬら(イなま)し。瓜たつまでに。ヤライシナヤ。サイシナヤ。瓜たつま。瓜たつまでに。

眞金吹

一段

まがねふく。眞金ふく(イになし)。吉備の中山。帶にせる。ナヨヤライシナヤ。サイシナヤ。帶にせる。ハレ。

二段

帶にせる。細谷川の。音のさやけさ。ヤライシナヤ。サイシナヤ。音のさや。おとのさやけさ。

紀伊國

一段

とゞろける—讒言によりて騒ぎ立ちたる意

天地の云々—以下嫁の辯解の辭

すがな—すげなき也。「菅の根の」は序詞

狛のわたり—山城木津の渡に近き名所にて昔聰瓜の名物を出したる所

とゞろける。この家。此いへの。弟嫁。親にまうよこし。けらしも。

四段

天地の。神も。かみも。證したべ。我はまうよこし。申さず。

五段

菅の根の。すがな。無情ことを。我は聞く。われは聞くかな。

山城

一段

山しろの。狛のわたりの瓜つくり。ナヨヤライシナヤ。サイシナヤ。瓜つくり。うりつくり。ハレ。

二段

瓜つくり。我を欲しといふ。いかにせん。ナヨヤライシナヤ。サイシナヤ。いかにせん。いかにせん。ハレ。

ちとめ—とゞめ

ことゝ—言端

つまさせる—事とせる女ありの意

眞來じヤ—口にはいへど實際は歸り來ぬに相違なし

しあす—明後日

まうよこし—橫言を申し、讒言し

一段

さくらびと。さくら人。その舟ちゞめ。島つ田を。十町つくれる。見て歸り來んヤ。ソヨヤ。あ(イさ)すかへりこんヤ。ソヨヤ。

二段

ことをこそ。明日ともいはめ。をちかたに。つまさるせな—有禁忌常不用也、よばふひと—仍替用之 なれば。明日も眞來じヤ。ソヨヤ。しあ(イしや)すもさねこじや。ソヨヤ。

葦垣

一段

あしがき。まがき。かきわけて。踏み越す(イてふこす又けふこす)と。追ひ越すと。ハレ。

二段

踏み(イてふ)越すと誰か。たれか。此ことを。親に。まうよこし。申しゝ(イけらしも)。

三段

皇天平十四年正月群臣に宴を賜ひし時六位以下の人の歌へるなり

二段

かくしこそ。仕へまつらめヤ。よろづ代までに。

三段

アハレ。ソコヨシヤ。よろづよまでに。

梅枝

此歌古今集にあり

一段

むめがえに。來居る鶯ヤ。春かけて。ハレ。

二段

春かけて。鳴けどもいまだヤ。雪は降りつゝ。

三段

アハレ。ソコヨシヤ。雪は降りつゝ。

櫻人

櫻人―尾張作良暇の人

此歌は續日本紀に見ゆ、聖武天

○呂(りよ)

安名尊(あなたふと)

一段

あなたふと。あなたふと(イになし)。今日(けふ)の尊(たふと)さや。いにしへも。ハレ。

二段

いにしへも。かくやありけんや。今日のたふとさ。

三段

アハレ。ソコヨシヤ。けふのたふとさ。

新年(あたらしきとし)

一段

あたらしき。あたらしき。年(とし)のはじめにヤ。かくしこそ。ハレ。

とゞこほれ―出發も滯る、旅枕の後朝のさま也

西寺の云々―父子心を合せて御物をかすめ取る者あるを早く公へ訴へよとの諷諭なるべしと、守部の説也

くぼのなを云々―守部の異說を列べたるものなるべし、「[illegible]」と古註本に見えたり

めど。夜妻(イはあり)さだめつや。サキンダチヤ。

鷄鳴

鷄は鳴きぬてふ。今朝くらまぎれ。下紐の緒に。おしすがりゐてこそ。とゞこぼれ。泣く子なすまで。

老鼠

西寺の。おいねずみ。若鼠。御裳喰づ。袈裟つんづ。けさつんづ。法師に申さん。師にまうせ。法師に申さん。師に申せ。

隱名

くぼ(イを)のなをば。なにとかいふ。くぼ(イを)のなをば。なにとかいふ。つび(イう又ら)たり。けふくなう。たもろ(イは)。ひのなかの。ひつき(イく)めな。けふくなう。たもろ。

鷹の子は。余に賜らんや。手にすゑて。粟津の原の。御栗栖の。めぐりの鶉。取らさんや。サキンダチヤ。

逢路

あふみちの。しののをずす(イふよ)き。はやひかず。子持。待ちやか(イと又せ)ぬらん。しののをずすきヤ。サキンダチヤ。

道口

みちのくち。武生の國府に。我はありと。親には申したべ。心あひの風ヤ。サキンダチヤ。

更衣

ころもがへせんや。サキンダチヤ。我衣は。野原篠原。萩の花摺や。サキンダチヤ。

何爲

いかにせん。せんや(イになし)。鴛鴦の鴨鳥。出でてゆけ(イかば)。親はありくと。さいな

しののをずすき—しのは靡く物の意、小薄也、女に譬ふ
はやひかず—早くうけひかざりし様に
子持ゑ々—今は子持となりて我を待ち兼ぬらん
心あひの風—我が戀ひ思ふ親の方に吹き行く風
さいなめど—叱責すれど

しなひ—柳の枝の撓み垂れたるをいふ
大芹—樗蒲にたとへて樗蒲を大簇と云ふ
小芹—四六を小簇と云ふ
せんばんさんたのき—栴檀瑪瑙の木かと守部は云ふ
むしかめ—牟蛙食也、勝ちの乙と
かすめ浮けたる—はのかに浮紋をつけたる也
浅水—越前
ふりにし—舊りにし、上の句は序也
消息し—案内の意
サキンダチヤ—公達也、拍子詞とす
たけく—越前武生
じよう—國司の中の掾也

青柳が。しなひを見(ィし)れば。今(ィいと)さかりなりや。今さかりなりや。

大芹

大芹は。國の禁物。小芹こそ。ゆでてもうまし。是やこの。せんばん。さんたのきの。柞の木の盤。むしかめの筒。犀角の賽。平賽投賽。兩面。かすめ浮けたる。切りとほし。金はめ盤木。五六がへしの。一二のさいや。四三のさいや。

浅水

あさンづの橋の。とゞろ〳〵と。降りし雨の。ふりにし我を。誰ぞ此。中人たてて。御許のかたち。消息し。とぶらひに來るや。サキンダチヤ。

挿櫛

さしぐしは。十ま(ィは)り七つ。ありしかど。たけくのじよう(ィざう)の。朝に取り。よ(ィゆ)うさり取り。とりしかば。さしぐしもなしや。サキンダチヤ。

鷹子

あやめの郡―讃岐か河内か詳ならず
大領―大郡の司

とまんかうさん―とざまかうざま
ねる―練り歩く
寄來ざるらしや―言ひ寄り來ればよいと思ふのに寄りては來ぬのか、それとも言ひ寄る由がなくてかと、内なる女のやるせなき小さき胸の悩

朝菜つみ。夕菜つみ。我名を。知らまくはしからば。御園生の。みそのふの。

三段

みそのふのや。みそのふの。あやめの郡の。大領の。愛娘といへ。弟姫と。こそいはめ。

我門乎

一段

わが門を。とさんかうさん。ねる男。寄來ざるらしや。よしこざるらしや。

二段

よしなしに(イさらば)。とさんかうさん。ねる男。寄來ざるらしや。よしこざるらしや。

大路

一段

大路に。沿ひてのぼれる。青柳が花や。あをやぎが花や。

二段

しほがひ―潮の間、故障の起らぬ間に早く女を手に入れんとの比喩
なのりそ―神馬藻、穂俵（ホンダハラ）海藻。
みやびとン―宮人
下ぐる袋―嚢の實は三角形にて袋の如ければいふ
上裙―和名抄「上曰レ裙下曰レ裳」

うぐひすの。縫ふといふ笠は。オケヤ。梅の花笠や。

伊勢海

伊勢の海の。いせのうみの。淸き渚の。しほがひに。なのりそや摘まん。貝や拾はん（イヤ）。玉やひろはん（イヤ）。

庭生

庭に生ふる。庭におふる（此句イになし）。から薺は。よき菜なり。ハレ。みやびとンの。下ぐる袋を。おのれ懸けたり。

我門爾

一段

わが門にヤ。わがかどに。上裙の裾ぬれ。下裳の裾ぬれ。朝菜摘み。夕菜つみ。あさなつみ。

二段

まやのあまりー まやはあづまやの反復にて、あまりは軒（ツマ）の餘り即ち葺下し也
とンのどー殿戸
我や人妻ー我は人妻ならず君が妻なるものを何の遠慮が入るものか
走井ー流れ水
飛鳥井ー二條萬里小路にあり
みもひーもひは飲なり、飲水のこと
此歌古今集に出て「といふ」を「てふ」に作る

あづまやの。まやのあまりの。雨そゝぎ。われ立ちぬれぬ。そのとンのど開かせ。

二段

鎹も。扃もあらばこそ。そのとンのど。われさゝめ。おし開いて來ませ。我や人妻。

走井

はしりゐの。小萱刈り收めか（イお）け。それにこそ。繭つくらせて。糸引きなさめ。

飛鳥井

あすかゐに。あすかゐに。宿りはすべし。オケ。陰もよし。かげもよし。みもひも寒し。御秣もよし。

青柳

一段

あをやぎを。あをやぎを。片糸によりてヤ。オケヤ。鶯の。オケヤ。

二段

かたくなに。ものいふ女かな。汝麻衣も。我妻のごとく。袂よ(イせ)く。著よく肩よく。こくびやはらかに。縫ひ(イまし)著せめかも。

貫河

一段

ぬき川の。瀬々の小菅の。やはら手枕。やはらかに。寝る夜はなくて。おや(イき)避くる夫。

二段

おやさくる夫は。ましてるはしも。しかし(イも)あらば。矢矧の市に。沓買ひにかん。

三段

沓かはば。線鞋の。細底を買へ。さしはきて。上裳とり著て。宮路かよはん。

東屋

一段

かたくなに云々—男が其女にいふ返答也
こくび—襟のこと
著せめかも—反語
貫河—三河國なるべしと云ふ、
「ぬき川の……るはしも」女の詞、「しかし……買ひにかん」男の詞、「沓……かよはん」女の詞
おや避くる夫—父母が間を引きさく夫
るはしも—愛すべし、うを省く
線鞋—草履の紐をつけたるものとぞ

さみを―染緒也
何しかも―何として まア
まだいけん―あわて急ぎし事なりけん、緩やかにものすべかりしものをな
夏引―ひきまゆといへるよき絲也
七量―衣七八段分の織料也
ましめ離れよ―汝れ妙き離れよと女が男にいふ也

四段

練緒さみをの。御衣掛にせん。玉やなぎ。

五段

何しかも。サン。何しかも。なにしかも。

六段

心もまだいけん。百合花の。さゆり花の。

七段

今朝咲いたる。初花に。あはましものを。さゆり花の。

夏引

一段

夏引の。白糸。七量あり。さごろもに。織りても着せん。ましめ離れよ(ィに)。

二段

恭仁—山城

高橋わたす—斯る淺き小流に課識しく斯る高き橋をわたさしむるよとの誹の意を含めて味ふべからん

さいさご—眞砂

白玉やなぎ—高貴の家の二人の處女に喩ふ

まし—汝の意

澤田川。袖つくばかり。淺けれど。ハレ。

二段

淺けれど。恭仁の宮人。高橋わたす。

三段

アハレ。ソコヨシヤ。高橋わたす。

高砂

一段

高砂の。さいさごの。たかさごの。

二段

尾上に立てる。白玉椿。玉やなぎ(イつばき)。

三段

それもがと。サン。ましもがと。ましもがと。

いで我駒云々ー此歌萬葉集十二にいで吾駒早くゆきこそまつち山待つらん妹を行きてとく見んとよめる詞をかへたる也待乳山ー大和つち山ーまを略す

催馬樂

○律

我駒

一段

いで我駒。早く行きこ(イま)せ。待乳山。アハレ。まつち山。ハレ。

二段

つち(イつよら)山。待つらん人を。行きてはや。アハレ。ゆきてはや見ん。

澤田川

一段

かむろぎ—皇祖神也。

庭鳥は—萬葉集「我門に千鳥しばなく起きよ起きよ我一夜妻人に知らゆな」の作りかへ

菅を。拆きはらひ。祈りしことは。今日の日のため。あなたふとや。わが皇神の。かむ(イみ)ろぎのよさ(イこ)。

又

庭鳥は。かけろと鳴きぬなり。起きよ。起きよ。わが一夜妻(イかとによのつま)。人もこそ見れ。人もこそ見れ。

ひざ—膝也、膝打ちて樂しむ也

酒殿—朝廷の酒殿、酒の神を祭れり

我が手な取りそ—女の男を制する詞

中臣—天兒屋命の裔

豐竈。御遊すらし。久かたの。天の川原に。琴の聲する。ひざの聲する。ひざの聲する。

末

久かたの。天の川原に。豐へつひ。御(イになし)あそびすらしも。ひざ(イは)の聲する(イよし)。ひざの聲する(イことのこゑよし)。

酒殿歌

本

さかどのは。廣し眞廣し。甕越に。我が手な取りそ。然はせぬわざ。然告けなくに。

末

さかどのは。今朝はな掃きそ。とね(イむれ)り女の。裳引き裾引き。今朝は掃きてき。今朝庭掃きよ。

或說

天の原。ふりさけ見れば(イる)。八重雲の。雲の中なる。雲の中臣の。中臣の。天の小

葛城云々—大和也、役小角鬼神を使ひて岩橋を架けしと云ふ、「繼橋の」までを序と見て其次に「つぎ〳〵にわたり來つれど其の心の中絶えしも知るべからねば」と補ひて見るべし

竈殿—神供を調ずる所にて、春秋に祭を行はる

朝倉や。おめの湊に。網引き居れば。あ(イた)まの童女に。な(イあ)びき(イに)あひにけり。なびきあひにけり。

末

葛城や。渡る久米路の。繼橋の。こゝろも(イこころもも)知らず。いざかへりなん。朝かへりなん。

其駒

その駒ぞや。我に(イになし)。我に(イになし)草乞ふ。草は取り飼はん。轡(イみつは)取り。草は取りかはんや。水は取りかはんや。

或説

あしぶちのや。もりの。杜の下なる。若ごま(イさ)率てこ。足斑の。虎毛の駒。

竈殿歌

本

あけの衣—明衣、明白清淨なる齋服
朝倉—筑前也、此歌天智天皇の御製を聊か改めて歌ふ也
木の丸殿—黒木作の御所

わかざくら。とりにわれゆくや。舟檝棹。人貸せ。於介於介。

本

皇神の。今朝の神上に。あふ人は。千歲の命。延ぶ(ィにこゝ又あり)とこそ聞け。

末

皇神は。よき日祭れば。明日よりは。あけの衣を。褻衣にせん。

朝倉

本

あさくらや。木ンの丸殿にヤ。わが居れば。わがをれば。

末

わがをれば。名のりをしつゝヤ。行くは誰が子ぞ。ゆく人やたれ。

或說

本

いづこにか—拾遺集「我駒は早くゆきなん朝日子がやへさす岡の玉笹の上に」

弓立—湯立の借字

とねら—公に仕ふる者の總名にて賤しき者迄を云ふ

ゆき—守部云、齋木か

いづこにか。駒をつながん。朝日子が。さすや岡邊の(ィあさるさはへの)。玉笹のうへに。玉ざさの上に。

或説

なにわざを。われはしつゝか。

弓立

本

伊勢島や。海士のとねらが。焼く火の氣。於介於介

末

たく火の氣。いそらが崎に。かをりあふ。於介於介

本

大君の。ゆきとる山の。若櫻。於介於介

末

うれたさンに―ねたさに、彼楡は得選子が他の人と隠れん蔽なればそれが妬さに我手折りて來れりと也

志那―ゆふに作る木と云ふ

汝も神ぞや遊べ―神に仕ふる以上は汝も神也いざ遊びせよとなるべし

ひるめの神―日神を大日孁貴と云ふ

末

我こそは、見ればや。うれたさンに。手折りて來しかや。とくせにこや。たよらこきひば(イよ)や。手折りて來しかや。とくせにこや。

木綿作

本

木綿作る。志那の原にや。朝たづンね。朝尋ね。あさたづねや。

末

あさたづンね。汝も神ぞや。遊べあそンべ。あそべあそべ。あそべあそべや。

晝日歌

本

いかばかり。よきわざしてか。天照るや。ひるめの神を。暫留めん。しばしとゞめん。

末

きゝりゝ—元きりきりと重ねたる詞ならん
千歳榮云々—法華懺法の讃なり
くはや—くは此、はやは感嘆の詞
びやくしゆんと—白衆等を末は諸方にて擬ぬる也
得錢子—得選、女官の名稱
ひば—檜葉か或は柴の轉音
たゝらこき—其意詳ならず

吉々利々

本

きょりょ。千歳榮。白衆等。聽説晨朝。清淨偈や。明星は。明星は。くはやこょなりや。
なにしかも。今宵の月の。たどこょにますや。たどこょに。たどこょにますや。

末

びやくしゆんと。ちやうせつ。しんてう。清淨偈や。あかほしは。みやうじやうは。く
はやこょなりや。何しかも。今宵の月の。たどこょに。たどこょにますや。たどこょに。
たどこょにますや。

得錢子

本

とくせにこが。閨なる標結ふひばを。誰か手折りし。とくせにこや。たょらこきひば(イ
よ)や。誰か手折りし。とくせにこや。

末

ヤ。そ(ィす)よりあげよ。ゆすりあげん。

本

ヤ。谷からゆ(ィい)かば。岡から行かん。

末

ヤ。岡から行かば。谷から行かん。

本

ヤ。これからゆ(ィい)かば。かれから行かん。

末

ヤ。かれからゆかば。これからゆかん。

○明星

ざえ—財、才も
かきこぼり—かきこぼれたる根、落穂
ひわりど—檜割戸

末
ヤ。髪の根の無ければ。
本
ヤ。女子のざえは。
末
ヤ。霜月しはすの。かきこぼり。
本
ヤ。あふり戸や。ひわ(ィは)りど。
末
ヤ。ひわ(ィは)りどや。あふりど。
本
ヤ。ゆすりあげよ(ィん)。そ(ィす)よりあけん。

末

ヤ。我も目はあり。先なる子。

本

ヤ。舍人來んぞ。しり來んぞ。

末

ヤ。我も來んぞ。しりこんぞ。

本

ヤ。あちの山脊(イを)山。

末

ヤ。脊山のあちの夫(イて)。

本

ヤ。近衛の御門に。巾子落いつ。

しり來んぞ—後より來んぞ

あち—彼方也

巾子—冠の附屬品にて髻に插すもの

取ろんと—取らんと也

あかゞり—あかぎれ、皸

末

ヤ。かの崎こえて。

本

ヤ。深山の小葛。

末

ヤ。繰れ〳〵こつゞら。

本

ヤ。鷺の頸取ろんと。

末

ヤ。いとはた長うて(ィとろんと)。

本

ヤ。おかゞり蹈むな。後なる子。

したらがまうど—守部云、したらは姓氏か地名か、まうどは眞人の音便
なとりれそ—取入るゝ勿れ

早歌—本末共に短く合せたる歌
いづれぞも—何れの所に留るぞ

本

したらがまうどの。單の狩衣。なとりれそ。いと妬し。

末

なとりれそ。小雨にそぼぬらせ。夜離する。いと〳〵妬し。

千歳

本

せんざい。せんざい。せんざいや。ちとせの。せんざいや。本方なほせんざい。

末

まんざい。まんざい。まんざいや。よろづよの。まんざいや。末方なほまんざい。

早歌

本

や。いづれぞも。とうどまり。

とろちなや—生捕りたきものを取るべき手こそ口惜しけれ、とろちは取る鵠の約といふ

ねたさうれたさ—嫉傷の意
オサマサ—笑ふ意の囃詞

湊田

本

みなと田に。鵠八つ居りや。とろちなや。とろちなや。八つながら。とろちなや。

末

八つながら。物もはず居りや。とろちなや。八つながら。とろちなや。とろちなや。

蛬

本

きりぎりすの。ねたさうれたさヤ。御園生に參り來て。木の根をほりはんで。オサマサ。角折れね。オサマサ。角折れぬ。

末

ねたさうれたさヤ。御園生に參り來て。木の根をほりはんで。オサマサ。角折れぬ。

或説

總角—小童
もふと—おもふとの省略

大宮—内裏
少小舍人—殿上童のこと
テラニヤ—玉を賞むる意の拍子詞也

總角

本

總角を。早稲田にやりてヤ。其をもふと。そをもふと。そをもふと。そをもふと。そをもふと。

末

そをもふと、何もせずして、春日すら。春日すら。春日すら。春日すら。春日すら。

大宮

本

大宮の。少小舍人ヤ。テラニヤテラニヤ。玉ならば。テラニヤ。

末

玉ならば。晝は手に据ゑ(ィとり)ヤ。よるは纏き寢ん(ィさねてん)。テラニヤ。よるはまきねん(ィさねてん)。テラニヤ。

いとこせ—愛するよるせ　一時の浮氣でなく、一生變らじとしん底から愛する女

かひなげ—手を擧ぐること

殖槻—田中—共に大和

きて—おきての省略

篠波

本

さゝなみや。志賀の辛崎や。御稻搗く。女のよさゝや。それもがも(イな)。かれもがも(イな)。いとこせの。眞いとこせにせん。

末

蘆原田の。稻舂蟹ノヤ。おのれさへ。よめを得ずとてや。さゝげて(イや)はおろしヤ(イさゝげては)で おろしては(此句イになし)さゝげヤ。かひなげをするや。

殖槻

本

うゑつきや。田中の杜や。もりやテフ。笠の淺茅が原に。

末

われをきて。二妻とるや(イな)。とるなテフ。笠の淺茅が原に。

閑野―守部云、地名か又は野澤の水づける地か

富草―稲

いそらが崎―志摩

天にますヤ。豊をか姫や。その贄人ぞ。鴫つきのぼる。網おろし。さでさしのぼる。アイゾ。その贄人ぞ。鴫つきのぼる。網おろし。さでさしのぼる。

閑野

本

しづやの小菅。鎌もて刈らば。生ひんや。生ひんや小菅。(末句イになし)

末

天なる雲雀。よ(イお)りこや雲雀。とみくさ。富草もち(イくひ)て。

磯等

本

いそらが崎に。鯛釣る海士も(イの)。鯛つる。たひつる(イあまの)。

末

我妹子がためと。鯛つるあまも(イの)。たひつるあまも(イの)。

鳥も取られず—前歌の「我脊の君はいくらかとりけん」といふに對ふるにて、あだし女には心も移らず、一つも犯さざりしとの比喩といふ

こもまくら—枕詞

贄人—魚鳥など捕りて供御に備ふる人

我妹子にヤ。一夜膚觸れ。アイゾ。あやまちせ（ィりに）しより。鳥も取られず。鳥も取られずヤ（末句ィ鳥とらず）。

末

然りともヤ。我がせ（ィよ）の君は。アイゾ。五つと（ィよ）り。六つ取り。七つ八つ取り。こゝのよ。十は取り。十は取りけんヤ。

○小前張

薦枕

本

こもまくら（ィヤ）。高瀬の淀にや。誰が贄人ぞ。鴫突きのぼる。網おろし。小網さしのぼる。アイゾ。たがにへびとぞ。鴫つきのぼる。網おろし。さでさしのぼる。

末

猪名―攝津
アイゾ―拍子の詞
此歌拾遺集に出でたるは「しながとりゐなのふし原飛渡る鴫が羽音は面白き哉」とあり
あみさすや―網を張る也

ぶくな。舟(イになし)傾くな。

末

若草のヤ。妹も乗りたりヤ。アイゾ。我も乗りたりや。舟かたぶくな。舟かたぶくな。

井奈野

本

しながどりヤ。猪名の柴原。アイゾ。飛びてくる。鴫が羽音は。おとおもしろき。鴫が羽おとは(末句イかはおと)。

末

しながどりヤ。ゐなのふし原。アイゾ。あ(イか)みさすや。我脊(イよ)の君は。いくらか取りけん。いくらか取りけん。

脇母古

本

かれち穂—守部云、枯朽穂也

此歌拾遺集に出づ

さいばら—辞櫟(サイハリ)にて櫟の木をさきて煎じて染むる事かと守部は云へり

しながどり—枕詞

ゆふしでし（イの）。神の幸（イたき）田に。稲の穂の。いなのほの。

末

いなの穂の。諸穂に垂でよ（イされは）。かれち穂もなく（イこれといふなし）。かれちほもなく。

前張

本

さいばらに。衣は染めん。雨ふれど。雨ふれど。

末

雨ふれど。うつろひがたし。深く染めてば。ふかくそめてば。

階香取

本

しながどり。猪名の湊に。アイゾ。入（イつ）る舟の。檝よくまかせ。舟（イになし）かた

大前張—小前張、共に神樂の餘興としてうたへる催馬樂なるべしと守部は云へり

おほよそ衣—大裝衣とほめていへるならん

膝とほし—膝迄長くとほしてゆるやかに着る也

此歌本末一首と

あまごろも—雨衣蓑とつゞく

宮人（みやひこ）

本

宮人（みやひこ）の。おほよそ衣（ごろも）。膝（ひざ）とほし。着（き）のよろしもよ。おほよそごろも。

末

ひざとほし。き(ィゆき)のよろしもよ。おほよそごろも。

難波潟（なにはがた）

本

難波潟（なにはがた）。汐（しほ）みちくれば。海士衣（あまごろも）。あまごろも。

末

あまごろも。田蓑（たみの）の島（しま）に。田鶴（たづ）なきわたる。たづ鳴（な）きわたる。

木綿志天（ゆふしで）

本

歌このまゝにて出でたるをば、入綾に「日影と眞折の歌なれどもかづらといふにつきても鬘葛に借りうたひし歌ども也」といへり
三島—伊豆
韓神—大年神の御子
からをぎ—枯荻を持つ也
して—木綿幣帛
大直日—直會(ナホラヒ)とて神を祭りはてゝ後人々集りて宴する日
神さかもどれ—神榮國の榮、神よもとのふましに幽らせ給へ

本

三島木綿。肩に取り掛け。われ韓神の。からをぎせんや。からをぎ。からをぎせんや。

末

八葉盤を。手に取りもちて。われ韓神の。からをぎせんや。からをぎせんや。

或說

本

わが生れは。皆人（イみやびと又みやびも）知らず。父が方。母が方とも。神ぞ（イは）知るらん。神ぞ知るらん。

末

宮（イみな）人の。しでは榮ゆる。大直日。いざわがともに。神さかもどれ。神さかもどれ（イに）。

○大前張　或曰二催馬樂曲一

諸擧—本末共に上げて謠ふ也
葛—入綾に「如此ありて歌を記さず」云々、薔しつゝは杓の古稱にて、もとの一個の名稱なるを、中古以後誤りて心得て二つと したるもの故題のみありて歌曲なき也、梁塵愚案抄には「本、わぎも子があなしの山の山人と人も見るべく山かづらせよ、末、み山には霰ふるらし外山なる正木の葛色づきにけり」とあれど宜しからず、古今集、採物の歌として、本歌の第一句「まきもくの」第四句「人も見るがに」とし、末

末

我門（わがかど）の。いたゐや。板井（いたゐ）の清水（しみづ）。

諸（もろ）擧（あげ）（歌ひぶりの名）

本

せがゐや。せがゐの水（みづ）を。

末

いたゐや。板井（いたゐ）の清水（しみづ）。

葛（かづら）

〔細書云、有曲名耳無其歌曲〕

○韓（から）神（かみ）

杓―瓢也、飲器也

此歌古今六帖に載せたるは「大原やせがゐの水を手に汲みて鳥はなくとも遊びてゆかん」とあり

鳥―鶏の鳥也

此歌古今集に出づ

水さびにけり―水錆の浮く也

片折―本末の内一方おろしてうたふ也

末

四方山の。人の守りに。する鉾を。神のみまへに。いはひつるかな。いはひ立てたる。

杓

本

大原や。清和井の清水(イ水を)。ひさごもて。鳥は鳴くとも。遊びてを汲め(イゆかん)。遊びて行かん。

末

我門の。板井の清水。里遠み。人し汲まねば。水さびにけり。水草居にけり。

片折　(歌ひぶりの名)

本

大原や。せがゐや。せがゐの水を。

此歌拾遺集に出づ
さげ佩きて━紐を長く垂れて佩きて
組の緒━太刀の紐

白銀の。目貫の太刀を。さげ佩きて。奈良の都を。ねるは(イヤ)誰が子ぞ。ねるは誰が子ぞ。

末

或説

石の上。ふるや男の。太刀もがな。組の緒垂でて。宮路かよはん。みやぢ通はん。

本

いはひこし。神は祭りつ。明日よりは。組の緒垂でて。遊べ太刀佩き。遊べ太刀佩き。

末

奥津城に。皇神たちを。いはひこし。心は今ぞ。たのしかりける。たのしかりける。

鉾

本

此鉾は。いづこの鉾ぞ。天にます。豊をか姫の。宮の鉾なり。みやの御鉾ぞ。

此歌古今集に出でたるは第四句末「さへよりこ」とあり
安達—郡名

さつを—狩人

梓弓—これは實の弓、次なるは春の枕詞

陸奥の。安達のま弓。わが引かば。やう〱(イやく)寄り來。しのび〱に。しのびしのびに。

或説

末

さつを(イて)らが。持たせのま弓。奥山に(イの)。み獵すらしも。弓の弭見ゆ。弓のはず見ゆ。

本

四方山の。まも(イほ)りに賴む。梓弓。神の寶に。今しつるかな。今しつるかな。

末

梓弓。春くるごとに。皇神の。豐の遊に。あはんとぞ思ふ。あはんとぞ思ふ。

劒

本

いざ川原より—行かん

豊の遊—豊のあかりのこと

瑞籬の—久しき意

弓といへば—弓と一口にいへば

ま弓—檀もて作る

笹分けば。袖こそ破れめ。利根川の。石は蹈むとも。いざ川原より。いざ川原より。

或説

本

笹の葉に。雪降りつもる。冬の夜に。豊の遊を。するがたのしさ(ィき)。するがたのしさ。

末

瑞籬の。神の御代より。笹の葉を(ィに)。手種に(ィたぶさと)取りて。遊びけ(ィす)らしも。遊びけらしも。

弓

本

弓といへば。品なきものを。梓弓。ま弓槻弓。品こそあるらし。品こそあるらし。

末

末

逢坂を。今朝こえくれば。山人の。千歳つけとて。くれし(イ切れる)杖なり。くれし杖なに。

此歌拾遺集にも出づ

或説

本

足引の。山を険しみ。木綿附くる。榊が枝を。杖にきり(イつき)つる。杖にきりつる。

此歌同上

末

皇神の。み山の杖と。山人の。千歳を祈り。きれる御杖ぞ。きれる御杖ぞ。

山人―仙人の意

篠

本

此篠は。いづこの篠ぞ。舎人等が。腰にさ(イま)がれる。輌岡のさゝ。ともをかの篠。

輌岡―山城の地名、其上の二句序の趣あり

末

此歌古今集にも出づ

神のきねーかんなぎの事を木根に掛く

此歌拾遺集にも出づ

豊をか姫ー豊宇氣神のこと

はひそめけん。

末

霜八度。置けど枯れせぬ。榊葉の。立ち榮ゆべき。神のきねかも。神のきねかも。

幣

本

幣帛は。わがにはあらず。天にます。豊をか姫の。神のみてぐら。神のみてぐら。

末

幣帛に。ならましものを。皇神の。御手に取られて。なづさはましを（イろべく）。なづさはましを。

杖

本

此杖は。いづこの杖ぞ。天にます。豊をか姫の。宮（イ神）の杖なり。神の杖なり。

採物―神樂の人長の採りて舞ふ物、此歌拾遺集にも出づ

八十氏人―神樂に集へる多くの人々也

此歌古今集に出づ

或說―場合によりて替へ歌ふものなりといふ　みむろ―御諸のこと　此歌拾遺集にも出づ

○採物

榊

本

榊葉の。香をかぐはしみ。とめくれば。八十氏人ぞ。圓居せりける。八十氏人ぞ。圓居せりける。

末

神籬の(ィや)。みむろの山の。榊葉は。神の御前(ィみむろ)に。茂りあひにけり。しげりあひにけり。

或說

本

榊葉に。木綿取り垂でて。誰が世にか。神の御前(ィみむろと)に。いはひそめけん。い

庭燎―神前の焼火也
此の歌古今集に神遊の歌とて載す
阿知女作法―天鈿女命の俳優の戯れのことと云ふ
本、末―本は左座、末は右座
於々―笑聲也、於介を守部は可笑しの意かと云へり

神樂歌

○庭燎

深山には。深山には。霰ふるらし。外山なる。眞折の葛。色づきにけり。色づきにけり。

○阿知女作法

本
阿知女。於々々々。

末
於介。阿知女。於々々々。

紀記歌集跋

紀記歌集何書。解釋根源之歌謠書也。蓋有此根源而後千枝萬派。今之歌。謠有焉。有客曰。君子務本。本立而道生。嗚呼此書行。而歌謠之事其生哉。先生及著此書。令余跋之。余辭。先生不聽。於是乎。不避不敏。採筆于貧喧菴東窓下。

時天明八歲次戊申秋八月　　大江魚足識

をぢなみ—宣長云、拙劣也

意富多久美、袁遲那美許曾、須美加多夫祁禮、
おほだくみ、をぢなみこそ、すみかたぶけれ、

爾志毘臣亦歌曰、

意富岐美能、許許呂袁由良美、淤美能古能、夜幣能、斯婆加岐、伊理多多受阿理、
おほぎみの、こゝろをゆらみ、おみのこの、やへの、しばがき、いりたゝずあり、

云、爾王子亦歌曰、

意布袁余志、斯毘都久阿麻余、斯賀阿禮婆、宇良胡本斯祁牟、志毘都久志毘、
おふをよし、しびつくあまよ、しがあれば、うらごほしけん、しびつくしび、

く、や(弭)堅く取らせ」とす

阿佐計—古事記傳には計を斗とす

あさけ—宣長はあさと(朝戸)とす

ゆふけ—宣長はゆふと(夕戸)とす

わきつき—宣長は脇息のこととす

いた—宣長云、板也

をとつ—宣長云、彼(ヲチ)つ也

爾袁杼比賣獻歌、其歌曰、

夜須美斯志、和賀淤富岐美能、阿佐計爾波、伊余理陀多志、由布計爾波、伊余理陀多須、和岐豆紀賀斯多能、伊多爾母賀、阿世袁、

やすみしし、わがおほぎみの、あさけには、いよりたたし、ゆふけには、いよりたたす、
わきつきがしたの、いたにもが、あせを、

清寧天皇段四首

故將治天下之間、云云、志毘臣立于歌垣、取其袁祁命將婚之美人手、其孃子者、菟田首等之女、名大魚也、爾袁祁命亦立歌垣、於是志毘臣歌曰、

意富美夜能、袁登都波多傳、須美加多夫祁理、

おほみやの、をとつはたで、すみかたぶけり、

如此歌、而乞其歌末之時、袁祁命歌曰、

可豆良—古事記傳には可を字とす

もゝしきの—枕詞、眞淵云、百石城也

かづらとり—宣長は鵜鳥とす

うずすまり—宣長云、群る也

さかみづくらし—酒に漬り居る也

本一作太下鬪

みなそゝぐ—宣長云、水灌也

おみ—與許宣長などは臣とす

かたく云々—宣長は、堅く取らせ、した（確）堅

毛毛志紀能、淤富美夜比登波、可豆良登理、比禮登理加氣氐、麻那婆志良、袁由岐阿閇、爾波須受米、宇受須麻理韋氐、祁布母加母、佐加美豆久良斯、多加比加流比能美夜比登、許登能加多理碁登母、許袁婆、

もゝしきの、おほみやびとは、かづらとり、ひれとりかけて、まなばしら、をゆきあへ、にはすゞめ、うずすまりゐて、けふもかも、さかみづくらし、たかひかるひのみやびと、ことのかたりごとも、こをば、

故於此豐樂、譽其三重采女而給多祿也、是豐樂之日、亦春日之袁杼比賣、獻大御酒之時、天皇歌曰、

美那曾曾久、淤美能袁登賣、本陀理登良須母、本陀理斗理、加多久斗良勢、本陀理斗良須古、

久夜、加多久斗良勢、本陀理斗良須古、

みなそゝぐ、おみのをとめ、ほだりとらすも、ほだりとり、かたくとらせし、たがかたくや、かたくとらせ、ほだりとらすこ、

むちふらばへ―落觸れ也

ありきぬの―枕詞

みへのこ―采女自らのこと

なづさひ―浮び凝々也

みなこをろ〳〵に―宣長云、水てしも―是しも也

こだかる―宣長はこを小とす

つかさ―宣長は高處の意とす

ゆづまつばき―五百箇（イホツ）眞椿と解すべからん「ゆつ」清む

なかつえ（中枝）に、おちふらばへ（落降延）、なかつえ（中枝）の、えのうらば（枝末葉）は、しもつえ（下枝）に、おちふらばへ（落降延）、しづえ（下枝）の、えのうらば（枝末葉）は、ありきぬの、みへのこ（三重子）が、さゝ（捧）かせる、みづたまうき（瑞玉盞）に、うき（浮）しあぶら（膏）、おち（落）なづさひ、みなこをろこをろに、こしもあや（奇）にかしこ（畏）し、たかひかるひ（高光日）のみこ（御子）、ことのかたりごと（言語事）も、こをば（是者）、

故獻レバ㆓此歌㆒者、赦㆓其罪㆒也、爾大后歌ヨミシタマフニ、其歌曰、

夜麻登能、許能多氣知爾、古陀加流、伊知能都加佐爾、比那閇夜爾、淤斐陀氏流、波毘呂由都麻都婆岐、曾賀波能、比呂理伊麻志、曾能波那能、氏理伊麻須、多加比加流比能美古爾、登余美岐多氏麻都良勢、許登能加多理碁登母、許袁婆、

やまと（倭）の、このたけち（此高市）に、こだかる（木高）、いちのつかさ（市司）に、ひなべや（日[illegible]家）に、おひたてる（生立）、はひろゆづまつばき（葉廣齋葉海石榴）、そがは（其葉）の、ひろりいまし（廣坐）、そのはな（其花）の、てりいます（照坐）、たかひかるひ（高光日）のみこ（皇子）に、とよみきたてまつらせ（豐御酒獻）、ことのかたりごと（言語事）も、こをば（是者）、

即天皇歌曰、

麻岐牟久能、比志呂乃美夜波、阿佐比能、比傳流美夜、由布比能、比賀氣流美夜、多氣能泥能、泥陀流美夜、許能泥能、泥婆布美夜、夜本爾余志、伊岐豆岐能美夜、麻紀佐久、比能美加度爾、比那閇夜爾、淤斐陀氐流、毛毛陀流都紀賀延波、本都延波、阿米袁淤幣理、那加都延波、阿豆麻袁淤幣理、志豆延波、比那袁淤幣理、本都延能、延能宇良婆波、那加都延爾、淤知布良婆閇、那加都延能、延能宇良婆波、斯毛都延爾、淤知布良婆閇、斯豆延能、延能宇良婆波、阿理岐奴能、美幣能古賀、佐佐加世流、美豆多麻宇岐爾、宇岐志阿夫良、淤知那豆佐比、美那許袁呂許袁呂爾、許斯母阿夜爾加志古志、多加比加流比能美、古許登能加多理碁登母、許袁婆、

まきむく（纏向）の、ひしろのみや（日代宮）は、あさひ（朝日）の、ひでるみや（日出宮）ゆふひ（夕日）の、ひかげるみや（日隠宮）、たけ（竹）のね（根）の、ねたるみや（根足宮）、このね（木根）の、ねはふみや（根延宮）、やほ（穂）によし、いきづきのみや（杵築宮）、まきさく（眞木割）、ひのみかど（日御門）に、ひなべや（日並家）に、おひたてる（生植）、ももたるつき（百足槻）がえ（枝）は、ほづえ（末枝）は、あめ（天）をおへ（負）り、なかつえ（中枝）は、あづま（東）をおへ（負）り、しづえ（下枝）は、ひな（鄙）をおへ（負）り、ほづえ（末枝）の、え（枝）のうらば（末葉）は、

ひでる―日照也
いきづき―いは發語、杵にて搗固めたる也
まきさく―枕詞
ひのみかど―ひは檜也
ひなべや―賓長は前句の「に」より續けて「にひなべや」を新嘗屋とす
もゝたる―枝の多き也
おへり―覆へり

がもーあれかし、希望の意の助辭

いかくるーいは接頭語
いはちーちはつの轉にて個なるべし
すきはぬるものーすきはねて其隱れがを見附け出さんものを

子之好儛作御歌、其歌曰、

阿具良韋能、加微能美氐母知、比久許登爾、麻比須流袁美那、登許余爾母加母、

あぐらゐの、かみのみてもち、ひくことに、まひするをみな、とこよにもがも。

又天皇、婚丸邇之佐都紀臣之女袁杼比賣、幸行于春日之時、媛女逢道、即見幸行、而逃隱岡邊、故作御歌、其歌曰、

袁登賣能、伊加久流袁加袁、加那須岐母、伊本知母賀母、須岐波奴流母能、

をとめの、いかくるをかを、かなすきも、いほちもがも、すきはぬるもの。

故號其岡、謂金鉏岡也、

天皇坐長谷之百枝槻下、爲豐樂之時、伊勢國之三重采女、指擧大御盞以獻、爾其百枝槻葉、落浮於大御盞、其采女不知、云云、猶獻大御酒、天皇看行其浮盞之葉、打伏其采女、以刀刺充其頸、將斬之時、其采女白天皇曰、莫殺吾身、有應白事、即歌曰、

わかくべに—若かりし程に

つくや—契沖宣長など築くの意とす

ともしきろかも—宣長云、乏しに羨しの意あり

みもろの、いつかしかもと、かしがもと、ゆゆしきかも、かしはらをとめ、

又歌曰、

比氣多能、和加久流須婆良、和加久閉爾、韋泥氏麻斯母能、淤伊爾祁流加母、

ひきたの、わかくるすはら、わかくべに、ゐねてましもの、おいにけるかも、

爾赤猪子之泣涙、悉濕其所服之丹摺袖、答其大御歌、而歌曰、

美母呂爾、都久夜多麻加岐、都岐阿麻斯、多爾加母余良牟、加微能美夜比登、

みもろに、つくやたまがき、つきあまし、たにかもよらん、かみのみやびと、

又歌曰、

久佐迦延能、伊理延能波知須、波那婆知須、微能佐加理毘登、登母志岐呂加母、

くさかえの、いりえのはちす、はなはちす、みのさかりびと、ともしきろかも、

爾多祿給其老女、以返遣也、

天皇幸行吉野宮之時、云云、而坐御呉床、彈御琴令爲儛其孃子、爾因其孃

登下脫幣子

いくみだけ―宣長は入り隠り竹の義といふ
たしみだけ―宣長は立繁（タチシミ）竹の意といふ
いくみ―宣長云、入組り也

多知邪加由流、波毘呂久麻加斯、母登爾波、伊久美陀氣淤斐、須惠幣爾波、多斯美陀氣淤斐、伊久美陀氣、伊久美波泥受、多斯美陀氣、多斯爾波韋泥受、能知母久美泥牟、曾能淤母比豆麻阿波禮、

くさかべの、こちのやまと、たゝみこも、へぐりのやまの、こちごちの、やまのかひに、たちさかゆる、はびろくまがし、もとへには、いくみだけおひ、すゑへには、たしみだけおひ、いくみだけ、いくみはねず、たしみだけ、たしにはゐねず、のちもくみねん、そのおもひづまあはれ、

即令持此歌、而返使也、

一時天皇、遊行到於美和河之時、河邊有洗衣童女、云云、仰待天皇之命、既經八十歲、云云、天皇大驚、吾既忘先事、然汝守志待命、徒過盛年、是甚愛悲、心裏欲婚、憚其極老不得成婚、而賜御歌、其歌曰、

美母呂能、伊都加斯加母登、加斯賀母登、由由斯伎加母、加志波良袁登賣、

れは又弓にもまさりて」と意を補ひて見るべきか

たま、かゞみ―思ふ人を譬へたる也

あがもふつま云云―斯く湊に我思ふ最愛の妻のあればこそ、家も栄はるゝなれ、今斯く妻が此方に来れる以上何の家ぞ何の國ぞ、我はさる所の戀しくもあらず行きたくもなしと也

又歌曰、

許母理久能、波都勢能賀波能、賀美都勢爾、伊久比袁宇知、斯毛都勢爾、麻久比袁宇知、伊久比爾波、加賀美袁加氣、麻久比爾波、麻多麻袁加氣、麻多麻那須、阿賀母布伊毛、加賀美那須、阿賀母布都麻、阿理登伊波婆許曾、伊幣爾母由加米、久爾袁母斯怒婆米、

こもりくの、はつせのかはの、かみつせに、いくひをうち、しもつせに、まくひをうち、いくひには、かがみをかけ、まくひには、またまをかけ、またまなす、あがもふいも、かがみなす、あがもふつま、ありといはばこそ、いへにもゆかめ、くにをもしぬばめ、

如レ此歌即共自死、故此二歌者讀歌也、

雄略天皇段十二首

初太后坐二日下一之時、云云、行二立其山之坂上一歌曰、

久佐加辨能、許知能夜麻登、多多美許母、幣具理夜夜麻能、許知碁知能、夜麻能賀比爾、

あひねのはま―地名なるべし

けながく―宣長云、けは來經(キヘ)の約也

むかへを―をは助詞

はたはりたて―云―幕を張りて云ところを幕所と定めたる意ならん

たてりたてりも―一つそのまゝに寫し置き來て慢た取る事もあらとゝ思ひしにと

那都久佐能、阿比泥能波麻能、加岐賀比爾、阿斯布麻須那、阿加斯氏杼富禮、

夏草　阿比泥濱　蠣貝　足莫踏　明而通
なつくさの、あひねのはまの、かきがひに、あしふますな、あかしてとほれ、

故後亦不ㇾ堪ㇾ戀慕、追往時歌曰、

岐美加由岐、氣那賀久那理奴、夜麻多豆能、牟加閇袁由加牟、麻都爾波麻多士、

君行　日長成　山鐵　迎將行　待不待
きみがゆき、けながくなりぬ、やまたづの、むかへをゆかん、まつにはまたじ、

故追到之時、待懷而歌曰、

許母理久能、波都世能夜麻能、意富袁爾波、波多波理陀氐、佐袁袁爾波、波多波理陀氐、意富袁爾斯、那加佐陀賣流、淤母比豆麻阿波禮、都久由美能、許夜流許夜理母、阿豆佐由美、多氏理多氏理母、能知母登理美流、意母比豆麻阿波禮、

隱口　泊瀨山　大峽　幡張立　小峽　幡張立
こもりくの、はつせのやまの、おほをには、はたはりたて、さをには、はたはりたて、

大峽　汝定　思妻嗚呼　槻弓　伏伏　梓
おほをにし、ながさだめる、おもひづまあはれ、つくゆみの、こやるこやりも、あづさ

弓　起起　後取見　思妻嗚呼
ゆみ、たてりたてりも、のちもとりみる、おもひづまあはれ、

佐佐婆爾、宇都夜阿良禮能、多志多志爾、韋泥氏牟能知波、比登波加由登母、宇流波斯登、佐泥斯佐泥氏婆、加理許母能、美陀禮婆美陀禮、佐泥斯佐泥氏婆、

ささばに、うつやあられの、たしたしに、ゐねてんのちは、ひとはかゆとも、うるはしと、さねしさねてば、かりこもの、みだればみだれ、さねしさねてば、

是以百官及天下人等、背輕太子、而歸穴穂御子、爾輕太子畏、而逃入大前小前大臣之家、云云、其太子被捕歌曰、云云、又歌曰、

阿麻陀牟、加流袁登賣、志多多爾母、餘理泥氏登富禮、加流袁登賣杼母、

あまたむ、かるをとめ、したたにも、よりねてとほれ、かるをとめども、

故其輕太子者流於伊餘湯也亦將流之時歌曰、

阿麻登夫、登理母都加比曾、多豆賀泥能、岐許延牟登岐波、和賀那斗波佐泥、

あまとぶ、とりもつかひぞ、たづがねの、きこえんときは、わがなとはさね、

其衣通王獻歌、其歌曰、

ささばに云々ー第二句迄は序也

ひとはかゆともー宣長云、人に離らるとも也

かりこものー枕詞

したたー下々と重ねて強めいへるならん

よりねてー人目につかぬ様身を潜め伏しての意か

衣通王者乃輕大郎女也

本坐難波宮之時、坐大嘗、而爲豐明之時、於大御酒宇良宜而大御寢也、云云、故到于多遲比野而寤、詔、此間者何處、爾阿知直白、墨江中王火著大殿、故率逃於倭、爾天皇歌曰、

多遲比怒邇、泥牟登斯理勢婆、多都碁母母、母知氐許麻志母能、泥牟登斯理勢波、

たちびぬに、ねんとしりせば、たつこもも、もちてこましもの、ねんとしりせば、

到於波邇賦坂、望見難波宮、其火猶炳、爾天皇亦歌曰、

波邇布邪迦、和賀多知美禮婆、迦藝漏肥能、毛由流伊幣牟良、都麻賀伊幣能阿多理、

はにふざか、わがたちみれば、かぎろひの、もゆるいへむら、つまがいへのあたり

允恭天皇段七首

天皇崩之後、定木梨之輕太子所知日繼、未卽位之間、姧其伊呂妹輕大郎女、而歌曰、云云、又歌曰、

宇良宜而—醉ひ興じて我を忘れ

たつこも—立薦の義也、席もて屏風の如くす

かぎろひ—こゝは輝く火のこと

炳—カンサリ

よし—宣長は縱しや個子は無くともの意とす

伊毛云々—古事記傳には第四句を伊波迦伎加泥とす

はしたての—枕詞

いもはきかねて—宣長はいはかきかねてとして岩攀きかねての意とす

爾八田若郎女答歌曰、

夜多能比登母登須宜波、比登理袁理登母、意富岐彌斯、與斯登岐許佐婆、比登理袁理登母、

やたのひともとすげは、ひとりをりとも、おほぎみし、よしときこさば、ひとりをりとも、

故爲八田若郎女之御名代、定八田部也、

天皇云云、興軍欲殺、爾速總別王女鳥王共逃退、而騰于倉椅山、於是速總別王歌曰、

波斯多氏能、久良波斯夜麻袁、佐賀志美登、伊毛波伎加泥氏、和賀氏登良須母、

はしたての、くらはしやまを、さかしみと、いもはきかねて、わがてとらすも、

履中天皇段二首

こもりつの―宣長云、隱水之也、「つ」濁る
したよばへつゝ―宣長云 從下延乍也、「へ」清む
美母呂能云々―古事記傳には流の下に意富韋古賀波良の七字あり
みもろの―三輪山のこと
おほゐこがはら―宣長云、大猪子之腹也
きもむかふ―枕詞
宣當作賀

やまとべに、ゆくはたがつま、こもりつの、したよばへつゝ、ゆくはたがつま、

八田若郎女、云云、天皇聞看太后自山代上幸、而使舍人名謂鳥山人、送御歌曰、云云、又續遣丸邇臣口子而歌曰、

美母呂能、曾能多迦紀那流、意富韋古賀波良邇阿流、岐毛牟加布、許許呂袁陀邇迦、阿比於母波受阿良牟、

みもろの、そのたかきなる、おほゐこがはらにある、きもむかふ、こゝろをだにか、おひおもはずあらむ、

天皇戀八田若郎女、賜遣御歌、其歌曰、

夜多能比登母登須宜波、古母多受、多知迦阿禮那牟、阿多良須賀波良、許登袁許曾、須宜波良登伊波米、阿多良須賀志賣、

やたのひともとすげは、こもたず、たちかあれなん、あたらすがはら、ことをこそ、すがはらといはめ、あたらすがしめ、

あはしま――契沖は紀伊粟島とす

さけつしま――未詳

にし――西風也

あげて――擧げて、開けて、兩說あり

阿遲摩佐能志麻母美由、佐氣都志摩美由、

おしてるや、なにはのさきゆ、いでたちて、わがくにみれば、あはしま、おのころじま、

あぢまさのしまもみゆ、さけつしまみゆ、

乃自其島傳而幸行吉備國、爾黑日賣命令大坐其國之山方地、而獻大御飯、於是爲煮大御羹、採其地之菘菜時、天皇到坐其孃子之採菘處歌曰、

夜麻賀多邇、麻祁流阿袁那母、岐備比登登、等母邇斯都米婆、多怒斯久母阿流迦、

やまがたに、まけるあをなも、きびひとと、ともにしつめば、たぬしくもあるか、

天皇上幸之時、黑日賣獻御歌曰、

夜麻登幣邇、爾斯布岐阿宜氐、玖毛婆那禮、曾岐袁理登母、和禮和須禮米夜、

やまとべに、にしふきあげて、くもはなれ、そきをりとも、われわすれめや、

又歌曰、

夜麻登幣邇、由玖波多賀都麻、許母理豆能、志多用波閇都都、由久波多賀都麻、

ことなぐしゑぐし―事和ぐ酒(クシ)咲(エ)酒也

之玖―宜長は之の字を羅の重點とす、又文は久、夜は岐の誤かと云へり

つらしく―宜長はつらゝくとし、數を連なる意とす

もろさや―宜長はくろさきとし、備中黑崎かと云へり

以獻、於是天皇、宇羅宜是所獻之大御酒、而〔宇羅宜三字以音〕御歌曰、

須須許理賀、迦美斯美岐邇、和禮惠比邇祁理、許登那具志、惠具志爾、和禮惠比邇祁理、

すゝこりが、かみしみきに、われゑひにけり、ことなぐし、ゑぐしに、われゑひにけり、

仁徳天皇段九首

爾天皇、云云、吉備海部直之女名黑日賣、云云、喚上而使也、然畏其太后之嫉、逃下本國、天皇坐高臺、望瞻其黑日賣之船出浮海以歌曰、

淤岐幣邇波、袁夫泥都羅羅之玖、文濕邪夜能、摩佐豆古和藝毛、玖邇幣玖陀良須、

おきへには、をぶねつらしく、もろさやの、まさつこわぎも、くにへくだらす、

故太后聞是之御歌大忿、遣人於大浦追下、而自步追去、於是天皇戀其黑日賣、欺太后曰、欲見淡道島、而幸行之時、坐淡道島、遙望歌曰、

於志氐流夜、那爾波能佐岐由、伊傳多知氐、和賀久邇美禮婆、阿波志摩、淤能碁呂志摩、

みほどり—鳰鳥に同じ
しなたゆふ—上り下りたゆたふこと
をだてろかも—ろかは哉にて　ろとも、は助詞
はなみはしひしなす—宣長は齒並蛛（ハシ）菱如（ナス）とす
しはには—宣長は底の土とす
うたけだに—宣長はうたたけにとし、轉た寝にの意とす
いそひ—いは發語

布下戰留字
紀上曽由字

するふゆ云々—宣長は、すゑふゆ、ふゆきのす、からがしたきの、さや〳〵し、末振冬木如（ノ）、枯（カラ）之下樹之清々の意とす

いちぢしま、みしまにとき、みほどりの、かづきいきづき、しなたゆふ、さゝなみぢを、すぐすぐと、わがいませばや、こはたのみちに、あはししをとめ、うしろでは、をだてろかも、はなみは、しひしなす、いちひゐの、わにさのにを、はつには、はだあからけみ、しはには、にくろきゆゑ、みつくりの、そのなかつにを、かぶつく、まひにはあてず、まよかき、こにかきたれ、あはししをみな、かもがと、わがみしこら、かくもがと、あがみしこに、うたけだに、むかひをるかも、いそひをるかも、

又吉野之國主等、瞻大雀命之所佩御刀歌曰、

本牟多能、比能美古、意富佐邪岐、意富佐邪岐、波加勢流多知、母登都流藝、須惠布由布由紀能、須加良賀志多、紀能佐夜佐夜、

ほんだの、ひのみこ、おほさゝぎ、おほさゝぎ、はかせるたち、もとつるぎ、するふゆふるゆきの、すがらがした、ゆきのさやさや、

百濟國、云云、知釀酒人名仁番、亦名須須許理等參渡來也、故是須須許理、釀大御酒

應神天皇段三首

一時、天皇越(エ)二幸(マス)近淡海國一之時、云云、故到(キ)二坐(ス)木幡村一之時、麗美孃子(カホヨキヲトメ)過二其道衢(チニ)一、云云、

於是天皇、任(マヽニ)レ令レ取二其大御酒盞(ノツキヲ)一、而御歌曰、

古事記傳には比比の一字は衍とす、本書は之を除ける也

許能迦邇夜、伊豆久能迦邇、毛毛豆多布、都奴賀能迦邇、余許佐良布、伊豆久邇伊多流、
伊知遲志麻、美志麻邇斗岐、美本杼理能、加豆伎伊岐豆岐、志那陀由布、佐佐那美遲袁、
須久須久登、和賀伊麻勢婆夜、許波多能美知邇、阿波志斯袁登賣、宇斯呂傳波、袁陀氐
呂迦母、波那美波、志比斯那須、伊知比韋能、和邇佐能邇袁、波都邇波、波陀阿可良氣
美、志波邇波、邇具漏岐由惠、美都具理能、曾能那迦都邇袁、加夫都久、麻肥邇波阿氐
受、麻用賀岐、許邇加岐多禮、阿波志斯袁美那、迦母賀登、和賀美斯古良、迦久母賀登、
阿賀美斯古邇、宇多氣陀邇、牟迦比袁流迦母、伊蘇比袁流迦母

このかに(此蟹)や、いづく(何處)のかに(蟹)、もゝづたふ(百傳)、つぬか(角鹿)のかに(蟹)、よこさらふ(横去)、いづく(何處)にいたる(至)、

上能恐衍

なづきたの—「なづきのたの」とすべし

あしよゆくな—足より行くな也、なは感動の助詞

うみが—宣長はクヌガ(陸)に對して海をウミガと云ふとす

おほはらの—「おほかはらの」の誤

那豆岐能多能、伊那賀良迺、伊那賀良爾、波比母登富呂布、登許呂豆良、
なづきたの、いながらに、いながらに、はひもとほろふ、ところづら、
於是化二八尋白智鳥一、翔レ天而向レ濱飛行、云云、其后御子等、云云、哭追、此時歌曰、
阿佐志怒波良、許斯那豆牟、蘇良波由賀受、阿斯用由久那、
あさしぬはら、こしなづむ、そらはゆかず、あしよゆくな、
又入二其海鹽一、而那豆美行時歌曰、
宇美賀由氣婆、許斯那豆牟、意富迦波良能、宇惠具佐、宇美賀波伊佐用布、
うみがゆけば、こしなづむ、おほはらの、うゑくさ、うみかはいさよふ、
又飛二居其磯一之時歌曰、
波麻都知登理、波麻用波由迦受、伊蘇豆多布、
はまつちどり、はまよはゆかず、いそづたふ、
是四歌者、皆歌二其御葬一也、云云、

あらたまの―枕詞

をとめ―尾張の美夜受比賣をいふ

那豆岐田―宣長の説に、四方の周圍にありて御陵に[illegible]ツキたる田

爾美夜受比賣答御歌曰、

多迦比迦流比能美古、夜須美斯志、和賀意富岐美、阿良多麻能、登斯賀岐布禮波、阿良多麻能、都紀波岐閇由久、宇倍那宇倍那、岐美麻知賀多爾、和賀祁勢流、意須比能須蘇爾、都紀多多那牟余、

たかひかるひのみこ、やすみしし、わがおほぎみ、あらたまの、としがきふれば、あらたまの、つきはきへゆく、うべなうべな、きみまちがたに、わがけせる、おすひのすそに、つきたゝなむよ、

云云、此時御病甚急、爾御歌曰、

袁登賣能、登許能辨爾、和賀淤岐斯、都流岐能多知、曾能多知波夜、

をとめの、とこのべに、わがおきし、つるぎのたち、そのたちはや、

歌竟卽崩、云云、於是坐倭后等及御子等諸下到、而作御陵、卽匍匐廻其地之那豆岐田、自那下三字以音、而哭爲歌曰、

さねさし―枕詞

くひひは云々―宣長は「くひ」にて句とし、「ひははそたわやかひなを」とせり。「ひははそ」は弱細

幸渡ニ走水海ニ之時、其渡神興ス浪、云云、爾其后名弟橘比賣命白之、妾易ニ御子ニ、云云

將ニ入ル海、云云、其后歌曰、

佐泥佐斯、佐賀牟能袁怒邇、毛由流肥能、本那加邇多知氏、斗比斯岐美波母、

さねさし、さがむのをぬに、もゆるひの、ほなかにたちて、とひしきみはも、

而還ニ來尾張國ニ、入ニ坐先日所ル期美夜受比賣之許ニ、云云、爾美夜受比賣、其於ニ意須比之襴ニ著ニ月經ヲ、故見ニ其月經ヲ御歌曰、

比佐迦多能、阿米能迦具夜麻、斗迦麻邇、佐和多流久毘比波、煩曾多和夜、賀比那袁麻迦牟登波、阿禮波須禮杼、佐泥牟登波、阿禮波意母閇杼、那賀祁勢流、意須比能須蘇邇、都紀多知邇祁理、

ひさかたの、あめのかぐやま、とかまに、さわたるくひひは、ほそたわや、かひなをまかむとは、あれはすれど、さねんとは、あれはおもへど、ながけせる、おすひのすそに、つきたちにけり、

こき以き

しけこき—宣長云、醜の意

さやぎぬ—さやさやと鳴り騒ぐな

くもとゐ—雲と居、夕方は風となるべき雲の畫の様は靜かに山際に懸り居ると也

あしはらの、しけこきをやに、すがだたみ、いやさやしきて、わがふたりねし、

然而阿禮坐之御子、云云、三柱、故天皇崩後、其庶兄當藝志美美命、娶其嫡后伊須氣余理比賣之時、將殺其三弟而謀之間、其御祖伊須氣余理比賣患苦、而以歌令知其御子等、歌曰、

佐韋賀波由、久毛多知和多理、宇泥備夜麻、許能波佐夜藝奴、加是布加牟登須、

さゐかはゆ、くもたちわたり、うねびやま、このはさやぎぬ、かぜふかんとす、

又歌曰、

宇泥備夜麻、比流波久毛登韋、由布佐禮波、加是布加牟登曾、許能波佐夜牙流、

うねびやま、ひるはくもとゐ、ゆふされば、かぜふかむとぞ、このはさやげる、

景行天皇段八首

倭建命、云云、爾到相武國之時、其國造詐白、云云、著向火而燒退、云云、白其人

えーえをとめ也

あめつゝちとりましとゝ―契沖はあめは天、つゝは千鳥を喚ぶ聲、ましは汝（イマシ）とゝは千鳥を呼ぶ詞とし、宣長は四つの鳥として天は胡鷰子（アマトリ）、つゝは鶺鴒、ちとりは千鳥、ましとゝは巫鳥（シトヽ）とす、其等の目の如くと下に續く

理比賣立於最前、以歌答曰、

加都賀都毋、伊夜佐岐陀氏流、延袁斯麻加牟、

かつがつも、いやさきだてる、えをしまかむ、

爾大久米命、以天皇之命、詔其伊須氣余理比賣之時、見其大久米命黥利目而思奇歌曰、

阿米都都、知杼理麻斯登登、那杼佐祁流斗米、

あめつゝ、ちとりましとゝ、などさけるとめ、

爾大久米命答歌曰、

袁登賣爾、多陀爾阿波牟登、和賀佐祁流斗米、

をとめに、たゞにあはんと、わがさけるとめ、

故其孃子、云云、參入宮內之時、天皇御歌曰、

阿斯波良能、志祁志岐袁夜爾、須賀多多美、伊夜佐夜斯岐氏、和賀布多理泥斯、

さやぐ―さやさやと音する也

たてまつらせ―奉れ也、飲み給への意

宇岐由比―盞結、固めの盃

宇那賀氣理―項(ウナジ)に手を掛けあふ意、親しく相雙びて居給ふをいふ

めにしあれば、なをきて、をはなし、なをきて、つまはなし、あやがきの、ふはやがしたに、むしぶすま、にこやがしたに、たくぶすま、さやぐがしたに、あわゆきの、わかやるむねを、たくつぬの、しろきたゞむき、そだたき、たゝきまながり、またまで、たまでさしまき、もゝながに、いをしなせ、とよみきたてまつらせ、

如レ此歌、即爲二宇岐由比一、四字以音而宇那賀氣理氏、六字以音至レ今鎭坐也、此謂二之神語一也、

神武天皇段七首

故坐二日向一時、云云、然更求下爲二大后一之美人上、云云、於是七媛女、遊二行於高佐士野一、伊須氣余理比賣在二其中一、爾大久米命、見二其伊須氣余理比賣一、而以レ歌白二於天皇一曰、

夜麻登能、多加佐志怒袁、那那由久袁登賣杼母、多禮袁志摩加牟、

やまとの、たかさしぬを、なゝゆくをとめども、たれをしまかむ、

爾伊須氣余理比賣者、立二其媛女等之前一、乃天皇見二其媛女等一、而御心知二伊須氣余

いとこやの—宣長云、妹といふ枕詞にていとはしき子と云ふ義也

きりに—古事記傳には「さきりに」とあり

こやの、いものみこと、むらどりの、わがむれいなば、ひけどりの、わがひけいなば、なかじとは、なはいふとも、やまとの、ひともとずすき、うなかぶし、ながなかさまく、おさあめの、きりにたゝんぞ、わかくさの、つまのみこと、ことのかたりごとも、こをば、

爾其后取₂大御酒抔₁、立依指擧而歌曰、

夜知富許能、加微能美許登夜、阿賀淤富久邇奴斯許曾波、遠邇伊麻世婆、宇知微流、斯麻能佐岐邪岐、加岐微流、伊蘇能佐岐於知受、和加久佐能、都麻母多勢良米、阿波母與、賣邇斯阿禮婆、那遠岐氏、遠波那志、那遠岐氏、都麻波那斯、阿夜加岐能、布波夜賀斯多爾、牟斯夫須麻、爾古夜賀斯多爾、多久夫須麻、佐夜具賀斯多爾、阿和由岐能、和加夜流牟泥遠、多久豆怒能、斯路岐多陀牟岐、曾陀多岐、多多岐麻那賀理　麻多麻傳、多麻傳佐斯麻岐、毛毛那賀爾、伊遠斯那世、登與美岐多氏麻都良世、

やちほこの、かみのみことや、あがおほくにぬしこそは、をにいませば、うちみる、しまのさきざき、かきみる、いそのさきおちず、わかくさの、つまもたせらめ、おはもよ、

多多藝母、許禮波布佐波受、幣都那美、曾邇奴岐宇氏、蘇邇杼理能、阿遠岐美祁斯遠、麻都夫佐邇、登理與曾比、淤岐都登理、牟那美流登岐婆、多多藝母、許母布佐波受、幣都那美、曾邇奴棄宇氏、夜麻賀多爾、麻岐斯阿多尼都岐、曾米紀賀斯流邇、斯米許呂母遠、麻都夫佐邇、登理與曾比、淤岐都登理、牟那美流登岐婆、多多藝母、許斯與呂志、伊刀古夜能、伊毛能美許等、牟良登理能、和賀牟禮伊那婆、比氣登理能、和賀比氣伊那婆、那迦士登波、那波伊布登母、夜麻登能、比登母登須須岐、宇那加夫斯、那賀那加佐麻久、阿佐阿米能、疑理邇多多牟叙、和加久佐能、都麻能美許登、許登能加多理碁登母、許遠婆

ぬばたまの、くろきみけしを、まつぶさに、とりよそひ、おきつとり、うなみるときは、たゞぎも、これはふさはず、へつなみ、そにぬぎうて、そにどりの、あをきみけしを、まつぶさに、とりよそひ、おきつどり、うなみるときは、たゞぎも、こもふさはず、へつなみ、そをぬぎうて、やまがたに、まきしあたにつき、そめぎがしるに、しめころもを、まつぶさに、とりよそひ、おきつどり、うなみるときは、たゞぎも、こしよろし、いと

牟作常字下同

牟(ム)にてよかるべし

疑—古事記傳には疑の上に佐あり

うなみる—むなみると訓ずべし、胸見るの義

たゞぎ—宣長は上の「は」より續けて「はたゞぎ」とし鰭揭の意とす

そをぬぎうて—本文の「邇」に従ひ、「そにぬぎうて」と訓ずべし

まきし—宣長は求きしとす

ぬえくさの―枕詞
わどり―宣長は和を知の誤として千鳥と釋き、などりを平和の義とす
たくづぬの―白と云はんための枕詞
あわゆきの―枕詞
わかやる―わかやかなる也
そたゝき―そは接頭語
またがり　抱く意
なこひきこし―戀ひ言ふ勿れ

斯麻岐、毛毛那賀爾、伊波那佐牟遠、阿夜爾那古斐岐許志、夜知富許能、加微能美許登、許登能迦多理碁登母、許遠婆、

やちほこの、かみのみこと、ぬえくさの、めにしあれば、わがこゝろ、うらすのとりぞ、いまこそは、わどりにあらめ、のちは、などりにあらんを、いのちは、なしせたまひそ、いしたふや、あまはせづかひ、ことのかたりごとも、こをば、」あをやまに、ひがかくらば、ぬばたまの、よはいでなん、あさひの、ゑみさかえきて、たくづぬの、しろきたゞむき、あわゆきの、わかやるむねを、そたゝき、たゝきまながり、またまで、たまでさしまき、もゝながに、いはなさんを、あやになこひきこし、やちほこの、かみのみこと、ことのかたりごとも、こをば、

故其夜者不ㇾ合、而明日夜爲ㇾ御合ㇾ也、」又其神之嫡后、須勢理毘賣命甚爲ㇾ嫉妬ㇾ、故其日子遲神和備氐、三字以音、云云、歌曰、

奴婆多麻能、久路岐美祁斯遠、麻都夫佐爾、登理與曾比、淤岐都登理、牟那美流登岐婆、

さよばひーさは接頭語

うちやめこせね—契沖は打止めこせと願ふ意とし、宣長は打惱まし苦しめんとの意とす

いしたふや—契沖は石飛ぶやにて枕詞とし、宣長は拍子の詞ならんと云へり

に、さがしめを、ありときかして、くはしめを、ありときこして、さよばひに、ありたたし、よばひに、ありかよはせ、たちがをも、いまだとかずて、おすひをも、いまだとかねば、をとめの、なすやいたどを、おそふらひ、わがたゝせれば、ひこつらひ、わがたゝせれば、あをやまに、ぬえはなき、さぬつどり、きどしはとよむ、にはつどり、かけはなく、うれたくも、なくなるとりか、このとりも、うちやめこせね、いしたふや、あまはせづかひ、ことのかたりごとも、こをば、

爾其沼河日賣未レ開レ戸、自レ内歌曰、

夜知富許能、加微能美許等、怒延久佐能、賣邇志阿禮婆、和何許許呂、宇良須能登理叙、伊麻許曾婆、和杼理邇阿良米、能知婆、那杼理爾阿良牟遠、伊能知波、那志勢多麻比曾、伊斯多布夜、阿麻波世豆迦比、許登能加多理碁登母、許遠婆、阿遠夜麻邇、比賀迦久良婆、奴婆多麻能、用波伊傳那牟、阿佐比能、惠美佐迦延岐氏、多久豆怒能、斯路岐多陀牟岐、阿和由岐能、和加夜流牟泥遠、曾陀多岐、多多岐麻那賀理、麻多麻傳、多麻傳佐

古事記上四首

八千矛神、將ニ婚ニ高志國之沼河比賣一幸行之時、到ニ其沼河比賣之家一歌曰、

夜知富許能、迦微能美許登波、夜斯麻久爾、都麻麻岐迦泥氏、登富登富斯、故志能久邇邇、佐賀志賣遠、阿理登岐加志氏、久波志賣遠、阿理登伎許志氏、佐用婆比爾、阿理多多斯、用婆比邇、阿理加用婆勢、多知賀遠母、伊麻陀登加受氏、淤須比遠母、伊麻陀登加泥婆、遠登賣能、那須夜伊多斗遠、淤曾夫良比、和何多多勢禮婆、比許豆良比、和何多多勢禮婆、阿遠夜麻邇、奴延波那伎、佐怒都登理、岐藝斯波登與牟、爾波都登理、迦祁婆那久、宇禮多久母、那久那留登理加、許能登理母、宇知夜米許世泥、伊斯多布夜、阿麻波勢豆加比、許登能加多理碁登母、許遠婆、

やちほこの、かみのみことは、やしまぐに、つままぎかねて、とほとほし、こしのくに

（八千矛　神　命　八洲　國　妻　覓　不得而　遠　遠　越　國）

やちほこのかみ—大國主神の一名

みよしぬ—みえしぬと訓ずべし
せまへ—しまへと訓ずべし
あくるしゑ—愛の字なれば、えくるしゑと訓ずべし
よけむ—えけむと訓ずべし

みよしぬ(吉野)の、よしぬ(吉野)のあゆ(鮎)、あゆ(鮎)こそは、せまへ(島邊)もよき(吉)、あくるしゑ(嗚呼苦)、なぎ(水葱)のもと(下)、せり(芹)のもと(下)、あれ(我)はくるし(苦)ゑ、

其二

於彌能古能、野陛能比母騰倶、比騰陛多爾、伊麻拕藤柯禰波、美古能比母騰矩、
おみのこ(臣子)の、やへ(八重)のひも(紐)とく(解)、ひとへ(一重)だに、いまだ(未)とか(解)ねば、みこ(皇子)のひも(紐)とく(解)、

其三

阿箇悟馬能、以喩企波波箇屢、麻矩儒播羅、奈爾能都底擧騰、多拕尼之曳鷄武、
あかごま(赤駒)の、いゆ(行)きはゞか(憚)る、まくずはら(眞葛原)、なに(何)のつて(傳)ごと(言)、たゞ(直)にしよ(吉)けむ、

やへこのとに—久老は八重込の外にとす

小山下者位階也

おやじ—おなとじの古言

九年夏四月、癸卯朔壬申、夜半之後、災（ワザハヒアリ）二法隆寺（ホフリウジニ）一、一屋無餘、火雨（ヒサメフリ）雷震（イカツチナル）、五月童（ワザ）謠（ウタ）曰、

于知波志能、都梅能阿素弭爾、伊提麻栖古、多麻提能伊鞞能、野鞞古能度珥、伊提麻志能、倶伊播阿羅珥茹、伊提麻西古、多麻提能伊鞞能、野鞞古能度珥、

うちはし（打橋）の、つめ（際）のあそび（遊）に、いでませこ（出坐子）、たまでのいへ（玉代家）の、やへこのと（八重木戸）に、いでまし（出坐）の、くい（悔）はあら（有）にそ、いでませこ（出坐子）、たまでのいへ（玉代家）の、やへこのと（八重木戸）に、

十年春正月、云云、辛亥百濟鎭將、云云、以二小山下一、授二餘達率等五十餘人一也、童謠曰、

多致播那播、於能我曳多曳多、那例例騰母、陀麻爾農矩騰岐、於野兒弘儞農倶、

たちばな（橘）は、おの（己）がえ（枝）だ〳〵、なれ（雖所成）ども、たま（玉）にぬく（貫）とき（時）、おやじ（同）を（緒）にぬく（貫）、

十年十二月、癸亥朔乙丑、天皇崩（カムサリマス）二于近江宮一、癸酉殯（カリモガリス）二于新宮一、于レ時童謠曰、

美曳之弩能、曳之弩能阿喩、阿喩擧曾播、施麻倍母曳岐、愛倶流之衞、奈疑能母騰、制利能母騰、阿例播倶流之衞、

童謡ー此の童謡、諸説區々たり、今伴信友の解説によりて示すべし、眞發く（發船也）綱繼連（ツノクレツレ）歷へ（杭を歷ふる意）たをらぶく（撓お意）乘廐（カリはイカリの略）お濱海門乘が（ミワダトノリ舟子の義）水脈（ミヲ）の上（ヘ）たをらぶく乘廐お後（カ）よと舟（ワ）よと水脈の上たをらぶく乘廐が子ー此の…

うつくしき、あがわかきこを、おきてかゆかむ、

詔秦大藏造萬里曰、傳斯歌勿令忘於世、云云、六年○是歲欲爲百濟將伐新羅、乃勅駿河國造船、已訖挽至續麻郊之時、其船夜中無故、艫舳相反、衆知終敗、科野國言、蠅群向西、飛踰巨坂、大十圍許、高至蒼天、或知救軍敗績之恠、有童謡曰、

摩比邏矩都能俱例豆例、於能幣陀乎邏賦俱、能理歌理鶏、美和陀騰能理歌、美烏能陛、陀烏邏賦俱能理歌理鶏、甲子騰、和與騰、美烏能陛、陀烏邏賦俱能理歌理鶏、

冬十月、癸亥朔己巳、天王之喪歸就于海、於是皇太子、云云、殯天皇、乃口號曰、

枳瀰我梅能、姑裒之枳舸羅儞、婆底底威底、舸矩野姑悲武謀、枳瀰我梅弘報梨、

きみがめの、こほしきからに、はててゐて、かくやこひむも、きみがめをほり、

同　天智紀五首

いゆしゝの云々ー三句迄は序
あすかがは云々ー三句迄は序
いまきー今城
くれにー遂に也、原本「間」の字を傍註せるは「闇」の誤寫か

いゆしゝ（射鹿）を、つなぐ（繫）かはべ（河邊）の、わかくさ（弱草）の、わかく（稚）あり（有）きと、あが（我）もはなくに（不思）、

其三

阿須箇我播、瀰儺蟻羅毘都都、喩矩瀰都能、阿比娜謨儺倶母、於母保喩屢柯母、
あすかがは（飛鳥川）、みなぎらひつゝ（水漲合乍）、ゆくみづ（逝水）の、あひだ（間）もなく（無）も、おもほゆるかも（所念哉）、

冬十月庚戌朔甲子、幸紀温湯（キノイデユニ）、天皇憶皇孫建王（オボシテミマゴタケルノオホギミヲ）、愴爾悲泣（イタミカナシミイカチ）、乃口號曰（クチズサミテ）、

耶麻古曳底、于瀰倭柂留騰母、於母之樓枳、伊麻紀能禹知播、倭須羅庾麻旨珥、
やま（山）こえ（踰）て、うみ（海）わたる（渡）とも（雖）、おもしろき（阿怜）、いまき（今來）のうち（內）は、わすらゆまじ（不可忘）に、

其二

瀰儺度能、于之褒能矩娜利、于那倶娜梨、于之廬母倶例尼、飫岐底舸庾舸武、
みなと（湊）の、うしほ（潮）のくだり（下）、うな（海）くだり（下）、うしろ（後）もくれ（間）に、おき（置）て（而）かゆかむ（將行）、

其三

于都倶之枳、阿餓倭柯枳古弘、飫岐底舸庾舸武、

かなぎ—小木の名といふ説あり

平恐當作呼

いまき—今城也大和高市郡
こむれ—乎の字をとかずへし、むれは韓語にて山の義也
くも—天に昇られしかたみとして雲を詔給ふ也

祖母尊間人皇后、幷率皇弟等、往居于倭飛鳥河邊行宮、于時公卿大夫百官人等、皆隨而遷、由是天皇恨欲捨於國位、令造宮於山碕、乃送歌於間人皇后曰、

舸那紀都該、阿我柯賦古麻播、比枳涅世儒、阿我柯賦古麻乎、比騰瀰都羅武箇、

かなぎつけ、あがかふこまは、ひきでせず、あがかふこまを、ひとみつらむか、

同　齊明紀八首

四年、云云、五月皇孫建王八歳薨、今城谷上起殯而收、天皇云云、不忍哀、云云、萬歳千秋之後、要合葬於朕陵、輒作歌曰、

伊磨紀那屢、乎武例我禹杯儞、倶謨娜尼母、旨屢倶之多多婆、那爾柯那皚柯武、

いまきなる、こむれがうへに、くもだにも、しろくしたゝば、なにかなげかむ、

其二

伊喩之之乎、都那遇舸播杯能、倭柯矩娑能、倭柯倶阿利岐騰、阿我謨婆儞倶儞、

うちきたますも｜久老は打消し給ふの意とす

たぐひ｜傍註の述の意にて、詩經に「窈窕淑女君子好逑」といへるが如く、つれあひの義也

禹都麻佐波、柯微騰母柯微騰、枳擧曳倶屢、騰擧預能柯微乎、宇智岐多麻須母、

うづまさ(太秦)は、かみ(神)ともかみ(神)と、きこえくる(聞來)、とこよのかみ(常世神)を、うちきたます(打痛)も、

同　孝德紀二首

大化五年、云云、皇太子妃蘇我造媛(ミヤツコヒメ)、云云、皇太子聞㆓造媛徂逝(シヌト)㆒、愴(イタミタマフ)然傷怛、哀泣極甚(ナリ)、

於㆑是野中川原史滿(ノフヒトミツ)、進而奉㆑歌、歌曰、

耶麻鵝播爾、烏志賦拕都威底、陀虞毘預倶、陀虞陛屢伊慕乎、多例柯威爾雞武、

やまがは(山川)に、をしふたつ(鴛鴦二)ゐ(居)て、たぐひ(逑)よく(好)、たぐへる(所逑)いも(妹)を、たれ(誰)かいにけむ(率去)、

其二

模騰渠等爾、婆那播左該騰模、那爾騰柯母、于都倶之伊母我、磨陀左枳涅渠農、

もと(本)ごと(毎)に、はな(花)はさけ(雖開)ども、なに(何)とかも、うつくし(愛)いも(妹)が、また(復)さき(開)でこぬ(出不來)、

白雉四年、云云、是歲皇太子奏請曰、冀(チガハクハ)欲㆑遷㆓于倭京㆒、天皇不㆑許焉、皇太子乃奉㆓皇

是月國内巫覡等、折取枝葉、懸掛木綿、伺大臣度橋之時、爭陳神語入微之說、

其巫甚多、不可具聽、老人等曰、移風之兆也、于時有謠歌三首、

波魯波魯爾、渠騰曾枳擧喩屢、之麻能野父播羅、

はろばろに、ことぞきこゆる、しまのやぶはら、

其二曰、

烏智可拖能、阿婆努能枳枳始、騰余謀作儒、倭例播禰始柯騰、比騰曾騰余謀須、

をちかたの、あはぬのきゞす、とよもさず、われはねしかど、ひとぞとよもす、

其三曰、

烏麼野始儞、倭例烏比岐例底、制始比騰能、於謀提母始羅儒、伊弊母始羅儒母也、

をばやしに、われをひきれて、せしひとの、おもてもしらず、いへもしらずもや、

秋七月、云云、勸祭蟲於村里之人曰、此者常世神也、云云、奈造河勝惡民所惑、打大生部多、其巫覡等恐休其勸祭、時人便作歌曰、

ことぞきこゆる―久老はことを言とす

をちかたのあはぬ―久老は越阿波野とともに地名とす

きゞす―すは始の假名によりてしとすべし

われ―入鹿をさす

ひと―中大兄皇子などをさす

小林地名也

以下林臣

せしひとの―久老云、約篇ニシセシ人の也

たげて—契沖は舉げての義とし久老は手掲げてに寓ふ意ありとす

制羅木名乎

にごね—久老はにごてと訓み柔手とす

さきて三字疑衍

さきで—久老は折手として醜くおそろしき手のことゝす

いはのへに、こざるこめやく、こめだにも、たげてとほらせ、かましゝのをぢ、

山背大兄王云云、吾之一身賜於入鹿、終與子弟妃妾一時自經俱死也、云云、時人、說前謠之應曰、伊波能杯儞、而喩上宮、以古佐屢、而喩林臣、林臣入鹿也、以渠梅野俱、而喩燒上宮、以渠梅拕儞母、陀礙底騰哀羅栖、柯麻之之能鳴膩、而喩山背王之頭髮班雜毛似山羊、又曰棄捨其宮匿深山相也、

三年乙巳、志紀上郡言、有人於三輪山見猿晝睡、竊執其臂、不害其身、猿猶合眼、歌曰、

武舸都烏爾、陀底屢制羅我、儞古禰擧曾、倭我底鳴騰羅每、拕我佐基泥、佐基泥曾母野、倭我底騰羅須謀野、

むかつをに、たてるせらが、にごねこそ、わがてをとらめ、たがさきで、さきでぞもや、わがてとらすもや、

此是經歷數年、上宮王等、爲蘇我鞍作、圍於膽駒山之兆也、云云、

うすけど—うすけれど

あよひ—あゆひに聞に

たづくり—たは接頭語、つくりはつくろひ也

大臣將レ殺ニ境部臣一、云云、以レ絞レ之、云云、兄子毛津逃ニ匿于尼寺瓦舍一、云云、入ニ畝傍山一、云云、

死ニ山中一。時人歌曰、

于泥備椰摩、虛多智于須家苫、多能彌介茂、氣菟能和區呉能、虛茂邏勢利祁牟、

うねびやま、こだちうすけど、たのみかも、けづのわくごの、こもらせりけむ、

同　皇極紀七首

元年辛亥是歲蘇我大臣蝦夷立ニ己祖廟於葛城高宮一、而爲ニ八佾之儛一、遂作レ歌曰、

野麻騰能、飫斯能毘稜栖鳴、倭拖羅務騰、阿庸比拖豆矩梨、擧始豆矩羅符母、

やまとの、おしのひろせを、わたらむと、あよひたづくり、こしづくらふも、

二年冬十月、云云、戊午蘇我入鹿獨謀、將レ廢ニ上宮王等一、而立ニ古人大兄一爲ニ天皇一、於

時有ニ童謠一曰、

伊波能杯儞、古佐屢渠梅野俱、渠梅多儞母、多礙底騰裒囉栖、歌麻之之能烏賦、

まそがよ—まは接頭語也
まさび—刀のこと
しなてる—眞淵は科（シナ）阪立てる義とす、科は階級の意
いひにゑて—「ゑて」は「うゑて」の略
こやせる—臥せる
さすたけの—枕詞

摩蘇餓豫、蘇餓能古羅破、宇摩奈羅麼、譬武伽能古摩、多智奈羅麼、句禮能摩差比、宇倍之訶茂、蘇餓能古羅烏、於朋枳彌能、莵伽破須羅志枳、

まそがよ、そがのこらは、うまならば、ひむかのこま、たちならば、くれのまさび、うべしかも、そがのこらを、おほぎみの、つかはすらしき、

二十一年十二月庚午朔、皇太子遊行於片岡、時飢者臥道垂、云云、視之、云云、則歌之曰、

斯那提流、箇多烏箇夜摩爾、伊比爾慧弖、許夜勢羅、諸能多比等阿波禮、於夜那斯爾、那禮奈理雞迷夜、佐須陀氣能、枳彌波夜那祇、伊比爾慧弖、許夜勢留、諸能多比等阿波禮、

しなてる、かたをかやまに、いひにゑて、こやせる、そのたびとあはれ、おやなしに、なれなりけめや、さすたけの、きみはやなき、いひにゑて、こやせる、そのたびとあはれ、

同　舒明紀一首

やそかげ—日の御影を云ふ、天皇の御事也

うたづきまつる—此の語詞（コト）を獻りて仕へ奉る意

柯羅俱儞能、基能倍儞陀陀志、於譜磨故幡、比禮甫羅須彌喩、那儞婆陛武岐底、

からくにの、きのへにたゝし、おほばこは、ひれふらすみゆ、なにはへむきて、

同　推古紀二首

二十年春正月辛巳朔丁亥、置酒宴群卿、是日大臣上壽、歌曰、

夜須彌志斯、和餓於朋者彌能、訶句理摩須、阿摩能椰蘇訶礙、異泥多多須、瀰蘇羅烏彌禮麼、豫呂豆余珥、訶句志茂餓茂、知余珥茂、訶句志茂餓茂、訶之胡彌氐、菟伽倍摩都羅武、烏呂餓彌弖、菟伽倍摩都羅武、宇多豆紀摩都流、

やすみしし、わがおほぎみの、かくります、あまのやそかげ、いでたゝす、みそらをみれば、よろづよに、かくしもがも、ちよにも、かくしもがも、かしこみて、つかへまつらむ、をろがみて、つかへまつらむ、うたづきまつる、

天皇和曰、

いかにふ—「ふ」は「いふ」の略
めづらこ—珍しき意を掛く
むかさくる—相對ひ作ら離れたる
ひれ—領巾は女のかくるもの、そを振るは惜別の意なり

目頰子初到任那時、在彼鄕家等贈歌曰、

柯羅屢儞嗚、以柯儞輔居等所、每豆羅古枳駄樓、武哿左屢樓、以祇能和駄喇嗚、梅豆羅古枳駄樓、

からくにを、いかにふことぞ、めづらこきたる、むかさくる、いきのわたりを、めづらこきたる、

同　欽明紀二首

二十三年秋七月、云云、遣大將軍、云云、時所虜調吉士伊企儺、云云、見殺、云云、其妻大葉子、亦並見禽、愴然而歌曰、

柯羅俱儞能、基能倍儞陀致底、於譜磨故幡、比例甫囉須母、耶魔等陛武岐底、

からくにの、きのへにたちて、おほばこは、ひれふらすも、やまとへむきて、

或有和曰、

いくみたけ―久老云、節込（ヨコミ）竹也
いはれ―原本「いわれ」
おはせる―原文に據れば「おませる」と訓ずべし
さゝら―前に註したる「さゝらかた」に同じ
あふみのや―のやは助詞
けな―「な」は「ぬ」の轉

我彌細歷、都奴娑播府、以籤例能伊開能、美儺矢駄府、紆鳴謨紆倍儞、堤堤那皚矩、野須美矢矢、倭我於朋枳美能、於魔細屢、娑佐羅能美於寢能、武須彌陀例、駄利衣矢比等母、紆陪儞泥堤那皚矩、

こもりくの、はつせのかはゆ、ながれくるたけの、いくみたけよたけ、もとべをば、ことにつくり、すゑべをば、ふえにつくり、ふきなす、みもろがうへに、のぼりたち、わがみせば、つぬさはふ、いはれのいけの、みなしたふ、うをもうへに、でてなげく、やすみしゝ、わがおほぎみの、おはせる、さゝらのみおびの、むすびたれ、たりやしひとも、うへにでてなげく、

二十四年、云云、冬十月調吉士至自任那、奏言、云云、是歲毛野臣、被召到于對馬、逢疾而死、送葬尋河而入近江、其妻歌曰、

比攞哿駄喩、輔曳輔枳能朋樓、阿府美能野、愷那能倭俱吾何、輔曳符枳能朋樓、

ひらかたゆ、ふえふきのぼる、あふみのや、けなのわくごが、ふえふきのぼる、

我提鳴歴、伊慕儞魔柯絁毎、磨左棄逗囉、多多企阿藏播梨、矢自矩矢盧、于魔伱儞矢度儞、儞播都等唎、柯稽播儺倶儺梨、奴都等唎、枳蟻矢播等余武、婆絁稽矩謨、伊麻娜以幡擶底、阿開儞啓梨倭蟻慕、

やしまぐに、つままきかねて、はるびの、かすがのくにに、くはしめを　ありときゝて、よろしめを、ありときゝて、まきさく、ひのいたどを、おしひらき、われいりまし、あとどり、つまどりして、まくらとり　つまどりして　いもがてを、われにまかしめ、わがてをば、いもにまかしめ、まさきづら、たゝきあざはり、しゝくしろ、うまいねしとに、にはつどり、かけはなくなり、ぬつどり、きゞしはとよむ　はしけくも、いまだいはずて、あけにけりわぎも、

妃和唱曰、

莒母唎矩能、簸都細能哿婆庾、那我例倶屢駄開能、以矩美娜開余嚢開、謨等陛鳴麽、莒等儞都倶唎、須衞陛嗚麽、府曳儞都倶唎、府企儺須、美母盧我紆倍儞、能朋梨陀致、倭

わがてをば—「ば」文字原文によりて補ふ
たゝき—久老は手拘の義とす
しゝくしろ—久老云、蠖（スミ）酒（クシ）呂（助詞）歟
にはつどり—枕詞
ぬつどり—枕詞

はるびの—枕詞也、霞わと續けて春日に掛く
つまごもる—枕詞、眞淵云、端(ツマ)ごの手にこもる簾とつゞくを小箭(ヲサ)と掛けたり
しゝじもの—鹿の如き物
みづくべごもり—久老はべを濁らず、水就隱(ミツキコモリ)の義とす
わくご—壯士の義
あさりつな—久老云、葛を發かむを恐れて云へるならむ

於是影媛收埋畢、云云、歌曰、

婀嗚儞與志、乃樂能婆娑摩儞、斯々貳暮能、（五字未詳脫句歟、）濔逗矩陛御暮黧、濔儺曾々矩、思寐能和俱吾嗚、阿婆理逗那偉能古、

あをによし、ならのはざまに、しゝじもの、みづくべごもり、みなそゝく、しびのわくごを、あさりつなゐのこ、

（靑丹吉　乃樂谷　鹿物　水漬邊隱　水灌　鮪稚子　勿求食　猪子）

同　繼體紀四首

七年九月勾大兄皇子、親聘春日皇女、於是月夜淸談、不覺天曉、斐然之藻忽形於言、乃口唱曰、

野絁磨俱儞、都磨磨祁哿泥底、播屢比能、賀須我能俱儞儞、俱婆絁謎嗚、阿唎等枳枳底、與慮志謎嗚、阿唎等枳枳底、莽紀佐具、避能伊陀圖嗚、飫斯毘羅枳、倭例以梨魔志、阿都圖利、都麽怒唎絁底、魔俱囉圖唎、都麽怒唎絁底、伊慕我堤嗚、倭例儞魔柯毎、倭

あはびしらたま―影媛の美容を譬ふ

たれやし―やしは助詞

こもまくら―枕詞也、枕の高き意につゞく

ものさはに―枕詞也、公とつゞけて地名の大宅に掛く

擧騰我瀰儞、枳謂屢箇愷比謎、栀摩儺羅麼、婀我褒屢枕摩能、婀波寐之羅陀麼、

ことがみに、きゐるかげひめ、たまならば、あがほるたまの、あはびしらたま、

鮪臣爲₂影媛₁答歌曰、

於褒枳瀰能、瀰於寐能之都波拕、夢須寐陀黎、陀黎耶始比登謀、阿避於謀婆儺倶儞、

おほぎみの、みおびのしづはた、むすびたれ、たれやしひとも、あひおもはなくに、

太子甫知₂鮪曾得₁₂影媛₁云云、戮₂鮪臣於乃樂山₁、是時影媛逐行₂戮處₁云云、遂作₂歌曰、

伊須能箇瀰、賦屢嗚須擬底、擧慕摩矩羅、拕箇播志須擬、慕能娑播儞、於褒野該須擬、播屢比能、箇須我嗚須擬、逗摩御暮屢、嗚佐褒嗚須擬、伊比佐倍母理、拕摩暮比儞、瀰逗佐倍母理、儺岐曾裒遲喩倶謀、柯碍比謎阿婆例、

いすのかみ、ふるをすぎて、こもまくら、たかはしすぎ、ものさはに、おほやけすぎ、はるびの、かすがをすぎ、つまごもる、をさほをすぎ、たまけには、いひさへもり、たまもひに、みづさへもり、なきそぼちゆくも、かげひめあはれ、

を鮪の名によりて鯖手とのたまへり

やへやからがき—原本「やえ」に作る、久老云、八重竹幹垣也

ぬかずとも—久老云、雖不拔也、影媛をゆるさぬに譬ふ

くみがき—久老は隱(コモリ)垣の義とす

耳彌—契沖は弭儞の誤とす

なをあましみに—久老云、名を廿餘に也

一賦疑陛歟

契云八府

よりこば—よはゆに通ず

おみ(臣)のこ(子)の、やへ(八重)やから(韓)がき(垣)、ゆる(縦)せとやみこ(皇子)、〔助〕〔與ノ意〕

太子歌曰、

飫褒拕摑嗚、多黎播枳多摑弖、農哿儒登慕、須衞婆陀志弖謀、阿波夢登茹於謀賦、

おほだち(大刀)を、たれ(垂)はき(帶)たち(立)て、ぬか(雖)ず(不)とも(避)、すゑ(末)はた(果)しても、あは(逢)むとぞおも(念)ふ、

鮪臣答歌曰、

飫褒枳瀰能、耶陛能矩瀰哿枳、哿々梅騰謀、儺嗚阿摩之耳彌、哿々農俱彌柯枳、

おほぎみ(大王)の、やへ(八重)のくみ(組)がき(垣)、かゝ(雖)めども(結)、なをおましにや(みに)、かゝぬ(不結)くみ(組)がき、

太子歌曰、

於彌能姑能、耶賦能之魔柯枳、始陀騰余彌、那爲我與釐據磨、耶黎夢之魔柯枳、一本以耶賦能之換耶陛

臣子、易耶陛

おみ(臣)のこ(子)の、やふ(八重)のしば(柴)がき(垣)、した(下)とよ(響)み、なゐ(地震)がより(淘)こ(來)ば、やれ(破)むしばがき(垣)、

太子贈影媛歌曰、

一延佳の説に第三句迄は鐸といふべき序也　もゝづたふ—久老云、百道(モヽチ)傳也、野道(ヌテ)とつゞきて鐸に掛くる　よ—詠歎辭

古與作夜　又甫作布

一本以之褒世易彌儺斗

しほせ—久老は潮塞(シホゼリ)にて潮のせきあふ所とす　なをり—波の折れ返る也　はたで—傍の事

二年九月、置目老困、云云、願歸桑梓以送厥終、云云、乃賜歌曰、古曰置目云云、天皇見送歌曰、

於岐毎慕與、阿甫彌能於岐毎、阿須用利簸、彌野磨我倶利底、彌曳儒哿謨阿羅牟、

おきめもよ、あふみのおきめ、あすよりは、みやまがくりて、みえずかもあらむ、
（置目　淡海置目　自明日　山隱　不見有）

同　武烈紀九首

十一年億計天皇崩、云云、於是太子、云云、期會影媛會鮪眞鳥大臣男鮪、云云、奉待海柘榴市巷、云云、執影媛袖、云云、佊而鮪臣來、排太子與影媛間立、由是太子放影媛袖、移廻向前立、直當鮪歌曰、

之褒世能、儺鳴理鳴彌黎歴、阿蘇寐倶屢、思寐我簸多泥爾、都摩陀氏理彌喩、

しほせの、なをりをみれば、あそびくる、しびがはたでに、つまたてりみゆ、
（潮瀬　波折見　遊來　鮪鰭　妻立見）

鮪答歌曰、

飫彌能古能、耶陛耶哿羅哿枳、瑜屢世登耶彌古、

いなむしろ―枕詞也、東滿の説に、稲席（イネムシロ）皮といふを川に言ひ掛く

おこたち―おきたちと訓むべし

おしのみの―久老はおしぬみのと訓めり

古鳴附嗚鳴須擬作喪陀瑠滾須擬以
古事記作夜

あさぢはら云々

著貴方屬今宵云云、乃起節歌曰、

伊儺武斯廬、箇破泝比野儺擬、寐逗愈凱麼、儺弭企於己陀智、曽能泥播宇世儒、

稲席 いなむしろ、河傍 かはそひやなぎ、水行 みづゆけば、靡起立 なびきおこたち、彼根不亡 そのねはうせず、

五年春正月白髮天皇崩、是月皇太子億計王、與天皇讓位、久而不處、由是天皇姉飯豐青皇女、於忍海角刺宮臨朝秉政、云云、當世詞人歌曰、

野麻登陛爾、瀰我保指母能婆、於尸農瀰能、莒能拖苛紀儺屢、都奴娑之能瀰野、

日本邊 やまとべに、見之欲者 みがほしものは、忍海 おしのみの、此高城在 このたかきなる、角刺宮 つのさしのみや、

元年二月、戊戌朔壬寅詔曰、先王遭離多難殞命荒郊、云云、求御骨莫能知者、云云、置目知御骨埋處、云云、於蚊屋野中、云云、老嫗奉詔鳴鐸而進、天皇遙聞鐸聲歌曰、

古曰、此天皇求其父王市邊王之御骨、云云、賜名號置目、云云、其所作屋者、近作宮邊、毎日必召、云云、欲召其嫗之時、必引鳴其鐸、爾作御歌曰、云云、

阿佐膩簸囉、嗚娜尼嗚須擬、謨謀逗拖甫、奴底喩羅俱慕與、於岐毎俱羅之慕、

淺茅原 あさぢはら、尾谷村過 をそねをすぎ、百傳 もゝづたふ、鐸響 ぬでゆらぐもよ、置目來 おきめくらしも、

一本伊能致志儺麿志作伊志柯儒阿羅麿志

ぬばたまの―鳥羽の實の黑きより、黑の枕詞とす

天皇聞是歌、云云、乃以赦使乘於甲斐黑駒馳詣刑所、止而赦之、用解徽纒、復作歌曰、

農播拖磨能、柯彼能矩盧古麼、矩羅枳制播、伊能致志儺磨志、何彼能倶盧古磨、

ぬばたまの、かひのくろこま、くらきせば、いのちしなまし、かひのくろこま、

二十三年八月、云云、是時征新羅將軍吉備臣尾代、云云、從家來會蝦夷於娑婆水門、合戰射蝦夷等、云云、乃立弓執末、而歌曰、

瀰致儞阿賦耶、嗚之慮能古、阿毎儞擧曾、枳擧曳儒阿羅毎、矩儞儞播、枳擧曳底那、

みちにあふや、をしろのこ、あめにこそ、きこえずあらめ、くにには、きこえてな、

唱訖自斬數人、

同　顯宗紀四首

白髮天皇二年、冬十一月、云云、天皇謂兄億計王曰、避亂於斯年踰數紀、顯名

あたらたくみはや、

於是天皇悟琴聲而赦其罪、

十三年春三月、狹穗彦玄孫齒田根命、竊姧采女山邊小島子、天皇聞、云云、齒田根命、以馬八匹大刀八口、祓除罪過、既而歌曰、

耶麼能謎能、古思麼古喩衞爾、比登涅羅賦、宇麼能耶都擬播、嗚思稽矩謀那斯、

やまのめの、こしまこゆゑに、ひとねらふ、うまのやつげは、をしけくもなし、

秋九月、木工猪名部直根、云云、付物部使刑於野、爰有同作巧者、歎惜眞根、而作歌曰、

婀珍羅斯枳、偉儺謎能陀倶彌、柯該志須彌儺皤、旨我那稽麼、拖例柯柯該武預、婀拖羅須彌儺皤、

あたらしき、ゐなめのたくみ、かけしすみなは、しがなけば、たれかかけむよ、あたらすみなは、

やまのめの—めはべと通ず

こしまこゆゑに—小島子の爲めなれば

しがなけば—汝がいき身となりたらんには

こもりくの—眞淵は山に圍まれたるこもり國の義とす、長谷にかゝる枕詞也
いでたち—山の立てる姿
やまと—原文に據れば「と」の字衍か
わしりで—山の引延へたる姿
うらぐはし—うらは心の義也、心にしみてよき意

疑伊勢能三字衍

いほふる—契沖は、いは發語の詞、ほふるは所合なりとし、久老は五百世經なりとす
がなと—原文に據れば「な」の字衍か

能、據暮利矩能、播都制能夜麻播、阿野儞于羅虞波斯、阿野儞于羅虞波斯、
こもりくの、はつせのやまは、いでたちの、よろしきやま、わしりでの、よろしきやまの、こもりくの、はつせのやまは、あやにうらぐはし、あやにうらぐはし、

於ㇾ是名ニ小野ㇾ、曰ニ道小野ㇾ、

十二年冬十月、癸酉朔壬午天皇云云、木工闘鶏御田云云、時有ニ伊勢采女ㇾ云云、覆ニ所ㇾ擎饌ㇾ天皇便疑ニ御田奸ㇾ其采女ㇾ自念ㇾ將ㇾ刑而付ニ物部ㇾ、時秦酒公侍坐、欲ニ琴聲使ㇾ悟ニ於天皇ㇾ、横ㇾ琴彈曰、

柯武柯噬能伊勢能、伊勢能奴能、婆柯曳鳴、伊褒甫流柯枳底、志我都矩屢麻泥儞、飫褒枳瀰儞、柯拖倶都枳倍、麻都羅武騰、倭我伊能致謀、那我倶母鵝騰、伊比志拖倶瀰播夜、阿拖羅陀倶彌皤夜、
かむかぜのいせの、いせのぬの、さかえを、いほふるかきて、しがつくるまでに、おほぎみに、かたくつかへ、まつらむと、わがいのちも、ながくもがなと、いひしたくみはや、

一本波賦武志謀以下云云同于
古無恕字
又俱斧作古牟

たくぶら―臂
はふむし―昆蟲
そらみつ―枕詞

古無阿西鳴三字
阿西恐阿吳誤
㓞曰與阿阿波例同意

うだき―叺ゆること
ありを―在尾也、尾は山の峯の引延へたる所

のおむを、あきつはやくひ、はふむしも、おほぎみにまつらふ、ながかたはおかん、あきつしまやまと、一本はふむしも以下、かくのごと、なにおはんと、そらみつ、やまとのくにを、あきつしまといふ、

因讚蜻蛉、名此地爲蜻蛉野、

五年春二月、天皇挍獵于葛城山、云云、嗔猪從草中暴出逐人、云云、天皇詔舍人曰、云云、舍人性懦弱、云云、於是田罷、欲斬舍人、舍人臨刑而作歌曰、古曰、共猪怒而字多岐依來云云、故天皇畏其字多岐、登坐榛上、御歌曰、

野須瀰斯志、倭我飫裒枳瀰能、阿蘇麼斯志、斯斯能古有夜斯斯志能五字、宇拕枳、舸斯陁瀰、倭我尼碍能裒利志、阿理嗚能宇倍能、波利我曳陁阿西嗚、

やすみしし、わがおほぎみの、あそばしし、しゝのうだき、かしこみ、わがにげのぼりし、ありをのうへの、はりがえだあせを、

六年春二月、壬子朔乙卯、天皇遊乎泊瀬小野、觀山野之體勢、慨然興感歌曰、

舉暮利矩能、播都制能野麼播、伊底拕智能、與慮斯企野麼、和斯里底能、與慮斯企野麼

なゝへをし―をしは召す也、著ること

吉野摩等能作美延斯怒能又羅能作瀰賀又柯作曾又禾學能居登四字一本麼陛作枳瀰古鈔裒上有夜須美斯志和賀古鈔作能古賊據以下枳能以上二句作斯志麻呂登一句一本陀陀伺作伊麻伺古同古鈔呂以下西摩以上六句作斯麻多閉能蘇氏岐蘇那布二句

おみのこは（臣子）、たへのはかまを（栲袴）、なゝへをし（七重爲）、にはにたゝして（庭立）、あよひなだすも（御帶正）、

四年秋八月、云云、幸于河上小野、云云、欲躬射而待、虻疾飛來嗜天皇臂、於是蜻蛉忽然飛來、齧虻將去、天皇嘉厥有心、詔群臣曰、爲朕讃蜻蛉歌賦之、群臣莫能敢賦者、天皇乃口號曰、

野麿等能、鳴武羅能陀該儞、之之符須登、拕例柯擧能居登、飫褒磨陛儞麻嗚須、飫裒枳瀰簸、賊據嗚枳舸斯題、拕磨磨枳能、阿娯羅儞陀陀伺、施都魔枳能、阿呉羅儞陀陀伺、斯斯魔都登、倭我伊麻西麼、佐謂麻都登、倭我陀陀西麼、陀俱符羅爾、阿武柯枳都枳都、曾能阿武嗚、婀枳豆波野俱辟、波賦武志謀、飫裒枳瀰儞磨都羅符、儺我柯陀播於柯武、婀岐豆斯麻野麻登、一本以婆賦武志謀以下、易婀短能御等、儺儞於婆武登蘇羅瀰豆、野磨等能短儞嗚、婀岐豆斯麻登以府、

六 やまとの（大和）、をむらのたけに（小室嶽）、しゝふすと（鹿伏）、たれかこのこと（誰此事）、おほまへにまをす（大前奏）、おほきみは（大王）、そこをきかして（其聞而）、たまきの（玉纏）、あぐらにたゝし（胡床立）、しづまきの（倭文纏）、あぐらにたゝし（胡床立）、ししまつと（鹿待）、わがいませば（朕坐）、さゐまつと（猪待）、わがたゝせば（朕立）、たくぶらに（手腓）、おむかきつきつ（虻搔着）、そ（其）

古多智豫羅泥作余埋許泥四字

かなとかげー久老云、垣之門陰也

時太子、云云、匿二物部大前宿禰之家一、穴穗皇子聞則圍レ之、大前宿禰出レ門而迎之、穴穗皇子歌之曰、（古九恭段曰、穴穗御子興軍圍二大前小前宿禰之家一、爾到二其門一時、零大氷雨、故歌曰、）

於朋摩弊、烏摩弊輸區泥餓、訶那杜加礙、訶區多智豫羅泥、阿梅多知夜梅牟、

おほまへ（大前）、をまへ（小前）すくね（宿禰）が、かなとかげ（金門蔭）、かくたちよらね（如此立）、あめたちやめん（雨忽止）、

大前宿禰答歌之曰、（古曰、爾大前小前云云、其歌曰、）

瀰椰比等能、阿由臂能古輸孺、於智珥岐等、瀰椰比等等豫牟、佐杜弭等茂由梅、

みやびと（宮人）の、あゆひ（脚帶）のこすゞ（小鈴）、おち（落）にきと、みやびと（宮人）とよむ（響動）、さとびと（里人）もゆめ（努力）、

同　雄略紀九首

眉輪王、云云、逃入二圓大臣宅一、云云、天皇復益レ興レ兵、圍二大臣宅一、大臣出立二於庭一、索二脚帶一、時大臣妻持二來脚帶一、愴矣傷懷、而歌曰、

飫瀰能古簸、多倍能婆伽摩嗚、那那陛嗚絁、儞播儞陀陀始諦、阿遙比那陀須暮、

子歌之曰、

於褒企彌烏、志摩珥波夫利、布儺阿摩利、異餓幣利去牟鋤、和餓哆哆彌由梅、去等烏許曾、哆哆彌等異絆梅、和餓菟摩烏由梅、

おほぎみ(大君)を、しまに(於島)はぶり(放流)、ふなあまり(舟餘)、いかへりこ(歸來)んぞ、わが(我)たゝみ(疊)ゆめ(努力)、こと(言)をこそ、たゝみ(疊)といは(云)め、わが(我)つま(妻)をゆめ(努)、

又歌之曰、古曰、故大前小前宿禰云云、其太子被捕歌曰、

阿摩儸霧、箇留惋等賣、異哆儺个麼、臂等資利奴陪彌、幡舍能夜摩能波刀能、資哆儺企邇奈句、

あまたむ(天飛)、かるをとめ(輕娘子)、いたなかば(痛泣)、ひとしりぬべみ(人可知)、はさのやま(羽狹山)のはと(鳩)の、したなき(下泣)になく(泣)、

同　安康紀二首

大君者指皇女

わがたゝみ―久老云、古旅行人の後に疊にあやまち有る時は其旅人に禍ありといふ諺あれば、屋中をもはかずつゝしめる意

古謂作志

あまたむ―たむはとぶに同じ、飛ぶ鳥の雁とかけて輕といふ地名の枕詞とす

羽狹山在大和國吉野郡

は衣通姫をたとふ、ことめてば一久老はことを如是の意とす、めでばと濁れるは冥本、一説ことめでばと清みて訓じ、斯く特に愛する事はく義とす、從ふべからん

きみもあへやもーやもは願の辭

奈能利曾毛ー莫告(ナノリソ)藻也、神馬藻(ホンダハラ)のこと

古娜作陁下同
又那企作枳比
又儺句莬摩作登布伊毛袁
又箇作斯
又曾下有波字
又津椰作波陀
或去曾衍
又摩下有莬字

わがとふ、したなきー凡て古事記に依りて訓じ、原文と一致せず

はだふれー逢ふ

十一年、春三月、云云、幸ニ茅渟(チヌ)宮ニ衣通郎姫歌之曰、

等虚辭倍邇、枳彌母阿閇椰毛、異舍儺等利、宇彌能波摩毛能、余留等枳等枳弘、

とこしへに(常)、きみ(君)もあ(遇)へやも(哉)、いさなとり(鯨魚取)、うみ(海)のはまも(藻)の、よる(寄)とき(時)どき(時)を、

時天皇謂ニ衣通郎姫一曰、是歌不レ可レ聆(キカス)ニ他人一、皇后聞必大恨、故時人號ニ濱藻一、謂ニ奈(ナ)能利曾毛(ノリソモ)一也、

二十三年、春三月云云、木梨輕(ノ)皇子、云云、同母妹輕大娘皇女、云云、遂竊通、云云、歌之曰、古曰、天皇崩之後云云、奸ニ其伊呂妹輕大郎女一而歌曰、

阿資臂紀能、椰摩娜烏菟絢利、椰摩娜箇彌、斯哆媚烏和之勢、志哆那企貳、和餓儺句菟摩、箇哆儺企貳、和餓儺句菟摩、去鐏去曾、椰主區津娜布例、

あしひき(足曳)の、やま(山)だ(田)をつくり(佃)、やまたかみ(山高)、したひ(下樋)をわしせ(走)、したとひ(下問)に、わが(吾)とふ(問)いもを(妹)、したなき(下泣)に、わが(吾)なく(泣)つま(妻)を、こぞこそ(昨夜)は、やすく(易)はだ(肌)ふれ(觸)、

二十四年、夏六月、云云、太子是爲ニ儲君一不レ得レ罪、則流ニ輕大娘皇女於伊豫一、是時太

ミチ）を告げざる也

たぎまぢ—大和の當麻に至る路にて岩屋越と云ふ

さゝがねのくも　原本—さゝがねを山名として、くもを雲とせり、普通には蜘蛛の事也、さゝがねは微に住む蟹の義と云ふ、久老は蟹が根の網むといふにかけて蜘蛛の枕詞とすとも說く、さゝがね又さゝがにと訓じ、小蟹の義とする說もあり

さゞらかた—細紋也

はなぐはし—櫻をほむる詞、櫻

同　允恭紀七首

八年、春二月、幸二于藤原一云云、是夕衣通郎姫戀二天皇一而獨居、其不レ知二天皇之臨一而歌曰、

和餓勢故餓、句倍枳豫臂奈利、佐瑳餓泥能、區茂能於虛奈比、虛豫比辭流辭毛、

わがせこ（吾夫）が、くべきよひなり（可來夜也）、さゝがね（微・小蟹）の、くものおこなひ（雲行）、こよひしるし（今夜驗）も、

天皇聆二是歌一、則有二感情一、而歌之曰、

佐瑳羅餓多、邇之枳能臂毛弘、等枳舍氣帝、阿麻哆絆泥受邇、多儺比等用能未、

さゞらかた（小形）、にしきのひも（錦紐）を、ときさけ（解離）て、あまた（數）はねず（不寢）に、たゞひとよのみ（唯一夜而已）、

明旦、天皇見二井傍櫻華一、而歌之曰、

波那具波辭、佐區羅能梅涅、許等梅涅麼、波椰區波梅涅孺、和我梅豆留古羅、

はなぐはし（花細）、さくらのめで（櫻愛）、こと（殊）めでば、はや（早）くはめでず（不愛）、わがめづるこら（吾愛子等）、

よのとほびと—世上第一の命長き人

くにのながひと—國中第一の長命者

かりこむ—鴈卵(コ)産む也、ろを略す

やすみしゝ—八方を知らす也、知らすは治め給ふ意也、眞淵宣長は安けく見給ふ意とす

一古沛作閇

たゞにはのらず—直徑(タダ

武内宿禰答歌曰、

夜輸灑始之、和我於朋枳瀰波、于倍儺于陪儺、和例烏斗波輸儺、阿企菟辭摩、椰莽等能倶珥珥、箇利古武等、和例波枳箇儒、古曰、多迦比迦流、比能美古、宇倍志許曾、斗比多麻閇、麻許曾邇、斗比多麻閇、阿禮許曾波、余能那賀乃、比登餘良美都夜、麻登能久邇爾、加理古牟登、伊麻陀岐加受、

八隅知之　　我大王　　諾諾　　我問　　秋津洲日本
やすみしし、わがおほぎみは、うべなうべな、われをとはすな、あきつしま、やまとの

國　　鴈産　　我不聞
くにに、かりこむと、われはきかず、古曰、如是白、而被給御琴、歌曰、那賀美古夜、都毘邇斯良牟登、加理波古牟良斯、

八十七年、春正月、云云、爰仲皇子畏有事、將殺太子、密興兵圍太子宮、云云、扶太子令乘馬、而逃之、云云、至于飛鳥山、遇少女於山口、問之曰、云云、宜廻自當摩徑踰之、太子於是以爲聆少女言、而得免難、則歌之曰、古曰、伊邪本和氣命、云云、爾天皇歌曰、多遲比奴邇、云云、到於波邇坂、云云、亦歌曰、波邇布邪迦、云云、故到幸大坂山口之時云云、爾天皇歌曰、

於朋佐箇珥、阿布夜烏等謎烏、瀰知度沛麼、哆駄珥破能邏儒、哆㟢摩知烏能流、

大坂　　遇少女　　路問　　直不告　　當摩徑告
おほさかに、あふやをとめを、みちとへば、たゞにはのらず、たぎまちをのる、

とらされ—取らせ給へ

古無破字又等保作那賀乃三字　又毛瀰盧曾以下至等二句　又阿菅豆辭莽作瞬良耒都　又瀰波企箇輪椰作岐久夜三字

破夜步佐波、阿梅珥能朋利、等弭箇慨梨、伊兎岐餓宇倍能、娑莽岐等羅佐泥、

（隼）はやぶさは、（上天）あめにのぼり、（飛翔）とびかけり、（槻上）いつきがうへの、（鷦鷯）さゝぎとらさね、

天皇聞是歌、而勃然大怒之曰、云云、時皇子率隼鳥皇女、云云、急走而越山、於是皇子歌曰、古曰、共逃退騰于倉椅山、於是速總別王歌曰、云云、又歌曰　波斯多氏能、久良波斯夜麻波、佐賀志祁杼、伊毛登能煩禮波、佐賀斯玖母阿良受、

破始多氏能、佐餓始枳椰摩茂、和藝毛古等、赴駄利古喩例麼、椰須武志呂箇茂、

（梯立）はしたての、（嶮山）さがしきやまも、（吾妹子）わぎもこと、（二人越）ふたりこゆれば、（安席哉）やすむしろかも、

五十年、春三月、云云、河内人奏言、於茨田堤鴈產（コウムト）之、云云、天皇於是歌、以問武内宿禰曰、古曰、天皇云云、幸行日女島之時、於其島鴈生卵、爾召建內宿禰、云云、其歌曰

多莽耆破屢、宇知能阿曾破、儺虛曾破、豫能等保臂等、儺虛曾破、區珥能那餓臂等、阿耆豆辭莽、椰莽等能區珥珥、箇利古武等、儺波企箇輪椰、

（玉極）たまきはる、（內朝臣）うちのあそは、（汝）なこそは、（世遠人）よのとほひと、（汝）なこそは、（國長人）くにのながひと、（秋津洲）あきつしま、（日本國）やまとのくにに、（鴈產）かりこむと、（汝不聞）なはきかずや

まかずけばこそ—久老は、けばを來ればの意とす

ひさかたの—枕詞也
あめかなばた—久老云、天織（アメノカリ）の機也
みおすひがね—襲は上の衣の類、がねは「設」の意にて「にすべき爲めの物」と解すべし

亦歌曰、

菟藝泥赴、夜莽之呂謎能、許玖波茂知、于知辭於朋泥、泥士漏能、辭漏多娜武枳、摩箇儒鷄廡虚會、辭羅儒等茂伊波梅、

つぎねふ、やましろめの、こくはもち、うちしおほね、ねしろの、しろたゞむき、まかずけばこそ、しらずともいはめ、

四十年、春二月、納鵙鳥皇女欲爲妃、以隼別皇子爲媒、時隼別皇子密親娶、而久之不復命、於是天皇不知有夫、而親臨鵙鳥皇女之殿、時爲皇女織縑、女人等歌之曰、（古曰、女鳥王坐機而織服、爾天皇歌曰、賣杼理能和賀意富岐美能、淤呂須波多、他賀多(爲)泥呂迦母、女鳥王答歌曰、多迦由久夜、波夜夫佐和氣能、美淤須比賀泥、）

比佐箇多能、阿梅箇儺麼多、謎廼利餓、於瑠箇儺麼多、波椰歩佐和氣能、瀰於須譬鷄泥、

ひさかたの、あめかなばた、めとりが、おるかなばた、はやぶさわけの、みおすひがね、

爰天皇知隼別皇子密婚而恨之、云云、隼別皇子之舍人等歌曰、（古曰、云云、[illegible]時其妻女鳥王歌曰、比波理波、阿米邇迦氣流、多迦由久夜、波夜夫佐和氣、佐邪岐登良佐泥、）

やましろの、つゝきのみやに、ものまをす、わがせをみれば、なみだぐましも、

云云、皇后謂之曰、告汝兄令速還、吾遂不返焉、口持臣則返之、復奏天皇、十一月、云云、天皇浮江幸山背、時桑枝沿水而流、天皇視桑枝歌之曰、

菟怒瑳破赴、以破能臂謎餓、飫朋呂伽珥、枳許瑳怒、于羅愚破能紀、豫屢麻志枳、箇破能區莽愚莽、豫呂朋譬喩玖伽茂、于羅愚破能紀、

つぬさはふ、いはのひめが、おほろかに、きこさぬ、うらくはのき、よるまじき、かはのくまぐま、よろほひゆくかも、うらくはのき、

明日、乘輿詣于筒城宮喚皇后、皇后不參見、時天皇歌曰、（古曰、爾天皇御立其大后所坐殿戸、歌曰、）

菟藝泥赴、椰摩之呂謎能、許久波茂知、于智辭於朋泥、佐和佐和珥、儺餓伊弊齊會、于知和多須、那餓波曳儺須、企以利摩韋區例、

つぎねふ、やましろめの、こくはもち、うちしおほね、さわさわに、ながいへせこそ、うちわたす、ながはえなす、きいりまゐくれ、

つぬさはふ―枕詞

さわ〳〵に―一説騷々に也

ながいへせこそ―契沖云、汝言へれこそ也

つぎねふ―枕詞也、宣長云、繼苗生山代の意也

もゝたらず―八十(ヤソ)にかゝる枕詞

おほぎみろ―ろは助詞

古赴下有夜字又莽上有夜䴵二字

一曰倭國之山如立楯也
葛城和名抄葛上郡高宮

あをによし―奈良の枕詞也、宣長は青土(アヲニ)よし(助詞)の義とす

泝芝賀波能比呂理伊䴵須波、之七句、

つぎねふ（次嶺経）、やましろがは（山背河）を、かはのぼり（河泝）、わがのぼれば（我泝）、かはくま（河隈）に、たちさかゆる（植栄）、
もゝたらず（百不足）、やそばのき（彌抓椏）は、おほぎみ（大君）ろかも（哉）、

卽越那羅山、望葛城歌之曰、（古曰、卽自山代廻到坐那良山口歌曰、）

菟藝泥赴、椰莽之呂餓波烏、瀰椰能朋利、和餓能朋例麼、阿烏珥豫辭、儺羅烏輪凝、烏陀氏夜莽、苫烏輪凝、和餓瀰餓朋辭區珥波、箇豆羅紀多伽瀰椰、和藝弊能阿多利、

つぎねふ（次嶺経）、やましろがは（山背河）を、みやのぼり（宮上泝）、わがのぼれば（我泝）、あをによし（青丹吉）、ならをすぎ（平城過）、をだてやま（小楯山）、やまとをすぎ（倭過）、わがみがほしくには（我見之欲郷土）、かつらぎたかみや（葛城高宮）、わぎへのあたり（我家辺）、

更還山背、興宮室於筒城岡南、而居之、（古曰、如此歌而還、暫入坐筒木韓人、名奴理能美之家也、）

冬十月、甲申朔、遣的臣祖口持臣喚皇后、云云、口持臣之妹、云云、侍皇后之側、見其兄沾雨、而流涕之歌曰、

椰莽辭呂能、菟菟紀能瀰椰珥、茂能莽烏輪、和餓齊烏瀰例麼、那瀰多愚摩辭茂、

三十年秋九月、乙卯朔乙丑、皇后遊㆓行紀國㆒、云云、天皇伺㆓皇后不㆑在而娶㆓八田皇女㆒納㆓於宮中㆒、時皇后到㆓難波濟㆒、聞㆓天皇合㆓八田皇女㆒、而大恨之、云云、天皇不㆑知㆓皇后忿不㆑著㆑岸、故親幸㆓大津㆒待㆓皇后之船㆒、而歌曰、

那珥波譬苫、須儒赴泥苫羅齊、許辭那豆瀰、曾能赴泥苫羅齊、於朋瀰赴泥苫禮、

なにはびと（難波人）、すゞふね（鈴船）とらせ（執）、こしなづみ（腰惱）、そのふね（其船）とらせ（執）、おほみふね（大御船）とれ（執）、

時皇后、不㆑泊㆓于大津㆒、更引㆑之泝（サカノボリ）㆑江自㆑山背（ヤマシロ）廻而向㆑倭、明日天皇、遣㆓舍人鳥山㆒、令㆑還㆓皇后㆒、乃歌曰、古曰、天皇聞㆘看大后自㆓山代㆒上幸㆖而使㆓舍人名謂鳥山人㆒送㆓御歌㆒曰、

夜莽之呂珥、伊辭鷄苫利夜莽、伊辭鷄之鷄、阿餓茂赴菟摩珥、伊辭枳阿波牟伽茂、

やましろ（山背）に、いしけ（及）とりやま（鳥山）、いしけしけ（及及）、あが（我）もふ（思）つま（妻）に、いしき（及）あは（遇）んかも（欲得）、

皇后不㆑還、猶行之至㆓山背河㆒、而歌曰、

菟藝泥赴、椰莽之呂餓波烏、箇波能朋利、涴餓能朋例婆、箇波區莽珥、多知瑳箇踰廛、毛毛多羅儒、椰素麼能紀破、於朋耆瀰呂箇茂、毛毛以下紀破以上二句古作佐斯夫、袁佐斯夫能紀、斯賀斯多瀰、游斐陁氏流、波毘呂由都麻都婆岐、斯賀波那能氏理伊麻

すゞふね—久老云、鈴船は官船にて鈴は驛鈴の類なるべし
とらせ—綱手を執れの意

古之上有伊字
又我赴菟摩作
波斯豆摩

いしけ—いは接頭語、しけは追及の意

古赴下有夜字
又涴作枳
又區莽作能倍
又多知瑳箇踰廛作於斐陁氏流

かしこきろかも—ろは助詞也、よくもあらず畏き御心哉の意

おしてる—枕詞

ひむし—蛾、ひむしの衣は二重といふ爲めの序

虚呂望虚會、赴多幹茂豫者、瑳由耐虚烏、那羅陪務者彌破、箇辭古者呂箇茂、
ころも(衣)こそ、ふたへ(二重)もよき(吉)、さゆとこ(夜床)を、ならべ(雙)んきみ(君)は、かしこき(可畏)ろかも(哉)、

天皇又歌曰、

於辭氐屢、耶珥破能瑳耆能、那羅弭破莽、那羅陪務苦虚層、會能古破阿利雞梅、
おしてる(押照)、なには(難波)のさき(碕)の、ならびはま(並濱)、ならべ(雙)んとこそ、そのこはあり(其子在)けめ、

皇后答歌曰、

那菟務始能、譬務始能虚呂望、赴多幣者氐、箇區彌夜儺利破、阿珥豫區望阿羅儺、
なつむし(夏蟲)の、ひむし(火蟲)のころも(衣)、ふたへきて(二重著而)、かくみ(圍)やたり(繞人)は、あによくもあらず(豈好乎)、(按如此還者)

天皇又歌曰、

阿佐豆磨能、避箇能烏瑳箇烏、箇多那耆珥、瀰致喩區茂能茂、多遇譬氐序豫枳、
あさづま(朝妻)の、ひか(避介)のをさか(小坂)を、かたなき(片泣)に、みちゆくもの(道行者)も、たぐひ(偶)てぞよき(好)、

皇后遂謂不聽、故默之亦不答言、

みなそこふ―枕詞

松記云三日之潮其流急速

みかしほ―はやにかゝる枕詞也、契沖はみかに大の義ありとし、久老は嚴(イカ)の意とす

由當作曳賦

うさゆづる―枕詞也、設め弓弦の略

十六年、秋七月戊寅朔天皇以二宮人桑田玖賀媛一、示二近習舍人等一曰、朕欲レ愛二是婦女一、苦二皇后之妬一不レ能合、以經二多年一、云云、卽歌曰、

瀰儺曾虚赴、於瀰能烏苦咩烏、多例椰始儺播務、

みなそこふ(水底經)、おみのをとめを(臣少女)、たれやしなはむ(誰將養)、

於レ是播磨國造祖速待、獨進之歌曰、

瀰箇始報、破利摩波椰摩智、以播區娜輪、伽之古倶等望、阿例椰始儺破務、

みかしほ(大潮)、はりまはやまち(播磨速待)、いはぐやす(石崩)、かしこくとも(雖畏)、あれやしなはむ(吾將養)、

二十二年、春正月、天皇語二皇后一曰、納二八田皇女一將レ爲レ妃、時皇后不レ聽、爰天皇歌以乞二於皇后一曰、

于磨臂苦能、多蒐屢虚等太氐、于磋由豆流、多由磨菟餓務珥、奈羅陪氐毛餓望、

うまびとの(君子)、たつることだて(建言立)、うさゆづる(設弓弦)、たゆまつがんに(絕間繼)、ならべてもがも(雙欲)、

皇后答歌曰、

古知破椰臂苫作知破夜夫流務恐衍之誤

ちはやびと―枕詞

古湍作是

古伽上有傳字
又伊上有傳字

わたりぜに―ぜの訓古事記に據る

いらなけく―甚くにおなじ、昔猶「イラナク」にて、ことの外に、いたく事の意に解すべからん

而傾(カタムケシム)、於是大山守皇子墮河而沒、更浮流之歌曰、古曰、浮出隨水流下、即流歌曰、

知破椰臂苫、于旎能和多利珥、佐烏刀利珥、破椰雞務臂苫辭、和餓毛胡珥虚務、

ちはやびと、うぢのわたりに、さをとりに、はやけむひとし、わがもこにこむ、

然伏兵多起、不得著岸、遂沈而死焉、云云、時太子視屍、歌之曰、

智破椰臂等、于旎能和多利珥、和多利涴珥多氐屢、阿豆瑳由瀰摩由瀰、伊枳羅牟苫、虚虚呂破望閇耐、伊斗羅牟苫、虚虚呂破望閇耐、望苫弊破、枳瀰烏於望臂泥、須惠弊破、伊暮烏於望比泥、伊羅那雞區、曾虚珥於望比、伽那志鷄區、虚虚珥於望臂、伊枳羅儒層區屢、阿豆瑳由瀰摩由瀰、

ちはやびと、うぢのわたりに、わたりぜにたてる、あづさゆみまゆみ、いきらんと、こころはもへど、いとらんと、こゝろはもへど、もとへは、きみをおもひで、すゑへは、いもをおもひで、いらなけく、そこにおもひ、かなしけく、こゝにおもひ、いきらずぞくる、あづさゆみまゆみ、

たかたされあらちし—奥沖は誰が隔て去りて有らせし意とす、久老は誰が片去らせ荒しゝ意とす

鏗鏘玉篇曰金玉之聲

古無紀字

しか—久老は其（シ）がとして餘りに續けて解けり

なつのき—浸漬（ナヅ）の木といふ説を正しとすべし

さやさや—鏘々たる音也、本文によれば「きさやさや」と訓ずべき也

大山守者太子之異母兄太子者菟道稚郎子也

あはぢしま、いやふたならび、あづきしま、いやふたならび、よろしきしまじま、たか（一句未詳）たされあらちし、きびなるいもを、あひみつるもの、

三十一年、秋八月、云云、枯野者、伊豆國所貢之船也、是朽之不堪用、云云、取其船材爲薪、而燒鹽、云云、有餘燼、則奇其不燼而獻之、天皇異以令作琴、其音鏗鏘而遠聆、是時天皇歌之曰、

訶羅怒烏、之褒珥椰枳之餓阿摩離、虚等珥菟句離、訶枳譬句椰、由羅能斗能、斗那訶能異句離珥、敷例多菟、那豆能紀能紀佐椰佐椰、

からぬを、しほにやきしがあまり、ことにつくり、かきひくや、ゆらのとの、となかのいくりに、ふれたつ、なつのきのさやさや、

同　仁徳紀二十三首

大山守皇子、云云、殺太子遂登帝位、云云、詣菟道將渡河、云云、誂度子蹈船

古廬作斷

かしのふ—ふは生(フ)也、かしのふは地名

まろがち—宣長云、ちは尊稱にて吾君の意也

みちのしり（道後）、こはたをとめ（木幡少女）は、あらそはず（不否）、ねしく（寢）をしぞ、うるはしみ（愛）もふ（思）、

十九年、冬十月戊戌朔、幸ニ吉野宮一、時國樔(クズ)人來朝之、因以ニ醴酒(コザケ)一獻ニ于天皇一、而歌之曰、

伽辭能輔珥、豫區周塢菟區利、豫區周珥、伽綿蘆於朋瀰枳、宇摩羅珥、枳虚之茂知塢勢、磨呂餓智、

かしのふ（白檮上）に、よくす（横臼）をつくり（作）、よくす（横臼）に、かめる（釀）おほみき（大御酒）、うまら（美）に、きこしもちをせ（飲）（めし同音）、まろがち（我父）、

二十二年、春三月甲申朔戊子、天皇幸ニ難波一、居ニ於大隅宮一、丁酉登ニ高臺一而遠望、時妃兄媛侍之、望レ西以大歎、兄媛者、吉備臣祖御友別之妹也、於是天皇問、云云、對曰、近日妾有ニ戀ニ父母一之情一、云云、聽之、云云、兄媛自ニ大津一發レ船而往之、天皇居ニ高臺一、望ニ兄媛船一以歌曰、

阿波旎辭摩、異椰敷多那羅弭、阿豆枳辭摩、異椰敷多那羅弭、豫呂辭枳辭摩之魔、儺伽多佐例阿羅智之、吉備那流伊慕塢、阿比瀰菟流慕能、

又例作良　又无盧　又伽作佐　又曳那作佘良　斯那四字

佐伽應—さかばと訓ずべし、原本古事記による

あかれる—女のうるはしきを云ふ

いざさゝば—宣長は誘ふ意とす

古珥作能　又委愚比至辭　羅四句无　又河作知　又辭下有叙字　又于古作袁古

いやうごにして—久老はうごを痴騃の意とす

木幡地名也

こはたをとめ—髪長媛を云ふ、日向國諸縣の君が女也

古阿上有波字　又茂布作意母　布三字

もり、あかれる（紅顔）をとめ（女）、いざさゝ（指）ば（愛）えな、

於是大鷦鷯尊、云云、便知得賜髪長媛、而大悅之、報歌曰、

瀰豆多摩蘆、豫佐瀰能伊戒珥、奴那波區利、破陪雞區辭羅珥、委愚比菟區、伽破摩多曳能、比辭餓羅能、佐辭雞區辭羅珥、阿餓許居呂辭、伊夜于古珥辭氐、（古有伊麻叙久夜斯岐七字、）

みづたまる（水渟）、よさみのいけ（依網池）に、ぬなは（蓴）くり（操）、はへ（延）けくしらに（不知）、ゐぐひ（堰杙）つく（著）、かはまた（川派）え（江）の、ひしがら（菱殼）の、さし（刺指）けくしらに（不知）、あがこゝろ（我心）し、いやうご（彌動）にして（而）、

大鷦鷯尊、與髪長媛既得交般勤、獨對髪長媛歌之曰、

瀰知能之利、古波儾塢等綿塢、伽未能語等、枳虛曳之介耐、阿比摩區羅摩區、

みちのしり（道後）、こはたをとめ（木幡少女）を、かみ（神）のごと（如）、きこえしかども（雖聞）、あひまくら（相枕）まく（枕）、

又歌曰、

瀰知能之利、古破儾塢等綿、阿羅素破儒、泥辭區塢之敍、于蘆波辭彌茂布、

古伽豆怒作葛野

伽豆怒ー「かづぬ」と訓ずべし、原本古事記によるも、くにのほー宣長云、山の周れる中の平原也

古阿藝作古杼母三字
又無珥字
又弭作能
又辭上有波字
又毛羅字
又比等未那等利作比登登理賀良斯
又府保語茂利作本〻毛理四字

同　應神紀八首

六年、春二月、天皇幸二近江國一至二菟道野上一、而歌之曰、（古曰、一時天皇、越幸二近淡海國一之時、御二立宇遲野上一、望二葛野一歌曰、）

知婆能、伽豆怒塢彌例麼、茂茂智儺蘆、夜珥波母彌喩、區珥能朋母彌喩、

千葉　葛野　見　百箇足　家庭　見　國秀　見

ちばの、かどのをみれば、もゝちたる、やにはもみゆ、くにのほもみゆ、

十三年、秋九月、云云、於レ是天皇知二大鷦鷯尊、感二髮長媛一而欲レ配、云云、因以上二坐於宴席一、時撝二大鷦鷯尊一、以指二髮長媛一、乃歌之曰、（古云云、於髮長比賣、令レ握二大御酒一柏賜二其太子一、御歌曰、）

伊裝阿藝、怒珥比蘆菟彌珥、比蘆菟彌珥、和餓喩區彌智、伽愚破志、波那多智麼那、辭豆曳羅波、比等未那等利、保菟曳波、等利委餓羅辭、彌菟遇利能、那伽菟曳能、府保語茂利、阿伽例儺塢等咩、伊弉佐伽麼曳那、

去來吾子　野蒜摘　蒜摘　我行路　香細し　花橘　下枝　人皆採　末枝　鳥集枯　三栗　中枝　含

いざあぎ、ぬにひるつみに、ひるつみに、わがゆくみちに、かぐはし、はなたちばな、しづえらは、ひとみなとり、ほづえは、とりゐからし、みつぐりの、なかつえの、ふほご

古等豫作加牟
又茂苫作玖流
又訶武作倉余
又玖流作母査

くしー久老云、酒の古名也
すくなみかみー少彦名神
ほぎもとほしー祝ひめぐらし
ほぎくるほしー祝ひ狂ひて
さゝー拍子の詞

古娜作陀塢下
古有麻比莵都
迦美邪彌禮加
毋十字豐企能
下同有美岐能
三字

うたたぬしー契沖は宴(ウタゲ)樂しの意とし、宣長は、轉た樂しの意とす

區能彌企波、和餓彌企那邏孺、區之能伽彌、等區豫珥伊麻輸、伊波多多須、周玖那彌伽未能、等豫保枳、保枳茂苫保之、訶武保枳、保枳玖流保之、摩莵利區辭彌企層、阿佐孺塢齊佐佐、

このみき(此酒)は、わがみき(我酒)ならず(非)、くし(靈)のかみ(神)、とこよ(常世)にいます(在)、いはたゝす(磐立)、すくなみかみ(少御神)の、とよほぎ(祝)、ほぎ(祝)もとほし(戻)、かむ(神)ほぎ(祝)、ほぎ(祝)くるほし(來)、まつり(奉)こし(來)みき(酒)ぞ、あさず(不淺)をせ(飲爲)さゝ、

武内宿禰、爲二太子一答歌之曰、

許能彌企塢、伽彌雞武比等破、曾能莵豆彌、于輪珥多氐氐、于多比莵莵、伽彌雞梅伽墓、許能彌企能、阿椰珥于多娜濃芝作沙、

このみき(此酒)を、かみ(釀)けんひと(人)は、その(其)つゞみ(鼓)、うす(臼)にたて(立)ゝ、うた(歌)ひつゝ(乍)、かみ(釀)けめかも、このみき(此酒)の、あや(奇)にうた(轉)たぬし(樂)さゝ、

伊裝阿藝、伊佐智須區禰、多摩枳波屢、于知能阿曾餓、句夫菟智能、伊多弖於破孺破、

珥倍廼利能、介豆岐齊奈、古个上有阿布美能宇美廼七字

いざあぎ（去來吾子）、いさちすくね（五十狹茅宿禰）、たまきはる（玉極）、うちのあそが（內朝臣）、くぶつちの（頭椎）、いたでおはずは（痛手不負）、

にほどりの（鸊鷉）、かづきせな（潛爲）、

則共沈ニ瀨田濟一而死之、于レ時武內宿禰歌之曰、

阿布彌能彌、齊多能和多利珥、伽豆區苔利、梅珥志彌曳泥麼、異枳廼倍呂之茂、

あふみのみ（近江海）、せたのわたりに（瀨田濟）、かづくとり（潛鳥）、めにしみえねば（目不見）、いきどほろしも（憤）、

於是探ニ其屍一而不レ得也、然後數日之、出ニ於菟道河（ウヂノカハ）一、武內宿禰亦歌曰、

阿布彌能彌、齊多能和多利珥、介豆區苔利、多那伽彌須疑氐、于旎珥等邏倍菟、

あふみのみ（近江海）、せたのわたりに（瀨田濟）、かづくとり（潛鳥）、たなかみすぎて（田上過）、うぢにとらへつ（於菟道捕）。

十三年、春二月、云云、命ニ武內宿禰一、云云 皇太后擧レ觴以壽ニ于太子一、因以歌曰、古曰、即入海

其死也、故建內宿禰命云云、其御祖息長帶日賣命釀ニ待酒一以獻、爾其御祖御歌曰、

古倍廼作本杼

あぎ—久老は吾君（アギミ）と親しみ呼ぶ辭とす

かづきせな—入水せんとなり

廼倍當作耐

めにしみえねば—屍を目に見ぬ間はの意

たなかみ—近江栗本郡にて宇治川の水上也

伊與也通

あらゝまつばら—久老云、まつちなる松原を云ふなるべし

まりや—久老は目あり矢にて八目鏑ならんと云へり

うまびとぬちや—ぬちはどち、やは助詞

たまきはる—枕詞

うちのあそ—武内宿禰をさす

いさごあれや—あれやはあらんやにて反語也

同　神功皇后紀六首

攝政元年、三月、丙申朔、庚子、命武内宿禰云云、令擊忍熊王云云、時有熊之凝者爲忍熊王軍之先鋒、則欲勸己衆、因以高唱之歌曰、

烏智箇多能、阿邏々摩菟麼邏、摩菟麼邏珥、和多利喩祇弖、菟區喩彌珥、末利椰塢多俱陪、宇摩比等破、于摩譬苦奴知野、伊徒姑幡茂、伊徒姑奴池、伊裝阿波那和例波、多摩岐波屢、于池能阿曾餓、波邏濃知波、異佐誤阿例椰、伊裝阿波那和利破、

をちかたの、あらゝまつばら、まつばらに、わたりゆきて、つくゆみに、まりやをたぐへ、うまびとは、うまびとぬちや、いつこはも、いつこぬち、いざあはなわれは、たまきはる、うちのあそが、はらぬちは、いさごあれや、いざあはなわれは、

時武内宿禰令三軍、云云、及于狹狹浪栗林而多斬、云云、忍熊王逃無處入、則喚五十狹茅宿禰而歌之曰、（古云云、此時忍熊王云云、乘船浮海、歌曰、）

にひばり—久老云、筑波にかゝる發語、新治の作墾(ツクバリ)といふ意にかさねたる也

かゞなめて—かゞなべて也、指を屈め並べて數ふる也、一說かゞなめてと濁みて讀み、日々並にて、日に日を重ねての意とす

流下古有袁都能佐岐那流七字、又阿波例作阿勢袁

はけ—佩かせ

珥比麽利、莵玖波塢須擬氐、異玖用加酾莵流、

にひばり、つくばをすぎて、いくよかねつる、（新墾 筑波 過而 幾夜 寢）

諸侍者、不能答言、時有秉燭者、續王歌之末、而歌曰、（古事記曰、爾其御火燒之老人、續御歌以歌曰、）

伽餓奈倍氐、用珥波虚虚能用、比珥波莵塢伽塢、

かゞなめて、よにはこゝのよ、ひにはとをかを、（屈並而 夜九夜 日十日）

昔日本武尊、向東之歲、停尾津濱而進食、是時解一劍置於松下、遂忘而去、

今至於此、劍猶存、故歌曰、（古同意、）

烏波利珥、多陀珥務伽幣流、比苔莵麽莵阿波例、比等莵麽莵、比苔珥阿利勢磨、岐農岐勢摩之塢、多知波開摩之塢、

をはりに、たゞにむかへる、ひとつまつあはれ、ひとつまつ、ひとにありせば、きぬきせましを、たちはけましを、（尾張 直所向而 松何怜 松 在人 衣著 劍佩）

波辭枳以下至知區碁三句古以寫片歌出于後

古遥摩作片波試下古有又歌曰三字

古曾作多又志羅作久麻又延作波又許作曾

はしきよしーいとも愛すべき、よしは助詞也

まほらまー契沖は眞秀（マホ）に助詞らまの添へるとし、久老は眞平庭也とす

まそけむひとー全からん人

たゝみこもー重（へ）と續けて平群の枕詞とす

このこー壯子にて陪從の臣下をさす

あさしものー消え易き意よりきえつ約けに續けて御木の枕詞とす

まへつぎみーまうちぎみに同じ、百寮有司也

波辭枳豫辭、和藝弊能伽多由、區毛位多知區暮、夜摩苔波、區珥能摩保邏摩、多多儺豆久、阿烏伽枳夜摩許莽倒屢、夜摩苔之于漏破試、異能知能、摩會祁務比苔波、多多彌許莽、弊過利能夜摩能、志羅伽之餓延塢、于受珥左勢許能固、

はしきよし、わぎへのかたゆ、くもゐたちくも、やまとは、くにのまほらま、たゝなづく、あをがきやまこもれる、やまとしうるはし、いのちの、まそけむひとは、たゝみこも、へぐりのやまの、しらかしがえを、うずにさせこのこ、

十八年、秋七月、云云、到筑紫後國御木、云云、有僵樹、長九百七十丈焉、百寮蹈其樹而往來、時人歌曰、

阿佐志毛能、瀰開能佐烏麼志、魔弊菟耆瀰、伊和多羅秀暮、瀰開能佐烏麼志、

あさしもの、みけのさをばし、まへつぎみ、いわたらすも、みけのさをばし、

四十年、冬十月、云云、日本武尊、云云、歷常陸至甲斐國、居于酒折宮、時擧燭而進食、是夜以歌之問侍者曰、（古曰、悉言向荒夫流蝦夷等、云云、即自其國越出甲斐、坐酒折宮之時歌曰、）

おほさか—大和葛下郡にあり
こしがてむかも—越し敢むかな

さはまき—太刀の柄に蔓を多く巻きたる也
さみなしに—まみはさびに同じく刀劒の刃也

一云、おほきどより、うかゞひて、ころさんと、すらくをしらに、ひめなそびすも、

是後、倭迹迹日百襲姫命、云云、薨、云云、是墓者、日也人作、夜也神作、故運大坂山石而造、人民相踵、以手遞傳而運焉、時人歌之曰、

飫朋佐介珥、菟藝廼煩例屢、伊辭務邏塢、多誤辭珥固佐縻、固辭介氏務介茂、
おほさかに、つぎのほれる、いしむらを、たごしにこさば、こしがてむかも、

六十年、秋七月丙申朔己酉、云云、出雲振根、云云、猶懐恨忿、有殺弟之志、欺弟曰、云云、兄竊作木刀、云云、弟不得拔木刀、云云、殺之、故時人歌之曰、

椰句毛多菟、伊頭毛多雞流餓、波雞流多知、菟頭邏佐波麻枳、佐微那辭珥阿波禮、
やくもたつ、いづもたけるが、はけるたち、つゞらさはまき、さみなしにあはれ、

同　景行紀五首

十七年、春三月、戊戌朔、己酉、幸子湯縣、云云、憶京都而歌之曰、

いくひさ—幾久しく聞召せ、久老は活日が自らの名を云へるにやと云へり

うまさけ—醅酒也、今のあま酒也、神に奉る酒をみわと云ふより三輪の枕詞とす

おしひらかね—押開けの意

此歌者武埴安彦将謀反之表者也

おのがををしせんと—契沖云、将殺己之夫也、久老云、己之雄略将爲也

ぬすまく—契沖は窺ふ意とし久老は盗む意として埴安彦の帝位を窺ふ事とす

久
くひさ、

如此歌之宴ニ于神宮ー、即宴竟之諸大夫等歌之曰、

宇磨佐開、瀰和能等能能、阿佐妬珥毛、伊弟氏由介那、瀰和能等能渡塢、

旨酒　大神殿　朝戸　出行　大神門戸

うまさけ、みわのとのの、あさとにも、いでてゆかな、みわのとのとを、

於レ茲天皇歌之曰、

宇磨佐階、瀰和能等能能、阿佐妬珥毛、於辭寐羅箇禰、瀰和能等能渡烏、

旨酒　大神殿　朝戸　押開　大神門戸

うまさけ、みわのとのの、あさとにも、おしひらかね、みわのとのとを、

十年、九月丙戌朔、甲午、以ニ大彦命ー遣ニ北陸ー、云云、云到ニ於和珥ワニ坂上ー、時有ニ少女ー歌之曰、

瀰磨紀異利寐胡播椰、飫廼餓烏、塢志齊務苫、農殊末句志羅珥、比賣那素寐殊望、一云於朋者妬廝利、于介伽卑氏、許呂佐務苔、須羅句塢志羅珥、比賣那素寐須望、

御間城入彦　己之　食至　竊　不知　姫遊爲

みまきいりびこはや、おのがを、をしせんと、ぬすまくしらに、ひめなそびすも、

又謠之曰、

瀰都瀰都志、倶梅能故羅餓、介耆茂等珥、于恵志破餌介瀰、勾致弭比倶、和例破涴輸例儒、于智旦之夜莽務、

みづみづし（瑞々）、くめのこらが（來目子等）、かきもとに（垣本）、うゑしはじかみ（植薑）、くちひゞく（口疼）、われはわすれず（我不忘）、うちてしやまむ（擊而將止）、

同　崇神紀六首

● 八年、夏四月、庚子朔、乙卯以高橋邑人活日、爲大神之掌酒、冬十二月、丙申、是日活日自擧神酒獻天皇、仍歌之曰、

許能彌枳破、和餓彌枳那羅孺、椰磨等那殊、於朋望能農之能、介瀰之瀰枳、伊句臂佐伊句臂佐、

このみきは（此酒）、わがみきならず（非我酒）、やまとなす（日本作成）、おほものぬしの（大物主）、かみしみき（釀酒）、いくひさい（幾久）

古歌作志

われはわすれず―皇兄五瀬命の薨じ給へる憤りを忘れ給はずと也

やまとなす―契沖云、日本國を作り成す也、久老云、大和に座す也

おほものぬし―大己貴命の一名なり

ひたりもゝなひと—一人を百人並みと云ふことにて一人當千の強敵の意也

古隱作惠又輪開作須氣伊那瑳山在兎田郡山路村一名山路山

たゝなめて—契沖云、一つには只楯をつき並べてと言へるか、二つには其意作ら次の伊を射になして弓を射る意につゞけさせ給へるか

われはや—はやは助詞

しまつとり—鵜の枕詞

かみら—契沖云、かは助語にて韮也、久老云、蜀椒(カミラ)也

えみしを、ひたりもゝなひと、ひとはいへども、たむかひもせず、

十有一月、癸亥朔、己巳、皇師大擧、云云、而介冑之士、不ㇾ無ニ疲弊ㇾ、故聊爲ニ御謠ㇾ以慰ニ將卒之心ㇾ焉、謠曰、

哆哆奈梅弖、伊那瑳能椰磨能、虛能莽由毛、易喩耆麻毛羅毗、多多个陪麼、和例破椰隈奴、之摩途等利、宇个譬餓等茂、伊莽輸開珥虛禰、

たゝなめて、いなさのやまの、このまゆも、いゆきまもらひ、たゝかへば、われはやゑぬ、しまつとり、うかひがとも、いますけにこね、

十有二月癸巳朔丙申、皇師遂擊ニ長髓彥ㇾ云云、意欲ニ窮誅ㇾ、乃爲御謠之曰、

彌都彌都志、倶梅能故邏餓、个耆茂等珥、阿波赴珥破、个彌羅毗苫茂苫、曾廼餓毛苫、曾彌梅屠那藝弖、于笞弖之夜莽務、

みづみづし、くめのこらが、かきもとに、あはふには、かみらひともと、そのがもと、そねめつなぎて、うちてしやまむ、

もとへる—諸抄もとはると讀めり
したゞみ—小嶋子、之太々美
もとへり—諸抄「もとほり」
古無苔毛二字
又無邇字
みづみづし—宣長云、滿々しにて圓（マド）々しと言はんが如し、此は目の圓に大なる貌を云へるにて久米の枕詞也
くぶつゝい—くぶはかぶに同じ、つゝいはつち也、頭椎の太刀なり
あゝしやを—あゝは笑聲、しやをは可笑し也

既而餘黨猶繁、云云、酒酣之後、吾則起歌、汝等聞ニ吾歌聲一、則一時刺レ虜（サセアタヲ）、云云、道臣命

乃起而歌之曰、古、曰、到ニ忍坂大室一之時、云云、故明將打ニ其土雲一之歌曰、

於佐箇廼、於朋務露夜珥、比苔瑳破而、異離烏利苔毛、比苔瑳破而、枳伊離烏利苔毛、

瀰都瀰都志、倶梅能固邏餓、勾鶩都都伊、異志都都伊毛智、于智弖之夜莽務、古、有美都美都斯、久米能古良賀、久夫都都伊、伊斯都都伊母知、伊麻宇多婆余良志、之句、

おさか（忍坂）の、おほむろや（大室屋）に、ひとさは（人多）に、いりをり（入居）とも、ひとさは（人多）に、きいりなり（來入雖居）とも、

みづみづし（瑞々）、くめ（來目）のこら（子等）が、くぶつゝい（頭椎）、いしつゝい（石椎）もち（持）、うちてし（擊而止）やまん

時我卒聞レ歌、云云、仰レ天而咲ヮ、因歌之曰、

伊莽波豫、伊莽波豫、阿阿時夜塢、伊莽儴而毛阿誤豫、伊莽儴而毛阿誤豫、

いま（今）はよ、いま（今）はよ、あゝしやを、いま（今）だにもあこ（吾子）よ、いま（今）だにもあこ（吾子）よ、

又歌之曰、

愛瀰詩烏、毘儺利毛毛那比苔、比苔破易倍耐毛、多牟伽毗毛勢儒、

古雑作流

たかき—契沖云、高城也、久老云、田垣也
なこはさは—宣長の説には、魚(ナ)乞はさば也
なけくを—少なけくをかと宣長云ふ
こけしひゑね—宣長は、こきしと讀みて、幾許とし、ひゑねは肉を薄く小さく切れの意とす
こけたひゑね—宣長は、こきだはこきしに同じと云へり

古於曾異之作
意斐志
又珥下無夜具
二字又中作富
又之上有布字
又能下有伊波
比丹登富袁字
知氏志夜歳年
十四字之下至
壽三十七字無

于儀能多伽機珥、辭藝和奈破廬、和餓末葛夜、辭藝破佐夜羅孺、伊殊區波辭、區施羅佐夜離、固奈彌餓、那居波佐麼、多智曾廢能未逎、那雞句塢、居氣辭被惠禰、宇破奈利餓、那居波佐麼、伊智佐介幾未逎、於朋雞句塢、居氣儴被惠禰、

うたのたかきに、しぎわなはる、わがまつや、しぎはさやらず、いすくはし、くぢらさやり、こなみか、なこはさは、たちそはのみの、なけくを、こけしひゑね、うはなりが、なこはさは、いちさかきみの、おほけくを、こけたひゑね、

冬十月、癸巳朔天皇、云云、撃二八十梟帥於國見丘一斬レ之、云云、爲御謠之曰、古曰、自二其地一幸行、到二忍坂大室一之時、云云、然後將レ撃二登美毘古一之時歌曰、

伽牟伽筮能、伊齊能于瀰能、於費異之珥夜、異波臂茂等倍廬、之多儴瀰能、阿誤豫阿誤豫、之多太瀰能、異波比茂等倍離、于智弖之夜莽務、于智弖之夜莽務、

かんかぜの、いせのうみの、おほいしにや、いはひもとへる、したゞみの、あごよあごよ、したゞみの、いはひもとへり、うちてしやまん、うちてしやまん、

おきつとり—鴨の枕詞
かもつく—古事記にはかもどくとあり
わすらに—忘れず也
よのことごと—世の限也

古娜作能又比訶利播阿利登作袁佐閇比迦禮杼又比登播伊佩杼作斯良多麻能

あかたま—久老は赤珠とし葺不合尊をさして御母の貫へるなりとす、宣長は此說を非とせり、古事記にはあかだまはとあり

云云、豐玉姬、云云、知₂天孫視₁其私屏₁、深懷₂慙恨₁、云云、乃涉₂海徑去、于₂時彥火火出見尊乃歌之曰、

飫企都鄧利、軻茂豆句志磨爾、和我謂禰志、伊茂播和素邏珥、珥譽能據鄧馭鄧母、

（澳鳥）おきつとり、（鴨着島）かもつくしまに、（我率寢）わがゐねし、（妹不可得忘）いもはわすらに、（齢盡）よのことごとも、

是後豐玉姬、聞₂其兒端正₁、云云、奉₂報歌₁曰、

阿軻娜磨廼、比訶利播阿利登、比鄧播伊珮耐、企弭我譽贈比志、多輔妬句阿利計利、

（明玉）あかたまの、（光有）ひかりはありと、（人雖云）ひとはいへど、（君粧）きみがよそひし、（貴有）たふとくありけり、

同　神武紀八首

戊午年、秋八月、云云、天皇使₃徵₂兄猾及弟猾₁、猾此云宇介志 是兩人菟田縣之魁帥者也、云云、時兄猾不來、云云、潛₂伏其兵₁、權作₂新宮₁、而殿內施₂機、欲₃因請饗以作₂難、云云、自蹈₂機而壓死、云云、天皇云云、乃爲御謠之曰、

おとたなばた—契沖云、弟織女也。久老云、音腰機也　うながせる—首に懸けたる　たまのみすまる—絲にて玉を貫き統べたる也　いわたらす—いは接頭語　いしかはかたふち—久老云、—方に石あれば—方は淵なるべし　めるよしに—契沖、久老等めろと讀み、めは女也。ろは助詞也とす、よしは久老寄せの意とす　おきつも—契沖云、萬葉にも興津藻の名延之妹など多く女に譬ふ、吾田津姫にたとへ給へり　へには—母には也、海邊也　さねとこ—さは接頭語　はまつちどり—契沖云、千鳥は妻を戀ふる鳥なれば自らよそへ給へり

輔拖和拖邏須、阿泥素企多伽避顧禰、

あめなるや、おとたなばたの、うながせる、たまのみすまるの、あなだまはや、みたに

ふたわたらす、あぢすきたかひこね、

又歌之曰、

阿磨佐箇屢、避奈菟謎迺、以和多邏素西渡、以嗣箇播箇拖輔智、箇拖輔智爾、阿彌播利和拖嗣、妹慮豫嗣爾、豫嗣豫利據禰、以嗣箇播箇拖輔智、

あまさかる、ひなつめの、いわたらすせと、いしかはかたふち、かたふちに、あみはりわたし、めろよしに、よしよりこね、いしかはかたふち、

皇孫因幸豐吾田津姫、則一夜而有身、云云　皇孫愛之乃爲歌之曰、

憶企都茂播、陛爾播譽戻耐母、佐禰耐據茂、阿黨播怒介茂譽、播磨津智耐理譽、

おきつもは、へにはよれども、さねとこも、あたはぬかもよ、はまつちどりよ、

一書云、彦火火出見尊、云云、海神則以其子豐玉姫妻之、云云、彦火火出見尊還鄕、

古事記作豆味作微廻作袁

いづもやへがき—宣長の說に、いづもは出でたる雲にて國名に非ず、やへがきは實際の垣にあらずして、雲の立出づる形容

古妹作未同乙
作於[illegible]下
有美[illegible]遲
丘字[illegible]
[illegible]

日本紀神代上一首

是時素戔嗚尊、自天而降到於出雲國簸之川上。云云、於彼處建宮、或云、時武素戔嗚尊歌之曰、古曰、故大神初作須賀宮之時、自其地雲立騰爾作御歌其歌曰、

夜句茂多菟、伊都毛夜覇餓岐、菟磨語味爾、夜覇餓枳菟倶盧、贈廼夜覇餓岐廻、
（彌雲起　出雲八重墻　妻籠　八重墻造　其八重墻）
やくもたつ、いづもやへがき、つまごめに、やへがきつくる、そのやへがきを、

同　神代下五首

一書云、天照大神勅天稚彦曰、云云、或云、味耜高彦根神之妹下照媛欲令衆人知映丘谷者是味耜高彦根神、故歌之曰、古曰、故阿治志貴高日子根神者、忿而飛去之時、其伊呂妹高比賣命、思顯其名、故歌曰、

阿妹奈屢夜、乙登多奈波多廼、汙奈餓勢屢、多磨廼彌素磨屢廼、阿奈陀磨波夜、彌多爾

こは、日本紀古事記の中に載たりける歌をとりすべて、好けるどちのために、かつやすけくも見えなんと、をみなもじをさへ加て、紀記歌集とぞいふなる。

天明八年戊申仲秋　林居士諸鳥

此例言は凡て原本のまゝ

紀記歌集

一日本紀古事記兩書に出たる歌は、日本紀の方にのみ出す。異同あるは、首にあぐ。但古と云は、古事記を略。

一齋明紀六年童謠は、古說有といへども、甘心しがたければ、かんな並傍書もくはへず。後の君子を待。

一左に傍書するは、一說にして、學者好所にまかす。

一下卷は古事記の歌のみ。日本紀に出たるをば出さず。

延年唱歌 五〇三―五一二

宴曲

新撰朗詠集

卷上

卷下

和漢朗詠集　一七一―二九二

卷上

雑藝

今様

催馬樂

古代歌謠集 目錄

紀記歌集　一―八八

みに、宴曲及び延年唱歌は、其の墨譜今日尚現存せる事、亦我が音樂史上最も重要の事といふべし。

大正四年四月

校訂者 野村八良

も多く行はる。新撰朗詠集は藤原基俊の撰也。今此の二書は流布刊本を收め、前者は古註數種を參考して本文を訂し、略註を加へ、後者は群書類從管絃部所收の書と對校せり。

宴曲は朗詠及び今樣の亞流にして、而も長編として發達し、用語、句法、題目、內容共に著しく鎌倉時代文學の特徵を發揮せり。浮屠明空の徒の作歌調曲に成る。歌唱の系統は聲明道の影響なるべきか。續群書類從遊戲部に收むるもの、宴曲集五卷、宴曲抄三卷、眞曲抄、究百集、拾菓集二卷、拾菓抄、別紙追加曲、玉林苑二卷あり。曲目百六十一を算す。嘗て吉田東伍氏と共に數種の古寫本を以て對校したる總集を剞劂に附したる事あり。今其の中について七十番を選出し、最近發見の善本に據り、本文を訂してこゝに之を收め、私注を首書としたり。

延年は、主として南都北嶺に行はれたる僧家の舞樂にして、もと祝言の意を寓するものなること、その名已に然り。その役柄、詞、歌、さては舞の手ぶり等、後の猿樂能に著しく影響せり。今傳はる所の興福寺延年舞式によりて、こゝに其の詞書及び歌謠を收めたり。因

亦同書に準じイとして之を示し、頭註亦多くは之れを參考せり。されど古くは梁塵愚案抄より、賀茂眞淵の神樂歌考、催馬樂考までをも合せ勘へたり。

東遊又東舞ともいふ、東國の風俗にあはするが故の名也。其の歌神樂歌の類に過ぎず。風俗歌は諸國の俚謠とおぼしく、催馬樂の歌と性質を同じうす。守部は催馬樂の撰定に漏れたる類ならんと說けり。右の二書は群書類從管絃部に收めたる本文に據り、今井似閑の萬葉緯、賀茂眞淵の神遊考、風俗歌考等を參考して略注を加へたり。

今樣は新しき風の歌の義にして、和讚の流れと見るべく、後には句格整ひて七五調四拍子となれり。宴遊に用ひられし樣諸書に見ゆ。

雜藝と稱するは、五節の謠ひ物の類にて、何くれとなく數々傳はれり。今古き舟歌、田植歌の類をも之れに附加して收めたり。今樣と共に伴信友の中古雜唱集より抽出す。

朗詠は和漢文人の詩文につきて、主として雅興豐かなる駢儷の句を朗吟するものの謂にして、上流の間に行はれし樣物語書などに見ゆ。和漢朗詠集は藤原公任の撰にして、古來最

緒言

本集は太古より近古に至る謠ひ物の代表文學を系統的に輯錄し、題して古代歌謠集と云ふ。卽ち古事記及び日本書紀載する所の歌謠を首めとして、郢曲と總稱する所の神樂、催馬樂、東遊、風俗、今樣、雜藝、朗詠より、降りて宴曲、延年唱歌に及べり。

紀記の歌は、專ら江戸の人、林諸鳥の編せる紀記歌集を採り、傍ら契沖阿闍梨の厚顏抄、本居宣長の古事記傳、荒木田久老の日本紀歌之解などに據りて頭註を加へたり。紀の歌は、其の題材概ね單純、詞藻極めて幼稚淳朴にして、詩形句格亦頗る區々なれども、萬葉集に於ける短歌、長歌、旋頭歌等の源泉として、我が韻文史上に逸すべからざるもの也。

神樂又神あそびは神祇を祭る舞樂にして、その謠ひ物を神樂歌と稱し、古くより世に傳はれり。其の譜は一條雅信公の定むる所なりといふ。催馬樂は其の名義數說あり、要するにもと路頭巷里の謠歌にして、當時の風俗人情の反映せるものと稱すべし。其の譜は同じく雅信公の所作と傳ふ。右の二書は橘守部の入綾に據りて本文を立て、傳承の異同の如きも、

古代歌謡集

全



PL
763
.1
T8

Tsukamoto, Tetsuzo
Kodai kayo shu

G

PL
763
.1
T8

...TE 'R' CARD

...ED FEB 19 1969